

虚・女神転生

春猫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

VR技術が実用化された未来。人気ゲーム、作品が次々とVR化される中、メガテンもVRMMOに。本サービスと同時にサマナーとしてプレイを開始したタケルは、幸先良く王道な仲魔ピクシーを仲魔にしプレイを開始するが……。もうひとつの現実、もうひとつの世界。そこに現れる悪魔たちは果たして本当に「単なるプログラム」なのだろうか……。？ 現実と仮想の狭間に揺れる魂の物語、デジタルデビルストーリー 虚・女神転生、始まります。

目次

Hallucination	111
Checkman	100
Messenger	88
Spirit's Power	77
Battlefield	66
Devil Speak	49
Ex convict	38
An Encounter	29
Explorer	20
12	
TOKIO Adventurer	
Prediction	1

窓明り	219
MICOM	210
Lady's Shop	200
190	
Hurry UP To Exit	175
DAEDALUS	165
Dimensional Trip	155
Another World	143
Dark Night	133
Und	
Dash Under the Gro	122
I ♡ Money	

RUMBLING	DATH	KETHER	CHOKMAH	BINAH	CHESED	GEBURAH	TIPHERETH	NETZACH	HOD	YESOD	MALKUT	Fall, n Gods
354	343	334	324	315	306	297	287	275	264	254	243	229

2 日前	3 日前	4 日前	5 日前	SUMMON	PLUNDER	DISCLOSURE	AWAKENING	NOXIOUS	OMEN
451	444	433	424	415	403	392	382	373	364

P r e d i c t i o n

VRの登場は当初その開発に要するスペックの高さと安全性に対する基準の厳しさから、期待されていた娯楽性の高いものは中々発売されず、それでも仮想空間の中でしょうか不可能、困難な体験から中毒性が既存メディアで声高に叫ばれるほどの「愛好家（フリースク）」を生み出した。

またネットワーク回線が大幅に強化され、SOHOの流れを汲んだVROFFICEの登場は痛勤とまで言われた通勤の負担を減らすと共に、身体的、環境的に就業が困難であった層に対する労働環境の提供にも繋がっていた。

さらに日本独自とも言える二足歩行ロボットの進化とテレイングジスタンスがVRと融合した結果、重労働とされる肉体労働に生身の筋力が不要となった。

こうして懸念されていた労働力不足を移民などの手段を用いずに解決した日本では、時間の圧縮すら可能なVR技術の後押しもあり、ワークシェアが進み、リアルよりも低いコストで充足感の得られ、より娯楽性の高いVRへの欲求が高まっていくこととなった。

そうした中、既存のゲーム企業、エンターテインメント企業も手を拱いていた訳では

ない。

まずは膨大なデータストックと資本力を持つ米国企業が、映画と遊園地を融合したVRテーマパークを開業。初年度年間来客者数は500億人を超えた。

日本でも既存のゲームタイトル、映像作品が相次いでVR化され、そして、あのタイトルもVR化されてしまった。

「女神転生」

α 、クローズド β 、オープン β を経て、そのそれぞれで「如何にも」な噂を生みつつ、満を持しての本サービス開始。

杉山猛もそんなメガテンVRMMOを本サービススタートからプレイしようと、自分のVR機器をセットしカウントダウンを待っているメガテニストの一人だ。

「古典」と現在では称される無印から始まって、真、if、ペルソナ、デビルサマナー、デビチル、魔神転生……と一通りはやり尽くし、ハンティング系VRでVRゲームに親しんだ彼に取ってみれば、本当は β 時代から参加したかった。

くじ運の無さは商店街の福引でティッシュ以外、ラップすら当たらないという点で身に染みて感じてはいたものの、それでもかすかな望みをかけて、それこそ「一生分の運

を使ってもいいから！」と思って応募したもののβの抽選から外れた。

本プレイでの集中プレイのため、本業（人型作業用ユニットを使った遠隔倉庫作業と倉庫管理）の他にバイト（接客ユニットでのコンビニレジ打ちと商品補充、時間帯によっては一人で複数のユニットを使い分けて作業する）も入れ、本業でのシフトを調整までした。

冷蔵庫の中には栄養補給ゼリーと飲料。

流石に紙オムツは止めた。

トイレにも事前に行ったし、飲料、食糧とも手元に一食分は出しておいた。

あと一分。

ベッドに横になり既に装着していたヘッドフォンと縁日のお面が一体化した様な端末をあらためて確認。

あと三十秒。

お面状の端末の下の鼻がかゆくなったのでかく。

あと二十秒。

友人からメールが来たのをスルー。

あと十秒。

九秒、八秒、七秒、六秒、五秒、四秒、三秒、二秒、一秒……。

く。

向かつて右に鮮やかな黄色いヒマワリが、向かつて左に真つ赤な彼岸花が、それを押しつけるようにさらに中心部からまるで蛇の様にうねりながら木が生え、あつという間に巨木に育つと青々とした葉を茂らせ始める。

「新たな世界へようこそ」

太い木の根元の洞、周囲とは不釣合いな金属光沢のカウンターがいつの間にか現れ、カウンターを挟んで奥側に座る役人じみた服装の顔色の悪い、実は死人だと言っても信じられる様な不健康そうな男が口を開く。

「人の欲望と言うものには際限が無いものなのだ、この様な世界まで生み出してしまふとは……。ここでは君のこの世界での有り様を決めることになる。体型、性別に関しては別の世界での君とあまり大きな差が無い様にする事が望ましい……。などと君が読んだであろう説明には書いてあつただろうがな、まあ、そんなものさほど気にする必要も無い。むしろ魂の有り様と矛盾しないことの方が重要だろう。仮初とは言え、この世界もまたひとつの現実。歪みの果てに待つものは……。まあ、門出に送る言葉ではないか。ここは時の狭間であるがゆえ、慎重に検討を重ねてもらつても構わないが、何事にも限度というものはある。君はこの世界に何を望むかね？」

言いながらカウンターの上をタブレットコンピュータの様なものを滑らせてくる。

「名前、タケシ……使われてるか、じゃタケル。性別は男、種族？ 種族も選べるの？」

人、悪魔人、先祖返り、造魔、へえ、悪魔人は運が悪いと強化・合体時に悪魔に乗っ取られたことになってアカウント消失のリスク、その分、能力、魔法、スキル優遇ね。先祖返りは狼男とか吸血鬼とかの悪魔要素を薄く持つ、言ってみりや劣化悪魔人ね。造魔はまあ、それなりにおなじみだよな。月の満ち欠けに影響を受けるつと。また対NPCや対悪魔交渉にマイナス修正を受けるわけね。うーん、悪魔人とかなあ、でも、やつぱりかな？ 職業はメインとサブで最低でも一つづつは貰えて、イベントなんかで追加も有り、メインが対悪魔、サブが表の顔って感じか。学生とか会社員とか探偵とか警察官とか自衛官とかでそれぞれステータス修正とスキル追加、メインの方は戦闘スタイルってトコか、サマナー、異能者、ペルソナ使い、バスター。やっぱメガテンだからサマナーかな？ 仲魔とかね、ケルベロスとかカーシーとかどのくらいモフモフなのか体験してみたいし。サマナーだとコンピュータ系あると便利かな？ サブはSEで、次はステータスとスキルか。ステータス……もうひとつの現実ってなら「運」は必須だな、あつちの現実には運無いし。運と速さ高め、他はそこそこ。スキルは職業で自動的にサマナーとコンピュータが付いたから、後は自分の戦闘用かな？ カタナとかうまく使えないだろうし、鈍器とかスキル……あつた。乗り物乗るのもスキル要るのか。うーん、建設機械とか、戦闘機や戦車まであるのかよ！ とりま最初はいつか、生き残って、レベ

ル上げるのを主に考えて、後回しにしよう……、逃走用にダツシユ、これは攻撃にも使えるだろうし、それと対悪魔用に交渉スキルを……」

タブレットに表示されている項目に入力していく猛。

入力内容を律儀にといつていくくらい口になっているが、なんとか必要とされる要素を入力し終え、向きを逆にして顔色の悪い男へと渡す。

「ふむ、まあ、こんなもんだろうな。タケル：24歳：男：サマナー／SE：属性・N／N：カルマ0：初期スキル・サマナー、コンピュータ（ソフトウエア・プログラミング）、鈍器、交渉、ダツシユ……ステータスとスキルから初期アイテムと装備、所持金が決定される。外見も定着したようだな。」

「え？ おお、リーマンっぽいスーツ、多少は防御力ありね。空間投影のキーボードとモニター付いたコンプ、これは優れもの……に鈍器……確かに鈍器だけど、握りやすいけど、ブロンズの花瓶って！ 傷薬5つ、これはありがたい！ 反魂香、チャクラドロツプ一個ずつ。所持金5万2398円、これは多いのか少ないのか？ それと……何故に猫餌の缶詰？ ポケットに入ってたんですけど？ え、サービスですか……ありがとう（ご）いますか？」

「それでは扉を開こう。二度と会うことはあるまいが、たとえこの世界での君に最後の

時が訪れたとしても、その魂の安らかなることを……」

「えっ！ てか、これってVRゲームのスタートトつてより、転生もののお約束じゃあー!?」

ぽつかりと足元に開いた穴に落ちていく猛ことタケル。

無表情であつた顔色の悪い男の口元が微かに歪んだ。

「ふう酷い目にあつた……ええ？」

同時に落ちて来たその男と全く同じセリフを口にしてしまったタケルは男と互いに顔を見合わせる。

「やはり足元に穴が開いて落とされたんですか？」

「いきなりでビビった、死ぬかと思った、これだからVRは洒落にならない」

「飛ばば良かったんじゃ？」

「あ……」

腕の下に伸びた皮膜を見て男が肩を落とす。

「鏡無い、鏡？」

「そこの家電店でテレビ画面に……」

「あちやあ、背中に生えるんじや無かったのかよ」

「悪魔人選んだんですか、チャレンジャーですなあ」

「デ○ルマンと呼んでくれ！ コウモリの悪魔人でいけると思っただけだなあ……」

メガテニストの中でも他の創作に出てきた特定の悪魔に強い執着を見せる人間は居るし、『if』では、おそらくこの男が目指した方向性も、あまりにも捻って無さ過ぎてそのまんまの形で出てくる。

「アキラだ、この名前が取られて無かったことに運命を感じた結果がご覧の有様だ」

「普通の人、タケルです。サマナー／SEのN／Nです。仮面ライダーの怪人みたいですなあ」

「バスター／学生のC／N、悪魔人で動物二種混合でコウモリ、オオカミで行けると思っただがなあ、やっぱコウモリ、ヤギが正しかったんかなあ……」

「これも何かの縁なんでフレお願いできますか？」

「ああ、こつちこそよろしく」

フレ登録は握手、拳を軽くぶつけ合う、コンプ、スマホなどの端末を使うなど色々ある。

拳を軽く合わせ、フレ承認。

手を上げてお互いのホームスペースへ向かうため別れる。

このVRMMOの場合、表の顔がある為、スタート時点から個人の拠点は存在する。自身の行動やイベントの進行などでそれが失われることもあり、場合によっては表の職業・肩書すら失われることがあるという話だ。

ポケットの中には財布とスマホ偽装のコンプ、そしてホームスペースであろう部屋のカギが入っている。

コンプを起動し、百太郎とMr. サプライズを動かしておく。

幸いホームは近くにあるようなのでコンピニに入り赤飯のおにぎりと生クリームとカスタードのちよつとりツチなシュークリーム、そしてウーロン茶を買う。

目的地らしい低層マンション近く、「気になる」雰囲気を感じ路地に入る。

廃屋らしい蜘蛛の巣だらけの平屋建ての一軒屋。

蜘蛛の巣がおかしな揺れ方をしている。

近付き目を凝らすタケル。

「こんなパターンアリかよ？」と内心がっくり。

蜘蛛の巣にはメガテンレギュラー悪魔であるピクシーが引っかかっていた。

「助けてあげるから仲魔になつてくれない？」

「ムキー、ちよつと今、大変なんだから黙つて……助けてくれるの？ 貴方、サマナーね？」

「うん、取り敢えずじっとしてて、動くも余計絡まってるみたいだから……、取れた、契約して一旦コンプに入ってからまた召喚すればベタベタとかも取れるだろうし、契約よろしく?」

「私は安くはないわよ、他のピクシー仲間よりちよつとだけお高いんだから!」

「今ならシュークリームも付けるよ?」

「シュークリームって、あの甘くてふわふわのよね! 一個丸ごとくれるのよね、誰かと分けるとか言わないわよね!? 私は妖精ピクシー、今後ともよろしくね!」

言うが早いかコンプに飛び込むピクシー。

「定番」「王道」とも言えるピクシーの仲間入りにタケルのテンションも上がる。

こうしてタケルのDD（デジタルデビル）VRMMO生活は始まったのであった。

TOKIO Adventurer

女神転生VRMMOこと『女神転生Ruina』の舞台は21世紀初頭の東京だ。

ただし、そのままの東京では無く、シンボリックな建物は残しつつもマップとしての広さは現実の四分の一程度になっている。

必然的に色々と省略されたり、ゲーム都合上、現実には無かった要素(ショップ類、異界化した廃墟、異界の入り口など)がプラスされているため、地元の住人がプレイしてもその土地勘は全く生かされない。

将来的には首都圏、本州、日本列島と拡大していく可能性もあると言われるが、一方でネットなどで根強い意見は「そこまでマップが拡大する前にカタストロフィ・イベントが起きるんじゃない？」というもの。

タイトルの「Ruina」、ラテン語で「遺跡・廃墟」という意味である。

製作サイドのコメントとしては「これまでの、そして原点の女神転生の要素を組み込んだ、一種モニユメント的意味合いもあるのでこのタイトルに決定しました」というものが発信されているが、素直に受け取っている方が少数派である。

タケルたちが落ちて来たのは中野駅近く、タケルのホームポイントは東中野にあった。

割と東京の中心部よりでありながら、けっこう庶民的な一軒屋が建っていたりする辺りの、コンビニなどのある通りから一本路地に入った奥にある低層マンション。

地銀系が手放した独身寮を改装したものという、誰得の設定まできちんとなるようだ。

部屋は狭いものの建物自体の作りは古いがしつかりしているので、余所の部屋の住人が五月蠅いなどということは無い。

というかそもそも他の住人は居るのだろうか？

プレイヤー専門の建物かもしれない。

部屋の鍵を開け、コンビニの袋をコタツの上に置く。

部屋にはエアコン、冷蔵庫、テレビ、コタツ、ベッド、箆笥があり、ユニットバスには洗濯機、乾燥機、ドライヤー、歯ブラシ、コップなどが置かれ、冷蔵庫にはミネラルウォーターに牛乳、マーガリン、チーズなどが入っていた。食器や調理器具、防御力ゼロだが装備が出来る普段着まである。

あくまでプレイ自体には影響しないが、フレージャーと言いつ切るにはかなり力が入っている。

室内は生活による汚れは無いものの、妙に生活感がある。

「失わせるために『日常』が与えられているんじゃないや？」 ネットでの情報なども合わせて、少しゾツとするタケル。

偽装コンプがブルブルと震え、画面を見るとまるでガラス窓に顔を押し当てている様な感じでどアップのピクシー。

思わず笑ってしまう。

「召喚ピクシー」〔Summoning O.K?〕

「Hurry Hurry Hurry! シュークリームうっ!!」

「まあ、待て、なんか牛乳もあるみたいだ」

何故か食器棚にあったぐい飲みにミルクを注ぎ、シュークリームの袋を開いて取り出し、皿の上に乗せコタツに置く。

「んま〜い♪ 人間の世界に遊びに来た甲斐があったね! あ、チーズもあるの? 頂戴! 昔はチーズだけでも契約してた子が居たって話だけど、私の勝ちだね! シュークリームに牛乳、そしてチーズ! 私、最強、今の私は最強のピクシーだね!」

抱え込む様にシュークリームを食べ、牛乳を飲み、チーズを齧ってニパツつと笑う。

羨ましいほど能天気である。

人によってはこの光景だけで、このVRMMOをプレイして良かったと思うのでは無

いだろうか？

「……（牛乳もチーズも平気そうだな）」とタケルは案外腹黒い。

天真爛漫なピクシーを毒見役にするとは、ピクシー愛好家を敵に回す行為、掲示板に晒されたらフルボッコ確定である。

偽装コンプのカメラ機能で顔中クリームだらけのピクシーの写真を撮る。

ここで撮った写真はVR機本体に記憶媒体を入れておけば、そちらに保存される。ネットで公開したり、VR空間で写真アクセサリ化したり出来るのだ。

取扱説明書にも記載されているが、それよりも自分の仲魔自慢をしたがったβ勢によつてアップされた画像で、その辺りの情報はかなり知れ渡っている。

「馬鹿な子ほど可愛い」というが、タケルも既に出会って間もないこのピクシーのことを相当気に入っているようだ。

「おバカ可愛い」自分が契約したピクシーを掲示板などで自慢したいと思っている。

「蜘蛛の巣に引つかかっていた」というお間抜けな出会いエピソードまで書けば相当ウケるだろう。

というか、他の交渉で仲魔にしたピクシーとどこか違うところがあるのだろうか？

「知ってる、知ってる、それ写真撮ったんだよね、見せて、見せてー！」

見せてあげるとようやく自分の今の顔の状態に気付いて、ティッシュでぬぐって「や

り直しを要求する！」とポーズを取っている。

「なんか戦わずにダラダラと遊んでたくなるな」などと思いつつ、パシャパシャとシャツター音の度にポーズを変えるピクシーの写真を撮る。

ただ、メガテン、どのシリーズにも漂う「終わり、破滅の臭い」を思い出し、「最低でも自分と仲魔だけは守れる力を付けなと！」とタケルは思い直す。強くてもあつさり死ぬのがメガテン、鍛えればそれでオツケーとはいかないが、たとえ架空の存在でもせつかく仲魔になつてくれた存在が死ぬところは見たくない。

「そう言えば、名前はあるのか？ 俺の名前はタケルっていうんだ」とピクシーに問いかける。

「ん〜？ 無いよ、私ら契約する前って個の意識が希薄だからね、個性とかは個体ごとにあることはあるけど、名前ってあんま必要無いしね同族で居る時は。なに？ もしかして名前つけてくれるの？ 可愛くて私に相応しい名前じゃないと許さないからね！」
「だから顔面の前に浮いて薄い胸を張るな！」と思いつつも口には出さずにタケルは考える。

「思い付きだけど、フィーネ、愛称フィーってのどうかな？」

「フィー、フィーネ……60点、まあ、合格ラインギリギリってトコね。……じゃ、あらためてタケル、ピクシーのフィーネです、これから末永くよろしくね！」

「よろしく、フィー」

挨拶をしつつ互いに照れている。

どこの中学生カップルかという空間だ。

こういう時、誰かに覗き込まれる心配の無いVRは心強い。

モニターを使うものの場合、横から、後ろから、見られてしまう可能性があるからだ。

一人暮らしの場合、その危険性は減るが、パソコンの場合はスリープ状態で置いておいたものが、来客時などに何かのきっかけで起動して社会的に自爆する危険性もある。

ともあれ、ここまでのプレイに満足したタケルは、いったんログアウトしてセーブすることにする。

この『女神転生Ruin』の場合、死亡時は花畑臨死からログインに戻り「前回セーブしたところに巻き戻し」となる。

セーブはログアウト時に自動的に行われるため、壊滅的に詰まってしまうことが無い代わりに努力が無駄になる危険性は高い。

大事な仲魔の合体前や、重要なアイテムを入手した後などにセーブをしないと地獄を見る。

β時代に多くの血涙が流され、変更を希望する声が多かったにも関わらず本サービスでも変わらなかった点である。

せつかく仲魔になったフィーネを失いたくないタケル。ログアウトするのは当然のことだった。

端末を外し、タオルで顔を拭いてトイレに。

コンビニのサンドイッチとコーヒードで軽い食事。

「中でも外でもコンビニ飯か……」とぼやきながらも食事を終え、洗面所で歯を磨く。

ログイン時に特に連絡も無かったことを確認し、一瞬「掲示板とか見てみようかな?」
と思いつつも速攻で再ログインすることにする。

今度に変な文字が出ることも無くログイン完了。

起きるとフィーネが「私をほっといて寝ちゃうなんて酷い!」とプンスカしていた。

「ごめん、ごめん」と謝りつつも、「こんな感じに誰かと話すの久しぶりだなあ」とタケルは最近の自分の生活を振り返って一抹の寂しさを感じたりもする。

うっかりフィーネを出しっぱなしにしていた割にはMAGが減っていない。

コンプを起動しヘルプを見るとホームスペースではMAGの消費が軽減されるとのこと。

それでもピクシーだから問題無いのであって、巨大な仲魔だとしてもないことになるだろう。

「その辺で拠点移したりにお金がかかって、アイテムや武器防具以外にも散財させられる訳か……」

「最初の仲魔がピクシーで良かった」そう思いつつ、「一休みしたし、また街に出るか、フィー、コンプに入って！」と声をかけるタケル。

食事も終えて暇そうにコタツの縁に座って足をプラプラさせていたフィーネは「いいけど、私を放っておいて寝ちゃった罰にコンビニで何かおいしいものを買うこと！」とズビシッと指をさして注文をつけている。

「プリンでいいかな？」

「もう一声！」

「うーん、甘い物で？」

「もつちろん！」

「分かった、アイスも付けよう！」

「アイス!? あの冷たくてフワフワな!? わーい、じゃコンプ入ってるから〜！」

飛び込んだ偽装コンプのスマホ画面では小さなフィーネが口から「アイス、アイス！」と吹き出しを出しながら行ったり来たりしている。

微笑んだタケルはコンプを胸ポケットにしまうと靴を履き、部屋の鍵を閉めて外に向かうのだった。

E x p l o r e r

商店街の道を歩くタケル。

近所のおばさんや子どもを乗せたママチャリで道を行く若いお母さんなどが居て、現実感が高いため「コミュニケーション障や対人恐怖の奴はツラそうだなあ」などと思う。

買い物客や食事をとり終えて蕎麦屋から出てくるサラリーマンなど、ひと昔前のリアルがそのまま再現されている。

特に特殊なゴーグルやメガネをかけている訳ではないが、タケルの見る風景は、拡張現実的に時々、アイコンが表示されている。

それぞれの町にあるメガテンならではの裏のお店のマークだ。

「高槻マンドリン教室」八百屋の二階にある音楽教室、天本英世にメガネをかけた様なぴっちりとしたスリーピースを着たおっさんが経営するその教室の裏の顔はアイテムショップ。

「肉のミカミ」コロツケがおいしそうだと思う買ってしまっただが、恰幅のいいプロレスラーっぽいおっちゃんの裏の顔は武器屋。

「メンズファッション浅木」思わず「誰が着るんだよ、こんなのか？」と思ってしまう様な

柄のシャツやカーディガンなどが並ぶ、「子ども時代のあだ名はバカボンだったんだろうなあ」って外見の服屋のおっさんの裏の顔は防具屋。

立ち飲み屋の奥に生体エネルギー協会があったり、「おたふく教」という新興宗教（オールド特撮マニアが開発スタツフに居るのだろうか？）の会館が邪教の館だったり普通の町の中にある普通の建物がお馴染みのメガテン系シヨップなのだ。

「はあ、なんか凄いな。でもちよつとワクワクするな、こういう一般人の知らない裏があった存在として、一見、普通の日常に見える場所にいるつても……」

タケルも本当はどこか適当なところに入ってみようかとも思っていたのだが、「私もコロツケ食わせろ〜！」とフィーネが五月蠅いのでコンビニに寄って約束のプリンとアイス、そして自分の分の飲み物や食べ物を買って部屋に戻った。

「コロツケ〜♪　そしてデザートにプリン！　デザートにデザートにアイス♪」

「アイスは取り敢えず冷凍庫入れとくから食う時言えよ！」
「らじや〜！　うふふふ、まだ、カリカリのアツアツ♪」

幸せそうなフィーネを見つつ、「そう言えばテレビって映るの？」と電源を入れて、タケルは映し出されたニュースを見て口に含んだ茶を吹いた。

「もー、何吹いてるのよー！　せつかくのコロツケ→テンションが台無しじゃない！　次に外に出かけた時にやり直し用のコロツケを要求する！」などとフィーネが叫んで

いるがタケルはそれを制してテレビの音量を上げる。

「五島陸佐を隊長とするPKF部隊が今日、日本を離れ、パレスチナに向かいました……」

「ふんどし」こと「あの」五島「陸将」、この世界ではPKF部隊を率いてパレスチナに向かったらしい。

ICBMフラグが折れていることに安堵はするものの、こんな感じで原典キャラが出てくるとは思ってもみなかったタケル。いや、もしかすると「エルサレムでハルマゲドン」フラグかもしれない。

「案外、アキバとか行くと中島とすれ違うかもな?」

その辺の高校とかにペルソナ系のキャラも居るかもしれない。

狭間もどこかで「OTZ」とハザマってる可能性がある。

てつきりそうしたキャラはイベントNPCだと思っていたタケルは不意をつかれた形になって茶を吹いてしまったのだ。

『♪♪♪』

「え? コンプに電話ってかかるの?」と偽装のほすのスマホを手にするタケル。

「よう! 数時間ぶり!」

「えつと、アキラ?」

「なんか怪訝そうだな？」

「偽装スマホのはずのコンプに電話がかかってきて……」

「あー、サマナーの場合はそうなんだ。こっちは本物のポケットに入ってたスマホなんだけどな」

「フレへの通信ってこうなるんだ」

「通信魔法とか念話とか無いからなあメガテンの場合。サマナーと異能者とペルソナ使いとバスター、それぞれ同士で通信とかなるとスマホになるんじゃないか？ まあ、それはいいや。もう戦闘はしたか？」

「いや、まだ。仲魔は出来たけど」

「おー！ やっぱ地霊か妖精？」

「妖精、王道のピクシー」

「ほお、案外、開始すぐには仲魔に出来ないらしいのに運がいいな！」

「運にはフってるからねえ、極フリじゃないけど」

「まあ、仲魔も居るならなおいいな。これから戦闘をちよつとしようかと思ってるんだけど付き合わないか？」

アキラの誘いに了承の意を伝え、ファイネに声をかけるタケル。

ファイネは足でテレビのリモコンを押して、チャンネルを変えつつプリンを食べてい

る。

「えー！ まだアイスを食べないのに!？」

「後でゆっくり食べるか、今、急いで食べるか、どっちがいい？」

「うー！ アイスは堪能しながらじつくりと食べたい！ でも、今すぐ食べたい！
ぶう、タケル酷い！」

「とは言ってもなあ。最初の戦闘くらい、余裕を持っていたかったトコだし、初心者同士
とはいえ俺とフィーネだけよりは安心だろ？」

しづしづコンプに入ったフィーネをなだめつつ、タケルは部屋を後にする。

「修学旅行の土産かよ〜!？」

「二時間ドラマの犯人かよ!!！」

顔を合わせるなりお互いの「獲物」を見ておちよくり合う。

タケルの武器は「ブロンズの花瓶」、アキラの武器は「日光東照宮の木刀」である。

こんなものを持ち歩いても警察は何も言わないし、周りも奇異なものを見る目で見ない。

流星にアキラは悪魔人丸出しではなく、人間フォームであるが……。

レベルの低いうちは「人間要素が多いから」という設定で人間フォームが取れるが、レ

ベルが高くなると偽装手段が必要になるのが悪魔人である。

人間形態とは言え、現実なら警官には見とがめられる状態、現実舞台のVRMMOならではのシニールさである。

それでも彼らの装備はまだ、言い訳がきく範囲だが、銃や日本刀が当たり前なのがメガテンである。

「見とがめられて連行され、警察署が実は……」なんてイベントもあり得る。下手に咎められないのに慣れてしまうのも良くないだろうな、などとアキラはともかくタケルは考えたりもしている。

悪魔にしても同じプレイヤーかイベントNPCしか見えない設定だ。

だから、本当のところ、タケルはピクシーを出しっぱなしのまま、買い物とかしても平気なのだ。

それでも様式美に従って普段はコンプに入れているのはメガテン好きならはだるう。

決してあれこれねだられたり、あれは何、これは何と聞かれるのを防ぐためではない。

「じゃじゃ〜ん！ 最強ピクシー、ファイネ参上！」

「おー!!! ピクシーだ、ピクシーだ！ メガテンって感じしてきたなあ！」

「出会いはお間抜けだったけどな」

「あー！ あー！ 言っちゃダメだからね、タケル!!」

「はあ……こういうやり取り見るとサマナー羨ましくなるな……ラブラブじゃん」

じやれ合うフィーネとタケル、半ば本心で落ち込むアキラ。

「にしても、悪魔すげえな、これ、ホントにAI?」

「中の人が居るとかすら考えないくらい自然で、全然、その辺意識しないレベル……つてか、悪魔との交渉が微妙に憂鬱。コミュ障の奴とか、サマナーやるのキツいんじゃない?」

よく分かってないのに褒められてる気配に得意そうに胸を張るフィーネ。

「あー、ポッチ系ゲームー厳しそう。つてか、4分の1でも東京広過ぎ! タケル以外プレイヤー見てないぞ」

「あー、シヨップとか一応チラ見してみたけど、居なそうだったしなあ」

「その辺は外の掲示板かDDSとかのコンプ通信頼りなのかね?」

「アキラのスマホも悪魔入れられないだけでコンプに近いんじゃないの、実は?」

「あー、かもね? 劣化コンプ?」

「アプリとか実は入ってるんじゃないの、Mr. サプライズとかバスターとかの戦闘特化でも有用だし」

「どれどれ……なんでレディキラーが入ってたよ!」

「女悪魔と合体すれ！　つてことじゃない？」

「TSはノーサンキュー」

「タケル！　戦いに行くんでしょ？」

「あ、悪い、ファイネ」

　　ついつい話し込んでしまい、ファイネに耳を引つ張られるタケル。

　　一緒に遊んでた友達に、友達の彼女が合流した時の様な居心地の悪さを感じているアキラ。

「取り敢えず昼間の異界の浅いトコなら、そんなに危険じゃないらしい」

「この辺の異界って？」

「サンプラザ」

「あそこが異界になってるんだ」

「昼は一部だけらしいけど、夜中はホテル部分の廊下すら、だつてさ」

「アキラはタケルとは違って、なんか私たちちっぽい感じ？」

「やっぱ、悪魔だとその辺分かるんだ？」

「最強のピクシーだからね、私は！　他の子は私が言うのもなんだけど、ちよつと頭の軽い子も居るし」

「……………（あんま、変わらないんじゃない？）」

にぎやかに会話しつつ町を進むタケル達。

そしてサンプラザ前に。

「中とかけっこう広そうじゃない？」

「あー…エレベーターでって具体的にドコら辺が異界の範囲か分かってないんだよなあ…」

「階段使うしかないわけか……」

戦闘前から微妙に疲れた空気を纏う二人と、怪訝そうにタケルの頭の周りを飛ぶフィーネであった。

A n n o u n c e m e n t

「うわあぁ……」

「ひくな、後ずさるな、そんな目で見るな！」

「いや、無いわ〜！ やっぱ、それは無いわ」

「タケル……うん、頑張ったね……」

階段をえつちらと上って、フロアの様子を窺いつつ進んだ先でタケルたちは初の戦闘を終えていた。

「思っていた以上にブロンズの花瓶で殴り掛かる姿ってのはヤバいな」

「壁使って上手く叩き潰してたし、初めての戦闘にしては上出来だよ」

ブロンズの花瓶でゾンビドッグの頭を壁とサンドイッチにする様に叩きつけたところ、クリティカル扱いなのか、一撃で頭部が破壊され、その後も順調に花瓶を振り回して戦闘に勝利はしたものの、アキラとフィーネからドン引きされていたタケルであった。

「俺だって花瓶なんか振り回したくねえよ！ でも初期装備がこれなんだからしょうが

ねえじゃん!」

「何故に鈍器を選んだし……」

「刀とかうまく使えそうも無いし、銃とか金がかかりそうだし……」

「VRとはいえ、補正がかかるしスキルもあるんだから気にしなくて良かったんじゃないかねの?」

勝利したはずなのにタケルはがつくりと肩を落としている。

ファイネがその頭を「よしよし」と撫でているのを見て「いい子だなあ、やっぱサマナー羨ましいぞ」とアキラまで落ち込んでいる。

「落としたのは魔貨だけかあ……」

「まあ、あいつらが傷薬とか落としても使う気がしないけど」

「あー、かえって怪我悪化しそうってか、ばい菌入りそうだよな」

「経験値も入ってるな……鈍器のレベル、なんで上がってるの!」

「頑張つて振り回してたからなあ(笑)」

「いや、アキラだって木刀振り回してたじゃん!」

「最初の一匹でクリティカルっぽい出したせいじゃね? 上手く攻撃したり、効果的に魔法使ったりすると、普通にやるよりレベル上がり易いとかありそうじゃん?」

まだ戦闘は一回だけ、しかも雑魚相手ということもあって、職業レベルは当然上がっていないのだが、何故か鈍器のレベルが上がっていたタケルは首を傾げている。

「タケルは凄いいんだね、流石ファイネが契約したサマナー！」とファイネは嬉しそうにタケルの周囲を飛び回っている。

「うわっやべ、五月蠅くしてたから警備員来ちゃった!？」

「待て、アキラ！ あれ、悪魔だ!」

「うげっ、マジだ、腐ってやがる」

「ゾンビガードマンだね！ さっきは暴れられなかったから私から行くよ！ ジオッ
！」

「うしっ感電来た！ ラッキー!」

「良くやった、ファイ！ おらっ!」

またも花瓶で殴り掛かるタケルを見て「どう見ても見つかって開き直って警備員に襲い掛かる窃盗犯だよなあ」と思うアキラであった。

「一応、ドロップとしては『当り』なのかね?」

「装備は出来るみたいだけど、見た目以外はブロンズの花瓶以下だ、これ」

その後もゾンビドッグ、ゾンビガードマン、ポルターガイスト、ガキといった悪魔との戦闘をこなし、今またゾンビガードマンとの戦闘を終えてアキラがレベルアップしたところで、一休み。

ドロップしたアイテムは警棒。

しかしながら数値的にはタケルのコメント通りの品物である。

「じゃ、俺が貰っていいか？ 木刀折れた時の予備に」

「うん、いいよ。この花瓶、そうそう壊れなさそうだし」

「それが壊れる相手って今のレベルじゃ相手に出来ないよな」

「だよねえ」

「タケル、タケル、この階臭くて嫌い！ 別の階に行こー」

「あー、会話自体無い悪魔ばっかだしねえ」

「凹つても気が咎めない相手ではあるんだが……」

戦う相手としては気楽というか、負担にならないダーク系の悪魔だが、戦うだけがメガテンではない。

ダーク系でもアプリを入れれば会話は成立するものの、好んで仲間にした相手ではない、特に低レベルのダーク悪魔は。

タケルたちはフィーネの勧め通り、別の階に向かうことにした。

「きやあ、久しぶり、元気だった〜?」

「えへへ、今の私にはフィーネという名前があるのだ、名前で呼んでくれたまえ!」

「うわあ調子乗ってるー!」

「もう、ノリノリに乗ってるよ、調子! 帰ったらアイスだし!」

メガテンの悪魔会話、サマナーと相手悪魔だけで、仲魔や他のキャラクターが絡んでこないのは何故なんだろう、などとタケルは思っていたのだが、目の前の光景を見て、その理由を納得した。

「キリがねえ〜」

フロアを移ってフィーネの同族、ピクシーたちと遭遇したタケルたちだったが、最初こそは有り勝ちな会話だったものの、フィーネがしやしやり出てきて御覧の有様である。

既にアキラもフィーネに対して、AIだのプログラムだのといった意識が無くなっている。

だから、こういう女同士の会話に下手に口を突っ込むとろくなことにならない、という現実に即した対応になっているのだ。

「普通のゲームだとグラフィック使いまわしだけど、全員個性あるなあ」

「まあ、ゾンビドッグも色々犬種居たしなあ……」

「ブルドッグはともかくボルゾイのゾンビは怖かったな」

「ピクシーだけ集めまくる奴とか居そうだなあ」

「シルキーを『俺の嫁』とか言う奴も出るな」

「くそつ、やつぱポイント貯めてサマナー技能取ってやる！」

「デビ○マンでサマナーかよ、意外と無かったな、そういうの」

「あえて言えば人修羅か？」

「今ならまだ始めたばかりだから、作り直した方が早くね？」

「なんか負けた気がするから嫌だ！」

そうこうする内にフィーネたちの話も終わったのかピクシーたちが寄ってくる。

「私たちの仲間、大事にしなさいよ!？」

「今度会ったら私にもアイスちょうだいね！」

「なんだつたら、私も仲……んー、なんでもない」

「サマナーと契約するとアイスが貰える、ピクシー覚えた……」

「その子泣かせる様な真似したら女王様に言いつけるからね！」

「あ、ああ大事にするから……」

「えへへへ……大事にされちゃうから！」

「「「じゃあね！ バイバイ！」」」

タケルの頭に寝そべりながら、嬉しそうに手を振るフィーネ。

「なんか、高校の時のクラスメイトが、同じクラスの彼女の友だちに囲まれて似た様なことを言われてたなあ」などと思っっているアキラ。

「ピクシーたちに話が広まって、サマナーにアイスを請求する様になっただろうしやう？」などと考え、「後でこっそりと交流掲示板でも見てみよう」と思っっているタケル。

なんととはなく、戦闘のテンションが切れてしまったため、タケルたちはサンプラザを後にすることにした。

ピクシーたちとの会話で日常寄りの感覚になってしまったのだ。

「むふふふ」と上機嫌のままのフィーネからも特に異論は出なかった。

「結局、レベルはお互い2ずつ、俺が剣レベル1上がって、タケルが鈍器2上昇。タケルって鈍器の才能あるんじゃないやね？」

「鈍器の才能ってなんだよ……」

「ファンタジー風ならハンマーとか、メイスとかで鈍器でも恰好つくんだけどな」

「せめてボールの様なものをくれ」

「バアルの様なもの？」

「それ合体事故」

「パールの様なもの？」

「それBB弾じゃね？」

「まあ、ともかく、今日はお疲れでした！」

「もつかれ〜！」

「また時間が合えば一緒に行ってみんべ」

「そうだな、慣れて来たら遠征とか？」

「電車に乗って？」

「電車に乗って……チャリですらポイント必要なんだもんな」

「バイクとかスキルも要るし、値段も高いし……」

「じゃあな（ね）」

アキラと別れたタケルはいまだ上機嫌で上の空のフィーネをコンプに戻してホームに向かう。

どこかの家から料理の臭い。

「こんなトコまでリアルなのかよ」とかなり驚く。

路面も意識すれば微妙な凹凸があったりと、普段の仕事などよりもよっぽどリアルだ。

接客ユニットを使って応対しているバイトのコンビニの客も、この世界の住人よりよっぽど人間味が無い。

ましてやファイネとは比較にもならない。

「仲魔がみんなこんな感じだったら、俺、悪魔合体とかさせられないんじゃないかね？」少なくともファイネに関しては間違いなく無理だ。

目いっぱい、この世界を楽しみ、気に入りながらも、そんな先行きに不安を感じたりもするタケルであった。

E x - c o n v i c t

「ありがとうございました」

コンビニの接客ユニットを通しての客への応対を終え、猛は並列して起動している仮想スクリーンのネット掲示板を読む。

猛が入っているのはコンビニの深夜のシフトのバイト。

本業の倉庫作業とは別に、『女神転生 R u i n a』のスタート前の軍資金稼ぎで行っていたバイトだが、店長に泣きつかれて週二回深夜シフトだけが続いている。

倉庫作業で複数ユニットを動かすことに慣れている猛は接客ユニット、商品補充ユニット、監視モニターなどを一人で動かしているため、抜けられると店としては大打撃なのだ。

朝一や昼飯時の繁忙時間帯でそれをしたら地獄を見るが、深夜帯ならなんとかなる。VRとワークシェアで以前以上に人々の生活時間帯は多様化した、それでも昼間に比べると深夜は来客が少ない。

様々なネット宅配サービスが発達したことや、V R O F F I C E、V R S C H O O L で外に出る必然性が減ったこともある。

VR制御している時も、空の時も接客ユニットの外見は変わらないということもあり、店舗に客が居ない時はこうして掲示板やらのネット巡回をしたり、VRでないゲームをしたりしても問題は無い。

ちなみにこのコンビニの接客ユニットは女性型ヒューマノイドタイプであり、声優の音声を用いているため、中の人が男の猛でも客から見れば女の子っぽくなっている。

コンビニのイベントやキャンペーンなどには本部から書き換えデータが送信され、女優や歌手、デフォルトとはまた別の声優などの声が変わったりもする。

外見としては運用コストやメンテなどの関係から表情の無い仮面状の顔をしているが、日本人にとってはアニメや特撮などで見慣れた造形だ。

ネット上などでは「●●の接客ユニットが可愛い」「いや、◆◆のユニットに○○タンの声こそ至高」などと盛り上がっている。

ともあれ、猛はそうしたユニットを使ってコンビニバイトの合間に掲示板を覗いているのだが、当然、見ているのは『女神転生Runa』関連だ。

「へえ、中野の場合、ブロードウェイがたまり場の存在になってるのか……一極集中で他の場所には居ないって訳ね。アキラ誘って行ってみるか？ えっ!? 父島スタートのヤツも居るのかよ！ うわっ、ひでえな、それ……」



【居るのか?】 お前らのスタート地点を語れ! その4 【ご当地悪魔】

1: 鶯谷のバスター

ここは『女神転生 Ruina』のプレイスタート地点を晒すスレです。

スクショは歓迎ですが、リンク先へのアクセスは自己責任で!

煽り、荒らしは華麗にスルーしましょう。

過去スレ: お前らのスタート地点を語れ! その1~3

(中略)

628: 池袋のサマナー

まさか、離島部があるとはwwwwww

629: 町田の異能者

町田でした、町田って東京だったんだ……

630: 巣鴨のペルソナ使い

巣鴨でもラッキーな部類だったんだなあ……線香臭いけど

631: 代官山のサマナー

>>>629

町田馬鹿にすんな！ 東京都民言うなし！

632：大手町のバスター

大手町でした。皇居見てきた〜

つ【スクシヨ】【スクシヨ】

警官多過ぎ、なのに落ちて来たおいらスルーwwww

633：錦糸町の異能者

>>632

そこは首塚に行くトコだろJK

アホなことやって将門公怒らせるなよ？



『中野でした。ミカミのコロッケうめえ〜！』つと

書き込み、別のスレッドに。

同時にモニターで店内と時刻を確認。

商品補充の配送ユニットの到着まで一時間以上ある。



【うちの子が】お前らの初仲魔を紹介すれ！ その23 「一番可愛い！」

1：吉祥寺のサマナー

ここは『女神転生Ruina』プレイでの初仲魔をサマナーが晒すスレです。スクショは歓迎ですが、リンク先へのアクセスは自己責任で！

煽り、荒らしは華麗にスルーしましょう

愛情の無いコメント、貶しはNG

和気藹々、マターリ進行でいきましょう

過去スレ：お前らの初仲魔を紹介すれ！ その1〜22

(中略)

15：恵比寿のサマナー

>>>1

スレ縦乙！ 吉祥寺のサマナーとか主人公かよ！

16：御茶ノ水のサマナー

ノツカーでした

17：本郷のサマナー

ノツカーでした

18：四谷のサマナー

コダマでした

19：信濃町のサマナー

ウオツチャーでした

20：青山のサマナー

ホーリーゴーストでした

21：高円寺のサマナー

なんだなんだ、みんな愛が足りないぞ！

ウチの子見て萌えろく！

初仲魔：未熟なカーシー

つ【スクシヨ】【スクシヨ】【スクシヨ】

22：市ヶ谷のサマナー

ケモナー降臨と聞いて

23：新橋のサマナー

モフモフで、ちんまいっすなあ……

ウチの子はノッカーだけどつぶらな瞳では負けてないっすよ！

24：田端のサマナー

称号付きが初かよ、運極？

25：高円寺のサマナー

運と魅力！

他力本願の極みwww



「へえ、やっぱりピクシー居ないなあ…、地霊系多い、あと天使？　ロウ系評判悪いからフレンドリー化して取り込みか？　場所で出現悪魔の偏りとかもありそう。遠征もやっぱ必要か……」

来店者があったので、そこでメインを接客ユニットに切り替える猛。

レジ前に接近すると自動的に切り替わるが、その辺りは働く者としての意識である。

「いらっしやいませー」

割と決まった時間に来る、いつもの客だ。

食べ物と飲み物、たまに雑誌や雑貨。

電子カードでの支払いなのでお釣りなどの心配も要らない。

電子化、VR化が進んだこの時代でも紙の出版物、パッケージソフトは生き残っている。

ただ、嗜好品的な意味合いも強くなっているので、小規模な町の本屋などは更に減少している。

シャツターとコンビニとチェーン薬局とチェーン外食だけが並ぶ商店街などのも珍しくなくなっているし、中古やリースの作業、接客ユニットを使ってお年寄りが続けている個人商店もある。

時代の変化とはいえ、「VRの中の方が人が居る」と猛が思ってしまうのも無理はない。

フィーネの居るあの世界に「帰りたく」なってしまう猛。

レジに客が近寄ってきたのを見て、意識を仕事に向ける。

バイト終了まで後三時間、それから軽く寝て速攻でログインしようと「ありがとうございます」と客を送り出しつつ決意する猛であった。

先ほど猛が接客した相手、コンビニの常連、坂巻哲司も『女神転生Ruina』のプレイヤーである。

在宅勤務の配送業務（車輛ユニットと搬送ユニットを遠隔操作）を終え、コンビニで食事を買ひ、食後にシャワーを浴びてからメガテンにログイン、プレイ後軽く眠って、起

床後に近くの牛井屋かカレーショップで朝食を済ませ、自宅に戻ってVRトレイグジスタンスで担当車輛にアクセスし仕事をする、というのが彼の一日だ。

βプレイヤーである彼はβプレイ時にはサマナーであったが、本プレイの現在はペルソナ使いをやっている。

β時代、中で仲魔育てに突っ走った挙句に本プレイへ仲魔が持ち越せなかった（一体だけならβ特典で継承出来たが、その一体を選べなかった）ため、ペットロス症候群に近い精神状態になってしまい、サマナーをする気が起きなかったためだ（それでもプレイをしない、という選択をしないあたりが……救いようが無い）。

βプレイヤー特典（「仲魔一体継承」「初期ステータスポーナス」「スキルポイントボーナス」「武器アイテムボーナス」「防具アイテムボーナス」「獲得済みのスキルの中から一つを初期枠とは別に授与」「乗り物とそのスキル」から選択。アイテム系はランダムで当たり外れあり）としてバイクとそのスキルを獲得した彼は、首都高でターボばあさんなどチェイスをしている。

ちなみにアルカナは『戦車』、バイク乗りとしてはコレか『運命の輪』のどちらか以外しつくり来ないだろう。

β時代につるんでいた連中も居たが、現在はソロで、バイクで適当に気が向くまま移動し、目に付いた異界などで経験値稼ぎをしているため、プレイ時間にしてはあまりレ

ベルは上がっていない。

現実では二輪には縁の無い哲司だが、VRレースゲーム、VRFPSなどでVR内ではそこそこ経験を積んでいる。

別にスーパーカブでも良かったのだが、彼が入手したのはover1000ccのビッグバイク。ホームスペースである小川町のマンションは地下駐車場付き（βプレイヤーのホームスペースは他のプレイヤーより1〜2クラス上のものとなっているため、都内一戸建てのオーナーなんてのも結構居る）だからいいものの、アパート住まいだと大変なところだったろう。

ログインをした彼は珍しくバイクに乗らず、徒歩で神保町へ向かう。

地下鉄の入り口側の路地『技の1号』『力の2号』と二軒並んだ兄弟店の食事を取れる2号の方に入る。

実際の神保町にある名前以外はそのままの店舗と同じ味のナポリタンが食べたくなっただけだ。

ナポリタンとアイスミルクを頼む。

ここのアイスミルクはちよつとだけイチゴかメロンの風味がついていて、その微妙にチープな感じが哲司は気に入っている。

店内には編集者と漫画家や、ノートパソコンを開いているライターっぽい男、近くの

大学の学生らしい若者などが居る。

アイコン表示は特に無い。

プレイヤーやイベントNPCは居ないようだ。

食事を終えた哲司はその足で本屋に向かう。

『マニアのグランデ、オタクのブックマート』と言われるマニア向けの方だ。もちろん、名前は変えられているが、建物、客層、書架に並ぶ書籍傾向はそのものだ。天文学の本の隣にUFOの本が並び、歴史書と並んで超古代文明の本が置かれ、格闘技系の書籍が嫌に充実しているところまで忠実だ。

特に買いたい本がある訳ではなく、この店の空気が好きなのだ、哲司は。現実ではわざわざ足を運ぶことは滅多に無いが、比較的気軽に来れるこのVRMMO内では時々訪れる場所だ。

一通り中を徘徊して満足した彼は、マンションの部屋に戻ることなく直接駐車場へ向かい、バイクにまたがると靖国通りを車の流れのままに走らせるのであった。

Devil Speak

中野駅前ではアキラと待ち合わせをしたタケルは、合流を果たすとブロードウェイへの道を共に進んでいく。

タケルがバイトをしているコンビニチェーンを元にした様なお店もあり、普通のアルバイト店員が接客している姿に「昔はこうだったんだよな」などと思ったりもしている。アキラは今日はタンクトップにジーンズ。

コウモリ要素のある悪魔人のアキラの場合、この格好が偽装を解いた時にいいらしい。

仮想のブロードウェイはサンプラザもそうだったが、ほぼ現実のものと同スケール、その分他の建物にしわ寄せが行っている。

「まあ、なんというか、言われてみれば納得なんだが、ブロードウェイに固まってるとは思わなかった。普通に街中にいねーなあって不思議に思ってたからな」

「雰囲気としては『らし過ぎる』よねブロードウェイって」

「逆にメガテンショップのアイコン表示が無い店を不自然に感じるもんなあ」

「全部の店が裏の顔あつてもおかしくない感じ」

『タケルー！ タケルー！』

「コンプの中？ フィーネちゃん」

「そ！ 街中はやつぱ出して歩くよね？」

『なんかおいしそうな物がある気配がする！ 私のリーダーにピンピン反応してるよ！』

「ん？ 豆腐か？」

『ちくがくうく！ 出して、出して！』

「平気そうじゃね？ 出してあげれば？」

「ん、ま、いつか…召喚フィーネ」【Summoning O.K?】

「じゃじゃくん！ こつちこつち！」

「ん、下の階？」

「まあ、フィーネのことだからお菓子かなんかだと……」

エスカレーターまで先導すると最近の定位置タケルの頭の上に陣取るフィーネ。

さして重くも無いのでそのままにしているタケル。

アキラは物珍しそうに周囲の店を見ている。

「クレープ？」

「おいしそうでしょ！」

「安っ！ うそ、マジかってくらい」

「飲み物付けて400円以下って……」

「でかした!!」

「えっへん！」

胸を張るフィーネ、ドヤ顔だが、それも許される。

「私、チョコバナナってやつ！」

「何気に俺、リアルでクレープ食ったことないんだよねえ……クリームカスタードにしとくわ」

「じゃ、俺はこのソフトクレープ……これソフトクリームだな、じゃ、これにしよう」
注文をし、お金を払う。

「……そう言えば今の店の人、普通にフィーネに対応してなかったか？」

「え？ ショップのアイコン出てなかったよな？」

「え？ なに、おいしいね、これ！」

フィーネは食べるのに夢中で全く聞いていない。

「慣れてるってことかね？」

「あちこちサマナー御用達？ 仲魔向けのアパレルショップとかあつたりして？」

「ここだと現実の方でもそんな店あってもおかしくない感じだよなあ」

伊達にカオスの城とは呼ばれていない。

「まあ、ブロードウェイだから」で納得してしまう独特の雰囲気を持っているのだ。

「おお、ピクシーだあ……すいません、スクショ撮っていいですか？」

そう声をかけてきたのはストリート系のカジュアルな服装にクラシカルなモノクルという、微妙に狂ったファッションをした青年だった。

「もしかしくなくてもプレイヤーの方ですか？」

「はい、異能者やってます、ウシロとイイマスです！」

「えっと、俺は悪魔人のバスターでアキラ、でこつちが」

「サマナーのタケルです、でもってこの子がフィーネ」

「おおおっ！ やっぱ仲魔にするのには何かコツが？」

「フィーネに口止めされてんで……スンマセン」

みつともないからなのだが、そうは取らずに真剣に「そうですかあ」などと頷くウシロ。

「フィーネ、この人が写真撮らせてほしいんだって！」

「ん？ まあ、最強な私に目をつけるとはなかなかやるね、チミは！ いいよー！ あ、タケル、これ持つて、食べちゃダメだかんね！」

「なら2ショットの方がいんじゃない？ 俺が撮るよ」

「あ、すみません、お願いできますか？」

タケルはクレープで両手がふさがってるため、アキラがウシロに声をかける。

フィーネもいい笑顔だが、ウシロも非常に嬉しそうだ！

今にも飛び跳ねそう……撮った写真を確認して飛び跳ねてる。

「ありがとうございます！ あのプロもお願ひできますか？」

「いいですよ！」

「いいよ！」

「おっけー！」

そういう「機能」は無いのにフィーネまで返事をし、フレ登録。

ウシロはこの後、サンプラザで経験値稼ぎを友だちとするのでそうだ。

自分らの経験をタケルやアキラは軽く話して別れを告げる。

フィーネはバイバイと手を振りながらもクレープを食べ続けている。

自分の分を食べ終えると物足りなさそうにタケルのものをじとーつと見ている。

「食うか、これ？」

最初から全部食べる気は無かったタケルは、フィーネの食べ具合を見ながら自分の食べる速度を調整していたのだ。

「食べる、食べる！ うわっ、これアイス？」

「ソフトクリーム、まあ、やわらかいアイスって言ってもいいか」

「これもおいひい！」

何気に視線が時々来ている。

先ほどのウシロの様に話しかけてくる訳ではないが、プレイヤーがかなり居るのだから。

取り敢えずはフィーネも満足したため、ブロードウェイ内のそれっぽい店を回ることにする。

「にやんだらけへようこそ！」

「隠す気無いだろ、おい」

「これは、アリなのか？」

「うわあ、人間のお店で働いてるんだ、凄く凄く！」

「これはコスプレだにやん♪」

ブロードウェイをある意味代表するお店、漫画古書専門店では予想外の光景が待っていた。

「店員」としてネコマタが働いていたのだ。

「お金を稼げば生体エナジー協会でMAGが買えるのにや？ 寝る時は猫の姿になれば

いいのにや。自分の食い扶持は自分で稼ぐ、私は自立した悪魔なのにや！」

「あ、これ高級ネコ缶です」

「良かったら、これ使ってください！」

「ありがとにゃん！」

プレイヤーによる貢物もしっかりと獲得している模様。

「まあ、百歩譲ってネコマタはいいとしよう」

「なんで、こんなのまで歩いてるんだ？」

アキラが指差す先にはリトルグレイ。

「……そう言えば、プレイヤー種族で造魔っていたな」

「あー、そっか、造魔……あれで日常過ごせるのか？」

「ここの中ならまあさほど違和感無いが、東中野の商店街とかだと浮きまくりだぞ？」

「それでも中野なら雑司が谷に比べればまだ……」

その後ショップをいくつか覗き、傷薬をタケルは買い足し、アキラは防具ショップで安全靴を買った。

帰り際、ブロードウェイ前で解散とはならず、その足でサンプラザに。

レベル上げの戦闘を行ってからの現地解散。

ホームへの帰宅途中でコンビニに立ち寄り、更に「たまには」とホカ弁屋へ足を伸ば

して食事を買う。

今日も戦闘はダーク悪魔中心だったため「なんか臭くなってる気がする」と文句を言うファイネのために洗面台にお湯を張り、ペットボトルの蓋を複数使って「シャンプー」「リンス」「ボディソープ」を小分けにする。

ハンドタオルをバスタオル代わりに置いて「覗かないでよー！　でもドアは閉めちゃだめだからねー！」とファイネが言ってくるのに返事をしつつ、ベッドに横たわり、軽くログアウトするタケル。

すぐに再度ログイン。

まだ、ファイネは鼻歌を歌いながらパシャパシャとやっている。

テレビをつけると、まあ、現実と同じ程度につまらない番組だらけ。

スポンサー提供に佐伯エレクトロニクス・バイオロジカル&エネルギーコーポレーションとかアルゴン社とか流れているが、今更騒ぐほどのことではない。

「タケルー、居るー？」

「居るよ！　どうした？」

「また行こうね、さっきのトコ！」

「サンプラザか？」

「ちーがーううう！」

「分かってる分かってる、ブロードウェイだよな?」

「そう! クレープ全種制覇が待ってるの!」

その後もファイネとおしやべりをしてからコンプにファイネを戻してログアウト。今日はコンビニのバイトが無いため、少しネットを見ようとパソコンを起動する。



【魔獣も夜魔も】お前らの仲魔を紹介すれ! その17【みんな天使!】

1:吉祥寺のサマナー

ここは『女神転生Ruina』プレイでの仲魔をサマナーが自慢・羨望するスレです。スクショは歓迎ですが、リンク先へのアクセスは自己責任で!

煽り、荒らしは華麗にスルーしましょう

愛情の無いコメント、貶しはNG

和気藹々、マターリ進行でいきましよう

過去スレ:お前らの仲魔を紹介すれ! その1〜16

(中略)

172:雑司が谷のバスター

>>155

勝てば仲間になるかと思ったら余計に嫌われたでゴザル

173 : 中野の異能者

ピクシー キタ*・°. . * : : * . ° (∇ °) ° . * : : . . . : * . .

。 . * !!!

174 : 鶯谷のサマナー

>>173

もちつけ つΩ

175 : 田町の異能者

>>173

いや、戦闘相手なら出てくるよ?

176 : 中野の異能者

控えおろうっ!

つ【スクシヨ】【スクシヨ】

177 : 御徒町のサマナー

フォトシヨ加工乙

178 : 千駄ヶ谷のバスター

一緒に写ってるのが176か？

その服にモノクルは合わねえんじやね？

179：中野のバスター

あー、一緒に写真撮ったんだ、羨ましい

私にもやんだらけ詣での道中で見かけたよ！

180：赤坂の異能者

にやんだらけってことはブロードウェイか！

181：水道橋のサマナー

ネコマタさんが働いているというあのにやんだらけか！

182：品川のバスター

いやいや、話がそれてるから！

>>176

で、詳細キボンヌ

183：中野の異能者

>>177

そんな加工してる暇ありやログインしてレベル上げるわい！

>>178

初期装備で異能者向けのアイテムだからね!?

>>>182

ブロードウェイでクレープを食べてるピクシーたん発見↓契約してるサマナーにスクショ撮影許可を取る↓一緒に居たバスターっぽい人が「一緒に撮った方がいんじゃない?」と撮影を申し出てくれる↓フレ登録して約束があつたんで別れる↓掲示板に書き込む↑今ココ

184 : 大久保のサマナー

で、で?

どうやって契約したって?

185 : 代々木上原のサマナー

β プレイヤーじゃね?

186 : 中野の異能者

>>>184

ピクシーに口止めされてた、あれ、ふりとかじゃなく、ホントにピクシーが口外されること嫌がってたみたい

187 : 淡路町のサマナー

(; ㇿ) ゴクリ : も、もしかしてエロゲ的展開?

188：千駄木の異能者

>>187

ネーよ！

189：西日暮里のバスター

>>187

それはない（；^ω^）



「うえっ、ここまでピクシーって仲魔にならないの？」

書き込みを見て猛は引きつる。

ちよつと過去ログを見ると板が少し荒れていた時期もあったようだ。

「ちよつとヤバいかも」と思いつつ、気になっていたことを書きこんでみる。



193：東中野のサマナー

あの？ ピクシーにアイスとかねだられたりした人居ます？

194：大森のサマナー

>>187

ねーよ！

195：目黒のサマナー

>>193

アイス？ ないんじゃない？

196：浅草のサマナー

>>193

そもそもが何かねだられるトコまで行ってないよね

197：神保町のサマナー

>>193

マグも魔貨も通じないでござる

198：東中野のサマナー

ウチの子（スクシヨの子です）はコンビニのシュークリームで釣れて

その後、ピクシー仲間に遭遇した時は

買ってあげたアイスの自慢をしてですね

一部のピクシーが「サマナーと契約をするとアイスがもらえる」

などと言っていたもので……

199：目黒のサマナー

ガタツ……ちよつとコンビニ行つて来る！

200：大久保のサマナー

ガタツ！

201：恵比寿のサマナー

ガタツ！

202：神保町のサマナー

>>198

もしかしてピクシーの契約サマナー降臨でござるか？

203：原宿のサマナー

キタ——（。▽。）——！！



「ふう、えらいことになつちやつたな……」

加速するスレッドにさらに猛は引きつる。

その後も質疑応答は続き、タケルも落ちるに落ちれなくなる。



517：目黒のサマナー

今までの苦労はなんだったんだ……orz

518：大久保のサマナー

ヒヤッホイ！ ピクシーたんが我が家に！

519：浅草のサマナー

なんとという物欲無双……今までのメガテンの感覚でプレイしたらあかんかったんや

……

520：初台のサマナー

有難う！ ピクシー最高！ このVRやって良かった！



「……なんとか成功してみたんだな。これでフィーネを連れ歩いてても悪目立ちしなくなるな、良かった、ホント、うまくいかなかったらどうしようかと……」

ほっとしてブラウザを閉じ、パソコンの電源を落とすと猛はベッドに横たわり、本当

に眠るのであった。

Battlefield

「あー、こういう方向性は居るかとは思ってたが……」

「まあ、現状、 β 勢以外はほとんど横並びだし、コスプレとおもえば……」

タケルとアキラ、二人がサンプラザで出会ったプレイヤーはメシアン。

それも背中を向けて見なかったことにしたくなるタイプであった。

「あー、はじめまして、バスター／神父でメシアンのアンデと言います」

「サマナー／SEのタケルです」

「バスター／学生のアキラだ、でもって悪魔人なんだけど、メシアンが話しかけて平気なの？」

「あー、その辺、ガチ勢は洒落にならないみたいですけど、本サービスタートの俺らみたいなのはそこまで行っていないですから」

表の顔つぱく善良な感じでにっこりと笑うが、無茶苦茶時間かけて作り込まれたであろう、その外見で言われても説得力が無い。

「異教徒とカオス勢は皆殺しだ！」と口にする方がよっぽど似合っている。

「いやあ、こう見えて実は種族は先祖返り選んじやってますからねえ。しかも吸血鬼、気

にする方がおかしいですねえ」

「いや、その外見じゃダメだろ！」

「なんか色々と間違ってる気がする」

「女の子のメシアンプレイとか、結構いいですよ。初期にシスターの服とか貰える上に、その防御力高いんできちんと着ている人が多いですし」

「あー、シスターは確かにいいな！」

『禁書』風にかスタマイズをするとか将来的にいそっだし」

「それに知り合いのサマナーに聞いた話だと、どうもメシアン御用達系の悪魔が仲魔になりやすい傾向があるらしいですよ？」

「あー、掲示板にそういうのあったな」

「ゲーム本編や二次でメシアンの評判悪いから挽回策？」

「あー、SW1.0のファリス神官より酷い扱いですよねえメシアン」

「現実でもイスラムとか過激派イメーজあるけど、日本で会うのは気のいいおっちゃんとか多いしなあ」

「トンカツ好きないスラム教徒とか、ビーフカレーが好物のヒンズー教徒とか居るし、『可愛いは正義！』とか言うメシアンが居てもおかしくはないか……」

話せば結構俗っぽいのだが、外見で避けられてしまうことも多いのだとか。

まあ、その外見では仕方がない。

むしろフレンドリーに話しかけられている現状でも、違和感はぬぐえない。

「まあ、せっかくなんで、組んで中を回りますか？」

「いんじやね？ タケルは？」

「ファイネ次第……」

「じゃじゃくん、ファイネだよ！ よろしく、おじさん！」

「おじさん……こう見えて中身まだ大学生なんですけどねえ……」

組んで中を回ることになった。

「良く銃剣なんか初期装備でゲット出来たなあ」

「まあ、これで武器が金属バットとかだとガツクリ感が半端無いけど」

「執念とリアルラックの賜物です！ ……それより、ブロンズの花瓶って強いですねえ」

「こいつは鈍器の申し子だからな！」

「鬼に金棒、タケルに花瓶だよ！」

「……お前ら」

くだらない話をしながらもなんとかなる程度に余裕はある。

タケルとアキラ、そしてファイネだけでも危なげなく経験値稼ぎを出来ていたのだ。

更に攻撃が出来る人間が加われば傷薬の出番すらない。

「なんだ、このあからさまに怪しい扉は」

「前に回った時には無かったよな？」

「一定人数かレベルで出現するとか、月齢が関係してるとかじゃないですか？」

「なんか、私の嫌いな臭いがする〜！」

順調に経験値稼ぎを続けていた彼らの前に、突如、といった形で現れる扉。

周囲の建物の本来の扉と明らかに異なった様相を呈している。

「この悪魔の傾向からしてダーク系のちよつと強いのだろうけど、何が出てくるんだろうな？」

「さすがに序盤でギリメカラは出てこないと思いたい。つてかねえよな、流石に？」

「メガテンだから絶対に無いとは言い切れませんねえ。入らずに引き返すのも手ですよ？」

「たのもう〜！」

「「あ！」」

ピクシーであるフィーネの手であつさりと思うようなドアが開き、呆気にとられる三人。

「ダ、ダレダ、オマエラハっ！」

血まみれの室内には人に似た異形。

「analyze 邪鬼ウエンデイゴ：ちつと格上？」

「一人増えてるのが救いつて言えば救いだが」

「明らかにメシアンとは相容れない悪魔ですね。見て見ぬふりは出来ないでしょう！」

「こいつ臭い！ やつちやえ、タケル！」

フィーネにけしかけられたからではないが、素早さでは敵も含めた中で一番早いタケルが花瓶で殴り掛かる。

「いつ見てもどつちが悪役かわからねえよな」

「敵じゃなくて良かったと本当に思います」

アキラとアンデも続く。

幸い、ウエンデイゴはさほど素早くはないようだ。

「ソ、ソナモノデナグリカカルナ！」

花瓶で殴られるのは悪魔でも嫌らしい。

かなり動揺している。

「いっくよー、下がって！ ジョー！」

動揺した隙にフィーネの魔法が飛ぶ。

感電こそしなかったもののそれなりのダメージを与えた様だ。
ウエンデイゴの表情が怒りに歪む。

「キ、キサマラ！ ブフ！」

ウエンデイゴから魔法が飛ぶ。

何気に氷結魔法を見ることが自体が初めてだ。

攻撃をくらったアキラ以外の周辺にも冷気が飛ぶ。

「アキラ！」

「だ、大丈夫ですか？」

「うわっ氷結使う相手初めてだから気が付かなかったけど、悪魔人のオオカミ要素、氷結耐性あるわ、助かった」

「じゃ、アキラ壁の俺とアンデが遊撃、フィーネ後衛ね！」

「お、おい！」

「分かりました！ メシアンがやられ役でないとところを見せましょう！」

「危なくなったら言ってるね。ディアも覚えてるから！」

「ヘイト稼ぎとかねえんだぞ、これ!？」

「任せた！」

「おいっ！」

即席のフォーメーションで敵に当たるタケルたち。

アキラが咬みつかれた(安全靴で蹴って引きはがした)り、タケルが鋭い爪で引っかけた(頬に爪のラインが入って「おお、ワイルド」などと何故かファイネが喜んでいたり、ファイネを狙った魔法をファイネが躲したせいでアンデが直撃食らった(この冷たさ、プールの腰洗いみたいに身がすくみますね」と氷結して行動不能にならなくても影響があるVRならではの戦闘を身をもって感じていた)りと色々あったが、重大なダメージを食らうことも無く無事に戦闘終了。

「なんか、本当に『戦っている』って感じがしたな!」

「ちよつと冷や冷やした。魔法は意外と避けられるもんなんだな」

「気を付けないと、違う人を狙った魔法を食らいますけど……」

「大勝り! ぶいっ!」

「経験値入ったなあ、雑魚戦2く3戦分は入ってるんじゃないか?」

「宝玉とブフストーンですか、割と実入りはいいですね」

「俺は宝玉とターコイズ、宝石も落とすんだな」

「俺は宝玉と……なんだ、これ? どう見ても食器洗い用のゴム手袋なんだが?」

「防御2、氷結、感電耐性、炎熱弱点……見てくれ以外は当りアイテムじゃね?」

「そうですね、見た目以外はいい装備だと思いますよ?」

「タケルく、似合ってるよ！」

「お前からこつち見て言え！ フィーネもニマニマしながら言うな！」

「ドロップは基本手に入れた人のもんでいいよな？」

「ええ、問題ありません」

「おおい！」

和やかに戦利品の確認も進む。

外に出るとドアごと部屋は消え、元の廊下に。

その後は特に特殊な相手が出ることも無く、しかしながら夜の時間帯の相手の連戦はまだ難しいレベルということで、時間帯の変化前に切り上げることにする。

「じゃ、お疲れさま！」

「お疲れさまでした。あ、フレいいですか？」

「いいよ、拳でいいよな？」

「コッソ」「コッソ」「コッソ」とフィーネまで拳を合わせて、フレ登録完了。

その場で解散ということ、それぞれのホームへ向かう。

既になじみ深くなっているサンプラザから東中野のホームまでの道。

「タケル、タケル！ 大変、大変！」

出しっぱなしの散歩気分で道路脇にフラフラと飛んでいたフィーネが慌ててタケル

を呼びに来た。

何やら道路脇に茶色いものがうずくまっている。

猫か犬だろうか？

そう思い、しゃがみこんで様子を見るタケル。

「……俺って普通のパターンじゃ仲間作れないのかな？」

他の悪魔にやられたのか、それともサマナーやバスターにやられたのか、意識を無くしてうずくまっていたのはノツカーだった。

「まあ、見ちゃったからには放置は出来ないよな」

傷薬を使っても意識をささないノツカーを抱えると、心配そうに見るフィーネに「大丈夫そうだよ」と声をかけ、ホームに向かう。

片手でノツカーを抱えたまま、鍵を出してドアを開ける。

先行したフィーネが部屋の灯りを着けている。

テレビなどのリモコン操作や、部屋の灯りの on/offなどは部屋で過ごすうちに出来るようになっていたフィーネである。

そのうちスマホも操作しだしそうだ。

「契約してないからコンプで休ませるって訳にもいかないんだよな」

「この子大丈夫そうね、寝てるだけみたい」

「ピクシーって他の悪魔と仲がいいのか？」

「別にそういうんじゃないけどね、弱ってる子は放つてはおけないじゃない！ この子はサンプラザに出る連中と違って臭くないし」

「まあ、取りあえずは部屋で寝かせておくか」

座布団の上に寝かせ、タオルケットをかける。

「フィーネはお風呂はいいのか？」

「あ、入る入る！ この子もすぐには起きそうもないしね」

「じゃ、準備するから、待っててな！」

「あー、そう言えば、コンビニ寄らなかつた！」

「まあ、この子を放置する訳にもいかなかったからなあ、ちなみにこの子は何を食べるんだ？」

「良く知らないけど、地霊系の子は固い物が好きらしいよ？」

「そっか、あとで買いい物に行かないとダメかもな？」

「そしたら、コンビニ行こ、コンビニ！」

「この子放置出来ないだろ？ フィーネはお留守番」

「えー！ 自分で選ぶのが楽しいのに！」

「さて、準備済んだぞ!? 風呂入っとけ」

「うー仕方ないか……風呂上がり of 冷たいミルクもおいしいよね」

風呂にファイネが行っている間にタケルは軽くログアウトする。

今の状況について掲示板で訊ねてみたい気もするが、ファイネが待っているし、ノツカーも目を覚ますかもしれない。

すぐに再度ログインするタケルであった。

S p i r i t , s P o w e r

「ペルソナっ！ ガルっ！」

「おお凄えー！」

「仲魔が使うのとはまた違うなあ」

タケルとアキラはブロードウェイで声をかけてきたペルソナ使いの女の子と共に初の遠征を行っていた……徒歩で。

「しかし、ここも異界化か、それっぽいって言えばそれっぽいけどさ」

「まあ、学校、寺、病院、神社、墓地って辺りは定番だよな」

「俺、ここ落ちたんだよなあ、大学受験……」

こちらの方がホームでブロードウェイは遠征というか遠出になるんだ、と笑いながら言った少女（少なくともアバター外見は）は、制服風のブレザーとミニスカートにスパッツとグラントホツケーのステイックという現実でもさほど違和感の無い格好で、「エリリって言うんだよろしくね！」とフィーネの目を見て自己紹介をしていた。

ホントの名前はエリで「エリ」か「エリー」か「エリイ」か「エリイ」にしようとしたのだが、全部先に使用されていたため、この名前になったのだという。

アルカナは「剛毅」、なんと言うか外見に見合わぬ勇ましいアルカナにちよつと引きつってしまったタケルである（性格を知れば「らしい」と思えるのだが）。

初の遠征ではあるが、プレイヤー×3、仲魔×2という編制である現在、特に問題はなっていない。

そう、仲魔×2。

ピクシーのフィーネに加えて、ノツカーのムルル（「なんかそんな感じ！」とフィーネによる命名）が仲魔になった。

部屋に連れて来た後、目を覚ましてしばらくは怯えた様子を見せていたが、フィーネがなだめ、タケルが飴をあげるとなんか凄い勢いで懐いた。

飴はフィーネが欲しがって以前に買っていたものだが、フィーネには大き過ぎて口の中に入らなかつたものだ。

ガリガリと噛み砕いて食べるとわんこの様な目でタケルを見上げ、「仲魔になつてくれるか？」との問いに勢い良くなんでも頷いてコンプに自分から入っていったムルルは、召喚される度に「ご主人様大好きわんこ」の目をして嬉しそうに寄って来る。

こう「好かれるのは嬉しいけど、なんでそこまで喜ぶの？」って言いたくなくなるころもわんに似ている。

犬の要素が無い悪魔なのに、なんでこうなんだろう、とタケルは首を傾げているが、こうした戦闘でも役に立つことを嬉しがっているのが良くわかるのだ。

「ホント、ムルルちゃんはタケルさんが大好きなんだねえ！」

「人外たらしの隠し称号とか持つてるんじゃない？」

「俺は女好きの貧乏GSじゃないぞ？」

こうしてる間も実のところ戦闘は続いている。

出現悪魔の傾向はタケルたちお馴染みのサンプラザとは異なっていて、墮天使、夜魔の出現が多い。

「大体、交渉が一回も成功してねえし！」

スキルで交渉を持っているにも関わらず、仲魔となつてもらうための交渉に一度も成功したことが無いタケルである。

「まともな方法では仲魔が増やせないんじゃないか？」と肩を落としたくもなる。

「タケルー、ちよつと休憩しない？」

「あ、いいかもね！」

「そだな、この小講堂しばらくは悪魔出そうもないし」

「じゃ、私の水筒取ってー!」

タケルの鞆の中には、今日からフイーネ用の水筒が入っているのだ。

喉が渴いたということもあるのだろうが、「見せびらかしたい!」という意識も強いようだ。

小さなサイズの水筒だが、それでもフイーネが持つものには大き過ぎるので、タケルの鞆の中に入っている。

キャップに中身の牛乳を注ぎ、フイーネに渡すと更に鞆の中を探ってタケルのズボンを掴んでいるムルルに飴玉を渡す。

ついでに他の二人も飴玉を欲しがってる様なので手渡す。

「ありがとな!」

「ありがとー!」

「ふはーっ! タケル、もう一杯!」

「はいはい、クツキーも付けるか?」

「あるの!?! なら頂戴!」

クツキーを抱えながら牛乳をちびちび。

ピクシーには二本しか腕はないから、フイーネが飲みやすい位置でキャップを差し出しておくのはタケルの仕事である。

「仲魔羨ましいと思つてたけど、サマナーにはおかん属性が必要だと良く分かつたよ！」

「おかん（笑）！ 確かにタケルはそういうトコあるよな」

「誰がおかんだ！ せめて保父さんと言え！」

「大して変わらんが？」

「……………」

「どうしたムルル、ムルルもクッキー食べるのか？」

片手でフィーネの牛乳を保持しつつ、もう片方の手でクッキーを取り出してムルルに与える。

「（やっぱおかんじゃん！）」

本人がいくら否定しようが周囲の評価は固定されてしまったようだ。

「さて、じゃ、休憩終了〜！ ここつて何かボスっぽいもの出るの？」

「夜は爵位持ちの悪魔が出るつて噂だけど、昼はそういうの無いはず」

廊下を進む3人と仲魔。

「掲示板にも書き込んだけど、サンプラザは何か変な扉、そうそうあんな感じ……………いいか、フィーネ、勝手に開けるなよ？ ふりじゃないからな？」

「あ……………あんな扉が出てな？ 中に周囲より強めの、その時はウエンディゴが出たん

「だわ」

「ドロップや経験値的にはおいしいと言えるんだが、その分リスキーな相手が出そうだよなあ」

フィーネは今回は別にどうでも良さそうな顔をしている。

ムルルはやる気を見せている。

「どうする？」

「う〜ん……」

悩むタケルとアキラ。

「よしっ、やろう！」

エリリの言葉にドアが開く。

「その言葉が聞きたかった!!」

「そっちが開けちゃうのかよ!?!」

「既に5つのパーティーにスルーされているのだよ!」

「「あー……」」

開いたドアの先、そこに居たのは悪魔と言うより不審者だった。

黒いゴムの雨合羽、黒のゴム長靴、ゴム手袋、手にはゲートボールのスティックを持つ

ている。

「analyze 鬼神ツール（劣化分霊）……劣化し過ぎだろ!!」

「う、五月蠅い！ 雷神が感電つてネタをお前ら面白がり過ぎだ！ 見ろ、対策はバツチリだぞ!!」

「何故にゲートボールのステイック？」

「劣化というのは概念が希薄になるんだ、仕方ないだろ!! ハンマーに近い形状を取れただけでも幸運なんだ！」

「（今の内にゴム手袋をこっちもしといてつと）まあ、効かないだろうがお約束つてことで、行け、フィーネ！」

「いっくよー、ジオ！ あー、無効じゃないけど耐性だ、つまんなーい！」

「貴様ら！ 会話するフリして攻撃とは！」

「いや、それが人間と言うものだよ、ソアー」

「英語読みするな！ それだとアメコミヒーローになるだろ！」

「おお、固えな、結構！」

「だから、会話するフリして死角から殴るな！」

「隙アリ！」

「……………♪」

「あ、ツールって自分でも電撃系使うんだっけ？ 私ちと下がるね？」

「あーペルソナの？」

「そ、弱点出来ちゃう点はリスクだよねえ」

逆上したツールを更に煽りつつ戦うタケルとアキラ、張り切つてゴム装備のため炎熱弱点になつてしまったツールにアギを飛ばすムルル、そしてお気楽傍観者モード時々手伝いといったファイネとエリリ。

高位分霊ならともかく、これ以上低くすると概念を保つことすら困難になるというレベルの劣化分霊。

タケルの鈍器が唸り、感電対策を取つたにも関わらず倒されるツール。

実に哀れなものである。

追い討ちをかけるようだが、一連のやり取り、エリリは電撃弱点ゆえの退避のフリをして動画を撮影していた。

ネットで動画公開する気満々である。

本体が怒りのために降臨しかねない鬼畜の所業だ。

「いとあはれ……、本体とか高位分霊は滅茶苦茶強いのにねえ」

「お疲れ、流石に体力はあったなあ、あと少しからが長かった」

「……………！……………♪」

「うんうん、ムルルは頑張ったなあ！」

「ぶう、あんな格好してなきや私の独壇場だったのに！」

「あー……………まあ、そういう相手も居るわな、反射じやないだけマシと思わないと」

多少の怪我はあったものの、悪魔をして卑怯とののしられる戦いぶりでも無難な勝利を収めたタケルたち。

次はドロップの確認である。

「魔石と雨合羽だった……」

「宝玉とゴム長靴……」

「宝玉とゲートボールスティック！」

「ドロップは手に入れた人のものってことで！」

今日はタケルが真っ先に声を上げる。

「異議無し！」

ゲートボールのスティックを手に入れたエリリも賛成。

「なあ、雨合羽と宝玉交換してくれない？」

アキラは渋っている。

「俺だつてゴム長なんだぞ？」

「タケルは既に花瓶、ゴム手袋だからいいじゃないか！」

「耐性同じ装備増えても意味無いからいらん！」

「どうしても嫌だつたら売るかオークション出せばいいんじゃない？」

「オークション？」

「DDSの」

「あれつて仲魔とかだけじゃないの？」

「アイテムを出せるよ？ ま、売れずにそのまま戻ってくることもあるらしいけど」

「そっか！」

なんとか諍いのタネも収まって、大きなバトルでそれなりにアイテム消費もしたというところで校門まで戻って解散。

もちろんフレ登録は済ませた。

「「じゃ、また！」」

二人と別れ、ホームへの道を歩く。

フィーネは出しっぱなし、ラストの戦闘で頑張ったムルルは抱っこして欲しそうにしてたので、「ちよつとの間な」と言つて人通りの少ない通りを歩く間だけ抱っこして進む。

「都電走ってるんだなあ、深夜帯に幽霊都電とかイベントありそうじゃね？」

「あー、今度乗ってみたーい！」

「……………♪」

「へえ、ここ小学校なんだ」

「子供が遊んでるね」

「お、このお店駄菓子売ってるのか！」

「駄菓子って何？」

「うーん、安いお菓子。例えば、フィーネがいつも買ってるプリンの値段で、これとこれとこれ、更にこれまで買える」

「おー！ 凄いなだね、駄菓子！ でもプリンやアイスもおいしいし……………」

「色々買ってみるか、気に入ったのあれば、コンビニでも売ってるヤツもあるし……………」

フィーネにあんこ玉、ムルルに糸引き飴、自分は串のアンズを食べる。

色々買った筈の駄菓子は、ホームにたどり着く前に全て消費されるのであった。

M e s s e n g e r

「お疲れさま」

「お疲れ様です。現実のオフィスならこのあと食事にとか飲み会とか出来るんですけどね」

「あー、まあ、その分、通勤とかで苦しまないで済む訳だし……」

猛の本業である倉庫管理の仕事、実作業は倉庫の各種端末へ自宅からVRアクセスするのだが、勤務管理その他のため、始業時、終業時それぞれにV R O F F I C Eに顔を出すことになっている。

いつもは挨拶程度で終わるのだが、今日は相手が話しかけてきたため会話となっている。

「浮いた自由な時間とはいってもほとんどVRで過ごすんですけどね」

「杉山さんは今何やってるんですか？」

「女神転生ってゲームのVR版です」

「あー、あの悪魔とか出る昔の東京が舞台のヤツですよ、弟がやってて勧めてくるんですけど、面白いですか？」

「ある意味現実より現実味があるっていうか、悪魔も人間味って言うとな変ですけど、なんかちゃんと生きてるって感じだ」

メガテンの話に猛の舌も滑らかになる。

「へえ、やってみようかな？ 始めたら色々教えてくれます？」

「あー、ただ、プレイして感じるのは『東京って広いな』ってことなんですよねえ。四分の一の広さに縮小されてるんですが、プレイヤーと自然とすれ違うなんてことはあまり無くて、東京のあちこちでバラバラにスタートなんです。だから、外の知り合いとか中に居ても会うのが大変だと思いますよ。なんせ、離島部、小笠原諸島とかそっちの方の人まで居るそうだから」

「へえ、その辺は弟は言ってたなあ。中で会うのも一苦労って、フォローするとか言つときながらそれはダメだろうって話ですよねえ」

「そうですねえ、スタート時間ほぼ一緒でも全然違う場所ってのが検証されていますし、あ、ただ、弟さんがβプレイヤー、実際のサービズ開始前にテストを兼ねてプレイする人のことです。その場合、乗り物を自前で持つてる可能性もあるんで、それならフォロー出来ると思いますよ？」

「ふむふむ、その辺含めて弟に聞いてみまします！ あ、長々と引き止めちゃってますみませんでした。ではお疲れさまでした」

「お疲れ様です」

数少ない現実（とは言ってもVR越しだが）の女性とのやり取り、以前だと変に緊張していたのだが、割とスムーズにやり取り出来たのはフィーネたちと会話をしたりしているおかげなのだろうかと考える猛。

本サービス開始後、順調にプレイヤー数が伸びている『女神転生Ruin a』だが、VR内部から現実の掲示板などへのアクセスが可能になるバッチが当てられるという情報が正式にアナウンスされている。

とは言っても書き込むことは出来ず、閲覧するだけなのだが、情報掲示板や攻略HP、Wikiなどへアクセス出来るのはプレイヤーとしては有り難い。

書き込み機能の要望も根強いらしいが、セキュリティの関係上不可能とされている。VR端末を外して夕食の準備を進める。

外食チェーンの一部が行っている冷凍宅配サービスの冷凍食品だ。

普通の冷凍食品よりは割高だが、お店で食べる味に近いものが自宅で食べられるため、猛はたまに「自分への褒美」として食べている。

「まあ、メガテンの中で食うものの方が美味いんだけどねえ」

掲示板を見つつレンジの出来上がりを待つ。



【アクションから】封切！ メガテン動画館！ その6 【コメディまで】

1：乃木坂の異能者

ここは『女神転生 Ruina』プレイヤーが動画を公開するスレです。

無断転載は禁止！

リンク先へのアクセスは自己責任で！

煽り、荒らしは華麗にスルーしましょう

愛情の無いコメント、貶しはNG

和気藹々、マターリ進行でいきましょう

過去スレ：封切！ メガテン動画館！ その1〜5

（中略）

364：高田馬場のペルソナ使い

まあ、何も言わずに見てくれい！

ある意味泣ける！

>>370

しーっ！ 思ってもそれは言っちゃだめだ！

373：葛飾の異能者

徹はんなにしてまんねん!?

374：四谷のサマナー

劣化し過ぎwwwwwwwwwwwwwwwwwwww

……で、これ、どういう状況で遭遇したの？

375：高田馬場のペルソナ使い

時々報告上がってる変な扉

都の西北で経験値稼ぎの道中で出現

なんか、私らの前に5組くらいスルーしたらしくて、私が「よし、やろう！」って決

めたら「その言葉が聞きたかった！」って向こうから扉を開けて来た(藁

376：新宿のサマナー

じつと出待ちするツールさん……

なんか、マジで泣けてきた……



「動画撮ってたのかよ！ うわ、酷え！ 戦ってる最中は気にして無かったけど、こうして動画を見ると酷過ぎる！」

食事を取りながら動画を見て、思わずツツコンでしまう。

トールの劣化ぶりと不憫さに注目が集まって、自分たちの戦いにはあまり注目されないことにホッとする。

しかしながら、別のスレッドを見ていた猛の箸が止まる。

「なんだ、これ？」



【グレイじゃないよ】造魔な生活報告所 その7 【造魔だよ？】

1：恵比寿のペルソナ使い

ここは『女神転生Ruina』で種族：造魔を選択してしまったプレイヤーがその日常を公開するスレです。

スクショは歓迎ですが、リンク先へのアクセスは自己責任で！

煽り、荒らしは華麗にスルーしましょう

愛情の無いコメント、貶しはNG

和気藹々、マターリ進行でいきましょう

過去スレ：造魔な生活報告所 その1〜6

(中略)

64：池袋のバスター

将来的に俺たち、ヨシツネとか成れちやうのかね？

65：巣鴨の異能者

結局、どこの町でも俺ら浮くんだな

最近じゃ浮きっぷりを楽しんでる

つ【スクシヨ】【スクシヨ】【スクシヨ】

66：田端のバスター

プレイヤー以外は普通に接してくるのがシユールでね

なんか逆に楽しくなってきた

今日なんか山手線でグルグル回って来たし

つ【スクシヨ】【スクシヨ】

67：大久保のペルソナ使い

今の姿に愛着が出てなあ

Bボタン連打とか出来ねえの？

68；水道橋のサマナー

遊園地行ってきた！

楽しかった！

つ【スクショ】【スクショ】

お化け屋敷が異界化したのは笑った

中身、全部、本物wwwwww

69：巣鴨の異能者

>>68

ヒーローと握手してんじゃねえよwww



「なんか、楽しそうだな」

思っていたより造魔を選んだ者は多かつたらしい。

マイナス補正のため、親しくなるのは難しいらしいが、NPCである町の人たちはご

く普通に接してくるのだとか。

調べてみるとこのスレッド、書き込む者よりROMつてる者が圧倒的に多い、かなりの人気スレッドらしい。

確かにスクショを見ているだけで結構楽しい。

食事を終えて冷凍食品の容器を軽く洗ってプラゴミの袋に入れる。

シャワーを浴び、歯も磨いて準備完了。

メガテンの世界へと旅立つ。

ログインするとコンプがピコピコと点滅している。

フィーネが画面に貼り付いているのでまずは召喚。

ムルルも呼び出し、それぞれ食べ物を与えてから点滅の原因であるメッセージを読む。

「エリリです・事後承諾でごめんなさいですけど、この間の戦闘、動画にして公開してます！ 良かったら見てくださいね！ 追伸：また、一緒に異界に行きましょう！」

「了解、『見ましたが、客観的に見ると酷過ぎですねえ……………』っと」

「タケル〜！ ブロードウェイ行こう！ ムルル連れてってあげたことないでしょ？」

タケルの髪の毛を両手で引っ張りながらフィーネがリクエストする。

「……………♪」

頭を撫でられてるだけでムルルは満足そうだ。

「フィーネが行きたいだけなんじゃないのか？」

「当然、私も行きたいけど、行けばムルルも気に入るはずだもん！」

「はいはい、アキラはまだログインしてないか……サンプラザ行くにしてもブロードウェイからなら近いしな、分かった、じゃ、行こうか！」

自分の希望が通り喜ぶフィーネとお出かけで嬉しいムルル。

ブロードウェイまでゆつくりと歩いていく。

「今日は生クリームマンゴーパイにする！」

「クレープ食うのは確定なの……じゃあ、俺は小倉マロンに……ムルルはどうする？」

「クレープは柔らかいからねえ……」

「……………！」

「一口でいいって？ んー、他の店も見て何か欲しいものがあつたら言うんだぞ？」

「……………♪」

クレープを買い、上の階へ向かう。

アキラからメッセージで、軽く一回ログインして連絡を入れたが、現実での用事があるので、再度ログインしてから連絡すること。

「みんな、何してんの、これ？」

「テレビゲームだな……」

「……………?!？」

ブロードウェイ内のゲームセンターではプレイヤーたちがムキになって対戦ゲームをしていた。

「現実のゲーセンじゃ、こういう対戦無くなっちゃったから分かるって言えば分かるんだが、ここにログインしてやることか、これ？」

ちよつとげんなりしたタケルであった。

Checkman

「表の職業ってフレージャーじゃ無かったんだ!？」

「どうやら、他のゲームだと補助職や生産職に当たるもんだってのが検証され始めて掲示板が阿鼻叫喚」

「そら、そうだな。事前の情報にそういうの一切無かったからなあ」

「 β でも特にそういった要素は無かったみたいだから、本サービスでの導入ってこったろうな」

「俺のSEはコンプ系技能ってのは分かるけど、アキラの学生って何?」

「スキルである程度色々出来るけど、上限が低い。上位互換がフリーターだつてさ。まあ、そっちもちゃんとした職業に比べれば上限低いけどね。あと他の職業に就くための必要ポイントが低いから、ある意味現状では有利かもしれない」

「あー、転職しやすいんだ」

「裏の方は転職無理っぽいけどな」

「メシアンやガイアーズは居るけど、クズノハとかファントム・ソサエティとかあるのかね?」

「どうだろうなあ、あつたとしても入れるかどうかは分からないしな」

いつもの狩り場であるサンプラザではなく、タケルとアキラは中野にいくつかある寺の一つの墓地に来ている。

月齢によつて悪魔の出現頻度が変わる小規模な異界である。

ちようど新月で悪魔が一番多く出現するタイミングであつたことから「一度行つてみるか？」と意見が一致したのだ。

「うーん、こゝつてサンプラザに比べると悪い空気じゃないんだけど、なんかちよつと変」

「……………」

雑談モードのタケルたちに対して、フィーネたち仲魔は周囲が気になるようだ。

「そーいやプログラミング持つてるんだよねえ。アプリの改造とか出来るのかな？」

「あー、どうなんだろう？ 現状、料理とかは調理師や家事手伝いを選んでる人間が作つたりしてるみたいだけど『店の方が美味い』って話だし」

「スキル上げが必要ってことかね？ 回数こなすとか難しいよな」

「タケル！」

フィーネが警告の声を上げる。

「分かつてる！ エネミーソナー反応無かつたのに！」

「ホーリーゴースト、寺に天使系っておかしくね？」

「飛び道具欲しいなあ……」

「ジオ！」

「……………!!」

「へっへ、俺も魔法覚えたんだよ！ アギっ！」

「ちつくしよう、俺だけ鈍器かよ！」

「でも、タケルの鈍器が一番ダメージ大きいよ！」

「……………!!」

「ホント、鈍器の申し子だよな！ って寄ってきやがった！ おらっ！」

その後もいくつか戦闘を行い、今はフイーネの牛乳タイム。

ムルルは飴を齧り、タケルとアキラはスポーツドリンクを飲んでいる。

「なんか、変な寺だな？」

「隠れキリシタンのカモフラージュ？」

寺なのに出てくる悪魔が天使系か堕天使系ばかりなのだ。

交渉に向いた新月のだが、タケルはなんか交渉が成立しない気がする。

比較的仲魔になりやすいらしい天使系で交渉失敗したら、タケルは立ち直れないかも
しれない。

交渉スキルとはいったい何なのかと開発や運営に聞いたただしい気もするが、それはピクシー相手に散々振り回された他のプレイヤーが言いたいことだろう。

メシアンのサマナーなら上手く交渉出来るのだろうか？

「メシアンでも連れて来るか、ここ？」

「アンデじや違和感ありまくりだけどな」

「もう少し回ってみるか？」

「うーん、なんか変なの。気になる〜！」

「……………！」

更に墓地内を徘徊する。

お供えもののおはぎにフィーネがフラフラと近寄ろうとするのを引き止めたり、唐突に現れた猫に「ネコマタか？」と警戒するも普通の猫だったりとあまり盛り上がりがない内に終了かと思われた時、唐突に強い悪魔の気配が生じる。

「あらあら、目覚めてはいないのね？ もつとも必ず目覚めるとも言えない状態みたいだけど……………」

「な、なんで、こんなトコに神樹……………」

「神樹ダフネってギリシア神話の？」

「あー、そういうことだったんだ！」

警戒するも全く戦闘を仕掛けてくる気配が無い。

まあ、戦闘になつたらタケルもアキラもパトる羽目になる相手だが。

「もつと強くなつてから、またいらつしやい。私はそれまで、また眠ることにするわ」
ダフネは傍の木に溶け込む様に消えていく。

「ふう、初臨死になるかと思つた！」

「もしかしてイベントフラグ立つた？」

「なんか、意味深なこと言つてたな？」

「誰に対して言つてたのか分からないけどな」

「あー、俺らでなく仲魔に対してって可能性もあるか……」

「にしても天使や墮天使ばっか出るわ、神樹は居るわ、この寺何？ 実は地下に邪教の館

あるんじゃないか？」

「どつと疲れた。下手に戦闘続けて機嫌損ねて敵対されたら軽く死ぬる」

「だな、取り敢えずはここからは退散しよう」

寺の敷地から出るとフィーネたちも元の調子を取り戻す。

「あの中、神樹が姿を隠すのに魔法使つてるから、変な感じがしたんだよ。私くらいじゃないと気が付かないくらい凄い魔法だったんだけどね！ まあ、神樹とか精霊とかは私

「たち妖精とは割と仲がいいし、嫌な感じでは無かったでしょ？」

「強さにはビビったけど、確かに嫌な感じはしなかったな」

「美人だったし！」

「ほー、アキラってああいうのがタイプなのか？」

「いや、客観的に見てもだな……」

「アキラ赤くなってる〜！」

「……………♪!!」

「うっせえ、やっぱサマナー技能取って、強くなって仲魔にしてやるー！」

「神樹ってLーLでCーNのアキラにはキツくないか？」

「強くなればなんとかなる！」

「あー、そういうアキラのコンプもどき、レディキラー入ってたっけ」

「お、そうだ、俺のスマホ！ これは天が俺に味方してるな！」

「アキラがサマナー技能取る頃までにはプログラムミング鍛えて自作アプリとはいかなくてもアプリ改造くらいは出来るようにしとくわ。強化とか出来るかもしれないし」

そのまま解散ということで、アキラと別れたタケルはホームへと向かう。

フィーネは頭の上、ムルルは足元を歩いている。

今日は一瞬死を覚悟したこともあって、余計にこうした日常が大切に思える。

実際には全く危ないことは無かったのだが、悪魔は人とは異なる道理で生きている。ニコニコと親しみを込めた口調で「死んでくれる?」と言ってくる者さえ居るのだ。たまたま死ななかつただけ、これはこの世界の中でも外でも同じかもしれない。むしろ、悪魔という分かりやすい脅威が存在する分、こちらの方がシンプルで、外はもつと訳の分からないものが溢れている気もする。

「今日はいつもとちよつと違つた道を通つて、別のコンビニに寄つてみようか?」
「売つてるものはあんまり変わらないんですよ?」

「いや、弁当とかスイーツとかはチエーンごとかなり違うぞ?」

「ホント!?」 じゃあ、食べたことないおいしいものあるかな?」

「あるある。俺だつて美味しい物を全部食べたなんてとてもじゃないけど言えないんだぜ?」 一食かかつてでも食べつくせないな、きつと」

「……………!!」

「ムルルも今日は自分で選んでみるか?」

コンビニでいつもよりたくさん買い物をしたタケルたちはホームへと帰つて来た。

いつもは気にしないポストを覗くとチラシしか入っていないかつた。

姿は見えないが階段を下りていく足音が聞こえる。

自分以外の住人の気配を初めて感じたタケルである。

大きなうずまきのペロペロキャンディを手にご機嫌のムルルとエクレアに初挑戦の
ファイネ。

共に満足してコンプに戻ったのを機にタケルもログアウトをする。

眠る前に掲示板の巡回。

表の職業に関しての情報を集めようと思ったのだが、気になるスレッドを見つけてしま
まう。



【ワープするぞー！】ステイブンを探せ！ その13 【どこに行った？！】

1：巣鴨のサマナー

ここは『女神転生 Ruina』で神出鬼没、見かけはしても接触は出来ないステイブ
ンを追いかけるスレです。

スクショは歓迎ですが、リンク先へのアクセスは自己責任で！

煽り、荒らしは華麗にスルーしましょう

愛情の無いコメント、貶しはNG

和気藹々、マタリリ進行でいきましょう

過去スレ：ステイブンを探せ！ その1〜12

(中略)

283：半蔵門のバスター

地下鉄ホームで発見も降車客に紛れて見失った。

てか、エレベーターから離れてたし、ワープした？

284：笹塚のサマナー

新宿ダンジョンで発見！

ここでの追跡は無理wwwwwwww

285：信濃町のペルソナ使い

やっぱワープしてるよな

同時刻の複数目撃は無いからなあ

286：九段下の異能者

何故にウチのマンションの廊下にwwwwww

角曲がったら消えてた

287：神谷町のペルソナ使い

直接の目撃では無いんだが、テレビの天気予報の後ろを横切ってた！
意外と目立ちたがり？

288：国分寺のバスター

誰か接触出来ないのか？

ダッシュスキルとかでもダメなの？

289：原宿の異能者

アキレスと亀理論で追いつけない

どんなに速く動いてもその一歩先に移動してる



「ステイブン居るのか！ ターミナルとか出てくるのかな？ 遠征しやすくなるんだ
けど」

D r. スリルとかも居るかもしれない。

ヴィクトルとメアリはどんなんだろう？
パソコンを閉じてもそんな考えに頭を満たされながら、
猛は眠りに落ちた。

Hallucination

「会社員をやめてニートになろうと思うんだ！」

「何を言ってるんだお前は？」

ブロードウェイで交わされるプレイヤー同士の会話。

現実ならダメ人間だが、表の職業の転職に関して激動とも言える状態になっている今の『女神転生Ruina』においては、さほど珍しい会話ではない。

転職するためにほぼポイントを使用しないニートを経由することで、転職にかかるポイントが節約出来ることが検証系のプレイを行うプレイヤー有志によって発見され、それが掲示板などで情報拡散されると、この世界に大量のニートが発生した。

運営も想像していなかった事態であろう。

ニート、フリーター、学生が現在のプレイヤー職業人数トップ3である。

「プレイ上仕方ないって言えば仕方ないんだけど、このダメ人間臭溢れる状況はなあ……ニートになった奴、ちゃんとポイント集めて転職するのか？ 結局、他の要素にポイント使いまくってニートのままになるんじゃない？」

「まあ、こういうゲームにはまる人間はただでさえダメ人間要素があるからなあ、俺を含

めて」

「やはり、ここは私が神の愛を布教すべき時ではっ！」

ほぼ固定ペアとなっているアキラに加えて、今日はここで偶然遭遇したアンデも同席している。

ブロードウェイ内にくっつか存在する占いショップ。

その内、いくつかの店で悪魔関連の情報を入手することが出来るのだという。

そこでの情報収集に足を運んだという話だ。

メシアンとしてのロールプレイで布教を行うのは決して間違っではないが、その外見では布教と言うより脅迫である。

不良がかった外見のNPCが避けて通る有様なのだ。

ここで会ったのも何かの縁ということで、この後「聖地巡礼」に行くことになっている。

メガテンの聖地巡礼、そう、井の頭公園への遠征である。

中野からさほど遠くないにも関わらず今まで行っていなかったのが不思議な井の頭公園。

井の頭公園、そして吉祥寺は、やはりメガテンプレイヤーにとっては特別な存在であ

り、サービス開始当日から既に多くのプレイヤーが訪れている。

ちなみに井之頭と言えば井之頭五郎の名前も上がるが、彼の食べたアフガニスタン料理の店も、名前以外そのまま東中野に存在する。

食道楽とサブカルマニアが開発スタッフに居るのはほぼ間違いない。

ゲームセンターのゲームはちゃんとプレイ出来るものであるし、漫画喫茶に行けばきちんと漫画が読める。

ログイン時間の大半を漫画の読み漁りに使っている、何がしたいのか分からない人間すら居るらしい。

権利関係の支払いを考えると本当に利益が出ているのか不安になるところだ。

この世界を気に入っているタケルにしてみれば、変なところに力を入れてサービスが早期終了する羽目になって欲しくない。

東中野から井の頭公園は歩くとやや遠く、自転車で行くとちょうどいいくらいの距離だが、三人は歩いて移動している。

人の流れの中に時折ポツポツとプレイヤーが確認出来る。

さすが聖地、訪れるプレイヤーはいまだに多い。

公園の入り口、なんとなくこみ上げてくるものがある。

スクショを撮影しているプレイヤーの邪魔にならないよう、奥へと進む。

フィーネが外に出たがっっているので外に出す。

ピクシーと井の頭公園、メガテンマニアならニマニマしてしまう組み合わせだ。

ムルルも一緒に外に出す。

現状、プレイヤー同士のPVPは無いため、仲魔を出していても問題視はされない。将来的にはダークサマナーへの転職も含めて導入されるのではという話も掲示板では語られているが、今のところすぐにそういったことになるという話はない。

NPCの普通の人たちはフィーネに特に反応はしないが、プレイヤーはその姿に嬉しそうな表情を浮かべるし、同じ様にピクシーをお供にしたサマナーの姿も見かける。

タケルによる情報公開後、爆発的な勢いでピクシーを仲魔にすることに成功した者が増え、ブロードウェイでも良く見かける様になっている。

こうして見ると普通の公園なのだが、メガテンフィルターをかけて見ると大きな事件が発生するその萌芽があるのでは、という気がしてくる。

大きな犬の散歩をしている少年は、実は「真I」の主人公で、あの犬はパスカルののではないか、とか……。

「なあ、あの犬、パスカルに似てないか？」

「げっ、マジで激似」

「て、ことはあの少年が将来のI主人公ですか？」

「どうやらそう思っているのは彼らだけではないらしく、コンプでスクショを撮っている者も居る。」

少年は怪訝そうな顔をしているが、自分の犬が可愛いからだろうと納得したようだ。少し得意げな顔で散歩を続けている。

原典の様な不幸が彼に訪れて欲しくないものだどタケルは思う。

公園を進む内にフィーネが特定の方向に気を引かれた。

「どうしたフィーネ？」

「なんか、あつちから呼ばれてる気がする」

「行ってみるか？　メガテン、井の頭公園、ピクシーときて何も無いわけないだろ？」

「そうですね、メガテニストとしてはワクワクするところですね」

何故か人の流れが少なくなっている方へと足を向ける。

「へ、これは……」

「わーいー！」

「……♪」

アキラもアンデも無言になっている。

「あらあら、人の子がここに来るとは珍しいこともあるものね」

「な、なんでこんな高レベルの……」

「湖の乙女……」

「ヴィヴィアン……」

ピクシーやハイピクシーが飛び交う中、それを見守る様に足を水に浸し、岩に腰掛ける乙女。

「それでね、タケルってば……」

「そうなの……ふふふ、楽しく暮らしているのね？」

フィーネが話しかけ、それを楽し気にヴィヴィアンは聞いている。

「ここは妖精の泉、妖精と歩む者よ、また、いつかいらっしやい」

その声と共に夢の様な妖精の乱舞する空間は消え、元の公園に。

「ピクシー同行限定イベント？」

「それっぽいですねえ、いや、いいものを見せてもらいました」

「これ、書き込まないとヤバいかもしれない……。経験値でハイピクシーに進化出来る

様になつてる！」

「相変わらずメガテンではピクシー優遇されてますねえ……」

「AIも他の悪魔より力入ってる感じだもんなあ」

なかば呆然としながらも更に公園を歩むとエネミーソナーに反応。

「……、異界化してるっ！」

「墮天使と凶鳥？」

「誰も銃持っていないもんなあ」

「メシアンでガーディアンつける秘法があるという噂が、それでゾンビコップでも付ければ銃が撃てるんですが」

「いっくよー、ジオー！」

「……………!!!」

先制のジオで一部感電、アギで追い打ち、後は物理で片が付いた。

「まあ、雑魚だからドロップもこんなもんか」

「変なもんは無いな、流石に」

「銃とか使つてたら赤字じゃないですかね、この程度の相手だと」

その後、三回ほどの戦闘で異界からは抜けた。

公園をぐるっと回って吉祥寺の町に。

「おお、ここも聖地と言えるな」

「ホームがこちらの人は主人公気分でしょうねえ」

「センメンキのおじさん……なんでもない」

アキラがこっそりエロゲマニアの本性をさらしたりもしたが、吉祥寺の町をふらついで、駅でそのまま解散。

ホームに戻り、フィーネとムルルと時間を過ごした後、ログアウト。

掲示板へ書き込もうとコンプ、ではなくパソコンを起動する。

最近、パソコンのことをついついコンプと考えてしまう猛である。

「また、荒れるかなあ……でも隠してたと思われるとなあ……」



【愛があれば】ピクシー愛好家が怒涛の勢いで集まるスレ その15 【サイズの差なんて】

1：大久保のサマナー

ここは『女神転生 Ruina』でピクシーを仲魔とし、その愛らしさを愛でる者が集まるスレです。

東中野のサマナーさんへの感謝は忘れずに！

リンク先へのアクセスは自己責任で！

煽り、荒らしは華麗にスルーしましょう

愛情の無いコメント、貶しはNG

和気藹々、マタリリ進行でいきましょう

過去スレ：ピクシー愛好家が怒涛の勢いで集まるスレ その1〜14

(中略)

456：国分寺のサマナー

ここまで個性あると中の人の存在を疑いたくなるな

457：四谷のサマナー

中の人などいない！

……いや、冗談抜きに「本物」じゃないかって気がしないか？

ソウルハツカーズとか考えるとき、ありそうじゃね？

458：東中野のサマナー

今日、井の頭公園に聖地巡礼に行ってきました

……が！

おそらくピクシー同行限定と思われるイベント発生

ピクシーの行きたがる方向へついていたら

なんと湖の乙女と大量のピクシー、ハイピクシーが！

仲魔のピクシーと湖の乙女が会話した後、ピクシーが経験値でハイピクシーに進化可能に！

レベルを上げれば進化可能になるのでは、と言われてましたが、もしかするとこのイベントが必須かもしれません

他の方の検証をお願いします

459：田町のサマナー

おお、東中野のサマナーさんだ、感謝！

……つて、え？

湖の乙女つてヴィヴィアンだよね！

で、ハイピクシー化イベント？

460：荻窪のサマナー

>>458

いつも情報ありがとうございます

つてハイピクシー化！

これは「みんな聖地巡礼すれ！」つてことですね

461：恵比寿のサマナー

これ、強化進化するタイプの悪魔、ピクシー以外にも別なイベントあるんじゃないかね？

462：高円寺のサマナー

グレートパスカルですね、分かります

463：市ヶ谷のサマナー

仲魔とは別に中でペットとか飼えるのかな？

464：新宿のサマナー

話がそれてる

とりま、近場のサマナーは検証（。D。）ノヨロ



「あー、攻略系のスレにも書いた方がいいんかね、どう、思うファイネ？ ……つて、あ
ちやあ、つい、中の感覚でファイネに話しかけちゃったよ」

ごくごく自然にファイネに話しかけてしまった猛。

既に相手手遅れのようにだ。

パソコンの電源を落とし、部屋の灯りを消すと、仕事に備えて眠りにつく猛であった。

I
♡
M o n e y

「お、けっこう入ってるな」

「私たちほつといて働いてたんだから、それで稼いで無かったら怒るよ！」

「……………♪」

日本円の入金を確認してタケルは上機嫌な声を上げた。

戦闘などで獲得出来るのは魔貨。

アイテムなどの売買も基本的には魔貨で行われるこの『女神転生Ruina』において、日本円を獲得する仕組みは非ログイン時間にある。

ゲーム内設定として、非ログイン時間は表の職業で働いていたこととなり、その時間によつて職業ごとに決められた日本円を獲得、廃人的な連続ログインが必ずしもプラスにならない仕様になっている。

ニートや学生などはお小遣い扱いなので、当然、日本円の収入は低く設定されているが、どの職業でも「現実でそんなに稼げりや苦勞しないよ！」というくらい割のいい収入である。

タケルの場合はSEなので、現実と照らし合わせてしまうと軽く落ち込めるくらいの収入はある。

日本円はフリーバー要素が強いため、攻略には必ずしも必要とはされ無いが、表の職業の転職や、乗り物の入手（改造には魔貨が必要となったりするが）、ホームの転居などには必要となるし、遠征などで電車に乗ったりする際や、中で食事を取ったりする場合にも必要となるため、極度に少ないと惨めな思いをする。

物価に関してはゲーム設定当時の日本の物価がほぼ正確に適用されている。

家賃などに関してはこの日本円から支払う必要は無い上に、食事を取らないことによるペナルティも無いため、惨めさを我慢すれば、文無しでも暮らしてはいける（周囲に「金さえ出せば手に入るもの」が溢れている状態で、金が使えないのは想像以上に惨めなものだ）。

表の職業レベルの上昇によって、収入は上がる。

表の職業レベルは非ログイン時間と中での職業関連スキルの使用に応じて上がるため、ログインをずっとしないで居れば上がるといふ訳ではない。

ちなみに現実ではあり得ないが、ニートでもレベルが上がれば収入は増える。

一方で日本円と魔貨の間にはシステムとしてはトレードが行われていないが、一方的な譲渡に近くなる取引は禁止されているものの、DDSオークションで「日本円でも可」

と設定することが可能となつてゐるため、廃人組の中にはこれを利用してなんとか日本円を確保している者も居る。

ちなみに、一人に付き一つのアカウントしか作成出来ないため、日本円獲得のために長期間ログインしないキャラを作成することは難しいが、『女神転生 R u i n a』に興味の無い親族、友人などの協力で抜け道的（大した金額にないアイテムを最初から高めの金額でオークションにかけ、親族、友人などに日本円で落札してもらつた感じ、ただ、余りにも極端な場合、例えば傷薬一個に十万円とか、は「一方的な譲渡」と見做され警告を受ける）に日本円を獲得することは可能だ。

この辺りは運営でも苦慮しているが、長期間ログインしていなかったり、ログイン時間が短いことを理由にアカウント停止を行うということは難しく実質的に手の打ちようが無い状態だ（せいぜいが極度にログイン回数が少ないアカウントに、サービス枠の確保のためという名目で退会を促すメールを送付する程度しか出来ない）。

まあ、興味の無いことにそこまで協力してくれる者を確保することは難しいし、一回や二回ならともかく、何度もとなれば断られる率は高くなるため、最終的には問題にならない範囲に収まるであろうと考察されている。

ともあれ、日本円に関してはログイン、ログアウトを普通にしてプレイしていれば、それなりに入ってくるのだ。

フイーネたちの食事代くらいでは全く心配は要らない。

タケルが財布の中身を確認し、フイーネたちがウキウキとしている理由、それは違った意味での聖地「秋葉原」への遠征にある。

エリリからタケルとアキラにお誘いがかかり、この世界の秋葉原に興味があつた二人も快諾。

日時を調整して、今日、現地集合することになっている。

東中野からだだとJR一本で乗り換え無しなので楽だ。

東中野の駅で切符を買い、さほど待たずに電車に乗る。

フイーネたちはコンプに入っているが、秋葉原の改札を出たら外に出すことを約束させられている。

同じ車両にグレイ……ではなく造魔が乗っている。

誰も特に注目はせず、本人もヘッドホンで音楽を聴きながら文庫本を読んでいる。

表情は分かり辛いがリラックスしているようだ。

割と日常的に電車を使用しているらしい。

電気街口や中央改札はごちゃごちゃしているので、待ち合わせは昭和通り口、地下鉄で来ることになるエリリにとってもこちらの方が都合がいい。

二人がまだ来ていなかったの、キオスクで梅干し純を買う。
タケルはこの酸っぱさが好きなのだ。

改札を出るや否や外に出していたフィーネとムルルも欲しがったのであげたが、共に悶えている。

「なにこれ〜！ 甘くないじゃない！」

「……………!!」

「ん？ ムルルは気に入ったのか？ もう一個食べるか？」

「飲み物を要求するっ！」

「相変わらずにぎやかだな、お前ら」

アキラが合流、同じ電車に乗っていたのかもしれない。

フィーネにフルーツ牛乳を買って飲ませている内にエリリも到着。

三人で電気街の方へと歩く。

「まあ、噂には聞いてたが…………」

「すごいねえ…………」

「ジャンク屋寄つてみたいな、ガンブとかあるんじゃない？」

吉祥寺や井の頭公園以上にプレイヤーが多い。

サマナーに同行しているピクシー同士がお喋りをして、サマナーたちが苦笑いしながら

らそれを見ている姿もある。

「取り敢えずは喫茶店に行こう！ 事前に調べておいたの！」

エリリの先導で人と悪魔で混み合った歩道を進む。

人気のある店の前では中から人が溢れていて、人の通れる部分が減っているのだ。

サマナーの仲魔だけでなく、単独で来ている悪魔すら居る。

「うん、まあ、可能性はあるな、とは思ってた」

「客はほぼ全員プレイヤーだな……」

「来て見たかったんだ！ でも一人じゃ入り辛いでしょ？」

「お帰りなさいませ、お席にご案内いたします」

「うわあ、ウエイトレスさん、全員シルキーだ！」

「……♪」

フィーネの言う通り、エリリの案内で到着したのは「シルキー喫茶」である。

衣擦れの音が聞こえるくらい、店内の客は大人しい。

男性サマナーが「なんとしても仲魔にしたい」と思いながらも、レベルの関係で高嶺の花となっているシルキー。

β勢を除くと仲魔にしている者は現状いない。

サマナー以外だと将来的なチャンスすら無い。

そのシルキーが店内に多数存在して働いているのだ。

店内の半数以上が常連客だということのも無理はない。

「やつぱり上品だねえ、それでいて上位の悪魔ほど怖くないし」

上品な振る舞いをする悪魔は居るがその多くは高レベルの悪魔、威圧感やら実質的な脅威も半端ではない。

「β勢が戦闘強い悪魔で無くシルキー選んだヤツが多いのも分かる」

「まあ、アキバなら成立するよねえ……土地自体のMAGも濃そうだし」

「あー、下手に溜め込んで異界化するより、適度に消費してもらった方が人間にもいいよな」

電化製品などに悪影響のあるグレムリンなども居るのだ。

シルキーにMAGを消費してもらった方がよっぽどいい。

「いつてらっしやいませ、お帰りをお待ちしております」

「……やってることはほぼメイド喫茶と同じなんだけど」

「やってるのがシルキーだと全然違うな」

「池袋だとまた違う悪魔がやってそうだねえ」

「悪魔な執事？」

「妖精な執事もあるかも？」

喫茶店を後にして、今度は裏路地に入り込んでみる。

飲食店やジャンクショップ、合間によその町にもある様な普通の店もあつたりする。

「この怪しさがアキバだよな」

「あ、アイコン出てる」

「コンプ系のショップっぽいな」

「おお、タケル、これいいんじゃない？」

「ジャンク品？」

「トンファ―型コンプじゃねえか！ これで殴れつてか？ 殴った結果がジャンクとし

てココじゃね？」

「コンプも色々あるんだねえ」

「あ、本も売ってる。あのすみません、アプリの改造とかの本はありますか？」

店員に話しかけるタケル。

「スキルは持つてるの？」

「はい、プログラミング持ってます」

「まだ、全然スキル上げてないみたいだね、じゃ、これかこれかな？」
「じゃ、これください」

「あー、こつちの支払いは魔貨ね。はい、確かに、袋とか居る？」

「いえ、鞆に入れるんでいいです」

「じゃ、まいどあり〜」

鞆に買った本を入れ、店を後にする。

「なんだよ、トンフアーコンプ買わなかったのかよ」

「いや、俺のスキル、ハードじゃなくてソフトだからね？」

「花瓶とトンフアーで無敵だったのにwww」

「お前ら俺をネタキャラにしたいの？」

「大丈夫、すでにネタキャラだから！」

雑談しながら、更にアキバを散策。

「御徒町まで行けばミリ系偽装の武器・防具ショップあるんだけどな」

「アキバはそつちの方が趣味合うのありそうだな」

「私は武器はこの間のゲートボールスティックがあるから防具かな？」

「スポーツ寄りの見かけのだと小川町にありそうじゃね？」

「ヒーホー！ 今、予約するとオリジナル予約特典が付くホー！」

マスコットキャラの様な顔をして看板を手にしたジャックフロストが、オタ向けシヨップで呼び込みをしている。

それをオタたちと共に真剣に聞いているのは……ネビロス？

「な、なんで！」

「らしいと言えばらしいけど！」

「みんな騒いでないし、もしかして常連？」

イベントなどと全く関係の無い状況で、高位の悪魔を見かけるといふ状況にタケルたちはテンパっているが、周囲は全く気にしていない。

「あー、なんかどつと疲れた」

「シルキーにもう一回癒されたい」

「下位の分霊だけドツールより強いよ、あれ」

「ちよつと怖かったー。タケル、まだ、あれとは喧嘩しちゃダメだからね！」

「分かってる！ パトリ必至だもんな、あれ、相手じゃ」

「そんなレベルで予約特典にマジになってるし」

「この世界、アリス居ないのかね？」

「あー、居なくて二次に走った？」

「なんて、酷いwww」

皆、疲れてしまったので、駅へと向かう。

帰りに寄ろうかと思っていた本の塔に寄る気力も無い。

「じゃ、お疲れさま」

「お疲れ〜」

「お疲れさま、今度は経験値稼ぎで！」

コンプにフイーネとムルルを戻したタケルは、帰りの切符を買うため、券売機に並ぶのであった。

Dash Under the Ground

今日も毎度の経験値稼ぎ、顔を合わせるなりアキラが嬉しそうに報告してくる。

「雨合羽が売れた!？」

「おお、DDSオークションで相手の人大喜びだったぞ?」

雨合羽、大喜びで脳内に浮かんだものと照らし合わせる。

「あー、たぶん、間違いない……」

そう言うのとタケルは中でも見られる様になった機能を活かして、掲示板のログを見せた。



【力こそ】 脳筋プレイヤーの冒険酒場 その肋【パワーだ!】

1：新橋のバスター

ここは『女神転生Ruina』で、敢えて脳筋プレイを楽しむ者が集まる酒場です。

スクショ、動画は歓迎ですが、リンク先へのアクセスは自己責任で！

煽り、荒らしは豪快に叩き潰しましょう

絡み酒、他者を巻き込んだ喧嘩はご法度

和気藹々、マターリ進行でいきましょう

過去スレ：脳筋プレイヤーの冒険酒場 その式々誤

(中略)

723：九段下のサマナー

FINEガンのコンプが欲しい！

男なら拳で語るべきだろ！

724：駒場のペルソナ使い

凹って仲魔にすんのかよ!?

まあ、特殊なコンプってのは憧れるけどな

725：鶯谷のバスター

みんな丸太は持ったな!! 行くぞオ!!

また、一步理想に近づいたぞオ!!

つ【スクショ】【スクショ】【スクショ】

後は丸メガネだ！

726：品川の異能者

>>725

でかした！

727：新橋のバスター

>>725

でかした！

728：本郷のバスター

>>725

でかした！



「……………」

「いや、俺は力極じゃないけど、鈍器使うじゃん？」

で、鈍器スレ見に行ったら丸太使う

人が居てさ……………」

「丸太って……。万能武器ネタかよ！ まあ、そういうコンセプトなら喜ぶのも分かる」
タケルの花瓶も相当なものだが、上には上が居るものだ。

対吸血鬼戦闘スタイルで町中を歩いているのだ。

それで電車に乗っちゃったりもしてるらしい。

タクシーは流石に「ちよつと、その丸太はねえ」と断られたそうだ。

「あと、鈍器スレにこの間行つたアキバで見たジャンクのトンファークンプのこと書き込んだら、やたら感謝された上に祭になった」

「あー、トンファークンプとか？ トンファークンプはネタの宝庫だからな」

「スレ住人で寄つてたかつて強化するらしい」

「丸太コンプとか自作するヤツ居たら嫌だな」

「そのネタ書き込むなよ？ あそこの住人じゃ、やりかねない」

毎度のサンプラザ、雑談しながらでも問題無い状況に、そろそろ違う時間帯にも挑戦してみるか、といった話も出ている。

「タケル〜！ 気を抜かないの！」

「……………!!」

「悪い、悪い」

「文字通り尻に敷かれてんもんなあ」

フィーネはタケルの頭に座っている。

比喩表現で無しに尻に敷かれているのだ、タケルは。

「少し長居して、夜の相手と一戦だけしてみる?」

「あー、ぼちぼちそういう時期だよな」

「今日は怪我もしてないし、大丈夫大丈夫!」

「……………!!」

仲魔たちも乗り気なようだ。

念のため、ゴム手袋とゴム長靴も装備するタケル。

炎熱が弱点になってしまいが、行動不能になる凍結や感電を食らうよりはマシだ。

未見の相手との戦闘では、そうしたちよつとした事が生死を分ける。

「夜になると堕天使と夜魔、それにマシンが出るのか」

「ゾンビガードマンもゾンビコップになって強化されてるなあ、銃は流石に怖い」

「あの機械は私とタケルの連携でイチコロだね!」

ジオから鈍器、マシン系へは鉄板コンボと言えるかもしれない。

「……………?!……………!」

「ドロップも強くなった分……クリケットヘルメット? これまたマイナーな……」

「なかなかゴツいな。俺もヘルメット……乗馬用? 開発、マイナースポーツ押しか?」

「イギリス人が居るのかもしれない」

「似合わね〜!!」

互いに被った姿を見て笑い合うタケルとアキラ。

タケルの場合はスーツにゴム手袋、ゴム長、そこに野球とアメフトのヘルメットを合成了様なクリケットヘルメット。

アキラの場合はタンクトップにジーンズと安全靴というややパンクス系の恰好に、乗馬服か、牧童スタイルでも無いと似合わない乗馬用のヘルメット。

共に統一感皆無である。

「パニック映画の生き残り装備みたいだな」

「ゾンビは散々倒してるけどな」

「まあ、丸太雨合羽に比べりゃ普通だよな!」

ひと笑いして今日の経験値稼ぎは終了。

サンプラザの入り口で別れ、ホームへと戻る。

帰り道、東中野の商店街を通るとお好み焼きの屋台が出ていたのでそれを買い、ムル用には同じく屋台が出ていたべつ甲飴を買う。

綺麗な細工のべつ甲飴にムルルは目をキラキラとさせている。

フィーネは少し羨ましそうだが、それでもお好み焼きのソースの匂いも捨て難く、結局大きな口でお好み焼きにかぶりついている。

「……………」

「むきーっ！　イカっておいしいけど噛み千切りにくいっ！」

ご機嫌のムルルとイカをクチャクチャさせているフィーネ。

夜の攻略を少ししてきたため、いつもよりは遅い時間となっている。

町に行く人も帰宅するサラリーマンなどの姿が増えている。

歩くうち焼き鳥の匂いに釣られ、色々と買ってしまう。

ネギマにハツにレバーにつくね、それにムルル用にナンコツと手羽先。

骨だけ、というものは流石に無かったので、骨の付いた手羽先を買ったのだ。

和菓子屋でデザートも購入。

ホームへと戻ると少し疲れを感じる。

買い置ききのレンジでチンするご飯の上に焼き鳥を乗せて食べていると、フィーネが自

分もご飯を欲しがったためもう一個ご飯を温める。

ムルルは手羽先を骨ごと嬉しそうに食べている。

予想通り、骨も好きな様だ。

流石に串と一緒に食べない様に注意はしたが、同じ様な味付けをされたものを何故食べてはいけないんだろう、と不思議そうな顔をしている。

平気で自分と同じくらい食べるフィーネに「いったいどこに入るんだろう」とマジマジと見てしまうタケル。

ムルルが食が細い様な気がして色々と気にかけていたが、実はフィーネが食べ過ぎただけなんじゃなからうか？

そんなタケルの内心を他所に「デザートを要求する！」と元気いっばいのフィーネ。

一人一個で買った三つの和菓子の前に真剣に悩んでいる。

結局、一つを選んだが、まだ未練がある様だ。

タケルは苦笑をすると自分の分を半分に分け、半分をフィーネのところに、ムルルも同じ様にしている。

「ムルルは優しい良い子だなあ」と頭を撫でてあげると目を細めて喜んでいる。

「やっぱり、全部おいしかった！」とフィーネも喜んでいる。

そろってお茶を飲んでまったりと過ごす。

かなりの時間、のんびりとしてからログアウト。

掲示板巡回の後、思い立って公式サイトを見てみる。

トップページに『女神転生R u i n a』連動アプリ発売！と目立つ表示。

「ありがちな性質の悪い課金アプリか？」とも思いつつも、「それでVR運営にプラスになるなら、ちよつとくらいは無駄遣いしてもいいか」とリンク先にアクセスする猛。

内容を見て、速攻でアプリを購入する。

『女神転生R u i n a』での仲魔を現実に召喚する、という謳い文句だが、流石に現実世界には悪魔は呼べない。

VR世界内でコンプに入っている状態と同じ形で、仲魔一体に限ってコミュニケーションが取れるというアプリだ。

自分のスマホがコンプ替わりになるという訳だ。

カメラやマイク、スピーカーと画面でこちらを認識した相手と相互コミュニケーションをするのだという。

現実世界でもついついフィーネに話しかけてしまう猛の様なサマナーにとっては、これ以上無いアプリであろう。

要求スペックが高いのではと確認するも、現在持っているもので十分。

これは購入するしかないだろう。

「あー、本格的なサービス開始はまだ先なんだ、焦って買う必要無かったか？」

そう呟きながらも、賑やかになりそうな今後の暮らしについて頬を緩める猛であった。

Dark Night

「Let's Go!」

顔を合わせるなりノリノリで踊りだした相手に、さてどうリアクションをしていいものやらと悩むタケル。

アキラは面白がり、紹介者であるエリリは頭を抱えている。

既に準レギュラーと言ってもいいエリリとの合同での経験値稼ぎの際、雑談の中でガイアーズや異能者に縁が無いといった話をしたところ、エリリがその両方を兼ねた人間と知り合いだということが明らかに、相手側も以前からタケルやアキラに会ってみたいと言っていたことから、今日、こうして会ったのだが、いきなりのご覧の有様である。

「いやいや、付き合わせてしまって悪かったね。これが一番、俺のこの中の立ち位置を理解して貰えることだからさ！ キヤラコンセプトはこれ、β特典で防具選んだらこの服だったからさ、これはやるしかないでしょ？ ってな訳で、ガイア教徒、異能者、陰

陽師のマロロです、よろしく！ エリリとは従兄になります」

「はじめまして、サマナーのタケルです。で、仲魔のフィーネとムルルです」

「フィーネだよ、よろしくね！」

「……………!!」

「デ○ルマンでバスターのアキラだ、よろしく！」

「ごめんね、外ではもう少し、ほんのちよつとだけまともなだけどね」

「酷いな、エリリ。お兄ちゃん悲しいなあ」

「過保護気味の兄キャラですね、分かります」

「いや、それはいいんですけど、神社でこんなことして怒られません？」

待ち合わせ場所として指定されたのは西落合の小さな神社。

境内は綺麗に掃除されており、こういう悪ぶざけはちよつと罰当たりな気がするタケルである。

「いいの、いいの、ここ、俺ん家だから！」

「えっ!？」

「βプレイヤールのホームって、通常より1〜2ランク上で、一軒家とか住んでる連中結構いるんだけどね、流石に神社は俺だけだろうなあ、運営が面白がって決めた可能性が高いと踏んでる」

「ここに住んでるんですかあ……」

「将来的にギルドって名称になるのかどうかは分からないけど、そういつた集まりの拠点にも使えそうだし、いいかなあって思ってる。最低でも坊主二人と巫女一人は欲しいなあ」

「私は嫌だからね!」

「こんな感じにエリリには断られちゃってるしなあ、なあ、頭丸めてガイアーズにならない? 今なら衣装一式付けるよ?」

「入るんならスプーキーズと決めてるんで(笑)、すみません」

「俺も頭ハゲにするのはちよつとなあ……」

冗談か本気が分からない勧誘を断る。

それほど残念そうでないところを見るとあまり本気では無かったのだろう。

「ま、それはいいや。こうして会いたかったのはお礼を言いたかったからなんだ。君たちと知り合ってからエリリが楽しそうだね。本サービスからエリリがプレイはじめて、俺も出来るだけ色々とフォローはしてたけどさ、こういうのってやつば友達とかと楽しむもんじゃない? まあ、うちは仲良し家族だから、それなりにエリリも楽しめてたとは思うけど、あんまり日常サイドを知ってる相手だとき、こう地に足が付きちゃうって

「うか、はじけ切れないでしょ？ 素に戻っちゃう時があるっていうか……。変なヤツじゃないか、この目で確認したかったってのもあるけどね。ま、君らはナンパ目的の変なヤツとは違って、この世界楽しんでるって感じするし、大丈夫でしょ？」

マジマジとVRのAvatar越しでも分かる真剣な眼差し。

現実でもいい兄貴分してるんだろなあ、と感じる。

身内、しかも女の子がVR越しとはいえ男性とつるんで遊んでいけば、心配になる気持ちは理解できる。

「話とかしていると『女の子なんだなあ』って思うことはあるけど、戦ってる時はそんなの関係無しに、『良くやった』とか『もう少し相手見ろよ』とか思うだけで、あんま女の子だからって意識ないしなあ。まあ、一緒に楽しくやれる相手だとは思うけど」

「俺よりフィーネたちの方が仲がいいって感じ。挨拶も俺よりフィーネに先にするし（笑）、ムルルはペット枠だから、エリリが居ると男と女で2対2になるし、組み易い相手ではあるよね」

「一応はなんか誘う時も軽く誘う感じで、しつこくならない様にはしてるけど、それは別に相手が男でも変わらないしなあ」

「二番つるんでるアキラにしたって、俺は現実のこと何も知らないし、それで問題無いか

らねえ」

「システムとしてネカマは無いけど、もしそれでも関係ないし」

「うん、ま、これからもよろしくって感じ？」

「そだな」

正直にタケルとアキラも内心を口にする。

多少は、男同士よりは華がある感じでいいとは思ってるが、それを下手な言い方で言えばフィーネがへそを曲げるのだ。

口に自信の無いアキラやタケルは触れないことで危険を回避している。

「ありがとう！ こっちももつと誘うから、そっちも気楽に声かけてね。これからもよろしく！」

「という訳で、こっちの用件はこれでいいんだけど、そっちから何か聞きたいことあるんでしょ？」

感極まった感じのあるエリリのセリフをあつさり流して、マロロが尋ねる。身内ならではのぞんざいさである。

後できつと怒られるのだろう。

「大まかな設定とかは知ってるんだけどね、ガイアーズとか異能者とか中の知り合いに

居ないんで、どういふものかな？」と

「ガイアーズつても、まとまった集団無いんだよねえ、五島さんが海外行っちゃってるのは知ってる？ あの人中心の自衛隊の一部か逆に古い血族中心の集団くらいしか結束力無いのよ、ガイアつて。あと、メシア以外の宗教系、特に多神系は全部ガイアだから、お坊さんも神主さんも裏に関わりやみなガイア。寺生まれのTさんとかも中に居ればガイアじゃね？ 普通のプレイヤーはどうしてもニューtralが多いから、挺入れにガイアやメシアでガーディアン導入つて噂も出てるな。まあ、ifのガーディアンだとシステム崩壊するから、付けるのに条件がある上に、一回分死なずに済むだけつて形になりそうだって話」

現状、メシアンの様なまとまった活動はプレイヤーサイドではしていないのだそう
だ。

集団が出てくるとしたらイベントの敵役とかがありそうだ。

「異能者つてのも幅広いんだよね、まあ、悪魔を倒す手段として、武器や武技を使用するのがバスター、魔法や超能力を使用するのが異能者つてことで、物凄く大雑把に言えば他のRPGの前衛がバスター、後衛が異能者つて感じかな？ 銃とかを前衛つて言つていいかは分からんが……。超能力者や魔術師だと自分が魔法使つて攻撃するし、チャネラーはテーブルトークやらない人にはガーディアンに似た感じつて説明するのがいい

かな？ 俺の陰陽師だと自分でも魔法使えるコンプ使わないサマナーって感じか？ レベル低い内は、どの異能者も異能単体だけじゃ戦い切れないから、その辺はサマナーも一緒にしょ？ 最初は地味だよねえ」

ひらひらと手を振りながら説明するマロロ。

長台詞に仲魔たちは無関心でタケルにお菓子をねだっている。

「なるほどねえ。まあ、サマナーでも鈍器の申し子タケルみたいな例があるし、人によって結構違うんだろうけどなあ」

「アキラみたいな種族の違いでもまた違うんだろうし」

なんとなく理解する。

スキルの組み合わせもあるし、ステ値によっても変わるだろう。

「そう言えば、今日はクーちゃんは？」

「ああ、境内のどつかには居るだろ？」

「クーちゃんって？」

「管狐のクーちゃん、可愛いだよ」

「てつきりフェレットだと思ってるな、フェレット用のペットフード買ってあげたら懐いた。普段は自由にさせてるけど、異界行く時は戦力として連れてってるな、俺が使役出来るみたいだし」

確か、サマナーが仲魔に出来る悪魔じゃなかったか、と考えるタケル。

ピクシーはシユークリームだし、管狐はペットフード、言葉よりやはり物なのだろうか？

またの機会と一緒に異界に行くことを約束して神社を後にする。

「あんな人でごめんね！」

「いやいや、中々楽しんでプレイしてるみたいだし、いい人じゃね？」

「たぶん、エリリ用の巫女服をすっかりキープしてるな」

「メシアンはシスター服、ガイアは巫女服、ニユートラルの立場無くな？」

「ニユートラルは、学校制服？」

「アキラはともかく、俺は制服厳しいぞ？」

「エリリ着てんのってどっかの学校の制服？」

「それっぽいけど、そうじゃないみたい。まだ初期装備から買い替えて無いんだよね。女の子の場合、防御力とか耐性とかだけじゃ服を決められないからさ」

「いやいや、タケル見てみ、リーマンスーツにゴム手にゴム長、でもってクリケットメットと花瓶だよ？」

「パンクス風が乗馬ヘルメットで統一感無くなってるアキラが言ってもなあ」

「どっちも個性的としか褒められないわ」

駄弁りながら歩く途中で異界を発見。

「廃病院って、むっっちゃホラースポット……」

「たぶん、プレイヤー以外には認識されてないんだろうなあ。住んでるトコの近くにこんな建物あつたら引つ越すぞ?」

「スプラッター系出そうで嫌だなあ……」

屍鬼に悪霊、外道系のオンパレードでフィーネですら無口になっている。

「げっグール!」

「麻痺系持ってたっけ?」

「持つてなくても触られたくないー!」

ドタバタの末の一巡。

細かい分岐を見る気力も無い。

そのまま建物を後にする。

駅で解散、エリリは「モフモフ分を補給してくる」と従兄の神社に行つて管狐に癒されてくるそうだ。

帰宅後、フィーネのお風呂を準備するが「タケルもムルルも今日はお風呂に入りなさい!」とフィーネに一喝され、先に風呂に入らされる。

何気にタケルが中で風呂に入るのは初めてだし、ムルルと入るのも当然初めてだ。

シャワーを基本にムルルでも平気な程度に浅くお湯を張る。

洗ってあげるとムルルがスポンジを要求する。

渡すと座ったタケルの背中をゴシゴシと流してくれる。

「ありがとなー、ムルル！」

「……………いー♪」

タオルでムルルをくるむ様に拭いて、自分の体も拭いて、先にムルルを送り出してから、湯船を軽く流し、フィーネ用の洗面台のお湯を張りなおす。

「お待たせー、って風呂前にアイス食ってたのか？」

「当然！ お風呂上りにも食べるからね！」

「お腹壊すなよ？」

「大丈夫！ 最強の私はアイスの十個や二十個は軽い軽い！」

本当に軽く食べそうだから困ってしまふ。

風呂にフィーネが入っている間、ムルルを構う。

「固いものがいんだよな。ジュースとか凍らせたのってどうなんだ？」

取り敢えずアイスキューブを与えてみる。

冷たさに驚いた素振りを見せるが、これはこれで気に入ったらしい。

ガリガリ、ボリボリと氷を齧る。

「気に入ったか、じゃ、今度ファイネのアイス買う時、あずきバーでも買おうか？」

風呂からあがったファイネがムルルが食べる氷を見て、自分も食べてみたり「味が無いじゃない！」と騒いだりする一幕もあつたが、アイスで機嫌を直して、お喋りしてからコンプへ。

ログアウトをしたタケルは睡眠後倉庫作業の仕事にアクセス。

いつも通り、倉庫内の複数のユニットを切り替えつつ作業を行い、定時に仕事終了。思い立って現実のコンビニに行く。

アプリ用のVR機とスマホの接続コネクタを買うついでに夕食も購入する。

夕食後、VR機とスマホを接続した状態でログイン。

これで、スマホの方に仲魔を移すことが出来るのだそうだ。

アプリを入れただけでは、言ってみれば悪魔召喚プログラムをインストールした状態に過ぎないという訳だ。

ファイネとムルルを出していつも通りの挨拶。

コンプに戻した後、部屋を後にし、外に出る。

昼間の筈なのに暗い夜空に月が浮かんでいる。

「え？ 今、昼の筈だよな？」

『全体イベント「Dark Night」が始まります。各プレイヤーはアナウンスが終了するまで、活動を控えてください。また同様の内容に関して公式HPにおいても紹介しております。現時点でログインをしていない方にはそちらへの誘導をお願いします』

「イベント？ え？ どうなってるの？」

なんせ、空には月と星だけでなく、オーロラまで輝いているのだから。

人も歩いていない、と言うより気配すら無い。

街灯や家の灯りは着いているものの、生活音や料理などの匂いも無ければ、お店の中にも店員が居ない。

……そして、コンプ以外の町にある時計が動いていない。

「時の狭間なのか、位相のズレた世界なのかは分からんけど、元の現実じゃ無い。なもんで、お店も開いてなきや、人も居ないって訳だ」

「えーっ、じゃ、早くイベント終わらせないとー！」

「俺らだけ頑張ってもなあ……」

「……………!!」

イベントの概要は「悪魔によって奪われた都内の鎮護の灯りを再び点せ!」というもの。都内各所にある灯籠だったり、燭台だったりの灯りを点灯するため、時に悪魔を倒し、時にお使いイベントをこなし、時にミニゲームをこなすと、様々な条件をクリアしていく必要があるのだ。

夜空の星の数、視認出来る星の数は108。

地上の灯りが点る度に星が消え、最後にイベントボスが登場するのだという。

イベントボスを倒すと月が消え、そして夜の闇も消え、元の日常が戻ってくる。

また、このイベント独自のギミックとして転移陣というものがあるらしい。

これは時間の秒末尾0と1がホームのある町、2と3が現在地から北の町、4と5が現在地から東、6と7が現在地から南、8と9が現在地から西といった形で、都内の他の転移陣にある程度ランダムで転移出来るというもの。

かなり忙しないが、運営サイドとしてはプレイヤーが意図しない場所に転移してしまうことも期待している為の設定では無いかと思われる。

自分の町の仕掛けをクリアした後で他の場所を手伝ったり、逆に自力でどうしようも無い場所を手伝ってもらったりすることで、イベントの進行を促す仕掛けだ。

と、同時にどうしても自分のホーム近辺に留まりがちなプレイヤーに、違う町を認識させて活動範囲を広くさせようという運営サイドの狙いがあるとタケルは推察している。

この転移陣の評判が良ければターミナルの導入もあるのではないだろうかと期待もしてしまいが……。

島流し状態の父島のプレイヤーにとっては、今回のイベントは救済になるのではなからうか？

四分の一スケールとはいえ現実には交通手段で行く気にはならないが、一瞬で転移出来るなら行ってみたいとタケルも思っている。

アキラ、そしてエリリと立て続けに連絡が入り、合流するためブロードウェイに向かう。

ブロードウェイは建物自体は入れるが、ほとんどのお店は無人、動くに動ききれない多くのプレイヤーが集まっている。

「クレープ屋さんはやってないんだ、あくあ」

「ゲーセンは開いてるんだよなあ……」

「……………!!」

「ん？ カレー屋が開いてるの？ ここもメガテンショップだったんだ」

「よっ！ 事前告知無しでいきなりイベントとは驚いたな」

「フィーネちゃん、こんにちは……こんばんはかな？」

「あ、エリリとアキラだー！ ねえ聞いて、コンビニもクレープ屋さんも開いて無いんだよ、酷いと思わない？」

「自販機は使えたんだよね、と言う訳で、フィーネちゃん、はい、フルーツ牛乳！」

「わーい！ エリリ大好きー！」

フィーネとエリリは会うなり、じゃれ合っている。

アキラとエリリはブロードウェイの入り口で顔を合わせたようだ。

「みんな動くに動けない感じ？」

「何回かイベントありや要領も分かるだろうけど、最初だかな」

「タケル、タケル！ あそこ怪しいと思わない？」

「どこ？」

「ダフネの居るお寺！」

「おお、確かに！」

「なになに、ダフネの居るお寺って？」

「一言で言えば『変な寺』」

「出てくる悪魔は天使か墮天使で、神樹が隠れてる」

「でもってダフネはアキラのタイプなのだ〜！」

「ちよ、ま、それは言うなっ！」

「へえ〜？ まあ、特に有望な情報無いし、行ってみてもいいんじゃない？」

という訳で揃ってダフネと遭遇した寺へ向かう。

「他のVRで夜の町とかだとこんなもんだけどき、このメガテンでこういう町の感じは凄く違和感あるよな」

「犬とか遠吠えしてたり、どつかの家から料理の匂いがしたり、テレビの音が聞こえたりするもんね、夜でも」

「プレイしてから初めて『作り物』っぽさを感じてる」

「いつもは現実より現実っぽいもんなあ」

「なんか寂しくなるね、こういう感じ」

「って、しみじみもさせてくれねえってか!？」

「普通の町中に悪魔出るのかよっ!？」

「ペルソナっ!」

「いっくよ!!、ジオ!」

「……………!!!」

いつもは戦闘を覚悟する異界に入ってからからの戦闘、そこから出てしまえば日常空間に戻っていたのが、こういう町中でいきなり悪魔に遭遇すると交渉をするという考えすら頭からさっぱりと消えてしまう。

「強くは無い、異界の浅いトコレベルの悪魔だけど、焦っちゃったね」

「ダンジョン系のゲームでダンジョンの外にモンスターが出て来たって感じ」

「経験値普段より多め？」

「うゝん、どうだろ、普段戦ってない相手だし、よく分からないな」

「ははは、また鈍器レベルが上がってしまった……」

「鈍器の申し子から鈍器の鬼にレベルアップ?」

「この間武器屋覗いてみたらさ、これより強い鈍器って真鍮の女神像だった(汗)。持たせてもらったけど、力足りなくてとてもじゃないけど振り回せない」

「女神像は流石に罰当たりじゃないか? 何の女神かは分からないけど、元になった女神が出てきかねないぞ?」

「そこまで行くとプレイヤーってよりモンスターだよな」

「アンデなら天使像で悪魔撲殺しても似合うと思うんだけどな」

「知り合いのメシアン神父だっけ? 外見作り込みの」

「そう、だから、マロ口見ても実はさほどシヨックは受けなかったんだよ、俺ら」

「それに造魔に比べればねえ、多少の外見は……」

「造魔かあ、この間知り合った造魔の子は中身女の子で『せつかくの服が似合わない』って落ち込んでたよ」

「是非、造魔生活スレ紹介してやってくれ、あそこ見れば開き直れると思うから」

「その子、造魔でメシアンなんだよねえ」

「ぶっ! シスター服着た造魔か!」

「ま、アンデより罰当たりじゃないし……」

戦闘と雑談をこなしながら寺の前に。

「は、入れない……」

「え？　ここ一般施設扱い？」

「いやCAUTIONって出てないから違うと思う」

「ふむふむ、これはダフネの結界だね、さすが神樹！　そしてそれを見破る私もさすがだね！」

「……………！」

「そんなに褒めなくてもいいよ、ムルル！　フィーネが調子に乗るから」

「むふふふ、これを見てもまだ、その態度が取れるかね、タケルく!?」

「なんだ？」

「しつかりとこれを見つけたんだよ、私は！　これって転移陣ってやつだよ？　どう、

凄いい、凄いい？」

「凄いい凄いい、フィーネちゃん凄いい！」

「これで他所の町に行けるってことか!？」

「あー、確かに凄いいな、フィーネ！」

てつきりここがイベント関連の場所だと思っていた思惑は外れたが、どこにあるやらさっぱりだった転移陣を見つけたこととなった。

「もしかして、これで転移したら俺ら転移第一号？」

「可能性はあるな、どっちかって言うと、みんな地元のポイント探しとその攻略を先にしてるだろうし」

「中野近辺はけっこう人居るし、私たち居なくても平気よね、行っちゃおう?」
「行くなら父島狙いで南だな!」

「あー、ボツチで可哀相だもんね」

「一人じゃやる気も起きないよな、良く辞めずにプレイ続けてると思うよ」

「いや、案外、一人でせいせいしてるかもよ?」

「ま、ともかく南狙いで異存なしね」

「フイーネ、ムルル、一応念のため、コンプに戻ってくれるか? 置き去りになるとかは無いと思うけどな」

「はーい、仕方ないよね」

「……………」

フイーネとムルルをコンプに戻し、それぞれの持ち物も確認。

コンプなどの時間にズレが無いことも確認して、目で互いに合図し、カウントダウンしながら一斉に転移陣に入る。

恐ろしいくらい近くに見えるオーロラと星。

「いやったああ！ これ、どう見ても二十三区内じゃないだろ！」

「一発、大当たり？」

「これで硫黄島とかだったら泣くしかない」

「いや、流石に硫黄島は民間人立ち入り禁止だから無いだろ」

「ちつくしよおおっ！ 運営手加減しろよ、マジで！ こっちはボツチなんだぞ！
くそ、誰か、助けてくれー！」

響いてきた自棄っぱちな叫び声に、顔を見合わせるとタケルたちは声の方向へと駆け出すのであった。

Dimensional Trip

「いやー、助かった、どうもありがとう！」

そう声を上げる男……いや、少年。

どう見ても小学校高学年。

本来のゲームプレイヤーにはあり得ない年齢の少年は「ニコッ！」とその手の趣味を持つ人間なら撃沈される笑みを浮かべたのであった。

叫び声の方へ駆けつけたタケル達、コンプからフィーネたちを召喚すると臨戦態勢に移る。

神社の境内、少年と対峙するのはオオカミ。

「な？ え、プレイヤー？ このタイミングで来てくれるなんて、俺、主人公みたいだな？」

「手助け要るか？ 状況は？」

「この島ならここだろうとこの神社来たら『汝の力を示せ！』とイヌガミ登場、俺一人だとパトるしかなかった！ たのむっ！」

「衝撃、破魔弱点、火炎反射、呪殺無効か、フィーネはいつも通り、ムルルはアギが反射だからタルカジャか攻撃！」

「分かった！　まずはそっちの人だね、ディア！」

「……………」

「ちいつ、せつかく覚えたアギが使いねえってか！」

「ペルソナ！　ガルツ!!」

相手の素早さに中々攻撃が当たらず、素早さに唯一対抗出来るタケルが相手の直接攻撃に対応することになる。

「くそ、当たらねえ、こうなりや、とっておき、食らえ、ザンストーン！」

「効いてるよ！　脳天落とし！」

「こなくそ！　そんなに齧りたきや、これでも食つとけ！」

「タケルく下がって！　ジオ！」

「これでトドメだ、ソニックパンチ！」

少年(?)の顔に似合わぬ一撃でイヌガミが沈む。

初対面どころか互いに自己紹介も済ませていないのにハイタッチ。

神社のなか所だけ消えていた灯籠に灯りが点る。

「いや、この島、俺しか居ないし、無けりやいいけどあつたら俺以外イベントこなせる人間居ないしで根性入れて来て見たはいいものさ、これ、絶対、一人で相手出来る悪魔じゃないでしょ？」

「ここまで素早い悪魔は初めてだな、当てるだけでも一苦勞、一人じゃ回復の余裕も無いし、確実に詰む相手だなあ」

「致命傷もらわなくても削られて終わりってパターンよね」

「にしても、小学生アバってアリなの？」

「いやいや、俺、小学生じゃないよ？ ちゃんとした大人！ 種族で先祖返り（ランダム）ってのを選んだら先祖返り（小人）ってなっただけ！ いや、だってさ、選択肢に（ランダム）ってあつたら強キャラの予感感じない？ なんか、とんでもなく強い種族とかになつたりとかさ！」

「あく、分かる分かる。パラもランダムとか可能な場合、とんでもないボーナスとかありそうな気がするしな」

「どこからどう見ても小学生にしか見えない相手、小人の先祖返りだというのが無理がある様な気がする」

「この島でポツチで無ければ、「シヨタキャラキタ——（。▽。）——！！」と掲示板で拡散されていただろう。」

「じゃ、あらためて、自己紹介。俺はタロウ、意外とこういう名前って残ってんのな？」

本名はコウタロウだけど、コウタとかコタロとかコータの方は取られてて、自棄になってこの名前入力したら、あっさり通った。バスター、ボクサーのN/N、この外見で職業ボクサーが通つちやうのが笑えるだろ？」

「サマナー／SEのタケルだ。でもって仲魔のピクシーのフィーネとノツカーのムル。素早さふりの前衛型サマナーってとこかな？」

「バスター／学生でデビ○マンのアキラだ。一応、剣の前衛だけど、悪魔人って関係でアギは使える。割とタケルとは組んでるから、そこそこ連携はいけてるんじゃないかな？」

「ペルソナ使い／学生のエリリだよっ！ ペルソナの魔法使いながら遊撃つてのが普段のスタイルかな？ 耐性弱点の攻撃してくる相手だと後衛になるけどね」

互いに自己紹介を済ませ、ドロップを確認。

流星に毎回ネタアイテムということは無く、それぞれ宝玉とストーン系もしくは寶石をゲットする。

「にしても、ここ、一人つきりだろ？ 良く、やめずに続けてるな」

「まあ、他のプレイヤー居ないのはしんどいけどね。現実でも住みたくなるくらい、この

島がいいんだよ。まだ遭遇してないけど、台風とかは大変みたいだけどね。」

「ミリオタ？」

「オタまではいかないけど、そつちも好きだね」

父島には海上自衛隊の基地も、旧日本軍の施設跡もある。

JAXAや気象庁の施設もあつてマニア的にも観光的にも見る場所は多いし、八丈島経由で光ケーブルも来ているため、物流や人の移動以外ではさほど生活に問題はないのだ。

「そーいや、ここに来てることとは転移陣使つたつてことだよな？」

「うん、地元の方は人が多いから私たち居なくても平気だし、掲示板とかで父島の人が一人大つて書いてあつたから、そこに行ければラッキーつて、南に行く秒末尾に入つたら一発！」

「現実の方で宝くじでも買うかな？ 今、結構運がいいだろ、絶対」

「俺ら中野、サンプラザとかブロードウェイとかある辺から来たんだ」

「そつか、じゃ、その転移陣まで案内してもらえりゃ、俺も島からの初脱出がなるんだな……また、ここでの生活に戻るにしても、フレが居ると居ないのじゃ違うだろ？ この機会にフレを沢山作つておこうかな！」

「おお、いいな！　じゃ、まずは俺らからだな！」

「「よろしく〜」」

フレ登録も済ませる。

初めて埋まったフレ欄に、タロウは感慨深げだ。

「で、この島、ココ以外にイベントに絡みそうなトコある？」

「怪しいトコなら一杯だよ、この島は！　軍施設、砲台、塹壕の跡はあるし、JAXAや自衛隊の施設だって、この世界の場合なら、何か隠しててもおかしくない。ただ、俺だけでしょ、この島？　運営が鬼畜でも無い限り、ここに沢山イベント関連スポットは置かないと思うんだよね」

「今、プレイヤー分布ってどうなってたっけ？」

「当時の実際の人口分布に応じてプレイヤー割り振ってる感じらしい」

「いったん、中野戻って、ブロードウェイまでタロウを案内して、それからまた考えるって感じかな？」

「だな、一回、各自ホーム戻って軽くログアウトしてもいいかも」

「それなりに長丁場のイベントになりそうだしな……あ、タロウはホームに戻って軽く一回ログアウトしてから、もう一回、ここなり、どっか分かりやすい場所なりで合流し

「の方がいいかもな？」

「せっかく来たんだし、少しは島も見たいしなあ」

「イベント終わっても転移陣残ればいいのにな」

「そうさせてもらった方がいいな。じゃ、俺は一回ログアウトしてくるから、一時間後にまた、ここでいいかな？」

「オツケー！　じゃ、一時間後に！」

手を振りながら駆け足で去っていくタロウ。

やはり、どう見ても小学生だ。

「サイズ的には造魔とあまり変わらないけど、シヨタキャラプレイヤーが居るとは思わなかったな」

「フィーネは何やってんだ？」

「シュツシュツってあの子カツコよかったよね」

「そーいや、表が戦闘系って初めて会ったな」

「自衛官とか警官とかは最初のキャラ作成で頭に浮かんだけど、ボクサーとかもあるんだな」

「いろんな意味でシユールなヤツだけだな。有名ポツチプレイヤーで、外見小学生で、職

業ボクサー」

「つい、『えらいねえ』って頭撫でたくなっちゃって、我慢してた！ だってねえ、見た目小学生なんでもん！」

雑談しながら、少し周囲を見て回る。

生憎とイベントで夜の状態になっているため、景色を楽しむというわけにはいかないが、海の匂いを時折運んでくる潮風の中でのんびりと歩くのもいいものだ。

「自販機は生きてんだよな？ じゃ、これは？」

アキラが指を指す先にはカップヌードルの自販機。

それも現在では見ることの少なくなつたお湯を注ぐ機能が付いたものだ。大昔にはドライブインや酒の自販機と並んで酒屋にあつたりしたが、ハンバーガーの自販機ほど駆逐されつくしてはいないものの、まず日常では見かけない。

「ああ、たまに、なんか凄く食べたくなるよね、これ！」

「なにになに？ 甘い物？」

「いや、これは甘く無いなあ、アイスの自販機とか、ここまで来る船にはあるらしいけど、この辺は無いみたいだしなあ」

珍しさも手伝い、カップヌードルを買い、3分待つて少しづつ回し食いする。

フイーネには乳酸菌飲料、3人はそれぞれ好みの飲み物。ムルルは飲み物は要らないというので、タケルが最近では常備している飴を渡す。

その後も適当にぶらつくが、二度ほど悪魔に遭遇。

危なげなく倒し、時間の余裕を見て待ち合わせ場所へ。

既に来ていたタロウと合流し、来た時には駆けて来た道を歩いてゆつくりと進む。

意外と思っていたより距離があり、途中で「あれ？ 通り過ぎた？」と不安になるも無事に到着。

足並みを揃えて転移陣に入ると少し空気が涼しくなる。

転移で中野に到着。

まずはタロウをプレイヤーがまだ多く居るであろうブロードウェイに案内する。

歩きながらそれぞれのこれまでのプレイを話したり、掲示板ネタで盛り上がりつつたりする内に到着。

最初に来た時に比べれば多少は減っているものの、後からログインしてきたものが様子見に来ていたりとパツと見では大して変わっていない。

一度話をして、フレにも登録しているウシロが居たのでタロウを紹介すると目を丸くして驚いていた。

きつとすぐにでもログアウトして掲示板に書き込みに行きたいと思っているのだらう。

ウシロとタロウがフレ登録を済ませ、更に周囲の人間と交流しだしたのを機にタケルたちはいったん解散し、軽くログアウトをしてから合流することにする。

公式HP、掲示板なども見るつもりなので、二時間後の約束。

ホームに戻ったタケルはまずはファイネをなだめるため、冷凍庫からアイスを取り出し、最近ムルルのお気に入りになったアイスキューブも小鉢に盛ってテレビをつけてみるものの砂の嵐。

ファイネとムルルとコミニケーションをとってからコンプに戻して、ベッドに横たわるとログアウトする。

猛はVR機を外すとパソコンの電源を入れ、冷蔵庫の中から栄養補給ゼリーを出して吸いながらパソコンに向かう。

公式HPはアナウンスとほぼ同じだが、地図が表示されており、クリアされている場所には赤い点が表示されている。

掲示板はかなり荒れていて、ガセネタも多く流れているようだ。

「こりゃ、短時間じゃ情報収集は難しいかな?」

取り敢えずは地元関連の掲示板だけをチェックする猛であった。

DAEDALUS

「あーっと！ タケルくん吹っ飛ばされた〜っ!!」

「(アキラ、余裕だな、おい!)」

赤と白の金属の触手に吹っ飛ばされ、タケルが見上げた空。

月の中に刀を振り上げた男の姿が見えた。

月からそのまま飛び降りて来た様なその男が刀を振るうと、東京タワーは真つ二つになつた。

「タケルー!」

玉石混交どころか砕け散つたガラスの破片の中からダイヤモンドを探す様な情報収集をしつつ、「あ、中野と父島の転移陣の位置は書き込んでおいた方がいいな!」と全体攻略と地域攻略のスレに書き込み、一息ついた猛の耳に入つて来たのはフィーネの声。

「え、空耳?」

「タケルく、こつちこつち!」

VR端末に繋ぎっぱなしのスマホからファイネネの声がする。

「ヤッホー！　へえ、こっちのタケルの部屋ってこんな感じなんだ！」

「ファイネネなのか？」

「こんなに可愛いピクシーが私以外に居るわけないでしょ？」

「アプリが凄過ぎて現実感が無い！」

「凄いいよねえ、今まではお留守番するしか無かったけど、これでこっちでも一緒だよ！」
凄いの意味する場所が互いに違っているが、その点はお互いどうでもいいのだろう。

ファイネネの反応は完全に猛の事を見て、聞いて行っていると思えない。

「ソフトウエアでどうにかなるレベルなんだろうか？」と思ったりもするが、メガテンからログアウトした後の味気ないモノクロの現実が、これで少しは色が付いた様な気がする猛である。

「こまげえことはいいんだよ！」と早々に疑問を投げ捨てる。

「きたない、さすがア〇ラス、きたない」

ファイネネと一緒にアプリについて色々試してみたところ、課金でスマホ内の仲魔に強化アイテムや嗜好品を「プレゼント」出来ることが分かった。

スマホ内でチョコレートパフェを食べてご満悦のファイネネ。

単純にフィーネが食べておいしいというだけでなく、次の『女神転生 R u i n a』ログインからログアウトまでの間、フィーネに「破魔・呪殺無効、衝撃耐性」が付く。

食べたものによつては耐性だけでなく、ステータスが上がり、攻撃力が上がりするらしい。

きちんと攻略に役に立つところが、またなんともいやらしい。

課金をしなくても、スマホ内で仲魔が過ごした時間分、仲魔に経験値が入るし、ミニゲームでもアイテムが獲得出来たりもするが、課金した場合の見返りに比べるとどうしてもショボい。

「コンビニのバイト辞めなくて良かった」

コンビニのバイト分くらいは軽くこのアプリの課金に消えていくことが簡単に予想出来る猛。

「向こうのコンプでもこのパフェが食べられたらいいのにね♪」

「喫茶店やファミレス入れば食べられるぞ？ 今度入ってみるか？」

「いいの!?! わーい！ じゃ、すぐログインしよっ!」

「今、ログインしても店は開いてないぞ？」

「あ、そうだった……。早く終わらないかなあ、イベント!」

「事前告知も無かったし、そんなに長くは引つ張らないだろ、たぶん」

それでも一通りは用事は済んだしと、スマホを繋ぎ直すとログインの準備を進める猛。

ログインアクセスの時、すぐ傍にフィーネが居るのを感じる。思わず笑みを浮かべながらメガテンにログインする猛であった。

アキラたちとの約束の時間までまだ余裕はあるものの、早めに行く分には問題は無いだろうと、部屋を出るタケル。

パツと見て分かるほどではないが、夜空の星も減っているらしい。

途中、2回悪魔と遭遇するが、その内の一回はピクシーの集団で、戦闘にはならなかった。

しかし、戦闘を行うよりもよっぽど時間がかかってしまった。

フィーネのお喋りで……。

「おぼちゃん井戸端会議みてえ」と頭に思い浮かんだタケルだが、「これは絶対に口にしたらヤバイ！」と脳の奥底にその感想を封じ込める。年齢⇨彼女居ない歴であるタケルだが、こここのところ急速に対女性スキルが向上している。

到着したブロードウェイは一目で分かるほど人数が減っていた。

しかも居る人数の大半は、待ち合わせや情報交換の為に居るらしく、入れ替わりが激しい。

タロウも知り合ったフレと別の場所の攻略へと向かった、ということとをタケルは同じ様に一回ログアウトして掲示板巡回をしてから戻って来たウシロから聞いた。

「タロウのネタを書き込みたくてしようがなかったんだらう!？」

「あんなおいしいネタをスルー出来る訳がないでしょう？　また『フォトシヨ加工乙』って言われましたけど」

「父島に引越すヤツ出そうだよな」

「シヨタ好きホイホイですからねえ。あれだけ鼻絆創膏が似合う顔もそうそうないです」

「絆創膏押し付けてないだらうな？」

「俺はやってないですけど、あげてた人間が居て、怪訝そうな顔されてましたねえ」

「お待たせー！　アキラはまだなんだ？」

「お、エリリか、あれ？　エリリとウシロはそう言えばフレにはなつてなかったよな？」

「う、ウシロです、よろしくっ!!」

「エリリだよ、よろしくね♪」

ウシロが思いっきり女性耐性の無さを露呈している間に「よ、早いな！」とアキラも

合流。

互いに情報を交換、整理しながら次の目的地を検討する。

「取り敢えず、ここで回復系アイテムは補充しておこう」

「そだな、出先で不足すると怖い」

「フィーネちゃん、なんか嬉しそうだね？」

「タケルの向こうの家に行ったの！ コンプからは出られなかったけどね、チョコレトパフェがおいしかった！」

「え？ 向こうのつてリアル？」

「連動アプリ。あのプログラム組んだ人、マジものの天才だろ、こっちと同じ調子で会話出来たし」

「A・NAKAJIMAとかじゃないだろうな？」

「へえ、サマナー以外でもお友達仲間とかが出来れば私もやりたいなあ」

「……………！」

「そだな、ムルルも呼んでみたいよな」

「自分も！」と言うムルルの頭を撫でるタケル。

便乗してエリリもムルルの頭を撫でている。

「要求スペック高いんじゃない？」

「いや、俺のスマホ二年前のだけど問題無し」

「さらにサマナー技能取得目指すヤツが増えそうだな、な、ウシロ！」

横で掲示板を中から見ていたウシロに声をかけるアキラ。

ウシロもスマホの画面から顔を上げて会話に加わる。

「そうですね、そういうの聞くと我慢出来なくなりそうですよねえ」

「ピクシースレの住人はまず間違いなく全員あのアプリ買うな」

「これやつといて、サマナー技能の取得必要ポイント引き上げたら運営鬼畜だな？」

「やめれ、本当にやりそうだから！」

イベント中でもまったくと会話。

その後、攻略救援の要請に応じる形で柴又へ。

「へえ、ここが柴又なんだ、映画でしか見たこと無かった」

「柴又で有名なのは帝釈天ってことで、嫌な予感がするなあ……」

「インドラだっけ、流石に高位分霊は出ないだろ？」

「逆に変な劣化が出そうで怖い」

同じ様に声にこたえて集まったプレイヤーたちと会話しながら柴又帝釈天こと題経

寺へ。

「たいしたもんだよ蛙のシヨンベン……………」

「寅さんの恰好をしたインド人、これがもしかしてインドラ？」

「これで救援要請ってどういうこと？」

「『人が少な過ぎる！』とご立腹でして……………」

「見た目は劣化なのにアナライズ出来ないくらい高位だよ……………」

「これ、誰かが買えってこと？」

「……………買って頂戴よ。どう？」

また、東京大神宮では……………。

「ほうほう、これがぴくしいと申す者か、可愛いもう……………」

100人のピクシーに囲まれてご満悦なアマテラス。

この為に既にピクシーを仲魔にしているサマナーに留まらず、このために新たにピクシーと契約をしたサマナーまで駆り集められ、その一人としてタケルが参加したり……………。

「怨霊戦士マサカドマン！ マサカドクラッシュュツ!!!」

やられ役として後楽園遊園地にプレイヤーがかき集められたり……。

「運営、ちゃんとお参りしたんだろぅな？」

「ダメーじ無いけど、やられた瞬間首が！」

「し、知らんぞ、俺は」

「これ、ヤバくね？」

「将門公ノリノリじゃん」

……色々あって、二日目も終わろうかという時刻。

空の星も数える気が起きる程度に減っている。

『イベントポイント攻略率が規定値に達しました。今から三十分後からイベントボス戦が開始されます』

「これ、一応、ログアウト一回してセーブしときなさいよ、ってことだよな？」

「将門公に切られたのが一番経験値高かったのは笑ったけど……」

「経験値、ここでセーブしとかないとイベントボス戦でパットった時もつたいないよね」

「おそらく『死ぬ可能性も十分にある』って設定の相手だろうしな」

「じゃ、いったん、解散ということぞ！」

部屋に戻りファイネにアイスを、ムルルに飴とロックアイスをあげてからコンプに戻し、いったんログアウト。

「……………!!!」

「おつ、今度はムルルがこっちに来たのか、あんま時間無いけど何がいいかな？ かき氷でも食べるか？」

ムルルに氷結・物理耐性が付いた状態で再度ログイン。

「ムルルに譲ってあげたんだな、えらいぞ、ファイネ」

「私ばかりじゃね、可哀相だもんね」

「…………♪」

外に出て、ブロードウェイまで歩き入り口で空を見上げているアキラたちに合流。

「どうした？」

「あれ！」

「なんだ、あれ？」

月に切れ目が入り、それが徐々に広がっている。

そして時間。

「目玉？」

プレイヤー全てが「見られた!？」と感じた瞬間に周囲が完全な闇に。

そして再び元の姿に戻った月が輝くとそこには……。

「東京タワー？」

「なんか歪んでね？」

「きゃっ！」

耳障りな金属がきししみ、こすれる音。

「二本足で立ってる……？」

「ヒトデ？」

「なに、これ!？」

「いやいやいや、サイズが違い過ぎるだろJK」

「パ○ラ人ですね、わかります」

「デカラビア化？」

「これと戦えってか!?!？」

「俺たち、地球防衛軍だったんだ……」

バラバラの場所から一か所に集められたプレイヤーたちが呆然とするのも無理はない。

空から落ちて来た目玉と合体した東京タワーは、「悪魔」と呼んでいい歪みを見せて、星の無い夜空を背景にその威容を見せつけている。

「誰かライドウ呼んで来い！」

「お客様の中にウルトラ戦士の方はいらっしやいませんかあ!？」

「『こんなこともあろうかと!』って巨大ロボ出してくるヤツいねえのかよ!？」

どう手を付けていいやら分からない。

さらに混乱の中、上空から降ってくるものが!

「ミニチュアサイズでも俺らよりデカいじゃねえか!」

ミニチュアサイズの東京タワーが、集まったプレイヤーに襲い掛かってくる。

本体の方も手で薙ぎ払い、足で蹴り飛ばし、時折電撃を降らせて来る。

「最初のイベントから『これ無理じゃね』感が凄いですけど?」

「弱点でも無いと無理だよな、これ」

「ギリギリでペルソナの進化が済んでて助かったー!」

「お、電撃弱点じゃなくなったんだ!？」

「氷結耐性、疾風弱点、どっちもこの相手には関係ないけど、弱点無くなっただけ、マシ

！」

「見た目ほどダメージが大きく無いみたいなのが救いだな。フィーネ、ムルル、一応、反魂香と宝玉渡しとくから必要に応じて使ってくれ！」

「オツケー!! サイズの差なんて関係ない! 最強の私に任せといて!」

「……………!!!」

周囲のミニチュアを相手にしながら、本体の動きにも気を遣う。

「両方相手つてのは厳しいな。フィーネ! フィーネは周りの連中の相手はいいから、本体の動きを見て、俺たちに教えてくれ!」

「分かった、空飛べるから、その変なヤツの攻撃届かない位置から見てる!」

ミニチュアタワーの相手で手一杯で、周囲のプレイヤーたちも中々本体には攻撃出来ない。

異能者やサマナーの仲魔の中には、それでも本体に攻撃を仕掛ける者も居るが、少しでも効いているのか、それとも全く効いていないのかは見ている様子では全く分からない。

ミニチュアは時々倒されているが、その倒された分だけ、また上から降ってくる。

「キリがねえぞ、マジで!」

「本体に魔法撃つてみたけど効いてるとは思えないわね!」

「ミニチュアはともかく、本体にこの花瓶でどうしろと?」

本体からの攻撃がパターンを変え、地面の下を根っここの様に鉄骨を触手上にして無差別に攻撃を仕掛けてくる様になった。

そして、タケルがその一部の攻撃をくらい吹っ飛ばされる。

「あのモミアゲ……」

「誰だよ、本当に呼びに行った奴は!?!」

「もうライドウ一人で全部いいんじゃないかな?」

「十四代目だよな? タイムボカンシリーズ並に時間の壁越え過ぎだろ?」

イベントボス撃破、イベントクリアという状況でも、呆然としている者やよく分かっている者が多い。

『初の全体イベントが無事に終了いたしました。参加プレイヤーには経験値、魔貨、武器、防具等のアイテム、日本円が送られます。また後日集計の上、貢献度に応じたポイントが加算されます。楽しんでいただけましたでしょうか? それでは、また、次のイベントでお会いしましょう』

アナウンスと共に気が付けばタケルは自分のホームを出てすぐ、外が夜になったことに気が付いた場所に立っていた。

「はあ、訳わかんねえ、あ、フィーネ、ムルル、お疲れさま」

「タケル、大丈夫だった？ デイア！」

「……………？」

「部屋、戻ろっか？」

「コンビニ行ってからね!? イベント中は行けなかったんだから！」

「……………！」

「ああ、はいはい。じゃ一番近いコンビニでいいよな？」

「うん！ コンビニ、コンビニ、プリン、プリン、アイス、アイス♪」

「……………♪」

経験値だの入手アイテムだのは後回しにして、コンビニに向かうタケルたちであった。

Hurry Up To Exit

多くのプレイヤーが「やり遂げた」というより、「え、なにこれ？」と肩透かしの様な脱力感を感じた『女神転生 Ruina』初の全体イベント。

イベント終了後、公式ホームページでイベントについての情報が公開され、またイベントクリア報酬がかなりの大盤振る舞いであったことから、じわじわと「おお、やったあ！」と成功を喜ぶ声上がるようになっていった。

イベントに関しての公式解説だが、まず最終ボス戦発生条件、これはその日の日付が変わる時点までに7割以上のイベントスポットがクリアされるか、開始から四日目が終了する時点で発生することになっていた。

また、最終戦だが、10割クリアでのイベント戦の場合、最初からライドウが登場し、ゴウトの口からプレイヤーに共闘が呼びかけられる形に。

9割以上の場合、戦闘開始10分でライドウが登場、と同時にミニチュアが増殖、プレイヤーがミニチュアと戦い、本体をライドウが相手取るという形に。

8割以上の場合、今回のイベントではこれが適用されたが、戦闘開始、三十分後にライドウが登場、問答無用で東京タワーを真つ二つにする。

7割以上の場合、開始から四十五分経過もしくはプレイヤー生存数が6割以下になった時点でライドウが登場し、やはり東京タワー真つ二つ。

最終日まで突入し、5割以上の場合は前述の7割のケースと同じ。

5割未満の場合は、倒される所までは一緒だが、散り際にまき散らされた呪詛により、一週間、スマホでの通話、メッセージが不可能となっていた。

また最終日時点でスポットクリアゼロだった場合、東京タワーがスカイツリーまで歩き、スカイツリーを破壊、進路上の建物はプレイヤーのホームを含めて壊滅、中央線、山手線などは折り返し運転となり、復旧まで3か月かかることになっていったという話だが、流石にまだサービスが開始されたばかりのゲームのイベントで、超絶鬼畜難易度でも無い限りこれはあり得ない話なので与太話に近い。

ともあれ、ライドウとの共闘という形になる9割以上、ピンチにライドウが現れる8割未満と比べると、いまい盛り上がりながら8割以上になってしまったことは運営にとつても誤算だったかもしれない。

ライドウの登場がイベントスポットの消化率によって変わるのは、プレイヤーの手が及ばなかった場所はライドウたちクスノハが対処に当たっていた為という設定なのだそう。要は酷い目にあつても、それはプレイヤーの自業自得だということだ。

また、このイベントをきっかけに、ロウ、カオスの上位悪魔たちがこの世界の人間（プレイヤー）に注目し、積極的な介入を始めた、という設定のもと、噂になっていたロウ、カオスプレイヤーへのガーディアン付与が導入されることになった。

付与の条件は、アライメントがロウ、またはカオスに偏っていること。

付与を行うためにはプレイヤーが自己のアライメントの宗教施設、ロウの教会やガイアの神殿などに直接赴き、そこで付与してもらうか、サマナーの仲魔勧誘と同じ様に直接悪魔と交渉を行う必要がある。

ステイタス、魔法、スキルなどの修正が付与されたガーディアンによって変化する点はifと同じだが、倒された場合、自動的に別のガーディアンになって復活ではなく、ガーディアンを失った形で復活、言ってみればガーディアンとして付いた悪魔が身代わりになって死んだ形になる。

新たな悪魔をガーディアンとして付ける場合は、最初の時と同じ様に手間をかける必要はあるが、即死系や耐性、弱点の関係で他の作品に比べると死亡リスクの高い女神転生の場合、たとえ一回でも死亡を完全に防げるといえるのは大きなメリットである。

アンデヤマロロの高笑いが聞こえた気がして、この情報に接した際、猛はうんざりとしてしまったくらいだ。

また、このガーディアンもサマナーの仲魔と同様に連動アプリで強化、コミュニケーション

シヨンが出来るという点も大きい。

今回のイベントによるポイントの大盤振る舞いで、初期スキル以外のスキル獲得が可能になったプレイヤーは多く、バスター／サマナーや、原典ではあり得ないサマナー／ペルソナ使いなんて存在すら誕生しているようだが、このガーディアン導入で更にプレイヤーのスタイル選択に幅が広がっている。

「やつと、サマナー技能取れた！ ついでに表の職業も変えて、自衛官にした！ やつば、相手によっては銃が無いと厳しいし、剣を伸ばしつつ銃もって考えると表の職業も銃のスキルに關係しそうなものを選んだ方がいいしな！ てなわけで、これからはバスター／サマナー／自衛官な！」

「マロロがこれ見よがしにガーディアン見せつけてくるの！ クーちゃんだけでもズルいのに、そつちもモフモフなんだよ？ 巫女服片手に『カオスはいいぞお！』って言うわねえ……」

イベント後の初の異界入りでアキラやエリリの口から出る話題もやはりそうしたイベント後の風潮に影響を受けたものとなっている。

「そーいやさ、アイテムは何貰った？ 俺の場合はベレッタだったのも表の職業変えた理由なんだけどさ？」

「私はこれ！ 今着てるジャケツト！ 防刃、防弾、耐熱つても凄いいけど、今まで着たのより軽くて着心地がいいの！」

「おー、そう言えば新しくなってるんな！ 似合ってる似合ってる！」

「で、タケルは？」

「相手によつて使い分けようか、それとも新しいのをメインにしようか悩んでるんだけどね」

「つてことは武器か、防具か!？」

「えー、花瓶やめっちゃうの？」

「これなんだけどさ……」

タケルが持ち替えた装備は燭台、それも銀の燭台であった。

「ジャン・バルジャン乙！」

「それも鈍器なの？」

「ジャン・バルジャンは売らずに取っただけで、凶器にはしてねえよ！ 攻撃の最大期待値は今の花瓶の方が高いんだけどな、こっちは10%で破魔追撃発動とか付いてんだよね」

「ポイント余つてたらスキルで二刀流取つて、両手鈍器でいんじゃないかね？」

「二刀流は力必須だつてば！ どっちかって言えば素早さの人にはキツイわよ？」

「そう言えばさ、銀の天使像とかあったとして、それを武器にした場合、ロウに傾くのかカオスに傾くのかどっちなのかね？」

「どっちだろ？　持ち物として見ればロウだけど、使い方考えるとカオスな気もするね？」

「タケル、なんか近付いてきてるみたい！」

燭台装備のまま戦闘に突入。

10%とはいえ、運のステータスを上げているせいもあるのか、いいタイミングで破魔発動。

6体出た悪魔の内、2体はその効果で倒すことに成功する。

「そんなにリーチは変わらないか……」

「銀色は目立つなあ……売ったら実は結構いい値段になるんじゃないかね？」

「破魔発動もいいタイミングだったし、そっちにしちやええば？」

「……………!!」

「どうしたムルル？　なに、花瓶？　渡してもいいけど、どうするんだ？」

タケルから手渡された花瓶を意外に力強くブンブンと振り回すムルル。

その外見と振り回している物のギャップが激しい。

「おおー、やるなく、ムルル、私も負けないから！ タケルく！ なんか頂戴！」

「いや、フィーネが持てそうな物持てないって！」

「ええく？ なんか私にも頂戴よく！」

「……てか、仲魔つて装備出来るの？ 偽典だけじゃないの、仲魔が装備つて？」

ムルルの得意げな顔と、フィーネのおねだりに困惑するタケル。

「親に似るつていうの？ それとも飼い主……う？」

「こうして見るとやっぱタケルん家の子だなあ……」

エリリもアキラもどこか遠い目をしている。

「……♪ ……♪」

こうしてタケルの花瓶の二代目所有者も決まり、タケルの武器は銀の燭台へチェンジすることとなった。

「あれは痛い……」

「見るだけでも痛い」

背の高さの違いもあり、ムルルの振るう花瓶はゾンビコップの脛にガシガシと当たっている。

足元のムルルに気を取られるとタケルの銀の燭台が顔面を直撃する。

「こわっ！」

「悪いっ！ 初めて撃ったんだ、実は！」

「あー、試し撃ちとかする訳にもいかないしねえ、町中じゃ……」

アキラの撃った銃がタケルの耳元をかすめる。

イベントが夜の状態であったことによる意識の変化もあって、異界での経験値稼ぎも夜の時間帯へ突入しても特に気にすることなく続けられる様になっている。

もちろん、武器や防具が強化されたり、レベルアップでステータスが向上していることも影響している。

「親子で凶悪だなあ」

「物騒な親子だねえ」

「ムルルが子供なら私がお母さんだね！ うんうん」

「……♪ ……!!」

「いや、大事な仲魔だけど親子じゃないからな！」

「あっ!? タケル〜！ ちょっとMAG頂戴！」

「どうした？ コンプの貯蔵は十分なはずだぞ？」

「う〜んとね、なんか今の経験値で進化出来そう!!」

「フィーネちゃんハイピクシーになるの?」

「他のピクシーより先行してる分早いな、たぶん一番乗りだぞ?」

コンプからでなく、タケルから直接MAGを吸収するフィーネ。

光に包まれ、丸くなり、そして……。

「じゃじゃ〜ん! 私の才能にひれ伏せ〜っ! 単なるハイピクシーに留まらないこの私! もはやハイパーピクシーと言ってもいいね、これは!」

レオタードの様な服だったフィーネは、ドレスの様な、それでいて鎧の様な服装に変化し、髪長さも伸びて羽も体のサイズも若干大きくなっている。

「フィーネちゃん可愛い〜!!」

エリリは手の上にフィーネを乗せると頬ずりしている。

「なんか、ヴィヴィアンとここで見たハイピクシーと違うね?」

「称号が付いている……『ハイパーな』ハイピクシーだつてさ……」

「うふふ、ねえ、タケル嬉しい? 私が強くなつて!」

「あー……進化したのも確かに嬉しいけど、進化しても中身が変わってないことの方がもっと嬉しいかな? 進化して急に上品な口調で喋る様になったら、ちよつと嫌だったかもしれない……」

進化しても口調も行動も変わらず、いつもの定位置の頭に座るフィーネにほつとする

タケル。

「ついつい本音が口から出てしまう。」

「えへへ……そうだ！ お祝いにファミレス行こう！ ファミレス！ パフエがあるんでしょ？」

テンションまでハイなフィーネに引きずられる形で異界から引き揚げ、アキラやエリりも誘ってファミレスへと向かうタケルたちであった。

Lady's Shop

「起立つ、礼、着席！」

タヌキの顔をした担任が帰りの挨拶を済ませると、一回クラス中を見回してから職員室へ転移。

とたん、教室の中はあつという間に半数以上がログアウトを済ませて姿を消す。

現在の学校教育は「完全登校制」「V R併用制」「完全V R制」の中から本人や保護者が選択出来るようになってきているが、この学校の様に完全V R制の場合、対人トラブルでのトラウマなどの事情を抱えている生徒も多いことから教師の外見は動物を若干コミカルにアレンジした様な頭部を持つ、いわば獣人スタイルになっている。

人間の成人男性、成人女性というだけで恐怖を感じる者も居るからだ。

教師側としても素の表情が見られず、一種のロールプレイとして「頼り甲斐のある教師」を演じやすい点から好評である。

生徒側も外見でいじめられた経験があつたり、酷いコンプレックスを抱えていたりする者も居るため、コロコロと外見を変えて本人特定が出来なくなれば、本人そのままの外見で無くてもいいことになっている。このため、生徒の中には等身大のテ

デイベアやゲームやアニメのキャラクター、教師と同様の動物の頭部の獣人、エルフやドワーフなどのファンタジー世界の住人の外見をした者も居る。

「はあ、終わった終わった」

「VRでも座りっぱなしは疲れるねえ」

「軽くログアウトしてからVRカラオケルームでも行かない？」

教室に残ったクラスメイトの会話を聞きながら、自分もログアウトする絵里。

フルダイブ用の端末を外し、サンングラス状の端末を装着してハーフダイブタイプの介護ユニットを自分で操作。自室に併設されたユニットバスへ。

昔であればヘルパーなどの介護者の手を要する様な障害を抱えている者でも介護ユニットを自分で操作することによって「自分で自分を介護」出来るようになっていた。

家自体を改造しても同じ様なことは出来るし、アメリカなどの場合はむしろそういった家自体が一つのユニットといったリフォーム、新築を行う者の方が多いが、日本の場合は人型のユニットを用い、元々の住宅には軽く手を加える程度ということの方が多い。

絵里の右足は膝から下が無く、左足は足首から下が無い。

機械動力の補助とVR技術の応用による制御を用いた義足で歩くことも可能であるし、絵里もそうした電子制御義足は保有しているが、装着や脱却にはかなりの手間を要

するため、日常ではあまり用いていない。

生まれた時からの障碍ではなく、両親と弟の命も奪った交通事故によるものである。

自動車のオートクルーズ化と安全制御の高度化は進んでいるものの、それでも事故は完全にはゼロとならない。

安全を守る為の機能がケースによっては事故の原因にもなったりする。

レコーダーの検証で運転していた絵里の父親の過失は無かったことが確認され、相手が賠償金の支払能力を持った企業であったこと、父親と母親は保険に入っており、弟の進学を見据えて満額が高い契約に切り換えたばかりであったことから自宅のローンと改装費用を支払ってもかなりの金額が手元に残ったことから生活自体には問題は無い。

両親と仲の良かった親族が比較的近所に住んでいたという点も運が良かった。

それでも家族を失い、それまで当たり前に出来ていたことが出来なくなるといふことは、親や友人などから「底抜けに能天気」とさえ言われていた絵里から明るさを奪うのに十分な出来事であった。

「親父と喧嘩した」と言つて従兄が転がり込んで来たのも、そうした絵里の状況を心配してのことだろう。

なんせ社会人として既に安定した収入を得ていることから、もしそんな理由で家から

追い出されたのが本当だったとしても、一人暮らしを始めたところで全く問題は無く、それどころかローン完済の自家用車まで持つているのだ。

実際、通院や義足のメンテナンスなどの際にはお世話になっている。

「いや、こっちが迷惑かけてる側だからな！」と絵里の負担にならない様に言い訳までしてくる。

その従兄が最近は特に機嫌がいい。

『女神転生R u i n a』を始め、タケルやアキラと知り合った絵里が、かつてほどではないにしろ明るさを取り戻してきているからだ。

従兄は自分が β でプレイをし、その話をしていたからプレイを始めたと思って居るが、実際はクラスメイトが会話をしているのを聞いて「お友達になるきっかけになるかな？」と思ったのが始まりだ。

完全VR制の場合、授業終了と共にログアウトしてしまう者も多く、学校で友人を作るのが難しいのだ。

プレイを始め、あまりにも広大な東京にプレイ三日目でクラスメイトと中で「偶然」遭遇することを諦めたが、従兄が色々と気を遣いアドバイスやらアイテムの融通やらをしてくれるのをあっさりとやめてしまうのも悪いと思い、活動範囲を少しずつ広げていた、そんな時に見かけたのだ、妖精を。

最初は相当に変な子に思われただろう。

サマナーを無視して妖精に熱心に見ず知らずの女の子が話しかけてきたのだから。

「まあ、中の人の大半にとっては俺はフィーネのおまけだからなあ……」と、どこか黄昏ながら笑うタケル。

「そこそこ影で見ても、隙を窺う感じでスクショ撮る連中よりはストレートで好感持てるよな！」と笑い飛ばすアキラ。

二人と出会い、ログインしておらず消灯状態になっているフレ欄にガツカリしたり、ログインしてれば連絡を取ったり、一緒に異界に行つて経験値稼ぎをしたり、会つてくだらない話をしたり、中でちよつと出かけてみたりとしている内に、笑える様になつていたのだ、自然と。

「笑顔浮かべてないと不機嫌だと思われなかな？」「乱暴な言葉使うと嫌われなかな？」などといったことを考えず、思ったまま、感じたままで過ごせる様になると、逆にVRスクールでも相手の方から声をかけてくる様になつて、学校でも友達が出来て、と。VRゲーセンで撮つた「くまちゃん」との仮想フォトを眺め、笑みを浮かべる絵里。背の低さと体型から小学校で酷いじめを受けた「くまちゃん」は、学校に限らずVR内では等身大のデバイスアの外見をしている。

その愛らしさからクラスでは人気者だ。

「もふもふしてみたい」と思っても話しかけるきつかけが無く、仲良くしている人たちを羨ましく見ているしかなかった絵里だが、ごくごく普通に話しかけ、好きなゲームや漫画の話で盛り上がり、頑張ってなくても友達って出来るんだよね、そういえば」ということを思い出した。

くまちゃんも実は『女神転生Ruinna』のプレイヤーだということが分かり、今度、中で待ち合わせをして会う約束をしている。

パソコンの電源を入れ、ネット回線に接続する。

掲示板は賑しいや喧嘩、悪口の言い逃げなどもあって、あまり好きでは無いが、情報源としては有用なことが多いため、ある程度不快な書き込みの少ない板を選んで見ている絵里である。



【イベント】なんでそ？ お宝鑑定団 その4 【もつかれ〜】

1：永田町の異能者

ここは『女神転生Ruinna』で過日行われたイベントクリア報酬として、各自がゲットしたアイテムを公開するスレです。

スクショは歓迎ですが、リンク先へのアクセスは自己責任で！

煽り、荒らしは華麗にスルーしましょう

愛の無いコメント、貶しはNG

和気藹々、マタリ進行でいきましょう

過去スレ：なんでそ？ お宝鑑定団 その1〜3

(中略)

218：赤坂のペルソナ使い

獲得アイテム【イージスの義手】

性能は高いんだが、腕を切り落とせとせとでも？

それとも鈍器として振り回せってか？

219：多摩センターの異能者

獲得アイテム【鼓型コンプ】

和楽器の鼓の形状のコンプ！

高額でお買い上げ有難うございます!!!

220：明大前のサマナー

>>219

速攻で売れたのか!?

たしかにそれはちよつと欲しい!

221: 新宿三丁目のバスター

獲得アイテム【ハゲヅラ】

見た目はまんまハゲヅラ

呪殺・破魔無効、電撃反射、炎熱・氷結・衝撃耐性

性能は神性能! でもハゲヅラ

つ【スクシヨ】【スクシヨ】【スクシヨ】

222: 浅草のサマナー

>>221

顔にモザイクかけたくなる気持ちも分かる

これは酷い

223: 原宿のバスター

でも、なんでハゲヅラ?

224: 虎ノ門の異能者

実はヅラシリーズがけっこう多い模様

確認済みとして三つ編みお下げ、貞〇ロンゲ、仏陀パンチ、荊冠付きロンゲがある

225：四谷のサマナー

この高性能っぷりで逆に分かったぞ！

メガテンでハゲと言えば四文字！

つまりハゲヅラは四文字コスプレグッズだったんだよ!!!

226：中目黒のバスター

Ω Ω Ω < な、なんだってー!!



「タケルの銀の燭台でもマシな方だったんだねえ……」

パソコンの電源を切り、介護ユニットを用いてベッドに戻る。

VR端末を装着、いつもの高田馬場のホームへ。

色々和小物やらなんやらを買って漁って、現実よりも女の子の部屋らしくなっている。

コルクボードにはスクショから作られた写真が重なったりしながら沢山貼られている。

フイーネとの2ショットが多い。

スマホに入っていたメッセージを確認。

今日は早稲田に集合で都電に乗ることになっている。

フィーネのはしやぎっぷりが今から予想出来て、ウキウキとしてくるエリリであった。

MICOM

「フィーネちゃん、私の仲魔のシエーラだよ、よろしくね！」

「わあ、ハイピクシーさんですう！　すごいですう！」

「ふふふ！　私の素晴らしさが分かるとは中々有望なピクシーだね！　タケルと私を見習ってれば、すぐにハイピクシーになれるよ！」

「あんま調子に乗ってるんじゃないぞ、フィーネ。」

イベントで獲得したポイントで結局エリリもサマナー技能を獲得した。

タケルの体験を参考にピクシーも仲魔にして、そのお披露目が今回である。

フィーネと比べるとどこかおっとりとしているシエーラは、素直にハイピクシーになつたフィーネを賛嘆している。

アキラは天使を仲魔にして属性のニュートラル寄りへの移行を目指していたが、結局墮天使であるウコバクしか仲魔に出来ず、「更にカオス寄りに傾いちゃった」とダフネ仲魔入り計画の前途は多難なようだ。

そしてタケルはというと……。

「それにしても、この車凄いいねえ！」

「仲間内に保有者居ると便利だとは思ってたけど、そういうのつて先の話になると思ってた」

「イベントでの日本円のボーナスもけっこう多かつたし、SEつてこの中だと結構稼ぎ良くてさ、それにイベントで都内あちこち行って、遠征も面白かつたしな！」

自動車の技能を獲得し、日本円でハイルーフのワンボックスを購入した。

戦闘技能や最近、少しいじり始めたアプリの改造関連なども考えたのだが、一人で何かをするより、中で知り合った気の合う仲間と一緒に何かする楽しさを優先し、出来るだけ大勢で利用出来るこの車を買ったのだ。

魔貨も投じて改造を行い、ある程度は悪魔の攻撃にも耐える仕様だ。

また、ルーフに太陽光パネルを設置し、専用のバッテリーも追加、ちよつとした電化製品が使用出来る様になっていて、ルーフ下に就寝スペース（速攻でフイーネとムルルに占有されてしまったが）もあるプチ・キャンパーとなっている。

電子レンジと冷蔵庫も購入、据付しており、出先でもちよつとした食事なら取れる。

「まあ、誰も料理関係のスキルは持ってないけどねえ……」

「俺らが身に付けるより、レベル上げてそういうこと出来る仲魔を加えた方が早い気がする」

「タケルく！ 私とシエーラのアイス頂戴！」

「床にこぼすなよ？」

「部屋でもこぼしたことないじゃない！」

「ま、そんなもつたいたいことはないか？ 床に食べさせるくらいなら自分で食うよな、フィーネは」

せつかく車を入手したのだし、まずはレジヤも兼ねてちよつと遠出、ということ、三人は秋川溪谷に向かっている。

ちよつと異界で暴れてから、近くのキャンプ場でバーベキューをし、それから各自のホーム近くまでタケルが車で送り届けるという流れになっている。

ちなみにタケルの車の駐車場はマンション付属の入居者専用のもので、一台も停まっている車が無いせいなのかなんなのか、月1万5千円という破格の料金となっている（それでもフィーネは「それだけあれば、アイスとプリンがたくさん食べられるのに！」と不満そうだった）。

「で、あつちの異界はどい？」

「サマーランドだって！」

「つてことは水系の悪魔多め？」

「じゃないかな？　ただ、寺なのに天使なんてのもあるし、この中はいまいち良くわからん！」

「でもイベントの時の父島の神社は大神山でイヌガミつて割とストレートだったでしょ？」

「まあ、イベントとはいえ将門公がヒーローショーやる世界だからなあ……」

「連動アプリのミニゲームにもなってるんだよねえ、マサカドマン……」

「私もあのミニゲームやったけど、首がポンポン飛ぶんだよねえ、貰えるポイントやアイテムは割といいんだけど」

社会人のタケルやアキラとは違い、学生のエリリはそういう課金はあまり出来ないため、ミニゲームをかなりやり込んでいるようだ。

マロロにもらせば「お兄ちゃんに任せろ、バリバリ……！」「やめて！」という事態になるだろうが……。

車載のタブレットコンピュータを駆使した（とうとう使える様になった）フィーネのナビゲーションでサマーランドへ到着。

「普通に入場料金必要なのな」

「まあ、異界は一部だし、普通の人は気が付いて無い設定だからねえ」

「駐車料金、そういうものもあるのか!」

「タケルく、なんかおいしそうな匂いがするよ〜!」

フィーネの心は既にフードコーナーへ飛んでいる。

ハイピクシーになっても、この辺は全然変わらない。

エリリの仲魔のシェーラは甘い物は好きだが、ここまでは食い意地が張っていない。

フィーネが好きなのはアイスとプリンだが、シェーラはヨーグルトと乳酸菌飲料が好きなのだとか。

ここまでの車内での会話でのピクシーからの発言の7割は食べ物がらみであった。

「あらあら、そつちの坊はちゃんとご飯食べてるんかいな? ヒヨロヒヨロでもつと運

動せなあかんよ? よっしや、おばちゃんに任せとき!」

一方的にまくしたてられて、アキラのコンプにはアズミが入っている。

「アズミのおばちゃん化が加速しているのか、それともあの個体が特別なのか……」

「まあ、心強い仲魔が増えて良かったんじゃない?」

「タケルもエリリもサマナー技能持つてるのに、なんで、俺のトコに来るんだ？」

「母性本能がくすぐられた？ レディキラーのおかげじゃね？」

「あー、そっかアキラのコンプってレディキラー入ってるもんね！」

「レディの範囲広過ぎだろ……」

理想（ダフネ）と現実（アズミ）のギャップにアキラは納得がいかないようだ。

水に関する悪魔の登場が確かに多いものの、時々「なんで、こんなところに？」となる悪魔も出現し、仲魔になったばかりで強めの悪魔と戦うことになっているシエーラはお疲れ気味だ。

「エリリちゃん、疲れましたあ〜」

「へろへろだねえ、シエーラ。はい！ 乳酸菌飲料！」

「（ゴクゴクゴク……）ぷはあ〜！ 生き帰りました!!」

「……………!!」

「ん、ムルルは飴か？ コーラとヨーグルト、どっちの味がいい？」

「……………!!」

「両方？ フィーネの影響か？ ムルルも欲張りさんになってきたなあ……」

「タケル〜、水筒！」

「はいはい、ちよつと待つてて」

「ほれ、坊！ 坊もしつかり水分補給せな！ しゃつきりせい！」

「俺はこれかよ……。ま、飲み物サンキュな」

それぞれに仲魔も増えて、戦闘前後も賑やかなことになっている。

地元の悪魔よりも強めな悪魔が多いもの、イベントも終えてそれなりにレベルも上がった今のタケルたちにとってはさほど苦戦する相手でも無いが、属性の相性や即死系持ちなどの出現の可能性もあるため、油断は出来ない。

「きやがった、ムドだ！」

「確率低いとはいえ心臓に悪いよね」

「やっぱ、耐性アイテムなんか仕入れるかな、でも車で散財しちやったしなあ……」

「この手の攻撃してくるってことはタケルの銀の燭台効く可能性あるわよね!？」

「よーし、じゃ、そっちはタケル中心、こっちは火力中心でバーベキューだ！」

「あー、この後、バーベキューなのに、そういうこと言っちゃダメ〜！」

「わ、悪い！」

とといったちよつとヒヤヒヤした戦闘を最後に経験値稼ぎを切り上げ、サマーランドから少し離れたキャンプ場に移動する。

「お肉ばかり食べてちやあかんよ？ こっちのお野菜も食べな」

「甘いものは無いの？」

「マシユマロでも焼くか？ でも肉の臭いとかが移らないか？」

「お外で食べるとおいしいね！」

「……………!!!」

「新入りのせいで益々影が薄い件について…………」

アキラのウコバク、一応、ウコンという名前が付けられているが、新入りのアズミ（も
う、名前は『オカン』でいいんじゃないやね」とアキラ）が押しが強いため、どうしても影が
薄くなってしまう。

「こればかりはしようが無いねえ、チミ〜！ ハイパーな私を見習って精進したまへ
！」

「さっすがファイネさんですう！」

微妙に下つ端的役割が板に付きつつあるシエーラ。

ハイピクシーになっても相変わらずのファイネ。

「……………!!!」

「え、骨をもつと？ ムルルちゃんのおかげでゴミが少なくなりそうね？」

鶏肉やら骨付きカルビの骨をバリバリと食べるムルル。

オカンはおかんらしく、うんざり顔のアキラを構い倒している。

飲み物も食べ物もほとんど食べ尽して、ムルルのおかげでゴミも紙皿や割り箸、空き缶程度だったが、ゴミもまとめて、きちんと所定の場所に。

半分遠足のような車での初の遠征もこれで終わり。

みんな揃って車に乗って、帰途へ。

エリリ、そしてアキラと送り届け、マンションの駐車場に。

そのまま部屋に戻ろうとするも「コンビニ、コンビニー」とのフィーネの声に負けて、コンビニへと足を運ぶタケルであった。

窓明り

コンプをコタツに置いて空間投影モニターと空間投影キーボードを展開し、アプリの改造を行っているタケル。

「タケルく、ブロードウェイに行こうよ!」

「悪い、あと少しで取り敢えず終わるから、ちよつと待ってて!」

「……?」

「ん? 名前か? サーチライト(仮)とでもしとくか?」

プログラミング画面を見て、分からないだろうに「ふむふむ」などとフイーネはやっていたのだが、流石に飽きて来たようだ。

ムルルはコタツに入っただけで寝ている。

攻略組から見ればMAGの無駄遣いだろうが、タケルはログインしている間は出来るだけ邪魔は外に出す様になっている。

「悪魔の居る日常」というのも、この『女神転生Ruina』の楽しみのひとつだと思っ
ているからだ。

これもファイネやムルルといった仲魔に恵まれたからだとも言える。

ともあれ、一緒に居ても構い倒したりする訳でもなく、それぞれが好きな様に過ごすなどということも珍しく無くなってきており、表の職業の関係もあつて上昇しやすくなっているプログラミンのスキルを磨こうと、入門書を見つつ、数値を一部いじるというごくごく初歩的な改造を行っているのだ。

色々考えた末に、選んだ改造対象アプリはエネミーソナー。

とはいってもそう凝ったものは出来ないの、エネミーソナーの索敵方向を絞り込むことで、探知距離を広げるという方向性で改造しようとしている。

開けたフィールドならともかく、建物の中や通路などでは必ずしも三百六十度全方位の情報はいらないし、懐中電灯で照らす様に体の向きである程度はカバー出来ると考え、アキラが銃を手に入れたり、魔法が使える仲魔が増えたりということもあつて、相手が気付かない距離からこちら側が相手を把握出来ることの優位性を考えて「意外と使える改造じゃないかな?」と思っているタケルである。

「……これでよし! ……あ、メッセージ来てる、タロウからだ!」
「タロウってあの小さい子よね?」

「ああ(タロウもファイネには言われたくないだろうなあ……)」
添付のスクショを見てタケルは頬を緩ませる。

「父島移住組か！ 良かったな、タロウ！」

全て外見年齢は年上の他のプレイヤーに囲まれ、満面の笑顔のタロウ。

先日のイベントでは車の購入資金の約半額にも当たる高額の日本円を獲得したタケルだが、これはタケル一人に限ったことではなく、多くのプレイヤーにかなりの金額の日本円がイベント報酬として与えられた。

「現実で欲しいー」といった切実な叫びが掲示板の書き込みが溢れるほどの大盤振る舞いであつたが、運営側の狙いはこうしたホームの転居にあるのだろうと思われる。

初期は都内各地に強制的に割り振られることになつたが、そこでのプレイである程度内部に慣れ、イベントで他の町へ足を運び、違う町のプレイヤーたちと知り合うきっかけを作り、最大のハードルである日本円をイベントを機にバラまくという流れを見ると、「そんなつもりは全く無い」という方が不自然である。

父島への引越しもなると流石にかなりの費用が発生するが、二十三区内の移動程度ならばさして費用もかからない（住む場所のランクを上げるのには費用がかかるが、同ランクなら新宿でも渋谷でも巣鴨でも秋葉原でも引越し費用だけだ）。

もちろん、エリリのように日本円を「何か必要な時のために」と使わずに取っておく者も多いが、引越しだけでなく、タケルの様に乗り物の購入（車は流石に少ないがバイクや自転車はそれなりに）に充てたり、アキラの様に転職に用いたり（職種によってはポ

イントだけでなく日本円も必要とされる) した者も居る。

タロウにお祝いの言葉とこちらの近況を知らせるメツセージを発信し、コンプをスマホ状態に戻す。

タケルの車もファイネのお気に入りだが、それでもいまだにお気に入りナンバーワンはブロードウェイである。

毎度のブロードウェイ行きをしようとムルルに声をかけると、すぐに目を覚まし、タケルのことをじーつと見つめてくる。

「ムルル、どうした、眠いのか？」

「……………!!!」

「え？ 悪魔合体って……何言ってるんだよ、お前!？」

「……………!!!」

「いや、今でも役に立ってるだろ？」

「……………!!!」

「ずっと一緒にいたいから、強くなりたいんだって、ムルルも……タケル分かってあげて!」

「いや、だつてき、ムルルじゃなくなつちやうんだよ?」

「……………!!!」

「こういう時だけ強情なのな、お前……わかった、オークションでお前が合体出来る悪魔を探してみる」

これまで様々なメガテンでそれこそ何百回もしてきた悪魔合体。

ここまでワクワクしないのはタケルも初めてである。

メガテンの設定として「悪魔は強くなることを望み、悪魔合体を受け入れる」ということは頭では理解していた。

だが、この世界で可愛がつて、日常を共にしてきたムルルがそれを望むなどということとは、その可能性すら頭から消えていたタケルである。

「グレムリンと……いや、オニは可愛くないだろ、どう考えても……なんか……カソとでアガシオン……これなら、まあ可愛いと言えるかな?」

「……………♪」

「ムルルもこれがいって!」

フィーネは抵抗感が無いようだ。

この辺が悪魔と人間との感覚の違いなのだろう。

カソを落札、ムルルとフィーネと共にいったんコンプに入れ外に出る。

「タケル〜！」といつもと変わらぬ調子のフィーネの呼びかけに、いつもの様にフィーネとムルルを外に出す。

「ブロードウェイにれっつ〜！」

「……………」

ブロードウェイのいつものクレープ屋に立ち寄り、中を時間をかけて上から下までぶらぶらと歩き、そこから外に出て商店街で焼き鳥を買い、和菓子屋でムルルの好きな落雁を買う。

【おたふく教 東中野会館】

何故か札束が無造作にあちこちに放置された会館に入ると、ごく自然に奥へと案内される。

「ようこそ、悪魔がつどいし邪教の館へ何の用かな？」

「仲魔の合体をお願いします」

映画の転送装置の様なメガテンではおなじみの怪しげな機械も、こうして見ると非常に禍々しい。

ムルルを抱きしめ、この合体のためだけに仲魔にしたカソの頭も撫でる。

このカソもこうしてオークションで落札してすぐで無ければ、これまた愛着が出て辛くなっていただろう。

「嬉しそうに手を振るなよ……」

無邪気と言ってもいい調子で手を振るムルル。

装置が動作し、その姿が歪み、消える。

「僕の名前は妖魔アガシオン、今後ともよろしくね！」

「よろしくな、俺はタケル」

「知ってる、知ってる！……あれ、なんでだろ？」

「私はハイパーなピクシーファイネだよ！」

「食いしん坊のファイネだー！」

ツボに収まったというか、隠れたというか、そんなアガシオンがふよふよとタケル達の元へ飛んでくる。

「仲魔が増えたらまた来るがよい」

邪教の館を後にするタケル達。

「名前なんだけど、どうしようかな……？」

少し気が抜けてしまった様子ながらも話しかけるタケル。

ムルルであつてムルルでない相手をどう呼べばいいのか考えている。

「え？ ムルルはムルルでしょ？」

「そうだね、僕はムルルだね！」

「え？」

「名前を付けてもらった悪魔は合体しても記憶や感情は残るんだよ？」

「名前を貰った同士だと、混ざっちゃうらしいんだけどね！」

「なにそれ？」

「仲魔になる前は自我が乏しいって話はしたでしょ？ 仲魔になると自分つてもものが明

確になって、名前を貰うとそれが魂に刻まれるの。だから変な合体のさせ方や戦わせ方

をすると大変なんだよー!? 結局、手放すしかなくなったりとか！ まあ、私はピク

シーを極めるから、合体はしないけどね！」

「僕はいっぱい可愛がってもらつて大事にしてもらったからね。最初から親愛度MAX

なのさー！」

「じゃ、なにか？ ムルルじゃなくなつてないってことなのか？」

「そうだよ、見た目や喋り方は変わったけど、僕はムルルのままでよ？」

「ずっとそばに居るために強くなるって言ったじゃん！ タケル分かつてなかったの

「？」

「ははは……そんなん知るか！ これまでのメガテンじゃ合体したら別の存在だったわっ！ もうお別れかと思つて……それでもムルルの望んだことだからって、俺馬鹿みてえじゃん！」

「馬鹿じゃないよ、前の姿の時はその辺うまく説明出来なかつたしね。それに僕だつて悪魔合体は初めてだったんだから、本当のトコはどうなのかつて分からなかつたしき！ 実際、合体してすぐは前のこと思い出せなかつたしき。こうして話してる間に色々と思ひ出してきたんだよ？」

「タケルは馬鹿だけど、優しい馬鹿だよ、だから私たちが一緒に居たいって思うんだから！」

「フイーネ、それ実は貶してるだろ！ どうせ、俺は馬鹿だよ！」

「ホント、仲がいいねえ、ちよつとウラやましいかな？」

口では怒つた様な言葉を発しているタケルだが、口元はにやけている。

「ムルルは食べ物好みとかは変わつてないのか？」

「味とかは前のままだけど、流石に固い物をバリバリとは食べられないよ？ 種族は変わつてるから」

「そっか、じゃ、ムルルが強くなったお祝いにファミレス行くか!？」

「わーい! ファミレスファミレス! パフェとプリンアラモード両方頼んでいい?」

「僕はお子様プレートが食べてみたいな!」

「いいぞ、なんでも頼め〜!」

はしゃぐフィーネとムルルと共に、弾むような足取りでファミレスへ向かうタケルであつた。

Fall, n Gods

「オヤジ！　なんで、そんな馬鹿なことを!?!」

「俺は○▽×◆だからな……◆◆△●と●●◇のことは任せたぞ」

……

「兄さん、今日はこの辺で終わりに……」

「そのの尾根を越えると今まで植えて来たところが見晴らせると思うんだ、だからそこま
でやろうよ」

「お兄ちゃん、お腹減ったよお、ご飯、ご飯！」

・
・

「……………ケル〜！　タケル〜！　時間だよ〜！」

「う？　夢？　なんの夢だよ、あれ？」

「ホラホラ、寝ぼけてないで顔を洗う！　でもって私においしい食べ物プリーズ!!」

スマホの目覚まし機能と連動したフィーネに今日も起こされた猛。

この機能追加も課金である。

連動アプリで時計をプレゼントすることで、目覚ましやスケジュール管理が可能になる。

ゴツイヘビーデューティな腕時計や、可愛らしいアクセサリの様な時計、懐中時計やキーホルダー型、ペンダント型など（なんせ悪魔なんで手が無かったり、四足だったりする者も居る）その種類も実に多様だ。

フィーネの左手には可愛らしいピクシーサイズの女性用腕時計が巻かれている。

この時計『女神転生 Ruina』中でも装備された状態で、フィーネが見せびらかしまくってムルルを羨ましがらせ、ムルルにも時計をプレゼントする破目になった。

ちなみにムルルには合体で変化しても平気な懐中時計タイプのものをプレゼントしたが、嬉しがつて蓋を開けたり閉めたりを繰り返して、壊れてしまわないか心配になるほどである。

ちなみに時計は課金ガチャの景品としても出るが、時計は時計でも鳩時計だったり、ムーブメントの入っていないおもちゃの時計（三回分のマカラカーン機能がある魔反鏡の上位互換、攻略的には当りアイテム）だったりすることもあるので、素直に購入したり

する方が安上がりになることも多い。

「タケルはお仕事でしょ？　早くご飯を食べないと！　でもって私にもおいしいものプリーズ!!」

「フィーネもこつちにも随分馴染んだなあ……クリームソーダでいいか？」

「緑の綺麗なシユワシユワにアイス乗ってるヤツよね！　うん、いいよ！」

自分の分のトーストをオープントースターで焼きながら、スマホを操作してフィーネにクリームソーダを渡す。

これで氷結反射、電撃・衝撃耐性が付く。

ログインは仕事後になり、その前に間違いなくフィーネは食事を要求してくるので上書きされて攻略的には無意味になってしまっただが、仲魔に対して甘いことに関しては定評のある猛である。

「ありがとー！　おいしいね♪」のフィーネの言葉で今日一日頑張る気力も湧いてくるのだから、安いものだともいえる。

「じゃ、フィーネはお留守番な？」

「帰ってきたらあつちでブロードウェイだからね！」

「分かってる、分かってる」

VR端末を手に笑顔で返事を返す猛であった。

仕事を終えVR端末を外すと「タケル、おかえり〜！」とスマホからフィーネの声。アプリでは無く、本当にスマホに住んで居る様に感じる。

「ただいま」と返事を返し、スマホを胸ポケットに入れて中と同じ様にコンビニへ。

つついついフィーネの分のプリンも買ってしまい、帰宅後フィーネのジト目を受けながらパソコンの電源を入れて掲示板を軽く巡回する。



【たんけん】お前からお奨めの引越し先を教えろください！ その6 【ぼくのまち】

1：市ケ谷のサマナー

ここは『女神転生Ruina』のプレイでのお奨め引越し先を紹介するスレです。

自分の住んでいる場所を紹介するもよし、自分が引越したいと思っている街を紹介するもよし！

スクショは歓迎ですが、リンク先へのアクセスは自己責任で！

※ 飯テロは時間を選んで！

煽り、荒らしは華麗にスルーしましょう。

過去スレ：お前らお奨めの引越し先を教えろください！ その1〜5

(中略)

301：神保町のペルソナ使い

飯テロ行きま〜す！

つ【スクシヨ】【スクシヨ】【スクシヨ】

カレー3タイプ、神保町ならカレーオンリーで一週間も可能！

そんでもってガッツリカロリー特盛系

つ【スクシヨ】【スクシヨ】【スクシヨ】

本だけでなく、食い物も充実してるのが神保町

(何で中には芳●書店が無いんだ〜!!!)

302：明治神宮前の異能者

うぷつ、おじさん、見ただけで胸焼けが……

まあ、中での肉体は若いんだけどね？

ウチの近くは自然たつぷり、原宿や青山や代々木に歩いていける環境

住むには結構いいよ？

現実だと家賃高いけど、この中なら問題無いし

303：父島のサマナー

引っ越してココ来たけど、いいね！

つ【スクシヨ】【スクシヨ】【スクシヨ】

VRなのに空気の違いがはつきり分かるって凄くない？

本土まで最低でも6時間はかかるがな……？

304：恵比寿のバスター

昼から飲むビールは最高だぜ！

つ【スクシヨ】【スクシヨ】

ビール記念館の飲み比べセットお奨め！

305：新宿のバスター

食い物屋なら負けてないぞ？

つ【スクシヨ】【スクシヨ】【スクシヨ】

飲み屋なら圧倒的勝利だしな！

何気にオタ系、PC系も充実してるし

それに都内の移動もターミナルだから楽だし

異界も、かなり高レベルまで挑めるバブルの塔があるし

306：府中の異能者

メジャーなトコは引越しでどんどん埋まってくんだらうなあ

新規参入組が増えそうだな、逆にウチら辺みたいないなマイナー目のトコは

307：巢鴨のサマナー

知名度は高いが、移住希望者は少ないと思われる巢鴨に住んでる俺が来ましたよ!?

贗者の傷痕軍人かと思つたらゾンビソルジャーだったり

そのゾンビソルジャーにお婆ちゃんやんが塩大福あげたりしてるけどな!

視界に入るの高齢者多いけど、暮らしやすいよ、わりと!

だから、若者カモン!!!



エリリが「引越ししようかな？」などと口にしていたので見たスレッドだが、半分飯テロスレになっていて星評価をしている人間すら居る始末である。

やはり中野に限らず食べ物には妙に力が入っている。

「ファミレスとコンビニとブロードウェイだけじゃなくて、もつといろんな店に行ってみるか?」

「前に言ってた喫茶店?」

「商店街の中にある様なトコでもいいかもな?」

会話しつつスマホをVR端末に接続してログイン。

見えてはいないのだがスマホを繋いだ状態だと仲魔が側に居る感じでログイン出来る点も猛が連動アプリで気に入っている点だ。

たまに「仕事のログインの時に繋いでいたらどうなるんだろう?」と思ったりもするが、流石に現実で金を稼ぐことに関することで、思い付きレベルのチャレンジは出来ない。

VR内で食事も出来るが、その食事で生きていくことは無理だ。

いくらワークシェアリングで働く場所が増えているとはいえ、それ以上にVRによって働ける人間も増えているのだ。

職種によっては業務用と個人用を完全に区別した最低でも二台のVR機所有が就業条件になっている所さえある。

「タケル、ファイネ、おかえり〜♪」

アガシオンになってからムルルはかなり良く喋るようになってる。

タケルの頭の上のポジションをフィーネと争ったり、ふよふよと眼前に浮いたりと行動はフィーネの影響が強いようだ。

コンプからフィーネとムルルを外に出してスキンシップ。

ムルルは姿は変わっても頭を撫でられると喜ぶのは変わらない。

フィーネは食事と戦闘の時以外はタケルの頭の上が定位置だ。

「そう言えばムルルにあげた花瓶はどうした？」

「この壺の中に入ってるよ！ 今度の戦闘ではこれで『カッキーン！』って『葬らん』打つからね！」

「ホームランな！ まーたテレビだけで言葉覚えたな？」

「えー、葬らんの方がかっこいいよー！」

びよんこびよんこと壺ごと跳ねるムルル。

触ると固いムルルの壺のだが、身動きする時はふによふによと形を変えていて、さすが悪魔というか、正直訳が分からない。

ブロードウェイでアキラとエリリと合流。

暇そうにしていたウシロも誘ってサンプラザに。

ウシロはイベントでの獲得アイテムがステッキ型コンプだったということとでサマナー技能も獲得しているが、現代風の服装にモノクルとステッキという時代遅れの吸血

鬼が若者の服を強奪して着ている様な見てくれになっている。

「オリジナルコンプはいいよなあ」

「二応、スマホの標準のものより仲魔を多く入れられます。でもって実は仕込み杖にもなっているという優れもの」

「おわつ、模造刀じゃなくてマジに刃が付いてるじゃん」

「剣や刀のスキル持っていないんですけどねえ……。それまで取っちゃうと器用貧乏にすら成れずに一般人（改）程度に留まっちゃいそうぞ」

「あー、あれも欲しい、これも欲しいってスキルも際限ないからなあ、どっかで見切りつけないと」

雑談をしつつ、少し強めの悪魔が出る階層を大所帯で歩く。

それぞれの仲魔まで居るため、廊下部分では狭く感じるほどだ。

「タケル〜！ 臭いの来たよ〜！」

「ゾンビベアーって……なんで都内のビルの中で熊が出るんだよー！」

「行つくよー、『自由落下アタック』!!」

ゾンビベアーの頭に壺で直撃した後、前宙からの花瓶での一撃。

なかなか高度な技を使う様になっているムルル。

「ムルルちゃんやるわね。シエーラ、負けてられないわよ！」

「はいですう、エリリちゃん！ ジオですう！」

熊は三匹と言う数でかなりの脅威なのだが、犬とは違って並んだり入れ替わったりはその体の大きさのせいで出来ず、結果として犬より楽に倒されている。

「開けた場所で会ってたらちよつとヤバかったかもな？」

「実質、一体ずつ×3に過ぎなかったからなあ」

「その内、更に一体は一撃で死亡というか消滅でしたし」

「タケルの銀の燭台はゾンビ系に有利だよねえ。特に不利な特徴も無いし」

発動確率は100%で、実際に発動しているのはそれより更に少ないくらいなのだが、わりと効果的な相手に対して発動することが多いため評価が高いタケルの銀の燭台である。

仲魔にフィーネ、ムルル、シエーラという空中勢が居ることで戦い方も三次元的になつて、一回あたりの戦闘時間も短くなっている。

また、今回はウシロが加わっていることもあり、ウシロの得意とする補助系の魔法が的確なため、余計に殲滅速度が上がっている。

「ウシロは補助系使うの上手いから、臨時パーティーとかヘルプとかでも歓迎されるん

「じゃね？」

「どういう組み合わせのチームと組んでもいい感じに出来そうだよね」

「バイク乗ってピンチのヘルプとかに駆けつけるとか？」

「また、スキルが必要じゃないですか！ スキル沢山、全部低レベルなんてのは勘弁してください！」

戦闘をいくつかこなした後、ウシロも交えた戦闘の感想などをサンプラザ前で雑談。

そのまま解散、のはずなのだが……。

「あれ？ エリリ、あっちじゃなかった？」

「こつちにいい部屋があったから引越しちゃった！ 前の部屋より広いの！」

「天井も高くて、ロフトがあるんですう！」

いつもはタケルの向かう方向とは反対方向に歩いていくエリリだが、今日はタケルと同じ方向に歩いている。

「言ってくれば引越し手伝ったのに！」

「この中での引越しって実はかなり楽なんだよ、知らなかった？」

なんでも本人が移動すれば、移動不可能な家具や家電以外の私物は自動的に新しい部屋に配置されるのだとか。

「金の心配要らなきや、毎月でも引越し出来るお手軽さじゃん！」

「さすがにそこまでは出来ないよ！でも物が増え過ぎたら引越していうのもアリだね！」

「エリリ、遊びに行ってもいい!？」

「フイーネちゃんならいつでも歓迎だよ！」

「僕は〜？」

「ムルルちゃんも当然！」

タケルのマンションに近い、ちよつと奥まった小奇麗なアパートがエリリの新居だ。

近くのお店などを案内する約束をして別れる。

「エリリがご近所さんだね〜！」

「そうだな、車でみんなどこかに行く時なんかは便利になったな」

「僕の方がこの辺りでは先輩だからね、色々教えてあげなきゃ！」

「張り切ってるな、ムルルは」

そのままコンビニに立ち寄り、ムルル用に男梅の飴を、フイーネにマンゴープリンを購入し、自分用に飲み物となんだか久々に食べたくなつたカップ焼きソバも買う。

鍵を開けるとフイーネとムルルが争うように部屋の電気を点けて回る。

「風呂場の灯りは点けなくていいぞ！」

タケルはポットからカップ焼きソバにお湯を注ぎつつ、ムルルに声をかけ、テレビの

電源を入れた。

MALKUT

「えっ?」

「これ、事故の元になるんじゃないかね?」

「東京脱出はならずだね」

現在、マップは東京しかない『女神転生R u i n a』、では東京の外はどうなっているのか?

少なくとも景色は見える。

どっかの映画みたいに霧に覆われている訳ではないのだ。

天気が良ければ富士山や房総半島は見えるし、伊豆諸島や小笠原諸島なら船や飛行機（決まったルートで運航され、道中で船から海に飛び込んだりは見えない壁で出来ない）で行くことが出来る。

では、陸続きの神奈川や千葉や埼玉はどうか?

電車に乗っている場合、下りで外に向かう側に乗っていると境界線で上りに乗っている状態になる。

車ではどうか、という境界線を超えた時点で周囲の車ごと反対車線へ移動している状態になる。

流れはそのままなので、夜などはどの時点で向きが変わったか分からないほどである。

そうした話は掲示板などでタケルたちも知ってはいたが、せっかくタケルの車があるのだからとタケル、アキラ、エリリの3人で今回ドライブがてらチャレンジしてみたのだ。

ちなみに「日付が切り替わる時点で丁度境界線に差し掛かると外に行ける」という都市伝説が既に存在している。

少なくとも都内から見える範囲は、外観のデータは存在しているのだ。
「本当は行けるんじゃない？」と思うのも無理は無い。

「少なくとも乗っている状態じゃ、どの時点で向きが変わったか分からないな」

「前後の車もそのまんま居るからねえ」

「新幹線に乗るっていう日本円の無駄遣いをした人間も居るらしい。東京出たらあつと
いう間に東京だつてさ」

「タケルく、この後、どこに行くの？」

「上野に行こうかって話になってる」

「知ってる知ってる！ 動物園があるんだよね、僕、パンダが見たい！」

「フィーネはタケルの頭の上、ムルルは助手席にきつちりとシートベルトをして座っている……っついていうか固定されてる？」

上野は博物館が異界化しているという話だ。

動物園を見てから博物館の異界で経験値稼ぎというプラン。

エリリはシェーラをコンプから出しているが、アキラは出たがるオカンを手スルーして居る。

まあ、超小型のピクシーたちや、小型のアガシオンに比べればサイズが大きいこともあって、そうそう気軽に出せないとさえ出せないのだが……。

「動物園なんか来るの小学生以来だなあ……」

「人が多いねえ、プレイヤーは居ないみたいだけど……」

「タケルく、ソフトクリーム買って！」

「僕も僕も！」

「いや、買ってもいいけど、臭い平気か？ 動物園つて結構臭うぞ、動物の臭い」

「うん、おいしそうだね！」

「ムルルえ……」

久々に悪魔との感性の違いを感じるタケル。

しかしすぐに「俺も水族館で見たアジの群れが生きておいしそうだって思ったし、まあ、大して変わらないか」と思い直す。

伊達に「似た者親子」と言われてはいないタケルである。

「おい、プライドどこに行つた駄悪魔！」

「うわあ、むっちゃだらけてる」

「ある意味幸せそうではあるんだが……」

両隣のライオンとトラと同じ様にだらけきつた姿を晒しているのはヌエ。

ちゃんと「ヌエ」と案内まで付いている。

間違いなくこつちの言っていることを理解しているだろうに、悠然と欠伸をして後ろ足で頭を搔いている。

「ヌエつてけつこう強かつたよね？」

「普通の人には見えて無いみたいだなあ」

「上野動物園すげえ、流石恩賜動物園」

多摩動物公園はどうなんだろうと、ちよつと確認してみたくなったタケル。

又エだけでなく、妖獣、魔獣、妖鳥、霊鳥、凶鳥などもしつかりと檻に入つて、よく言えば穏やかに、悪く言えばダラダラと暮らしている。

「異界で出てくると怖かったりするの……」

「こうして檻に居ると周りの動物と大して変わらないなあ」

「ペットショップとかでも、もしかして!?!」

檻まで飛んで近付いては威嚇されてタケルの陰に隠れてアカンベーをしている
フィーネ。

まるで小学生だ。

檻の中の悪魔たちは外に出られないだけでなく、魔法なども使えないようである。

檻というより檻の形状の結果なのかもしれない。

「タケルゝ動かないよ? 死んでるんじゃない?」

「いや、息してるだろ! レッサーならともかく、ジャイアントパンダは動いてる方がレアだから」

「わーい、パンダだ、パンダだー！」

「エリリちゃん、大きくて怖いですうー！」

タケルとパンダの近くを行ったり来たりしているフィーネ。

ムルルは喜んで、シエーラは怖がっている。

コンプの中から絶え間なく話しかけられてアキラは疲れた顔。

オカンを仲魔にしてからずっと日常でもこの調子らしい。

「早くサマナーのレベル上げて、オカンを合体しないとまたない……」

それでも戦闘となれば影の薄いウコなんとかさんよりは活躍するため、簡単には手放せないのが辛いところだ。

「頼りにはなるんだよ、頼りには……」

「おお、これ童子切安綱の本物だあ……」

「オニ相手に使わせてもらえないかなあ？」

「流石に国宝だからなあ」

「来国光、長船、相州正宗……魔貨全部はたいも買えないよなあ」

「ていうか、ここ悪魔のレベル高いだろ？」

「奥に行く危険だと思っよ？」

「不動明王とか毘沙門天とか出たら洒落にならないもんな」

教科書に乗っている様な国宝や重要文化財が展示されている。

仏像なども見事なものだが、メガテンの場合、悪魔として登場する者も多い。

そうした展示物を媒介として、本体が出てきてしまう危険性もあるのだ。

そうでなくても地元の中野より出現する悪魔が強い。

想定外に強い悪魔にフィーネたちも軽口をたたく余裕が無い。

「これ、経験値稼ぎとか言つてたらパトるだろ？」と奥まで進むことなく、宝玉や傷薬も使いつつ出口に向かう。

「最後の最後でこれか？」

「もう劣化はお腹いっぱい！」

「この劣化の仕方はヤバいだろ？」

まるで外への逃走を遮る様に出口に現れたのはミシヤグジさまの劣化分霊、ただし再現率が低く、ぴゅ○太レベルにドットが荒い。

結果……。

「どうみてもモザイク処理です、本当にありがとうございますございました」

「リアル過ぎても嫌だけど、これはこれで卑猥！」

「うねるな、動くな！ 猥褻物にしか見えない！」

「ちっ、耐性は劣化してない！ 打撃使えないから俺無力だぞ？
くそ、アイテム係やる
しかないのか？」

「いつくよ〜ジオ！」

「いきまーすう、ジオ！」

「斬撃はいけるけど……アギ！」

「ペルソナ！ ラクンダ！」

劣化しようが神様は神様。

補助呪文を使い、アイテムを使っても厳しい戦いだ。

ましてやダメージ筆頭のタケルの鈍器が使えないのが痛い。

「傷薬、そんなでもって次のターン、とっておき行くぞ！」

「くそ、見た目へボいけど強いじゃねえか！」

「回復はタケルがやってくれるよね、じゃ、ジオンガっ！」

「神経耐性だもんな、とっておきの神経弾使っても意味ねえし、オラっ！」

「とっておきのとっておき！ メギドストーン！」

どうにかこうにか倒し、外に出ると周囲のNPCと自分たちの落差が激しい。治しきれない怪我也残り、ヘトヘトの3人とその仲魔たち。

逃げる様に駐車場のタケルの車へと戻る。

「死、死ぬかと思った……」

「あの見かけであの強さは詐欺だ！」

「大赤字だ……強くなってもいくらでも上は居るってことだな」

「タケルくおいしいもの食べに行こう、もうヘトヘトだよ！」

「タケル、タケル、ケバブってなーに!？」

「これで運転だとタケルも大変だし、飯食ってから帰らね？」

「そうだねえ、今日は自炊どころか帰りにコンビニ寄るのも勘弁って感じ……」

車で少し休憩し、落ち着いたところで食事に。

スペイン料理の店でラムチョップやトルティージャ、レバーのパテなどを食べる。

酒が欲しくなるところだが、タケルは運転、エリリは未成年ということで飲めないのが残念だ。

「前だったら、このラムチョップとかムルルが骨ごとバリバリ食べてたよなあ」

「この程度なら食べられるけどね、どっちかって言うとな今の場合、僕は割って吸う方がいいかな？」

「タケルく、トルテイージャってオムレッツだよねえ？」

「フワフワですよ おいしいですよ！」

「ほらほら、口のまわりが……」

「ラムとマトンって何が違うんだ？」

「美味けりやなんでもいいじゃん」

みんなでお腹いっぱいにおいしいものを食べれば気分も復活。

車に乗って家路につく。

疲れと満腹感で運転するタケル以外は早々に夢の中である。

ムルルはパツと見分かり辛いのが、ご丁寧に鼻提灯を出している。

フィーネはタケルの頭の定位置でうつ伏せ。

よだれで髪の毛がベタベタにならないか不安になるタケルである。

「ま、そんなに急ぐ必要も無いしな」とのんびりとしたペースで車を走らせる。

中野に到着。

寝ぼけ眼のアキラに不安を感じ、アキラにオカンを呼び出させてから降ろす。

「しやつきりせな！」と背中をオカンに引っ叩かれて目が覚めた様だ。

次いでエリリ。

タケルのマンションの駐車場を下すと不安なので、アパートの側まで送り届ける。

大して距離は無いとはいえ、エリリは目をグシグシとして眠そうだし、シエーラはまだ完全に眠っている。

バックで車を出さなくてはいけないギリギリまで車を入れて、鍵の確認をさせてから降ろす。

エリリはなんとか意識を戻して手を振っているが、シエーラは寝たままだ。

「さーて、到着つと。フィーネ、起きろく、それともこのまんま、コンプに戻るか？」

「んあく、着いたの？ お風呂入って牛乳飲んで、アイス食べてから寝るく」

「ほら、ムルルも家だぞ？」

「むにやむにや、もう食べられないよ……」

「無茶苦茶、ベタな寝言だな」

「取り敢えず、抱えていってあげてよく」

「お前も頭から降りる気ないのな……」

部屋に戻ったタケルは、取り敢えずムルルをこたつの側に下ろすとフィーネのお風呂の準備に取り掛かるのであった。

YESOD

「俺ら結構強くなったよな？ 寺にもつぺん行ってみね？」

「あー、そう言えばしばらく行つてなかったな」

「なにになに？ ダフネが居るってお寺？」

経験値もポイントも一回の経験値稼ぎではなかなか上げることが難しくなり、ややマンネリ化していたところで、アキラの提案に乗る形で徐々に中野の寺にやって来た三人。

アンデも誘おうとしたがログインしていなかった。

寺に出る天使とロウ・プレイヤーの相性に関しての検証は先送りとなった。

「けっこう、ネコが居るんだね」

「最初来た時、ネコマタかと思つて身構えた」

「生きた人間より悪魔と死人の方が圧倒的に多い場所だもんな、いきなり出てくると普通のネコだと思えねえよな」

最初から寝転がっているときほど警戒せずに済むが、物影からいきなり現れたり、通

路を横切ったりされると警戒してしまう。

イベントの時に発生した結果は、想定通り綺麗さっぱりと無くなっていた。

フィーネやシェーラは「なんとなく」ダフネの存在を感じている様だが、他の仲魔もタケルたちも全く違和感を感じない。

「悪魔を引きつれ、天使を倒しつつ、墓場を徘徊、完全に俺らの行動つて悪役だなあ……」

「天使つて言つてもホーリーゴーストやウオッチャーじや幽霊みたいじゃない」

『『おわあ、おわあ』つて言わないだけいいよ、まだ』

「あー、あれやったんだ！ あれVR化したら頭おかしくなっちゃう人がでそうだよねえ」

「不眠不休プレイとかしたら自我が崩壊するな、たぶん」

「設定とか分かった上でネタとして面白がつてプレイするなら平気だろうけど、ダラダラプレイとかも危ないかもしれないな」

合間合間に雑談しながらも天使と墮天使を倒していく。

現在よりも低レベルでプレイヤー人数も仲魔も少ない時点で問題無かった場所だ、完全に経験値稼ぎは出来ているものの、さほど稼ぎにはなっていない。

「わあ、アキラつて面食いなんだねえ……」

「見覚えのある顔ね、そちらの子は初めてかしら？ 目覚めつつあるけれど、まだ確定は

していないわね。私が仲魔になるのは難しいけれど……そうねえ、土を入れた植木鉢を持って来なさい、少しだけ力を貸してあげるわ」

「はいっ！ 分かりました！ ありがとうございます！」

「アキラえ……」

張り切ったアキラを先頭にホームセンターに向かい、植木鉢と土を買う。

タケルは「ふつうの植木鉢でいいだろ？」と思っていたのだが、エリリと意外なことにアキラからまでダメだしを食らって、テラコッタ製のちよつと安い物籠っぽいものを「持ちやすそうだから」と選んだ。

アキラはタケルのものの五倍は値段がする白い陶器製のものを、エリリはベランダに似合いそうな四角い木製のものを購入。

自分には似合わないお洒落さ加減になんだか照れ臭くなってしまふタケル。

そんなタケルを余所にフィーネは植木鉢の中に入ってムルルを羨ましがらせている。

ウコなんとかさんは「こんな時にしか呼ばれない」とぼやきつつも土を運ばされている。

「あー、如雨露とかも買えば良かった！」

「あ、そっか……ま、狭いトコだしなんとか……引つ越さないとダメかな？ 今の部屋、

日当たりあんま良くねえんだよなあ」

まだ、どういふ話かも確定していないのに、引越しさえ考えてしまうとアキラのめり込み具合には怖いものがある。

どこかキャバクラにハマるサラリーマンや、アイドルに貢ぐオタを思わせる。

ダフネに頼まれたら大きな庭付きの一戸建てへ引っ越したりしかねない。

「では、この枝を託しましょう。普通の木や草と同じにお日様に当てて、水をあげて、時々声をかけてあげてください」

ダフネが差し出して来たのは若葉の付いた木の枝。

挿し木の様に土に挿して世話をしあげればいいそうだ。

「きつと頑張つて育てればダフネに！」などとアキラの顔は緩んでいる。

「綺麗な花とか咲くのかな？」とエリリも嬉しそうにしている。

ダフネにお礼を言うと再会の約束をして、3人は寺を後にする。

アキラもエリリもウキウキだ。

つられてタケルや仲間たちの気分も浮き上がる。

「この土どうするん？」残った土を担がされているウコンの力さんを除いて……。

部屋に戻ったタケルは下に使っていない焼き魚用の皿を置き、植木鉢を窓際に乗せる

とコップに水を汲んで注ぐ。

「なんの木になるか分からないけど、元気に育てよ」

「タケルく、私には牛乳ね〜!」

「僕はオレンジジュース!」

「はいはい、オレンジジュースはコンビニに行かないとないぞ? 牛乳の買い足

しも含めてコンビニじゃなくスーパーに行くか?」

「スーパー、スーパー!」

「お肉、お肉!」

「なんで肉をかうって話になってるんだ?」

「スーパーとくれば特売のお肉じゃないの!?!」

「もう少し後で行って惣菜安くなったの買おうよ!」

近所用に買ったサンダルを履いて、仲魔と外に出る。

スーパーで子供が母親にお菓子をねだっているのを見て、それを真似するムルル。

どう考えてもおまけの方が高いおまけつきのお菓子だ。

フィーネはそんなムルルを「お子ちやまね」って顔をして優越感に浸った笑顔を見せ
ているが、徳用のこんにやくゼリーの大き袋をチラチラと見ている。

結局、大きなレジ袋二つの買い物をして部屋に戻る。

おまけのおもちやを大事に壺の中にムルルがしまったり、冷蔵庫に入れたばかりのこんにやくゼリーを「まだ冷えないかな？」と何回もフイーネが扉を開け閉めしてタケルに怒られたり、そろってご飯を食べながらテレビを見たりしてからログアウト。

「タケル、パソコンの方に繋いで！ ネット見ようよ！」

アプリを入れたスマホをパソコンに接続して、ネット巡回をすると、一緒に見ていた様に会話をする様になるアップデートが連動アプリにおいて行われ、多くの賞賛と一部の「エロサイト巡回が」との嘆きを生み出した。

最近はパソコンを起動してもほとんどがメガテン関連の巡回である猛の場合は、別に一緒に見ても問題は無い。

中野ローカルスレ、サマナーズレ、鈍器スレなどを見て周り、まとめサイトなども軽く流す。

「タケル、なんか私たち用の掲示板があるみたいだよ？」

「え？ フイーネたちって、仲魔専用か？」

「そう！ だからパソコン買って！！ タケルがこっちのお仕事行ってる時のお留守番の時に見るの！」

「あー、まあ、そういう理由ならいいかな？」

しやしん、すくしょ？　そういうのもはっていいれす
なにかあつてもじこせきにんれす
ごじ、だつじ、へんなひようきはごあいきよう
たのしくおしやべりしましょう

(中略)

209：アキバのジャックフロスト

ヒーホー、みんな書き込みに慣れてきたみたいだホー！

中でサマナーにスマホやタブレットをおねだりしてみるのもお奨めだホー

アキバに来たらメッセオンラインに来るホー、僕が居るホー

210：神谷町のエンジェル

サマナーの愛が重いです

パソコン欲しいって言ったら最高スペックの超巨大タワーが！

可愛いノートが欲しかったのに……

211：田町のヘアリージャック

Q h i h r p e p h a i m o t e t

を思い出してしまった猛である。

「じゃ、俺は仕事に行ってくるから、ファイネ、ネットを見るのはいいけど、ちゃんと休憩もすること！俺の居ない間、ぶっ通しで見てるんじゃないぞ!!」

「分かってるって！『ゲームは一日一時間』だよね！」

「なんか違う……」

ファイネのお見送りを受けて仕事にアクセスする猛であった。

ログインしたタケルが見たものは自分の横でスヤスヤと眠る半裸の美少女だった。焦りはしないが疑問には思う。

「誰？」と。

対女性スキルがフィーネのお陰で上昇しているとは言え、タケルのリアクションにしては薄いと思うだろうが、所謂ラブコメ的、あるいはエロゲ的な意味での焦りが生じないのは当然なのだ。

なんせ「美少女」は2〜3歳児並みの身長しかないのに少女のプロポーションをしているのだから……。

フィーネより少し大きい程度、人間とは完全にスケールが違う。

騒がしいコンプからフィーネとムルルを出す。

纏わりつくフィーネたちを左手であしらいつつ、右手でコンプを操作する。

「Analyze……妖精 ドリアード」

アナライズすると予想通り悪魔だ。

窓際の植木鉢を見る。

貰って来た時より若葉が増えている。

「たぶん、そうなんだろうな」と思うタケル。

「また、普通じゃないパターンってか？ アキラとエリリにも連絡とってみるか？」

「おはよう！ パパ！」

目を覚ましたドリアードが爆弾を落とす。

「タケル！ どういうことかな!？」

「うわあ、フィーネが怖いよ？」

「ダフネに貰った枝から俺のMAGを栄養に生まれたからってオチだろ、たぶん。

フィーネのハイピクシー化と似たようなもんだ」

フィーネが「ゆらあ」といった感じに瘴気じみたものを漂わせながら詰め寄るも、タケルはなんと冷静なものである。

倉庫作業の在庫データが管理部門のデータ入力ミスで混乱し、残業した疲れで、フィーネとじやれる余裕が無かっただけでも言う。

「ふくん」と言いながらタケルの返答内容よりもやり取りのテンションに不満そうなフィーネ。

「パパ、お水頂戴！」

「どっちにだ？」

「うーんとね、両方！」

元々、フィーネやムルルの世話に関しても周囲から「おかん」呼ばわりされていたタケルである。

「パパ」なら性別が一致してる分問題は少ないといった感じだろうか？

世話を焼くのも実に手馴れたものだ。

「フィーネとムルルはパンとご飯、どっちにするか？」

「うーん、ご飯がいいな、僕は」

「オムライス！」

「外で食べるのか？ あ、じゃあ商店街の喫茶店に行ってみるか？」

「その前にその子に名前付けないと！」

「あー、どんな名前がいいかな」

「僕、僕がつけていい？ キャロってどう？」

「ぶう、私がつけようと思ったのに！」

「いいんじゃないか？ どうだ？ キャロでいいか？」

「キャロ、私、キャロ？ 嬉しくい！ パパありがとう！」

緑の髪にオレンジ色の唇と瞳、その外見からニンジンを連想してのことだと思われる。

ムルルも色々と知識が増えてはいるものの、テレビか身の回りの情報が基本だ。

漫画や映画の知識はほとんど無いし、乗り物も自動車や電車といった大きな区分は理解しても車種だの形式だのは分かっていない。

コンビニで見かけた商品か、テレビのCMが名前の由来だろう。

キャロを仲魔に加えて、揃って商店街へ。

新規プレイヤーか、それとも引越し組か、たまにプレイヤーを見かける。

商店街をぶらついて、手書きのランチメニューがドアにぶら提げられた喫茶店に入る。

カウベルが「カラカラ」と音を立てる。

中に入るとマスターが一人でやっている如何にもな喫茶店。

コーヒーの香りが漂っている。

他に客はおらず貸しきり状態だ。

デザートは食後ということにしてまずは食事と飲み物を頼む。

「せっかく喫茶店なんだから」とタケルはブレンドのコーヒーとホットサンドを。

フィーネは食べたかったオムライスとタケルにどんなものか説明を聞いた上でミルクセーキを。

ムルルは悩んだ挙句にスパゲティミートソースとコーラフロートを。

外食どころか食事すら初めてのキヤロはフレンチトーストと紅茶をそれぞれ頼んだ。マスターがコーヒーを入れていた時とほとんど変わらないゆつたりとした動きながら、その実良く見ていると手際良く調理を行っている。

調理時間が異なるものを、ほぼ同時にテーブルに並べるその手際は職人芸を通り越して名人芸である。

「パパ、これおいしいよー」

キヤロが自分のフレンチトーストをフォークで切り分けてタケルの口元に差し出し
てくる。

一口食べて「ありがとなー」と頭を撫でると嬉しそうに声を上げて笑う。

食事が終わりにかけた頃にエリリから電話がかかってきた。

エリリの所でもドリアードが仲魔になったらしい。

喫茶店の場所を教えて電話を切り、飲み物とデザートをマスターに注文する。

フィーネがチーズケーキ、ムルルがプリンアラモード、キヤロはストロベリーパフェを頼み、タケルはコーヒーをもう一杯頼んだ。

食べ終わった皿が下げられ、追加で頼んだものを待つ間にアキラにもメッセージを送っておく。

「お待たせ♪」

「フイーネちゃんのおいしそうですね♪」

「じゆるり……エリリ、私もこの子の食べてるとおんなじの!!」

シエーラとキャロと同サイズのドリアードを連れたエリリ。

「タケルのトコの子も可愛いね。うちの子も負けてないけど」

「ドリアードのアンだよ! 『アン』の綴りは最後に『e』を付けてね!」

エリリのところのドリアードはタケルのところのキャロに比べるとボーイッシュな感じで髪も短い。

「三つ編みにするとこじゃね?」と思うタケルだが、そもそもが赤毛じゃない。

互いの仲魔が食事を取りつつ交流する横でタケルはエリリと今回の事態について話し合う。

「ダフネから貰った枝からサマナーの生体MAGを取り込んで誕生したつてのは分かるんだけど、枝をもらえる条件とか、月齢が関係してるかとか、属性が影響するかとかは分からないだよな」

「掲示板に下手な書き方するとダフネに迷惑かかっちゃわないかな?」

「寺の墓場だからなあ。ブロードウェイ並みに人が行くようになると流石にまずいだろう」

「かといってこの子たちのことを隠して過ごすのもねえ」

「あ……、あのスレ利用すればいいかも？」

そういうとタケルはコンプを立ち上げ、エリリに該当スレを見せる。



【ガセネタ?】都市伝説総合研究所 ver. 1. 3 【バグ探し?】

1: 錦糸町のペルソナ使い

ここは『女神転生 Ruina』内外で流れる様々な噂について調査・検証を行うスレです。

スクショ・動画は歓迎ですが、リンク先へのアクセスは自己責任で!

煽り、荒らしは華麗にスルーしましょう

愛の無いコメント、貶しはNG

和気藹々、マタリ進行でいきましょう

過去スレ: 都市伝説総合研究所 ver. 0. 1 ~ 1. 2

(中略)

46：新大久保のバスター

>>23

ターボばあさん自体は存在するって

要・検証はその出現地点、行動、速度などが月齢の影響を受けるかって点

47：本駒込の異能者

俺としては次の全体イベント、五色不動が絡むんじゃないかと予想

48：三軒茶屋のペルソナ使い

>>47

目黄（金）不動の特定に難あり

49：中目黒のサマナー

もう三色不動でいんじゃない？

50：府中の異能者

五色不動って魔人学園だっけ？

51：御徒町のバスター

偽典でも出てた筈

52：恵比寿のサマナー

から』って可能性はあるよね」

「むきー、最近ムルル生意気〜！」

「パパのMAGは独特だからねえ〜♪」

「あー、それはあるよね、キャロは分かっているじゃない！ タケルのMAGってね、木っ
ていうか森っというか、そんな感じなの！」

「エリリちゃんだっけって凄いですよ〜！」

途中から仲魔のサマナー自慢が変わってしまったているが……。

アキラからの電話を機に喫茶店を後にする。

「あ、あ、払いますよ、自分の分」

まとめて払おうとするタケルにエリリが慌てるが「中でも外でも社会人だからさ、こ
こは格好つけさせて」とそのままタケルが支払う。

「ごちそうさまでした」

「ごちそうさまですう！」

「ありがとね！」

食後の軽い散歩といった感じで、そのままのんびりと時々お店を冷やかしたりしながら
らブロードウェイへ。

やはりアキラも同じ様にドリアドが仲魔になったようだ。

一番、ダフネに執着し、枝を貰った時にも喜んでいたアキラである。

これでアキラだけドリアードが誕生していなかったり、別の悪魔、例えばマンドレイクとかになつていたりしたら目も当てられない。

ただし、世話係をオカンに取り上げられたのか、オカンが外に出てドリアードを抱っこしている。

「アキラの光源氏計画は多難そうだなあ」とアキラのうんざり顔を見ながら苦笑するタケルであった。

NETZACH



【初心者さん歓迎】喫茶居酒屋 京浜第3 その12 【仲魔も大歓迎】

1：高幡不動のバスター

ここは『女神転生Ruina』DDSの雑談スレです。

スクシヨは歓迎ですが、外部へのリンクは控え目に！

煽り、荒らしは華麗にスルーしましょう。

過去スレ：喫茶居酒屋 京浜第3 その1〜11

(中略)

451：秋葉原のジャックフロスト

サマナーはもつとランタンやリツパーを大事にするホー！

妬みと愚痴は聞き飽きたホー！

452：吉祥寺のピクシー

私はイベントNPCじゃないの！

これもサマナーの影が薄すぎるからいけないの！

「ニンジャだから仕方がない」とか間違ってるの！

453：国立のペルソナ使い

仲魔も大変だねえ

つ【ジャック・ター】【純米からじし】【越ノ氷輪山】【本醸造百六十二代】【純米秘蔵
まさむね】

454：府中のオニ

いただきます【純米秘蔵まさむね】

455：葛飾のサマナー

うちのリリムの金使いが荒い点について！

日本円稼げるイベント、誰か教えろください！



「……だよ！ と……タケルく、これで書き込めてるんだよね!？」

「それで、リターンキー押せばオッケー！ ……にしても足踏み入力とか画期的だな

(笑)、仮想キーボードってハードなのか、それともソフトなのか？ ソフトでいじれるならフィーネたちのサイズに合わせたものを作れるか……もう、作ってる奴居るよな、たぶん。オークションで探してみるか？ いや、アキバに行ってみるか？」

『女神転生Ruin』のDDSNネットに掲示板とチャットルームが導入された。

セキュリティの関係もあり外部のインターネットへの接続は出来ないが、内部での情報交換、交流がいつそう高まることが期待されている。

また、この掲示板和チャットルームにおいて、特筆すべき点は仲魔やガーディアンも書き込むことが可能になっている点だろう。

フィーネもさっそくタケルのコンプから掲示板に書き込んでいる。

ムルルもうずうずしてるし、キャラは良く分かって無いみたいだが、それでも他の仲魔がやっているのでも自分もやりたそうにしている。

「仲魔用に劣化コンプでいいから買わないとダメかもな？ そういや、拠点用のコンプとかもあるんだっけ？ 悪魔合体とか出来て仲魔のストック数も多いやつ」

「なになに、私用のコンプ？ 可愛くて高機能のヤツがいい〜！」

「僕はカツコいいの〜！」

「私も〜♪」

この調子で仲魔それぞれに買っていたら流石にSEがそれなりに稼げるとはいえ破

産してしまおう。

「なんか、コンプとかドロップする悪魔とかいないのかな？」

「こんにちわ、遊びに来たよ♪」

「わあ♪ エリリだー！」

ご近所さんになったエリリはたまにタケルの部屋に遊びに来る。

とはいってもエリリの感覚的にはフィーネのところ遊びに来るといふ感じだ。

毎回、ちよつとした手土産持参なのでフィーネたちからすると「エリリが来る」||「おいしいものが食べられる」とパブロフの犬状態だ。

アキラも遊びに来ることはあるが、手ぶらなのでエリリほど仲魔たちからの歓迎は受けない。

現金なものである。

「なになに、新しいコンプ買うの？」

「フィーネたちがDDSネットやるようになってき、劣化でいいからあつた方がいいかな、って……」

「あー、ウチは流石に時間制限付けた、一日一時間じゃないけど(笑)」

「その辺の下見も兼ねてアキバにまた行ってみようかなって」

「今のデフォルトのでもいいけど、オリジナルの可愛いコンプがあれば欲しいかな？」

「あの辺の異界とかも行ってないしな」

「エリリ、エリリ、これ食べていい!?!」

「あ、どうぞ、おいしいよ、それ！」

「わーい、ありがとう♪」

「ありがとう！」

「エリリちゃんありがとうー」

エリリの持つて来た箱の中には色々なケーキが入っている。

「商店街の小さなケーキ屋さんだけだね、こつちに引越してきて良かったらっと思って食べるくらいおいしいの！」

さすが女の子、甘い物にはこだわりがあるらしい。

はしやぐエリリと自分の仲魔たちを見ながら「なんか匂いと見てるだけでも口の中が甘くなっちゃったな」と砂糖を入れない紅茶を飲むタケルであった。

そして三人の都合が整った水曜日、タケル達は秋葉原の町にやって来た。

相変わらずの賑わい……どころか新規プレイヤーが増えたこともあって更に賑わっている。

また、転居組も多く、プレイヤーの入居可能な残り部屋数がどんどん減っているらしい。

「コンプとかドロップする悪魔とか、ここだと出そうだけどな」

「トンファア型とか実はそうなんじゃね？」

「ソウルハツカーズに出て来た傘型のコンプとかいいなあ……」

「ガンブ、傘型、メリケンサックは争奪戦が起きるな」

「PvP無いけどね……ガチャの景品とかに原典系アイテムがレアで入ったら破産しても回すヤツ出るよなあ」

「絶対出る！ しかも、アト〇スならやりかねない！」

「あー、でもアプリが絶好調らしいから、そこまで鬼畜にはならないんじゃないかな？」
「DDSの掲示板とかチャットが導入されたのも、アプリで稼いだ金でサーバ増やしたからって話もあるしな」

「そこまで儲かってるんだ！」

「いや、タケルだって相当課金してんだろ？」

「フイーネたちが喜ぶし、戦闘もラクになるからなあ……」

「社会人は違うねえ、私なんかミニゲームの鬼と化してるよ……」

「プリクラの時みたいに変な欲出して会社火の車にならなきゃいいけど……」

「プリンセスクラウンはいいゲームだったけどな」

「食べてるトコがおいしそうだったよね！ あれのVR版とかもやってみたいなあ」

ヨド〇シの中を一通り見て「普通」の範囲を確認してから路地を巡る。

シルキー喫茶は癒しになることが分かっているので最後の方に行く予定だ。

前回、色々と精神的に疲れた経験を活かしてのプランだが、果たしてどうなるかは分からない。

「宣伝してくれたんだってね、ありがとう」

前回本を買ったシヨップでは店員が歓迎をしてくれた。

トンファー騒動のせいか、脳筋系の客が増えたそうだ。

自分もコンプを使う様になって、ジャンクを漁るアキラの目は真剣になっている。

「これ、なんだ？」

「あー、それは自作用の増設MAGバッテリーだね。性能と圧縮率はほとんど新製品が出る度に上がってるけど、それでも足りないって人が居るからねえ」

「仮想キーボードのサイズ変更ってソフトでどうにかなるんですか？」

「インターフェイス系は結構難しいよ？ アプリを買った方が早いし安全、この辺どう？ 多言語配列対応でピクシーから巨神サイズまで可能だよ？」

「それください！」

「あ、私も！」

「俺も買つといた方がいいんかな？」

「毎度アリ〜♪」

取り敢えずは目的の一つは果たしたタケルたちだが、コンプの方は「これは！」といったものがなかなか見つからない。

「なんか、メシアとガイアが増えて無い？」

「シスターさんがアキバでチラシ配ってって、マハ〇ーシャかよ!!」

「メシアンも大変だねえ……」

「「ラーメン！」」

「ラーメン屋の宣伝？」

「海賊の恰好で？」

「あれってFSMじゃね？」

「なにそれ？」

「空飛ぶスパゲッティ・モンスター教」

「ガイアーズがネタに走つたな？」

「ラーメン屋もやつてるみたいだよ？」

「ラーメン屋の宣伝でもあるんだ……、本家怒るんじゃない？」

「いや、本家自体がパロディ宗教だからなあ……」

活発になったメシアとガイアだが、アキバでは変な方向に頑張っている。

「「「「いいいあ、すとらま!!」」」」

「「こつちは邪神ストラマかよ……」」

「え? クトウルフ系?」

「いや、非実在戦闘機……」

「元ネタの会社つとづくに潰れてんだろ?」

「どこまで本気だったのか、詐欺なのか、パロディなのかすら良く分からないな、今となっては……」

「まあ、下手な神様とか仏様対象にすると実物が来ちゃう危険性あるからなあ、メガテンの場合」

「『呼んだく?』とかがあり得るからなあ……」

「特にこの中は将門公がヒーローショーやるくらい腰が軽いからねえ」

「『明王戦隊 ゴシキンジャー』とかもあり得るよな」

「「「「それだ!!」」」」

「え? 今の誰?」

「ってか、こんだけカオスだと既にガイア寄りじゃね、アキバって」

「塩の柱にされんよな？　まさか？」

「ソドムとゴモラじゃなくアキバとシンジユク？」

「新宿はちよつと一人じゃ怖いよね」

「安全なトコがほとんどだけど、境界線が他の町に比べて分かり辛いな」

路地から大通りに戻り、雑談を続けながらメッ○の前を通り過ぎる。

「この四階も異界化してんだろ？」

「現実でもそんな感じじゃね？」

「アニ○イトとかもそうだね」

「池袋とかユ○さまが『ここもじき腐海に沈む』とか言ってる」

「いや、もう沈んでるだろ？」

「悪魔でもそっち系の趣味のとか居るんかね？」

「居そうだよなあ、なんか仲魔の♂悪魔とサマナーとかでカップリングしたり、掲示板で論争してたりしそうだ」

「まあ、ギリシャ神話とか普通に同性愛あるし、そっち系の悪魔も居るしなあ……」

「女サマナーと♀仲魔なら盛り上がったたりしそう……」

「その辺、エリリはどう？」

「ノーコメントで……」

大通りを歩きアキバラらしい店が減って来たあたりに、唐突とっていい感じに一軒の古い店が姿を見せる。

目立たない看板、薄暗い店内。

しかしながらタケル達の目にはつきりと映るメガテンショップのアイコン。

「骨董店、こんなトコに？」

「武器、防具のメガテンショップかな？」

「値段高そうだよね？」

薄暗く古臭いものが多いが、埃などは被っておらず、店主が毎日丁寧に扱っているようだ。

人形、時計、小物入れ、鏡、彫像……どれもいわくあり気で「実は悪魔が……」と言われても信じてしまいそうだ。

店に入ったタケル達に店主はチラッと視線を向けるが、すぐに新聞に視線を戻す。「読捨新聞」、「毎朝新聞」などと並んで漫画などの創作ではお馴染みの新聞だ。

相変わらず変なトコに力の入っている『女神転生 Ruina』である。

「うわあ、これ、コンプだ！」

「へえ、扇子か、センスがいいな！」

「アキラ……」

「すみません、これっておいくらですか？」

「スルーかよ！」

扇子型のコンプを見つけ目を輝かせたエリリだが、値段を聞いて肩をガツクリと落とす。

「た、足りない……今から異界行っても足りない……」

タケルとアキラは目で会話をし、店主に声をかける。

「じゃ、これください」

「足りない分は俺らが出すわ、なーに、一緒に異界行く仲間の戦力強化だからアリだろ？」

「で、でも……」

「この手のもんは『後で』とかやると、まず間違いなく二度と手に入らないもんだからなあ、俺も何回泣いたことか……」

やり取りに特に関心を示すこともない店主に魔貨を支払い、店を後にする。

弾む足取りのエリリを見つつ、タケルとアキラは笑顔で視線を交わし、シルキー喫茶への道を歩くのだった。

T I P H E R E T H

「これを狙ってたわけか……」

「噂悪魔の出現ね」

「掲示板の巡回必須ってか？」

掲示板、そしてチャットルームの導入に続いて、『女神転生R u i n a』のシステム面でのバージョンアップが行われ、チーム制と噂悪魔システムが導入された。

チーム制はR P Gなどのパーティなのだが、表の職業として偽装の会社や学校内のサークルなどを作成することも出来る。

日本円の確保に四苦八苦している廃人組にとっては運用の仕方によっては救済措置ともなる仕組みだ。

チャットルームはこのチーム制を前提として作成されており、チームメンバー専用のチャットルームの場合、面倒な認証などを行わずに自動的に認証出来る機能も備わっている。

噂悪魔は掲示板の「噂」を元にした悪魔が出現する様になるというシステムで、全体

に大きな影響を与える様な上位の悪魔に関しては必要とされる注目度がルナティックレベルなので、プレイヤー間で根回しをしたとしてもまず出現しないが、近隣に出現しない傾向の悪魔が近いエリアに出現する様になったり、称号付きの悪魔の出現頻度が変わったという形での利用は可能である。

ダフネの枝入手に関する情報拡散でタケルたちが利用したスレッドなどは、このシステム運用のために運営サイドも介入していたらしい。

プレイヤー側が意識的に望む結果をもたらす為の最大のネックは「仲魔も書き込みが可能である」という点にある。

仲魔も悪魔同士の噂や自分の考えを書き込むため「悪魔からするとこれは有り得ない」といった形でプレイヤーの書き込みがあつさりと否定されてしまうことも多いのだ。

運営も予想外の展開としては「あの辺いいよね」という水辺関連の悪魔の噂が元になって、皇居のお堀周りに実に様々な悪魔が出現する様になってしまった、などというものがある。

「ダフネの件は成功確率がだいたい10分の1くらいらしいな」

プレイヤーによって立てられた検証スレを見ていたタケルにアキラが話しかける。

アキラも検証スレをチェックしているようだ。

「混雑を心配してたけどイベントの時みたいな結界で一定人数以上は寺に入れなくなってるんだって」

「ダフネさんマジ有能」

「妖精か地霊を連れてる一定レベル以上のサマナー技能持ちって感じらしいな、杖をもらえてるの」

「アキラってその条件に当てはまって無いよな?」

「俺、もしかして特別扱い? うちのドリアードって育ててけばダフネになるってことかな?」

今日のタケルたちは浅草への遠征ということでタケルの車に乗って移動している。ピクシーやドリアードたちはルーフ下の就寝ルームで遊んでいるため、人間同士の会話がメインになっている。

最近では仲魔の持ち込んだ様々な物が転がっていて、人間の就寝ルームとしては使用不可能に近い。

「なんで『七福神』なのに九箇所あるんだ?」

「寿老人と福祿寿が二箇所あるんだってさ」

「一番マイナーなトコが複数って……『本家』と『元祖』で争ってるのか?」

「うーん、どうなんだろ?」

「ま、ともかく浅草寺からスタートして一通り巡ってから浅草寺に戻っておみくじを引くと引いたおみくじによって色々と言えるところという話だよな」

「隅田川沿いの散策とかもしながら観光気分がいいんじゃないかな？」

「リアルスケールだと歩くのかなりキツイけど、ここなら歩けるからまずは浅草寺に近めの駐車場探したな」

「異界はどの辺？」

「大きめが隅田公園で花やしきとか寺や神社周りにも小さめの異界だつて」

浅草近辺にリアルで行ったことは無いタケルだが、時代小説などではお馴染みの地名が多く、見知らぬ土地だと言う感じはしない。

駐車場に車を停めて雷門見物。

フィーネたちは大提灯の内側に入り込んで人間には出来ない見物をしている。

せっかくなんでサイズの小ささを優先して購入したデジカメを渡して、提灯の内側から上を見上げている自分たちの写真を撮ってもらう。

ムルルにあげた花瓶をフィーネが羨ましがっていたので買ったデジカメだが、その後、色々と他にしてあげていたのであげる機会を逸していたものだ。

「本日はフィーネをカメラマンに任命する！」

「了解！（ビシッ！）」

「けっこう楽しそうに写真を撮っていたのでそのままカメラを渡して「好きなものを撮っていいよ」と言っておく。」

七福神めぐりのスタートでありゴールである浅草寺。

ここは大黒天である。

「つまりはマハーカーラ、強キャラだな」

「マハーカーラ+オオクニヌシの合体って話だけど、この中で合体したら何になるんだ？」

「日本人って昔からそういうことしてるんだなあ……」

外人観光客の姿も多いが、東京都内から出られないこの世界で見かけるとなんか違和感がある。

まだ、たまに見かける造魔プレイヤーの方が違和感が無いくらいだ。

「続いて浅草神社、えべっさんだね」

「蛭子神の別形態って話もあるけど、こっちはなんか景気いいよな」

「でもって待乳山聖天」

「ガネーシャだっけ？」

「七福神的には毘沙門天」

「毘沙門天って言うと上杉謙信が浮かぶなあ」

「で、その先が今戸神社で福祿寿1号」

「1号言うなし……この辺までは割と近いよな」

ある程度近場にある4箇所を続けて回る。

次いで隅田川沿いを北上し橋場不動院（布袋）、石浜神社（寿老人1号）、そこから西南へ折り返して吉原へ。

「吉原とかもなんかイベントとか発生しそうだよなあ」

「吉原神社が弁天さまね」

「うる☆の弁天のイメージで上書きされちゃってるんだ、俺の場合」

「俺の場合は弁天様って言うのと江ノ島って感じ」

「で、次の……ワシ神社？」

「驚と書いてオオトリだって、西の市の『お西様』って行った方が通りがいいかもね？」

「あ、そっちはなんかニュースで見た記憶がある」

「ここが寿老人2号か……」

「でもって矢先稲荷でラスト！」

「福祿寿2号ね……まあ、全国に沢山あるんだから狭いトコでダブることもあるよな」

スケールが小さくなつてはいるものの歩き通しで疲れは出ている。

「もう少し近接してれば楽なのに、特に橋場不動院と石浜神社！」と思うのも無理は無

い。

この二箇所が飛び出した形になっているのだ、地図で見ると。

「タケル、タケル〜！ これの後、あそこの遊園地行こう！」

「民家に突っ込みそうなジェットコースターは乗ってみたいかも？」

「じゃ、浅草寺でおみくじ引いたら行くか！」

「賛成〜♪」

「わーい♪」

「遊園地ですう♪」

みんなでわいわいと話しながら浅草寺に。

メインの目的のはずが花やしきの話で盛り上がってしまった、なんとなく気持ち的に盛り上がらなくなっているタケル。

それでも七福神めぐりをしてきた証拠の朱印入りの福絵を見せておみくじを引く。

現実のおみくじだと大吉が出る確率が一番高いが、ここは大吉は超レア、大凶だと傷薬一個である。

「浅草神社は可愛いキツネみくじがあるんだよねえ……吉だからこれは『当たり』だよ
ね、親戚のお婆ちゃんに聞くまで中吉の方が吉よりいいと思ってたよ」

「え？ 中吉って大吉の次じゃないの？ 俺、中吉で喜んだのに……」

「なんでこうなる……意図的に入れない限り現実と違ってこんなおみくじ発生する訳ないよな？」

タケルの引いたおみくじは「末末末吉吉吉」というもの。

現実だと印刷のエラーで発生することがごく稀にあるパターンだが、VR内では誰かが作らない限りは有り得ない。

「へえ、吉は『こんなショボい本なの？』って思ったけど、好きなものを選ぶ結婚式のお返しパターンな訳ね……スクーターや自転車まである！」

「中吉は武器、防具、アイテムの大枠だけ選べるみてえだな、武器で刀欲しいトコだけど、銃が出ちやうともつたいないしなあ……防具にしとくか」

「なんだ、このどう見ても堅気の間人がしそうも無いネクタイは！ 提灯中心に七福神って！ 浅草っぽいけどさ！ 外人さん喜びそうだけどさ！」

エリリはさんざん悩んだがスクーターはスキルが必要なので諦めて電動アシスト自転車、アキラは革ジャンを手に入れたが、共にタケルのアイテムを見て苦笑している。

金糸や銀糸をふんだんに使った色使いといい、その絵柄といい、社会人が会社に着けていったら上司から叱責を受けそうなネクタイなのだ。

「いやげもの」として十分に通用する逸品だ。

「タケルの変な運は相変わらずだなあ……」

「どっちかって言うとりアルラック方の影響みたいだね……」

ムルルは「カッコイイ！」と目をキラキラさせているし、仲魔たちには割と好評である。

また、無効、反射、耐性と色々付いていて性能は高い。

見た目が「アレ」で高機能というのはタケルの定番になりつつある。

ともあれ無事(?)にメインの目的を果たした一行。

次は遊園地である。

ピクシーやドリアドでも楽しめる様な乗り物も花やしきの場合は存在している。

身長制限がある乗り物が四つしかない。

「なんか当時ですら既にレトロ口だったものだろ? 今なら博物館じゃね」

「いや、未だに修理と改修しつつ現役だとか……」

「VR時代になって遊園地は大変だよねえ」

「エリリちゃん、次はあれに乗りたいですう!」

「タケル、タケル! あれ買って!」

「パパ、あれに乗りたいたい!」

てんでバラバラの所に行きたがる仲魔たちにタケルもてんやわんやである。

なんとか「あれに乗ると全体見て回れるから最初はあれにしよう」と言っつて船の形を

したモノレールといった感じの乗り物に誘導。

アキラのところはオカンがすっかりしているし、エリリのところは友達グループと
いった感じでどちらもタケルほどは苦勞していない。

仲魔全員を抱きかかえる様な形でジェットコースターに乗ったり、「これくらい大した
こと無いわよ！」と回転する乗り物に乗ったフィーネが目を回したり、パンダカーに
ムルルが大はしやぎをしたり、キャロが最初の頃のフィーネを思い出させる様な感じで
クレープを食べて顔をクリームまみれにしたりと楽しい時間を過ごしている内に空が
赤くなってくる。

「じゃ、そろそろ帰ろうか？」

「「はーん」」

仲魔たちの同意を得たところでアキラとエリリにも連絡をいれ、駐車場で合流するこ
とにする。

「また来ようね♪」

頭に寝そべって言うフィーネに頷くタケル。

前転する形で頭からズリ落ち、プンスカするフィーネをなだめつつ車に乗り込むタケ
ルであった。

GEBURAH

「うわ、本当に走ってるんだな、幽霊列車」

「真っ黒だね」

「午前4時44分に原宿駅から乗れるって噂は山手線バージョン？」

「お召し列車のホーム？」

最近では昼夜逆転したサンプラザでの経験値稼ぎ。

遠征だと昼間でも強い悪魔が出る場所はあるが、タケルたちのホームである中野の場合、昼間は完全に初心者向けでそれなりにレベルアップしたタケルたちにとってはドロップアイテム稼ぎくらいの意味しか昼間の悪魔には無くなっているのだ。

今日も夕食後の待ち合わせで現在、2時過ぎといったところ。

ゲームの性質上、深夜だろうが真昼間だろうが（プレイヤーからはともかく）他者から何か言われたりすることは無いが、現実に近い街並みの『女神転生Ruin』の場合、ふと我に返って「うわあ、こんな深夜に徘徊とか学生時代にもしたことないぞ？」などと思ったりもするタケルである。

サンプラザ近くでアキラと別れて、エリリと仲魔たちとお喋りしながらの帰宅の道筋から、チラッと見た線路上を真っ黒な電車が通り過ぎて行く。

車体だけでなく窓まで黒いのに、今の様にチラ見でも何故かそこが窓だと分かる不思議仕様である。

普段見かける黄色い総武線やオレンジの中央線とは全く異なる。

中央線バージョンだと終電だと新宿で慌てて乗った酔客が気付けば周囲が悪魔だらけに、という形になるらしい。

乗ってしまうまでは普通の電車と変わらないという話なので、あの中には誰かが乗っているのかもしれない。

この幽霊列車、噂悪魔というか、噂イベントで、掲示板での噂が先行し、実態が後から発生したものだ。

列車内限定の称号付き悪魔も出るという話で、検証スレも虚実入り乱れて盛り上がりつつある。

「幽霊列車専用称号って『鉄道マニアな』『影の薄い』『没個性な』の3つが確認済みなんだよな」

「身近な称号持ちってフィーネちゃんしかいないけど、称号付いてるとやっぱ違うの?」「称号付く前からこんな感じだからなあ……フィーネはなんか実感ある?」

「元々がハイパーな私だから、やつと称号が追い付いたって感じだね！」

「検証スレだと性格や一緒にした行動、経験なんかで後天的に付く称号もあるって話。フィーネも一歩間違えたら『食いしん坊な』って称号になつてたかもな？」

「え〜ん、エリリ〜タケルがいじめるよ〜！」

「よしよし（なでなで）」

フィーネの頭を撫でながらも「ちよつとぶくぶくなフィーネとかも可愛いかも？」などと思っているエリリ。

焼き餅を焼いたのか、シエーラはエリリの頬に貼りついて顔全体で頬ずりをしている。

ふよふよと浮いているムルルは、ちよつと先に進んでは様子を見て立ち止まったり、急いで戻ってきたりと親とお出かけた幼児と同じ様な行動を取っている。

どこか犬っぽかった以前のムルルを思い起こさせるところもある。

エリリを自宅そばまで送っていったタケルは、フィーネたちのおねだりに負けてコンビニへと向かう。

マンションから一番近いコンビニではなく、最近、ムルルがハマっているおもちゃ付きのお菓子のラインナップが充実した商店街の中のコンビニだ。

雑誌の立ち読みをしている後続組のプレイヤーの姿に「中でも外と同じ様な行動取っ

ちやうもんだよな」などと思う。

コンビニからマンションに戻り、フィーネたちとお喋りしたり、キャロにミネラルウォーターをあげたり、ムルル自慢のおもちやコレクションを見て感想を言ったりしてからログアウト。

スマホはキャロの番だが、キャロの場合、色々と見ているだけでも楽しいらしく、フィーネやムルルほど話しかけては来ない。

欲しがるものもあまり無いので、たまに何かねだられると猛が張り切ってしまうくらいだ。

そのままスマホをポケットに入れて、現実の方のコンビニに買い物に行くとついミネラルウォーターを買ってしまう。

フィーネの時はデザート、ムルルの時はおもちや付きのお菓子と、つついアプリの方に来ている仲魔の物をVR内と同じ調子で買ってしまふ猛である。

「好みが極端な仲魔がいなくて良かった」と思う。

おもちやが貯まってしまうのはちよつと問題だが、他の物は自分でも普通に消費出来るものだ。

ひと眠りしてから仕事へ。

スマホを日当たりのいい窓際に置く。

キャロが中に居る場合、日の当たる場所を好むからだ。

お昼寝をしたり、窓の外の景色を眺めたりして、猛が仕事から戻ると「今日は電線のトコでカラスがお喋りしてたんだよ！」とか「今日は雨で残念だったけど、雨音聞いている内に眠くなっちゃってそのままお昼寝しちゃった」とか報告してくる。

すつかり気分は子供の一日の報告を聞くパパさんである。

良くそんなに話すことがあるなど感心するほど、キャロの報告はけっこう長く、猛が夕食を取っている間ずっと話し続けている。

歯を磨いて、シャワーを浴びてログイン。

飛びついて来るフイーネと、おもちゃ片手に「おかえり〜」と言ってくるムルルに挨拶をし、キャロの植木鉢にミネラルウォーターをあげる。

エリリからメツセージで、今日は学校のお友達と中で会うので経験値稼ぎはパスとすること。

アキラは会社の研修で今日はログイン出来ないと昨日の別れ際にげんなりとしていた。

久々と言つていいタケル一人だけの日である。

「商店街のあの喫茶店にでも行こうか？　で、その後、ダフネのトコにキャロの顔を見せに行こうか」

「アキラが焼き餅焼くんじやないの？　喫茶店行きは賛成〜♪」

「僕はタケルの飲んでるコーヒー飲んでみたいけど、苦い、んだよね？」

「砂糖とかミルクとか入れればそれほどじゃないけどな。この間コーラフロートだったからコーヒーフロートにしたらどうかな？」

「パパ、私ケーキ食べたい！」

「飲み物は何にする？　紅茶にしても色々あるみたいだぞ？」

喫茶店経由でダフネの居る寺に行き、墓地で経験値稼ぎをしてダフネに無事に成長しているキャロの顔見せをしようとのタケルの提案に口々に賛意を示す仲間たち。

尤も喫茶店行きを喜んでいただけとも言える。

部屋を出ると目の前にぼーっと立っている長い髪で顔を隠した女性。

「うわあー！」

「きゃつ！　……隣に越してきたサダロと言います。今、ノックしようとしてて驚いちゃつてすみません」

「こちらこそ、変な声出しちゃつてすみませんでした」

「まだ始めたばかりで色々分からないことが多いのでよろしくお願いします」

「こちらこそ……まだ、固定で一緒に経験値稼ぎをする人間が居ないなら、中野の場合、ブロードウェイに人が集まるんで、そこで探すか、内部の掲示板とかを利用するといいですよ」

「はい、後程行ってみるつもりです」

「そうですか、あ、自己紹介まだでしたね。タケルと言います。サマナーやってて、こっちが仲魔のフィーネとムルルとキャロです」

「フィーネだよー」

「ムルルだよー」

「キャロだよー」

髪で表情が良く分からないがサダロは微笑んでいるらしい。

サダロが部屋に戻るのを見送り、階段を下って外に出る。

フィーネがタケルの頭をポコポコと叩く。

「ぶう、綺麗な人だからってデレデレして！」

「え？ いや、まるで貞〇みたいでビビってただけだぞ？ あの髪で顔なんか分からない

いだろ!？」

「綺麗なお姉さんだったね」

「いや、ムルルも顔が分かったの？ でも別に美人だからとかあんまり関係ないだろ、こ

の中じゃ？ 悪魔でも美人はいっぱい居るし、それでも敵で出てくれれば倒すし……」

「この間のボディコニアンだっけ？ あの悪魔よりさっきのお姉さんの方が美人だったよ、パパ」

「外見にビビってたの俺だけ？ 正直、悪魔見た時よりビビってたんだけど？」

ドアを開けた瞬間のインパクトでまともな会話を行いつつも内心ビビりまくりだったタケルは、仲魔たちの言葉にガツクリくる。

そんなに軟派に見られているんだろうか、と。

「それにしても自分以外であそこに住んでる人間初めて見たな」

「エリリのトコは新しい人が一杯だつて！」

「ああ、あそこは女の子の人気の入りそうだな。エリリが一目ぼれしたくらいだし」
「掲示板にも新人さんの挨拶の書き込みがいっぱいあったよ！」

喫茶店でコンビニとは一味違うデザートを楽しみつつ会話。

中から見る商店街の通りにもたまにプレイヤーが通り過ぎ、自分が始めたところに比べると人が増えたと感慨深いタケルである。

まったりと過ごした後、ダフネの寺へ行くとプレイヤーの列が出来ている。

「これ、俺も並ばないとダメなのかな？」

「ダフネの結界だから平気じゃない？ 既にキャロが居るんだし」

プレイヤーを横目に寺の入り口に進むとあっさりと中に入れる。

プレイヤーから文句が出るかと思ったが、キャラが降る手にデレデレとしているプレイヤーたちからは苦情の声は出なかった。

内心、大きいため息をつくタケルであった。

CHESSED

『料理居酒屋・爾簾勒』

築地に出来た行列の出来る人気店である。

料理人は店名にも名を出している墮天使ニスロク。

旬の魚をメインとした和風の料理が多いが、和洋中にエスニック、悪魔ならではの食材、調味料などを使ったものなど実に幅広い。

プレイヤーだけでなくNPCの常連も多く、立场上「マズいんじゃない、アンタが来ちゃ？」という様なメシアンの大物すら訪れると言われている。

タケルたちは当然の様にこの行列に並んでいる。

本来は「勝鬨橋が開く時」というイベントへの参加が主目的なのだが、魚市場の見学やら食べ歩きやらの方に注目が集まっていることもあり、中でもメガテンならではの店はイベント参加者で通常より更に賑わっている。

大規模な全体イベントの第二回はいまだに行われていないが、東京各地でご当地イベントが行われる様になり、タケルの車もフル稼働で「ガソリン代がかからない仕様で良

かった」とタケルはかなりほっとしている。

タケルの車の就寝スペースは仲魔たちが思い思いに持ち込んだ物だけでなく、それを更に加工したりしてもはや人間の立ち入るスペースが存在していない。

携帯DVDプレイヤーやゲーム機まで置かれて、クツションや棚もそれぞれのテリトリーが決まっているなど、くつろぎの空間となっているのだ。

「さすが地獄の料理番、なんか最近、中で舌が肥えたせいで現実のコンビニ飯が味気なくてなあ……」

「これ海ブドウだよ、プチプチしておいしい♪」

「海草麺とかも使ってるんだな、この食感好きなんだよな、俺」

「おさしみおいしーい!」

仲魔連れの客も多く、フィーネの食べている刺身はフィーネたちでも食べ易い大きさに切り分けられている。

サイズの違いはあっても変に千切れたりせず、刺身として美しく盛りられているのは凄いとしか言い様が無い。

料理人がニスロクと言うのは聞いていたが、高位分霊に低位分霊と総ての料理人がニスロクだとは思っていなかったタケルは、調理場にスラツと並んだ同じ顔に少し引き

つったりもした。

お腹も舌も満足して店を出る。

「来てる客も凄いなあ……奥に居たガタイのいいおっさん、自衛隊の幕僚長だぜ？」

「メシアの大主教も来てるって話だし、クズノハもファントムも中では一時休戦だつてさ」

「ある意味日本らしい話だよ、おいしいもの食べる場所に余計な物を持ち込むのは厳禁って」

「悪魔もそうだよ！　おいしいものに口ウもニュートラルもカオスも無いよね！」

「デザートもおいしかった♪　でも途中で出てきたウニ？　あれもちよつとデザートっぽかった。タケルがお醤油とワサビ付けちゃうから驚いたけど、そういう食べ方もおいしかったね」

勝鬨橋に近付くと橋が半開き状態になっている。

川の上流に取り残されたネツシーの子供を橋を上げることで海へと逃がすというイベントだが、子供を狙う悪魔やメシア、ガイアなどの妨害もあるというもの。

悪魔（メシアン、ガイアーズを含む）の排除カウントで開き具合が変化するというあ

る程度長いスパンのイベントな為、ログイン中ずっと橋の周りで戦っている現地組、遠征組の他にタケルたちの様なスポット参戦組も存在する。

騒動に巻き込まれてワタワタしている水棲悪魔も発生し、そうした悪魔を仲魔にするチャンスでもあるらしい。

ケルピー、アズミ、スイコなど、仲魔にしたばかりの悪魔を使役しているサマナーの姿も多い。

アキラのところのオカンも「オバちゃんにまかしときー」と張り切っている。

「フィクションでは時々、開いたりすんけど、現実じゃ開いてないんだよな、この橋」

「なんか、現時点で既にネツシーの子供通れる気がするんだけど？」

「まあ、それを言っちゃおしまいつてことで、ある程度周期的に悪魔が湧くらしいから経験値稼ぎで狩りに参加しよっか」

「タケル、次はあの子仲魔にしようよ！」

「あの子ってネツシーかよ？ レベル的には可能かもだけど、流石に普段外に出したり出来ないぞ？」

「じゃ、ドラゴン！」

「ドラゴンって、竜王とか邪竜か？ メガテンの場合、あんまドラゴンっぽいドラゴンっていないんだよな」

「東洋系の竜の方が多いよね、形状として蛇っぽいやつ」

「乗り物扱いで墮天使のおまけだったりすることもある」

「なんてお喋りしてる内に……来たな。昼だから悪霊系とかは無いか、ハマ系効き易い相手はいないみたいだな」

「水には電気！ マハジオいくよ〜♪」

「まだ距離あんな、銃撃いつとくか、弾は通常弾でいいだろ」

隅田川から這い上がってくる悪魔も居るが主体は水中、という訳で遠隔攻撃がメインとなる。

そうなると一気に弱体化するのがタケルである。

仲魔が頑張っているんだからサマナーとしてはそれでいいじゃないか、というのが普通なのだが「仲魔を守る」という意識の強いタケルの場合、こういう時は少しいたたまれない気持ちに襲われるのだ。

ポールルウエポンの様な、それこそ丸太でも持っていれば川岸からでも悪魔に攻撃出来るのだが、銀の燭台ではリーチ的には警棒などとさして変わらない。

作業的に近寄ってくるスイコを蹴散らしながら不満そうなタケル。

後発組らしいプレイヤーが「え？ バスターじゃないの、あの人？」と目を丸くしているのにも気付いていない。

「メイン丸太来た！ これで勝つる！」

「おお、兄貴が来た！」

周囲から起こった歓声に視線を動かす。

川から顔を出したケルピーの顔面に丸太が叩き付けられる。

首が吹っ飛んだんではと思う様な一撃だ。

掲示板の有名人、丸太装備のレインコート姿の男が「それで悪魔人じゃないって詐欺でしょ？」と言いたくなる活躍を見せている。

振り回し、叩き付け、かと思えばそれで悪魔からの攻撃を防いだりもしている。

「どこの電柱盗んできた」と聞きたくなるサイズの丸太を、棒術の棒の様に振り回し、時には片手で突いたりすらしているのだ。

一度見たら忘れられない光景である。

「実物は凄えな！ フォロワーも出てるんだろ？」

「丸太軍団がゾンビ系出るマップで頭叩き潰して回ってるらしい」

「バンパイアだってあの姿見たら逃げるんじゃない？ 正直、イベント悪魔より怖いよ？」

「カツコイイ！ 僕も丸太使ってみたい！」

ムルルは自前の花瓶を振り回しながら目を輝かせている。

ムルルの様子が苦笑して少し肩の力が抜けたタケル。

川からの悪魔の襲来も少し減ってきた。

「メシアンもガイアーズも見た目じゃプレイヤーと区別つかねえって！」

「殴りかかってきたら敵ってことで！ アナライズしてる暇無いよね、これ！」

「コンプに収納出来ちゃうんだから人間じゃない！ 遠慮せずに経験値にするしかねえだろ！」

川からの悪魔の襲撃と時間差でメシアンとガイアーズが押し寄せてくる。

中にはプレイヤーに関係無く、ガイアーズに攻撃するメシアンや、メシアンを川に放り込むガイアーズなども居て、対悪魔よりカオスな展開となっている。

マーカー表示以外で区別のつかない「人間」相手の戦闘にとまどっているプレイヤーも多い。

「それでも一番目立ってるのは『兄貴』だけだな！」

「なんかあの人一人で十分なんじゃないかな？」

「タケル、タケル！ 丸太って木だよな？ なんで鉄より強そうなの？」

「パパ、あの人の丸太、既にただの木じゃなくなってるよ！ このまま行くと小鳥丸とか大典太とか童子切みたいになるみたい」

「葬らんじゃなく、浄土葬らんだね！」

悪魔からすればプレイヤーでもメシアンでもガイアーズでも関係ないのか、川に叩き込まれたNPCたちが悪魔に水中に引きずり込まれたりもしている。

ガイアーズやメシアンも姿を消すとアナウンスが流れる。

経験値や魔貨、マグネタイトとアイテムがまとめて入ってくる。

時間当たりで言えば普段の経験値稼ぎの10倍以上のペースであるが、倒した数で言えばほぼ順当（多少イベント加算）なものだ。

「ふう〜、お疲れ〜」

アキラとエリリ、それに周囲に居る初対面のプレイヤーたちとも声をかけあうタケル。

その内の何人かとはフレの交換も済ませる。

さり気にガードはしているが、エリリに軟派目的で近寄ってきている者も居ない。

人が一番集まっている場所では、どうやら兄貴が取り囲まれているらしい。「兄貴」コールが起こるなど凄い人気だ。

「見た目だけじゃないからね」

「一度は実際に目にするべきだな、あれは」

「掲示板で読んだ印象と全然違うね、流石に女の子にフォロワーは難しいと思うけど、周りの人も普段以上に体が動いてたんじゃない？」

「ああ、なんか力が湧くっていうか『俺も！』って気になるな」

会話をしながら築地の場外へ。

麩饅頭、醤油団子、小豆の入ったチーズケーキなど甘い物を中心に持ち帰りの品物を買うが、買う側からピクシーたちやドリアドたちにねだられて包みを開く羽目になっている。

卵焼きや練り物など食べる物も買う。

「みんなでお鍋っていうのもいいよね」

「「ゴチになりまーす」」

タケルもアキラも仲魔たちも料理は作れない。

唯一のスキル保持者であるエリリに頭を下げる一同であった。

BINAH

「ゲートが開いて各馬一斉にスタートー」

信号が変わり、歩行者が一斉に道路を渡り始める光景を見て、猛はそんな脳内アナウンスが流れるのを感じた。

そう思うのも無理は無い。

立体映像の実験として、この秋葉原では歩行者用信号に立体映像が取り入れられ、赤信号の間は横断歩道の車道沿いに半透明のゲートが表示されていて、車道側に足を進めようとするどぶつかると見えるように見えているのだ。

秋葉原と筑波、イクスプレスで繋がった両端はIT試験区として様々な実験的な試みが行われており、この信号もその一部である。

自動車のフロントガラスを利用した拡張現実には既に実用化されており、GPSや交通信号、道路情報、各種警告、注意喚起などの外部情報を取り込んでドライバーに分かりやすい形で情報を提供する様になっているが、歩行者は必ずしもスマートグラスなどを着用している訳ではないため、こうした立体映像による拡張現実的な視認は将来性が高

い分野だ。

現時点では動画の再生は難しいため、静止画像で一定の効果が期待できるものとして信号での実験が行われている。

物珍しさもあるのだろうが、ぶつかりそうに見えるものに突っ込むということに対する心理的な抵抗もあり、実際にはかなりの効果が出ているという話だ。

ここ秋葉原に猛がやってきたのはVR用の外部記憶カードの購入のためである。通販でも購入できるのだが、久々に秋葉原に来て見たかったのだ。

「悪魔たちが居ないと違和感を感じるなんて、メガテンに毒され過ぎだよなあ……」

VR内では割とちよくちよくとアキバに來ている猛だが、現実では特典を真剣に比較検討する大物悪魔や、メイド姿のリリムたちは存在しない。

普通の看板や電飾だけでもかなりの賑やかさなのだが、猛の様にスマートグラスを着用すると賑やかを通り越してVR内以上のカオスとなるのが現在のアキバだ。

「へえ、面白そうだけど自己責任って、なんかトラブル起こる可能性あるのか？」

同人ショップでは各種VR用の拡張、改造ツールやデータ集、同人VRゲームなどの販売が行われている。

思いつき黒に近いグレーや、比較的白に近いグレーの商品があるが、VRのサプラ

イヤー公式のものでは無いため、不具合や最悪アカウント消失、データ消滅の危険性があつたり、VRゲーム自体などのアップデート、バージョンチェンジなどで使用不可能となることもある。

猛が興味を引かれたのは『女神転生R u i n a』の簡単なカスタマイズツール。

内部の服や武器などのアイテムに自分で作成したロゴや画像などを貼り付けることが出来るというものだ。

『女神転生R u i n a』では既に内部のチームや仮想企業などに関して独自のロゴやマークを付けることが出来る様にはなっているが、個人レベルには対応していない。

たまに内部で見かけていた厨二テイスト満載の装備はこうしたツールを使ったものだったのかと納得している猛である。

結局、購入はしなかった猛だが、こうして見ているだけでも結構楽しい。

そうしてあちこち見て回る猛の視界に変なモノが映る。

スマートグラスを外す。

……居ない。

スマートグラスをかける。

……居る！

「ヒーロー、見つかってしまったヒー、みんなには内緒だヒー！」

グラス連動のイヤホンから音声が流れる。

拡張現実の中でVR内と同じ様に動き回るジャックフロスト。

「あー、いいなー！ 私もお外に出たい！」

スマホ内のフィーネもそれに気付いて羨ましそうにしている。

人ごみに紛れて去っていくジャックフロストの後姿を見送りつつ「どうなってんだ？」と首を傾げる猛であった。

「……てなことがあったんだ」

「新手の宣伝？ 私も見えてみたかった！」

「あれ、どう見てもメツ〇に居るアキバのジャックフロストだったんだけどなあ」

「プレイヤーのサマナーを飴と鞭で操ってるって言うヤツ？」

「タケルく、ゾンビくんとゾンビちゃんが団体で来たよー！」

「修学旅行生並の集団って多過ぎだろ！」

「タケル頑張れ、お前の銀の燭台の輝く時だ！」

「あれに突っ込めってか？」

「援護は任せて！」

「エリリもちやつかりしてんよなあ……元からか？」

「ここはおばちゃんに任せとき！」

「いや、オカンは別に相性いい訳じゃないだろ、ゾンビ系？」

既にタケル達にとっては雑魚と言えるゾンビくんはゾンビちゃんだが、数十人、目に見えない範囲まで含めれば下手すれば百人を超えたと話が変わってくる。

「俺はカメラマンじゃないんだぞ？ ゾンビ相手に無双なんてゲームが違うだろ！」

「バリケードが欲しいトコだな？」

「ここシヨツピングセンサーじゃないよね？」

「臭いのは燃やしちやえ〜！」

「汚物は消毒なのですう！」

タケルの銀の燭台、アキラの銃、エリリの魔法、仲魔たちの攻撃でなんとか撃退に成功する。

「廊下で良かったら、部屋とか外だとあの数じゃキツイよ〜」

「こつちのレベルが上がるとああいうのもあるんだな」

「鈍器とサマナーが上がった」

「私の方がレベル低いから上がり易いと思うんだけど、私は上がってないや」

「メイン職業関連の方が上がり易いんだよ。むしろタケルの鈍器の上がり方が異常。普

通のサマナーはそんなに上がらないって!」

後付けでそれぞれサマナー技能を付けたアキラとエリリだが、それぞれのメインであるバスター、ペルソナ使いの技能に比べるとスキルの上昇速度は遅い。

本来バスター寄りの技能である鈍器がポンポンと上昇しているタケルの方が異常だというアキラの指摘は正しい。

検証系スレではメイン職業関連とそれ以外の技能には2〜3倍の速度の違いがあるとされている。

「ムルルちゃんも鈍器使うし、マスクデータでなんかあるんじゃない?」

「サマナー系はマスクデータがかなり多いって予想されてんな」

「そーいやさ、今更なんだけどさ、最初のプレイ時の受付って普通は女の人が出てくるんだって?」

「うん、綺麗なお姉さんだったよ?」

「ソウルハツカーズのメアリに似た感じな」

「そうそう、そう言えばそんな感じ!」

「俺、おっさんだったぞ?」

「え、髭のヴィクトル?」

「いや、もつと病的な……『怪奇大作戦』の牧さんみたいな」

「誰それ？」

「あー、嵐山長官！」

「エリリ、実はオールド特撮マニア？」

「どつちかつて言う漫画マニア？ 『究極超人あくる』から『サンバルカン』で嵐山長官やってる人が『怪奇大作戦』や『帰ってきたウルトラマン』に出てたつてのは人から聞いた〜！ マロロが『岸田森の牧さんが格好いいんだ！』って力説してたからタケルの話聞いたら羨ましがるかも？」

「まあ、そんな感じじゃちよつと違うみたいだから、そのせいもあるかもな？ あと『スグニケセ』も見たし」

「あー、65535分の1の確率で発生するんだっけ？」

「ログイン途中はスクショ撮れないから見たつて証明が出来ないんだよな、最初に掲示板に書き込んだ人可哀相だった。別にいいじゃん、ホントでも嘘でも、粘着に『嘘つき』呼ばわりされてホント気の毒」

「スルー技能ないとネットはキツイよな。この時代になつてもコピペ馬鹿は居るし……」

「ま、そんなことあつたから、そのせいかなつて？」

「いや、それはタケルのリアルラックのせいじゃね？ 変なイベントとか、変なアイテム

とか?」

「タケルと一緒にだと変わったこと多いよね……劣化ツールとか?」

「俺のせいかな?」

「俺（私）たちのせいではないな（よね）」

その後も経験値稼ぎを続け、サンプラザ前で別れてタケルはコンビニに。

「タケル、タケル! 凄いよ、これ! 僕、これが欲しい!」

「破壊された建物と怪物のジオラマ付フォーセンガムって……モスラと東京タワーにゴモラと大阪城……えらく凝ってるな、これ」

「タケル、新作のプリンが凄いの! これ食べよ!」

「パパ、あのね、あのね、『サトミタダシ』共同開発の体にいい天然水だつて!」

「はいはい、一人500円までなく!」

レジを済ませ外に出ても仲魔のお喋りはやまない。

「タケルは向こうで部屋にこもり過ぎ! もっと外に出かけないと!」

「日当たりが良ければ私はおうちでもいいよ、パパ!」

「向こうの遊園地行こうよ!」

ムルルの言葉に「それって傍から見るといい年した男が一人遊園地だよな」とちよつとげんなりするタケル。

お一人様向けの様々なものはあるが、一人遊園地はレベルが高すぎる。

「今度、ジャックフロストにどうやったのか問い詰めないと！」

握り拳で決意をアピールするフィーネ。

相当、羨ましかったらしい。

拡張現実内で自由に飛び回りたいのだそうだ。

現実の自分の周りを飛び回るフィーネ。

その光景を頭に浮かべて、楽しみな様な怖い様なそんな気持ちになるタケルであった。

CHOKMAH

「タケルくう!!!」

顔中をクシヤクシヤにして涙でベシヨベシヨの顔で飛び寄ってくるフィーネ、その後ろからは敵の魔法が。

手を伸ばし庇いたくても動かない体。

視界が暗く、黒くなり、沈み込んでいく意識。



「我ら山の民はタケル様について参ります」

「確かに親父は凄いいけど、俺は大したことないぞ?」

「あのお方のことは関係ありません。この山の恵みはあなた様がもたらされたものゆえ

……」

「兄さん……」

「お兄ちゃん……」

「……分かった。このイソタケル、そなたらの命預かろう！」



何かから解放された様な脱力と共に白くなる視界。

明るくなった眼前に移るのは地平の彼方まで続くかの様な花畑。

再び視界が変わりログイン画面となる。

「くそつ、思ってたより『くる』な死に戻り……」

端末を外し、洗面所で顔を洗う。

鏡の中の自分は心なしかやつれて見える。

『女神転生Ruina』で初の死に戻りをした猛。

初期からアキラとのペアが多かったことと、妙なアイテムという形に結実することが多いが、その半分でも現実には欲しい内部での運、そして仲魔の支援でこれまで死に戻りを経験したことが無かった猛である。

一時的なパーティーでもとにかく誰かと組んでの戦闘が多い理由がこの死に戻り対策で、他のプレイヤーと組んでいる場合、戦闘終了まで死亡確定せず、その間に他のプレイヤーや自分の仲魔に反魂香や魔法などを使ってもらうことで戦列復帰することが出来るのだが、一人でプレイしている場合、プレイヤーが死亡した時点で死に戻り確定なのだ。

エリリが学校の友達達の地元へ遠征、アキラは前日ボヤキつばなしだった会社の研修で不在、プロロードウェイでも顔見知りには出会わず、「浅い所を軽く行っとくか」と出かけたサンプラザ、大きなダメージも食らわず順調な経験値稼ぎであったが、出会い頭のムドに沈んだ。

経験値や金やアイテムはいいとして、中でフィーネたちと過ごした時間まで消えてしまったという感覚、そして死に戻り直前のフィーネの顔と無力感。

初の死に戻りは思っていたより大きなダメージを猛にもたらした。

歯を磨き、気分をリフレッシュして再度ログイン。

いつもと変わりなくタケルを迎えるフィーネたち。

キャロの枝に水をやり、フィーネたちとお喋りをする。

「フィーネ、なんで泣いてるの?」

「タケルの顔を見たらなんかホツとして、なんでだろう?」

「パパも変な顔、どうしたの？」

「そういえば、アプリの順番はフィーネの番だったな」と思い出すタケル。

本来、無かったことになった時間の欠片がそのせいでフィーネの中に残っていたのだろうか？

飛び乗ったタケルの頭に顔をグシグシとこすりつけているフィーネ。

時々フィーネのタオルケット替わりになつてしまふタケルの髪の毛である。

「久々にブロードウェイでも行くか？」

流石に今日は再度の経験値稼ぎをする気にもなれず、そう口にするタケル。

「さんせうい！ クレープ食べて、にやんだらけ覗いて、ゲーセンに行こう〜！」

「僕はおもちゃ屋見てみたい！」

「パパ、リボンかなにか髪飾り買って〜！」

仲魔たちは大歓迎のようだ。

こつそり財布の中身を確認し、上着を羽織るタケル。

玄関に先回りしていた仲魔とそのまま外に出る。

現状、『女神転生 R u i n a』はご当地的なイベントは時々発生するものの、システム自体の変化や大きなイベントは無く、どこことなく弛緩した空気が漂っている。

のんびりと中の空気や時間を楽しんでいるタケルの様なプレイヤーにとっては好ま

しいものだが、刺激と変化を求める攻略系のプレイヤーにとつては物足りなさを感じさせるものであり、掲示板などでもそうした書き込みが見られる。

現在、一番「歯ごたえ」があるときれている異界は新宿都庁。

いまだ中層以上にたどり着いた者はおらず、最前線組でも深夜帯だと瞬殺もあると言われている。経験値稼ぎに夢中になり、時間帯の切り替わりを計算し違えて死に戻りする羽目になったプレイヤーも多い。

そうした場所柄、新宿にはガチ組が集まり、はじき出される様に代々木、中野などに転居するプレイヤーも居る。

新人以外のプレイヤーが中野に増えているのはそうした事情だ。

結果、ますますブロードウェイは賑わっている。

「今日も人が多いね〜♪」

「パパ、お友達が居るよ〜」

ダフネイベントは確率はさほど高く無いものの、挑戦者の数が多いことからドリアドを仲魔にしているサマナーは多く、特に中野は地元ということもあって、その率は高い。

目ざといのか商魂たくましいのか、ブロードウェイ内のアパレルショップではドリアドサイズの服も売っている。

「タケルく、僕の持つてるヤツ、こんな高い値段ついてるよー!」

食玩などのグッズ類を扱っているお店もブロードウェイ内にはある。

レアなものだとお菓子が大人買い出来るくらいの価格がついているものもあるのだ。

ムルルが指さしたおもちゃはそれほどの高値では無いものの、おもちゃのついていたお菓子の定価よりは遥かに高い。

外部の市場原理の模倣か、それとも内部独自の市場原理が働いているのか、少し興味深く、その値札を見るタケルである。

「こんにちわ」

そんなタケルに声をかけてきたのはウシロ。

珍しく同行者が居るが、そちらもタケルには顔なじみ、というかご近所さんのサダロである。

「こんにちわ、知り合いだったんですか?」

「弟です」

「………姉です」

別に何かをされた訳でもないのだが、その外見イメージと初対面時のインパクトのせいでサダロを相手にすると内心一步後ずさってしまいうタケルである。

ウシロは「仕方なく」一緒に居るといのが見え見えだ。

「遊び」の場に肉親を伴うというのは苦痛なものである。

リアルでの力関係まで察して同情するタケル。

「それにしても杉山さん、外見そのまんまなんですね？」

「姉ちゃん、リアルネームはご法度！」

「あ、ごめんなさい。その辺、どうも疎くって……」

顔に疑問符を浮かべるタケルに顔に「ああ！」と口を動かし、前髪をかき上げるサダ口。

「ああ、た……会社の！ いつもお世話になってます」

現れた顔はタケル、というより猛にとって見慣れた顔。

仕事で朝夕に顔を合わせるVRオフィス的女性だ。

つい口に出しかけた苗字を途中で止めて挨拶をする。

VR内でリアルの知り合いに会うのは、海外旅行先で地元の友人に偶然会うのに近いものがある。

そのままあっさり別れるのがなにか悪いことのような気がするのだ。

「じゃ、俺はこれで」とそそくさと立ち去っていくウシロ。

流石に引き止めるのは気の毒だと素直に見送るタケル。

「タケルく、お隣さんだよね、前からの知り合いなの？」

「向こうの方の仕事だね、俺も気付かなかったんだけど、今まで」

「パパく、喫茶店入ろう！」

「そうだな……よろしかつたら喫茶店でも入りませんか？」

「はい、弟にも置き去りにされちゃいましたし……」

クレープ屋をいつも利用していて余り入ったことが無いが、ブロードウェイ内にも喫茶店はある。

手近なその内の一店に入る。

「僕はマロンパフェ！」

「私はプリンパフェ？ そんなのあるんだ、じゃ、それ！」

「パパ、ホットケーキ食べていい？」

いつも通り賑やかな仲魔にちよつとあたふたするタケルだが、サダロが微笑まし気に見ている様子にちよつと安心する。

気になっていたサダロの外見。

フィーネがあつさりと言問をして明らかになったのだが、トラブル対策としてウシロ

のアドバイスも受けて行っているもののださうだ。

別のVRでしつこく粘着されたりしたこともあり、それも『女神転生R u i n a』のプレイを始めるにあたっての躊躇の原因となっていたそうだが、イベント後に出回る様になった「貞○カツラ・レプリカ」をウシロから譲り受ける形でスタート時から現在の外見に。

VR以外のネットなどでも、少し異性と会話などをするとやたらリアルで会いたがる層、特に「それだけ」を目的とする者は「中で楽しく過ごしたい」と考えるタケルの様な者にとつても邪魔だし、鬱陶しい。

付き纏われる側となれば、もつと迷惑なことだろう。

その効果もあつて、ドン引きされることはあつてもしつこく言い寄られることも無く、昔の東京巡りを楽しみながらプレイをしているのだという。

「時々、自分の今の外見忘れちゃつて、キャツキャと燥いじやつて弟から『姉ちゃん、その外見でその行動はNGだよ……』なんて言われることも」

オフィスでの会話で聞いた弟というのがウシロで、「世の中は広い様で狭いなあ」と思うタケルである。

仕事での会話が主だったため、割としつかりとしたイメージがあつたサダロだが、こうして話をしていると微妙に天然が入つていて、対人距離感の近さもあることから、い

わゆる「勘違いされやすい」タイプなのかもしれない。

中ではペルソナ使いでアルカナは「女教皇」。

「レベルが上がるとその内ハイピクシーなんですよ！」とフィーネに楽しそうに語りかけている。

あと少しでサラスヴァティに上がりそうとのこと、かなりのハイペースで経験値を稼いでいる。

ウシロが事前の自分の言葉を有言実行して、同行しての経験値稼ぎに限らず、色々とアドバイスをしているのだそうだ。

「サマナーも仲魔がいいなあって思うんですけど、色々と指示を出してつていうのが私には無理かなあって、異能者は弟がやってますけど色々と考えたり大変そうだし、バスターはちよつと怖いですし」という消去法でペルソナ使いを選んで、表の職業は保母さんなのだそうです。

「子供が怖がって泣かないかな？」などとちよつと失礼なことを思ってしまうタケルであつた。

KETHER

「ジャック・フロスト優遇され過ぎ〜！ 私たちピクシーの方がずっと可愛いのに〜！」

「次は僕もジャックフロストになってみるかな？」

「パパ、あのね、お菓子の長靴が欲しいの〜！」

クリスマスイベントとして『サンタ・フロストのクリスマス』と銘打ち、サンタ帽を被ったジャックフロストがVR内の街に溢れた。

街のあちこちに隠されたり、出現する悪魔（一部はクリスマス仕様になっていて、女性型悪魔のクリスマス仕様フォトコンなども非公式に行われていたりする）が落としたりするミニ雪だるまを集めると、その個数に応じて景品がゲット出来るというイベントだ。

仲魔の着せ替えデータや、ジョーク色の強いプレイヤー装備、期間限定ガチャ（ジャックフロストに外観を似せた車や雪だるま型の一軒家など超高額景品もある）を回す為のメダルなどプレイヤーの物欲を刺激しまくるイベントである。

ちなみにイベント攻略を有利に進める為の課金アイテムも存在している（期間限定ガ

チャのメダルも課金で購入出来る)。

タケルが優先的にゲットを目指しているのはピクシー用サンタミニドレス、DX合体超合金フロストロボ、そしてお菓子の詰め合わせの入った長靴と仲魔の要望に全面的に応えたもの。

ポイント的にはさほど高く無いので、それなりにイベントに取り組めば十分入手は可能だろう。

その為に課金で「雪だるまレーダー」のアプリを購入している。

今回のイベントに関しては「標準装備」とまで言われているアプリで、実際これ無しで町中に隠された雪だるまを探すのは、『女神転生 R u i n a』のマップの広さからして至難の業である。

「私までお世話になってしまって、すみません」

現在、マンション入り口で偶然、顔を合わせたサダロがタケルに同行している。

別に互いに何か約束がある訳でも無いのに振り切つて別れるというのも変な話なので、そのまま一緒にイベントを攻略している。

プレイヤーごとに雪だるまの位置が違うなどということは無いので、見つけた場所を教わつたり、見つけられる人間に同行すればアプリを購入せずにイベントを進めることも出来る。

その辺り、プレイヤー同士割と気軽にやり取りしていて、しつこく他人に聞いて回ったり、良く知らない相手にくっついて回ったりでもしない限りとやかく言われることはないのだが、サダロは恐縮して雪だるまのポイントの度に謝罪しているのだ。

「いいんですよ、イベントなんですから、楽しくやりましょう」

「そうだよー、楽しいのが一番！ 私なんか毎日全力で楽しんでるよー！」

「パパ、あつちから悪魔が来たよー！」

「ゾンビ・サンタとか誰得!? トナカイまでゾンビかよー！」

「いきますね、ペルソナ、マハブフです！」

「葬らん、カツキーン！ トナカイの角が折れたよー！」

「ウシっ、破魔ってる！ でもってこっちに！」

「マハジオ、いつけー！」

「ドロップアイテム雪だるま無し……トナカイの鼻って、ムルル着けてみるか？」

「着ける、着ける〜！ どう、似合う？」

「可愛いですね、ムルルちゃん」

「えへへ……（照）」

戦闘では自分の役割をこなしていることもあり、割と積極的に動いているサダロ。タケルの仲間たちとも馴染んでいる。

表の職業が保母さんという職を選んだけあって、子供（つばいタケルの仲間）と接するのも楽しんでいるようだ。

その後も着々と中野の町の雪だるまを見つけ、サダロがログアウトする時間になったとのことでマンションまで送り、部屋には戻らずコンビ二に。

「あ、こんにちわ。姉がお世話になってます」

「世話というほどの世話はしてないけどな」

ブロードウェイやサンプラザ近辺以外で会うのは珍しいウシロと遭遇。

姉のフォローをするため、同じ中野住まいではあったが、この近くに引越してきたのだそうだ。

「にしても、ウチの姉やタケルさんが住んでるあのマンション、本当はあそこに引越そうと思ってたんですよ、けど、あそこ初期配置では入居出来るけど転居先には選べないんですよ、実は」

「え、そうなの？ 人が全然居なくて駐車場スカスカなんだけど？」

「なんかステータスとかみたいで表に出てるんじゃないデータが予想以上に多そう

ですよね、このVR。後追いブースト修正とかもあるんでしようけど、姉の成長、明らかに俺の時より早いでもん」

「ウチのフィーネとかも他のピクシーより成長早い感じだな」

「聞いてますよ、タケルさんの鈍器。バスター涙目のスキル成長率だとか？」

「あー、うん、なんかね、鈍器に関しては明らかに裏ステータスがある感じで成長してるな、確かに。俺の前に使ってた鈍器、何故か仲魔が装備してるし……」

「え？ 仲魔って武器装備出来るんですか？ アクセサリとか以外に？」

「しつかり殴ってる、鈍器で。掲示板に書こうかとも思ったけど、他に全くそんな話が無いで躊躇してる内にすっかり時宜を逸した」

「その内、魔人・鈍器ホーテとかになっちゃったりしてwww」

「ありそうで笑えね〜！」

「民○書房的に鈍器鵬弓もあるかもしれない！」

「やめれ〜！」

くだらない会話を楽しみ、その場で別れる。

引越しまでしてサポートとは、天然の入った姉のフォローも中々大変な様だ。

サポート系の魔法を使うのが得意なウシロの性格は、そんな姉のフォローという日常によって培われたものなのかもしれない。

部屋に戻り、いつもの様にキャロの枝に水をやり、みんなでお菓子を食べてお喋りをしてからログアウト。

掲示板でイベント関連の情報を漁ろうとパソコンを立ち上げる。



【裏切り者に】ステイブン討伐スレ その5 【鉄槌を！】

1：品川の異能者

ここは『女神転生 Ruina』のクリスマスイベントにおいて、非リア充要素満載のキャラクターの癖にミニスカサンタ姿の女性に車椅子を押され、自分もサンタコスをしてリア充アピールをしつつ徘徊している裏切り者ステイブンを追い詰め、討伐することを誓った漢が集うスレです。

目撃情報には時間、場所の明記を忘れずに！

リンク先へのアクセスは自己責任で！

煽り、荒らしは華麗にスルーしましょう

愛情の無いコメント、貶しはNG

和気藹々、マターリ進行でいきましょう

過去スレ：ステイブン討伐スレ その1〜4

(中略)

833：新井薬師のバスター

また違う女連れてる（#。㊦。）

完全に俺ら煽ってるだろ、これ！

834：赤羽のサマナー

リア充死すべし、慈悲は無い！

835：京成高砂の異能者

ステイブンですらクリスマススを満喫してるのにお前らときたら……

836：青砥のサマナー

ピクシーとドリアドと一緒にクリスマスケーキを食べてる俺は勝ち組！

837：お花茶屋のサマナー

どうせ俺の仲魔は全部ぶだよ、（#。㊦。）ゴルア!!

838：池袋のペルソナ使い

にやんだらけのクリスマススイベント行ってこい、ネコマタさんと2ショット撮れるぞ
!?

839：上野のバスター

で、ステイブンはどこ行ったの？



「あー、荒れてるなあ」

現実のクリスマスとVRのクリスマススイベントが脳内で完全に断絶している猛の場
合、クリスマスだからと言って現実サイドで何かしたいという欲求が全く無いため、荒
れようも無かったのだが、割り切れない者も世の中には多いらしい。

かと思えばクリスマス限定バージョンの悪魔スクショコンプを目指す野郎どものス
レなどもあつたりして、攻略に関連したスレの方が少ない有様である。

「タケル、ジャックフロスト追いつめてこつちへの抜け道問い質さない」とー」

「アキバのジャックフロストはサマナーと同行してらるだろうから、イベント期間中の遭
遇は難しいと思うぞ？」

「私から逃げようなんて百年早いだよ、雪だるまの癖に！」

フィーネはすっかりジャックフロストを敵視している。

アプリでのスマホ内生活に喜んでいたフィーネだが、もつと自由に好き勝手に動いている存在を見て、羨ましさが高じて敵愾心にまでなってしまったようだ。

そこに追い打ちをかける様に、今回のジャックフロストメインと言えるクリスマスイベントである。

ステイブンに煽られている嫉妬仮面予備軍並みにメラメラと炎が燃え盛っているのだ。

「ムキー！ タケル、ケーキ買って、ケーキ！ こうなったらやけ食いよ！」

「（仕方ないか……）どれがいい？」

「ショートケーキじゃないの、ホールでサンタの人形とかもあるクリスマスケーキ！」

「（おうふ）現実のケーキ屋並みにあげつない価格……。現実と違って売れ残りがクリスマス後に安売りとかもないしなあ」

フィーネに言われるまま、クリスマス仕様の特製ケーキを購入する猛。

通常の課金アイテムでの食事の五倍の価格である。

スマホの中で初めて会った時の様に顔中クリームまみれにしてケーキを食べるフィーネに、「ま、いつか」と苦笑して自分の現実での食事に取り掛かる猛であった。

D A A T H

「今年のクリスマスは終了しました！」

「なにが聖夜だ！ ☆矢の方がいいぞ！ オールナイト上映マラソンでもやるか？」

「リア充共め、雪の代わりに地獄の劫火を降らせてやる！」

野郎どもの雄叫びも空しくクリスマスイベントは続く。

えっち系の機能は無いとは言え、デートは出来るのでプレイヤー同士、あるいはプレイヤーと仲魔といったカツプルの姿も目立ち、クリスマスムードを満喫するその姿は、一層、嫉妬に駆られた男たちを煽ることになっている。

一方でメインの雪だるまだけでなく、かつての全体イベントのラスボス、東京タワーを巨大なツリーに見立て、階段で展望台まで道中悪魔を倒しつつ進み、願い事を書いた短冊を吊るしてくるといふ、何かが激しく間違っているイベントも運営サイドで行われていたりもする。

「本日は、はるバス東京ダンジョンめぐりツアーにご参加いただきまして真に有難うございます。本日、皆様のご案内をさせていただきます、私ガイドの武内と申します

.....」

そんな中、タケルたちは何をしているかという都内のバスツアーに参加、リムジンバスのシートに座っている。

クリスマスイベントの雪だるま集め、キャロの欲しがっていたお菓子の長靴は割とあっさりと手に入ってしまったため、フィーネとお揃いになるドレスも追加でプレゼントしようか、などと考えているタケルだが、中野の普段の行動範囲はあらかじめ検索しつくしてしまっている。

新井薬師や高田馬場など別の駅に近いところまで歩いて搜索するのは中々に骨が折れる。

「いつそのこと車で気分転換に遠征に出かけるのもいいか？」などとも思っていた所にたまたま気が向いて覗いたポストにチラシ広告が入っていたのだ。

チラシを見つつフィーネたちの質問に答えていたタケルだが、ムルルやキャロの相手をしている内に、タケルのスマホを勝手に使ったアキラやエリリにフィーネが電話をかけてしまい、その後もコンビニに出かける際にマンション入り口ですれ違ったサダロにも誘いをかけるなどのフィーネ無双で、タケルの意思が全く介在しない内にバスツアーへの参加が決まってしまったのだ。

普段なかなか利用する機会の無いバスツアー、しかも地元民ほど利用しない都内観光

バス。ダンジョン四箇所巡って、昼食に江戸前の寿司と天ぷらまで付いて料金は樋口さん一枚でお釣りが来る値段。

クリスマスとは全く縁の無い内容にも関わらず、クリスマス特別価格と大々的に謳っているだけはある、タケルが頭の中で計算しても「これじゃどう見ても赤字、良くて収支トントンじゃない？」の安さである。

既に「行ってもいいかな？」という気分になっていたタケルではあったものの、自身話を進めるより遥かにスムーズで手際の良いフィーネのコミユ力には舌を巻くばかりである。

結局、サダロの弟ウシロ、そしてエリリの友達クママも参加、プレイヤー六人、仲魔も入れれば二桁の大集団と化した。

他のツアー参加者もダンジョンめぐりと銘打った異界めぐりのため、普段一緒にパーティーなどを組んでいる者同士の参加ばかりのようだ。

「お友達のくまちゃんです！」

「クママです、よろしくお願いします」

「「「よろしく（ね）」」」

「確かにクマだ〜」

「凄いね、その外見あったんだ！」

アキラとウシロが感心する様に、エリリの友達のクママはクマの外見をしている……ペルソナ4のクマの外見を。

たぶん大丈夫だろうと思いつつもネガティブな反応が無かったことにほっとするエリリ。

クママのリアル事情を説明しておこうかとも思いつつも、勝手に人に話してしまうのも躊躇して中々クママをタケルたちに紹介出来なかったエリリは、普段とはまた違ったシチュエーションになる今回をいい機会と捉えてクママを誘った。

ただ、悪意が無いどころか善意の言葉や反応でも、人の心は傷つくというのを自分の経験として知っているエリリとしては、タケルたちの人柄は信頼はしていても心配であつたのだ。

「わーい、クマさんだー♪」

「気に入った！ 何かあつたら、このハイパーなピクシーである私に言いなさい！ 力になつてあげるわ！」

「すごいねえ、クマだねー」

タケルの仲間たちにもすつかり気に入られてしまったクママ。

エリリの仲間とは既に顔馴染みであるため、シエーラなどはクママの頭にへばりついていて、「あんたはウチの子でしょうが！」とエリリは内心思つたりしている。

「二箇所目は、ここ有明水再生センターになります。隣接する一部下水網がダンジョン化しております。汚水ではなく雨水管ですのでご心配される様な悪臭などはございませんのでご安心ください……」

「なんかSFしてる建物だねえ……」

「一度見たら忘れない外観だな」

「こつちから見るとキノコみたい」

「こつちの建物は東京都のマークのイチョウなんだね」

ダンジョン入り口まで旗を持ったガイドさんの後をゾロゾロとついて歩くという中々に奇妙な光景。

武器やら仲魔やらの凶悪さと、どこまでも普通の観光ガイドのスタンスのガイドさんの温度差がシュールだ。

「こちらから先、異界化しております。二時間後までにこちらにお戻りください……」

「ちよつとだけタケルの長靴が羨ましい」

「足元滑るから注意してね、姉ちゃんは何も無いトコでも転べるんだから」

「意外と天井が高いんだねー」

「あつちの人たちって攻略組なのかな、装備気合入ってるよね」

「げつ、米軍仕様ของボディアーモージャー」

「ちよつと怖い……」

「大丈夫、最強のピクシーの私が守ってあげるから!」

普段の経験値稼ぎより遥かに大所帯であるだけでなく、ツアーの関係上、異界の浅いところには行けないため出てくる悪魔はさほど強く無い。

なにせムルルの花瓶の一撃で沈んでしまう者さえいるのだ。

タケルの燭台では完全にオーバーキルである。

タケルの鈍器攻撃を始めて目にしたサダロやクママはちよつとひいている。

見慣れているアキラやエリリでも苦笑いするしかない。

「今回のダンジョンめぐりはお試して感じかな?」

「まあ、深いトコ行けないし、時間も決まってるしね」

「次は神宮外苑で、日本橋に行つて昼食で、午後は東京駅に行つてから最終地が都庁だつて」

「そう言えば、この辺雪だるまあつた?」

「あ、全然気にしてなかった、そういやイベントまだ終わってなかったけ……」

「バスに乗ってる時だと意味ないなあ、どんどん見つけた雪だるまが遠ざかってく(笑)」

車中ではお菓子などを食べながら会話が弾む。

水再生センターでのドロップアイテムで雪だるまをゲットした者は居なかったようだ。

クリスマス仕様のモンスターも出現しなかったし、場所によってはクリスマスのバッチが適用されていないのかもしれない。

「この床って草なの？」

「知ってるよ、これが畳なんだよねー」

「そう言えば仲魔たちが畳を見るのは初めてだったか」とタケルは日本料理屋の座敷で食後のお茶を飲みながら考える。

タケルの部屋はフローリングのカーペット。

畳のあるお店に入ったのも今回が初めてである。

特にドリアド三人娘は匂いと感触がすっかり気に入ってしまったようで、ゴロゴロと転がっている。

ツアーの昼食は仲魔たちの分までしっかりと料理が出て来たので実に賑やかな食事となった。

寿司に刺身に天ぷらと来日した外国の人でも満足のメニュー、仲魔たちも普段とは異

なった料理に興味津々で色々と周囲に聞きながら堪能し、大喜びであった。

「これから、もしかするとたまにおねだりされるかも？」などとタケルは少し不安に思ったりもしている。

とは言っても本当におねだりされれば、事前にあれこれ考えていても、あっさりと連れていってしまうのがタケルなのだが……。

この後は東京駅、表の一般利用客用の通路で無く、職員や業者が利用する業務、メンテナンスの通路が異界化してるのだそう。

普通は入れない場所ということで、異界の内容そのものよりも、そうした見れない場所を見ることを楽しみにしているのがタケルやアキラやウシロである。

そうしたものに価値やらロマンやらを感じるのは男性ならではの感性なのだろう。女性陣は「へえ、そんなところもあるんだ」程度の感覚である。

「さすが東京駅、出てくる悪魔も日本ならではの連中が多いな」

「神宮外苑も割とそんな感じだったよね」

「何故かマシンも出てくるけど、東京らしいって言えば東京らしいか」

「皇居もすぐ側だしね」

やはり時間帯によってはかなり強い悪魔も出てくるのだそう。

将門公の乱入すら月齢によってはあるのだから洒落にならない。

「最終のダンジョンになります、新宿都庁です。こちらは現在の攻略の最前線ともなっています。皆さまには比較的浅い所に入っていたいただきますので攻略組との接触は無いとは思われますが、少しでもその空気を感じていただけたらと思っております……」

「聖獣ってことになってるけど見かけは魔獣だよな、パピルサグ」

「まあ、ランダとバロンだつて見た目大して変わらんしな」

「大天使とか墮天使も出るんですねえ、ここつて」

「つて姉ちゃん何を呑気に！ タルンダ行つときますね！」

「いっくよー、マハジオ！」

「見て見て！ サマーソルト葬らん！」

ムルルのサマーソルトというか逆宙返り、壺は腹に当たっているが、勢いそのまま振り回した花瓶は股間を直撃している。

「天使は中性あるいは無性と言うけど、それでも痛そうだ」

「少なくとも俺なら本当に葬られるな……」

「いいぞー、ムルル、もっとやっちゃえー!」

戦闘なのだし当然のフィーネの声援のだが、ムルルの攻撃のえげつなさの後なので、非常に怖いものを感じてしまうタケルである。

「ここはクリスマス仕様の悪魔が出るんだ……」

「運営なに考えてんだよ……カワンチャのクリスマスマスバージョンとか誰得?」

「と、ともかく雪だるまを落とす確率が高いらしいんで頑張りましょー!」

「エリリちゃんエリリちゃん、骨ですよ、骨、可愛くないですよお!」

シエーラの言う様に確かに可愛くないが、誰もカワンチャに可愛さは求めていないだろう。

タケルとムルルの鈍器ツープラトンを食らって敢え無く昇天。

その後もクリスマス仕様の悪魔は出てくるもの、ヌエやパトリムパスやヨモツシコメといった、見てもさほどはしゃぐ気にもなれない悪魔ばかりだったのは、いったい誰の日頃の行いの悪さなのだろうか?

ともあれ、都庁初アタックも雪だるまゲットの結果に終わり、新宿駅でバスツアーは解散。

「昼があれだったから、夜も少しいいもの食べてかないか?」というアキラの提案に賛成

多数。

駅の近辺で何かおいしいものをと夜の町に繰り出すタケルたち一行であった。

RUMBLING

クリスマスイベントが終了して、東中野の商店街は年末大売出しでプレイヤーに關係無い、ごく普通の福引が行われていたりする。

クリスマスイベントに関しては、最終的にタケルが目的としていた仲魔向けのアイテムは総て入手したので、余った分は結局限定ガチャのメダルに交換、5枚になったので仲魔たちにそれぞれ一回ずつガチャを引かせてあげて、自分は2回引いた。

宝玉（10個パック）×2、反魂香（5個パック）×1、ニスロクの特製ビーフジャーキー、悪魔スカウターが獲得賞品。

どれがタケルの獲得したものか一目瞭然である。

ビーフジャーキーは悪魔への贈答用にもなる食糧アイテムだが、肉食系の悪魔の友好値を一気に高めるらしく、レベル圏外の悪魔すら仲魔に出来るといふ話が掲示板で広がっている、今回の限定ガチャにおける「当たり」アイテムである。

手に持って歩いていたらオルトロスが家まで憑いて来た、などという冗談の様な話すらある。

まあ、仲魔たちが食べてみたがったため、既にタケルを含めた全員で食べてしまったため、タケルの手元からは消滅しているのだが……。

悪魔スカウターは某・少年漫画のスカウターそのままのデザインで、コンプのアナライズ機能の拡張版でプレイヤーやNPCの強さも同様に見ることが出来るというものだ。

「戦闘力……たったの5か……ゴミめ」ごっこは出来るが、強い悪魔を見ても爆発はしないらしい。

サマナーよりもバスターや異能者などの補助アイテムとしてなら、ネタアイテムとしてでなく実用アイテムとなる。

そのため、オークションに出そうかとタケルは考えたりもしたのだが、ムルルがすっかり気に入ってしまつて色々見て楽しんでるため、今ではムルルの壺の中に納まつている。

また突発的なクリスマス最終イベントとして、お台場のフ○テレビが「怪異・リア獣」となつて暴れるという大規模戦闘が発生し、独り者のプレイヤーたちからフルボッコにされて爆発したという騒動があつたが、タケルたちには無縁の話であつた。

それなりの経験値とアイテムを手によやく溜飲を下げたプレイヤーたちが、そのまま「くたばれクリスマス大宴会」に突入、実況スレは27まで短時間で板を消費したら

しい。

その頃のタケルは仲魔や友人たちとケーキやチキンでホームパーティーという「爆発しろ！」と言われる側のクリスマスイベント最終日を過ごしていたため、戦闘イベントには不参加であった。

「パパ、あれ何？」

キャロの指差す先には門松が売られている。

如何にもな商店街年末の風景として、特に注意もせず見ていたタケルだったが、キャロたちに説明しながら「買ってみたいかな？」と思い直した。

現実では実家に居た頃も含めて門松を飾ったりなどということには縁の無かったタケルだが、仲魔たちと過ごすこの世界での始めての正月に「この際、思いっきり正月ムードに浸ろうか」と門松を皮切りに鏡餅、普通の餅、豆餅、ゴマや青海苔のなまこ餅などの大量の餅、ミカンを八百屋で箱買い、おせちは作れないので惣菜店やスーパーなどから買い集めたものを買い、といった具合に色々日本の正月について仲魔たちに説明しながらの爆買いをしてしまう。

アイテムを収納出来るプレイヤーだからなんとかなるが、それでも無ければ大型の仲魔でも居ない限り持ち運べないほどの買い物である。

結果、大量の福引券と福引補助券を手に入れて、商店街の福引所へ。

「二等ハワイ旅行だつて！」

ムルルがはしゃいで言うが、都内しか移動できないこの世界で果たして本当にハワイに行けるのだろうか？

「流石に商店街の福引のためだけにデータは実装しないだろうなあ」などと思いつつも、豪華な上位の景品に目を輝かせる仲魔たちにタケルの気持ちも浮き立つ。

「おじさーん、これで何回引けるの？」

「おお、随分と集めてきたな、これだと14回引けるぞ、お嬢ちゃん」

商店街の人間が仲魔にごく普通の子供に対応するのと同じ様な返事をするのを聞きながら、「じゃあ、フィーネたちが4回、俺が2回引こうか」と声をかける。

「ガラガラガラ〜♪」

「おお、7等、ラップかこつちのお菓子だよ！」

まあ、そう素晴らしいものが当たる訳では無いが、商店街が頑張っているため一番下の8等でもティッシュだけということではなくお菓子も選べるため、仲魔たちは引いては貰えるものに喜んでいる。

一番上で6等だったが、それぞれ両手にお菓子を抱えてニコニコの仲魔たちに促され

てタケルが最後の2回を引く。

「8等だね」

昔のムルルを思い出して少し懐かしく感じながら、いくつかあるお菓子の中から大きい目の飴玉を選ぶ。

「ラスト、タケル頑張つて！」

フィーネの声援を受けて勢い良く抽選機を回す。

初めて見るオレンジ色の玉。

「お、4等だな、おめでどう！」

「やった、やった！」

「パ。パ。ずーい♪」

自分が当たるまで何なのかさえ確認していなかった4等の賞品を見るタケル。

この手のものは一番上と一番下はそれなりに意識しても、真ん中辺りはあまり気にしないものだ。

奥からおじさんが引つ張り出して来た4等賞品に仲魔の目が輝く。

「大きいなあ……」

思わずタケルが口にするほど巨大なそれは……。

可愛らしくデフォルメされたケルベロスのぬいぐるみだった。

目をつぶって眠っている姿で、全長はキャロの身長よりもある。

アイテムボックスに入れようとする仲魔たちが一斉に「えく？」という顔をするため、視界を半ば隠される状態になりながらも抱きかかえて帰宅することになったタケルである。

タケルの手が塞がっているため、ポケットからキャロが鍵を取り出して開け、フィーネとムルルが灯りを点けていく。

床にぬいぐるみを置く仲魔たちがそれにへばりつく。

「ぬいぐるみの上でお菓子食べて粉とかこぼすなよう！」

蜜柑の箱など買ってきたものを部屋にしまいつつ声をかける。

「タケルくミルク頂戴！」

「僕はオレンジジュース」

「私もジュース！」

返ってきた返事は飲み物の請求だった。

「正月気分が先行して年越し蕎麦とか買わなかったなあ、載せる天ぷらとかと一緒に大晦日に買いに行くか……」

ジュースを出した後、餅などをしまいつつ考える。

作りたてのなまこ餅はまだ柔らかいので、焼いたりせずそのまま食べてみようとな

板に載せて包丁で切る。

フィーネが肩に乗ってそれを覗き込む。

「私にも頂戴！」

「ゴマと青海苔どつちがいい？」

「両方！」

他の仲魔も食べると言うので、結局それぞれ切り分け、皿に載せ、緑茶を入れる。

「焼いたのも食べたーい！」

結局、なまこ餅だけでなく他の餅も焼き、「焼き海苔も買ってこないとなあ」と残り少ない海苔を見ながら考えるタケルであった。

昼の内に買っておいたかき揚げをオーブントースターで温めながら、そばを茹でるタケル。

近くに複数の寺があるために除夜の鐘が微妙にずれる感じで何度も聞こえてくるため、余韻を楽しむという感じではない。

テレビでは名前しか知らない様な昔の歌手が出ている紅白が流れている。

良く良く見ると昭和の時代の歌手が居たり、アニメ作品に登場する架空の歌手が居た

りとツツコミどころ満載なのだが、その辺りの知識が無いタケルは素直に「昔はこんなだったのか」と流している。

福引の時に買ったお餅は仲魔たちが気に入って何度も食べていたため、正月を前に残り少なくなってしまうため、今日になって追加で買ってきたのだが、「お餅も入れて〜！」とファイネがリクエストしたため、人数分をかき揚げの前に既に焼き終えて蕎麦に入れる準備が完了している。

「出来たぞ〜！」刻んだ長ネギを最後に載せて、お盆に載せたそれぞれのお蕎麦をこたつに置く。

この器も人数分、今回購入したもの。

普段の食事は外食や弁当類が多いため、コップ以外の人数分の食器が無かったのだ。

「わーい、年越し蕎麦だ！」

「お蕎麦、お蕎麦！」

「タケル、七味取って〜」

甘い物が大好きな割にはファイネは割と七味を使う。

辛いものが全くダメなキャロはネギも余り好きでは無いため、少ししか載せていない。

辛いものが大好きなムルルだが、辛くない料理に香辛料を足すことはしない。みな、それぞれの好みがあって、タケルはしっかりとそれを把握しているため、同じに見えてそれぞれのお蕎麦は少しずつ違っている。

食後、蜜柑を食べながらこたつでまったりと過ごす。

普段は日付が変わる前にログアウトするタケルも今日はそのままログインしている。キヤロは時々眠そうにしているが、それでも皆揃って遅くまで起きているという普段とは違った状況に嬉しそうだ。

フイーネは「正月はお雑煮とお汁粉だよね！」と既に正月に気持ち先走っている。ムルルはテレビのアイドル歌手の振り付けを真似しつつフヨフヨと宙を漂っている。

そうこうする内に紅白も「ラスボス？ あれラスボス？」とムルルが聞いてきた電飾まみれの歌手が歌い終わり、フィナーレが始まる。

どこからか先走った花火の打上げ音が響き、テレビ画面の中からは各地の年越しカウントダウン映像が流れ始めている。

「二「あけましておめでとうございます」二」

年越しの挨拶を済ませ、眠さが限界のキャロをコンプに戻す。

少しテンションが上がっているフィーネとムルルはまだまだ元気だ。

「今日くらいはフィーネたちの気が済むまで付き合おうか……」

自分のログアウト時間のことは頭から放り出し、アイスをねだるフィーネとジュースを欲しがるムルルのために冷蔵庫へと向かうタケルであった。

OMEN

メガテン内の初詣、全体イベントの際に「絶対に来なさい！」とアマテラス様直々に言われてしまったタケル（を含むピクシーのサマナーたち）には参拝先の選択の余地は無かった。

「東京のお伊勢さま」こと東京大神宮一択である。

車だと流石に渋滞が……ということとで電車での移動となる。

飯田橋へ出てそこから徒歩。

アキラとエリリも同行し、神様本人が降臨するという普通では体験出来ない初詣に。

他の神社での初詣は流石に本物降臨のところは少なく、内部と外部の掲示板ではこの騒ぎが拡散され、「それならご利益がありそう」と更なるプレイヤー参拝客が訪れることはほぼ確定である。

タケルやエリリと同じ様にピクシーを連れたサマナーや、縁結びのご利益を期待したプレイヤー、そしてNPCで境内には現時点でも人が溢れている。

振袖を着たピクシーなども居て、シエーラがエリリにおねだりをしている。

フィーネはそれよりもどこからか漂ってくるソースの匂いが気になっているようだ。今年もフィーネは「色気より食い気」なようだ。

無事にお参りも済ませて、せっかくなので靖国神社経由で九段下へ向かい、神保町の交差点を経由して水道橋へというルートを通ることにする。

靖国神社では「眉毛が凄いよ〜！」飛んで近くまで寄ってみたフィーネとシエーラの報告を受けながら大村益次郎像を見上げる。

近代陸軍の父とも言われているが、日本初のテクノクラートと言った方がいい人物の日本初の西洋彫刻。

依頼を受けた彫刻家がこの銅像の作成のためにわざわざ海外留学をして技術を学んで作ったという、日本の美術史的にも価値のある銅像だ。

上野の西郷さんと睨み合っているなどという話もある。

肖像画に比べると頭がでかくない（肖像画だとまるで漫画キャラの様なデフォルメをされている様に見える）。

靖国神社の敷地は東京大神宮より遥かに広く、外の靖国神社と違って変な人間が周囲に湧くことも無い……悪魔は湧くかもしれないが……。

「おお、武道館だ」

「ライブとかやつてるかな？」

「本来なら柔道大会とかそういうのだけだな、この建物」

一般人にすると武道館＝コンサートであるが、本来はその名の通り「武道」を行う場所である。

東京ドームでのコンサートが一般的になる前は外国のアーティストの来日公演で、武道館公演があるか無いかでランクの違いが区別されていた。

タケルの生きている現在でも、そこまでではないものの一定のステータスのシンボルであり、周辺の建物は変化があるものの武道館自体はそのまま残っている。

九段下へと向かう道の右手に見える建物を見つつのんびりと歩く。

靖国通り沿いをそのまま進むのでは無く、その裏のさくら通りを歩く。

この通りのお惣菜屋さんでコロツケを買うつもりなのだ。

コロツケだけでなく、元が肉屋だけあってメンチカツなども美味しいし、ハムカツ、マグロのカツなどのカツ類の他にも、春巻やらサラダ類やら煮物に加え、白いご飯も売っているし、組み合わせでお弁当の入れ物に入れたりもしてくれるが、ついつい「あれも食べたい、これも」と胃袋と財布の予定をオーバーした買い物をしてしまうお店でもある。

「コロツケとメンチを2個ずつ、それとアジフライ」

「から揚げとメンチとコロツケ」

「コロツケ2つとササミチーズ」

食べながら歩くが昼飯時などを除けば、靖国通りに比べて人通りが少ないため、さほど問題にはならない。

ファイネの齧るコロツケのパン粉が頭に降りかかってしまっているタケルは、「余所の人に迷惑かけなきやいつか……」と達観モードである。

アキラはから揚げを「コンビニのよりうめえな」と喜んで食べている。

エリリはコロツケをシェーラと半分こ、残りは帰ってからオーブントースターで温めなおし「冷蔵庫の前に作った春雨サラダが残ってるから、後は冷凍しといたご飯をチンすればいいだけ！」と晩御飯にするようだ。

すずらん通りへと向かい餃子を食いたい気持ちを振り切って、岩波ホールの前を横切り神保町の交差点へと向かい白山通りへ。

信号を渡り、路地へと誘う油や料理の匂いをなんとかスルーして、水道橋へ。

途中、かるた専門店を少し覗いて見る。

かるたに花札やトランプ、といったオードックスなものだけでなく、色々なゲーム（NotTVゲーム）が置いてある。

かなりマイナーなゲームなどもあり、せっかくなのでUNOといったメジャーどころも含めて幾つかカードゲームを買ってみる。

車でのお出かけや外に出るのも億劫な冬場や雨の日に活躍してくれるだろう。

歩きながらも待ちきれずにフィーネやムルルは袋から取り出して説明書を見ている。

アキラも興味深そうに見ているから、遊びに来た時に一緒にプレイすることになるかもしれない。

水道橋の駅、周囲の状況にもよるが良く耳を濟ませるとコースターなど遊園地の音が聞こえる。

当然、仲魔たちの目もキラ☆と輝いている訳で、「まだ休みのトコ多いから混んでん
だろ?」と言ったくらいで止まる筈が無い。

ここも全体イベントで訪れた場所だが、将門公に斬られるためというヤラレ役で、遊園地自体は稼動していなかったため（照明は点いて施設の電源は入っていたが）遊園地自体は楽しんだことは無かった。

「CAST IN THE NAME OF GOD. YE NOT GUILTY.
」

「えー、なにー！ー！」

ジェットコースターで観覧車を潜り抜ける瞬間、ネタを呟くがスルーされ、「ショータイムかアクションの方が良かったかなあ」とタケルが少し落ち込んだりもしたが、たとえ観覧車の名前を覚えていたとしてもネタに反応出来るかは微妙である。

「「「妖精戦隊ヒーロー5！」」」

「あー！ またジャックフロスト！ タケル、やつつけちやおうー！」

「いや、流石にアトラクションに乱入はヤバいだろう？」

「ここで将門公が乱入して全部ぶった切りとかちよつと期待」

「来ちゃうよ、来ちゃうよ！ そういうこと言ってる、このVRの中って閣下が出てこない分、将門公がフリーダムなんだから……」

ヒーローショーは今じゃジャックフロストの戦隊物である。

「仮面ライドウって、中身本物じゃないだろうな」

「無いとは思うけど、あってもおかしくないんだよねえ、この中じゃ」

「仮面ライドウ・アマゾンとかあつたら笑う。上半身裸のパンツ一丁のライドウ！」

公演の予定表を見ながらの会話、ショーで休憩したので再び絶叫マシーン系へ。

「考えてみればVRの中なんだから、もっとトンでもない絶叫マシーンとかも作れちゃ

うんだよね」

「それを言っちゃ身も蓋も無いけど、スカイツリー並みの高さからフリーフォールとかバンジーも可能だな」

「さっきの水で射つヤツ、的の中に悪魔が紛れてたよね！」

「あー、なんかオバリヨンが吹っ飛んでた気がする」

「タケル、タケル、次、あれ、あれ！ 私たちの名前が付いてる！」

ピクシーの名前がついたコーヒークップ、はしゃいで回し過ぎてぐったりしていた
ファイネたち。

おぼけ屋敷に入ると一気に雰囲気が変わる。

「エリリちゃん、ここ異界化してるよお〜！」

「うん、分かる、流石におぼけ屋敷であれば無いでしょ」

エリリが指差す先にはモコイの姿が。

「ダメダメだね、チミ」

どこことなく見下した感じで話しかけてくる。

「なんかムカつくー！」

アキラの感想そのままにバトルに突入。

同じ様な口調で話しかけてくるモコイたちに更にいらつかされる。

フルボッコにされながらも口元がどこか勝ち誇った表情のまま消えていくモコイ。そして戦闘に付き物のドロップアイテムだが……。

「久々に来たな、こういうの……」

「タケル、どうかな」

「ムルル、そんなもん首に巻くんじゃないの！」

「えー、マフラーみたいでヒーローっぽくない」

ドロップアイテムでタケルが入手したのは「モコイのふんどし」。

決して首に巻く様な代物ではない。

「あ、なんか強くなってるよー」

装備すると物理防御と力が上がり、ムド耐性が付くが、それでも首に巻くのは間違っている。

……のだが、すっかりご機嫌のムルルから取り上げることも出来ず、ため息をつくタケルである。

「ま、まあ流石に使用済じゃないでしょ……う？」

「まあ、似合う似合わないで言えば似合ってる……よな？」

エリリとアキラのフォローも微妙なところだ。

「くまさんだ〜！」

「タケル、カステラおいしいよ！　アイスといっしょだともっとおいしいー！」

「ちよつと食べるの躊躇しちゃう可愛さね」

アトラクションのハシゴの後、ちよつと小腹が減ったのでクマの形をしたカステラのお店でカステラとサンデーを買う。

「意外といけるな！」とアキラもつまんで食べている。

タケルはサンデーで口の周りをベタベタにしたキャロをウエットティッシュで綺麗にしてあげている。

キャロが「パパ〜！」と呼びかけているのに全く違和感が無い。

日が傾いて来たところで観覧車に乗って、これでラスト。

遊園地を出て駅に着く頃には周囲はすっかり暗くなっている。

ぼちぼちと年明け早々のイベントが待っている予感もする。

「明日からまた頑張ろうな！」

「「うん！」」

仲魔たちと遊んで充実したテンションのまま、新年の決意をするタケルであった。

NOXIOUS

「エントリーナンバー0204 チームぐんぐになる 2時間15分36秒 暫定3位です……」

アナウンスが流れ、電光掲示板のランキングボードに変化が現れる。

何故か芝浦にちやっかりと存在しているアルゴNSビル。

現在、その本社ビルを舞台に「セキュリティのテスト」という名目の元プレイヤーたちによるタイムトライアルが行われている。

VRならではの仕組で5分毎のスタートであるものの、内部でプレイヤー同士がかち合うということも無く、目まぐるしくランキングが変動し続けている。

原典に登場する企業のビルということもあって「裏に何かあるんじゃない？」と深読みをする者も多いが、現在のところごくごく普通にイベントは進行している。

時代的に液晶やLEDが主流になっていた時代の筈にも関わらず、順位が表示されているボードがオーソドックスな電光掲示板である、という点を除いて、特に不審な所も見られない。

「お、来てたんだ！ もうトライしたのか？」

掲示板を見ながら雑談をしていたタケルたちに話しかけて来たのはマロロ。ガチの攻略系ガイアーズと一緒に、非常に近寄りがたい空気を纏っている。

見るからにヒヤッハーなモヒカン、軍用のヘルメットに鬮體型のフェイスガードとタクティカルベストを含めて上から下まで真っ赤にカスタマイズした装備を付けたミリ系、「渋い」と言っていていくらいオーソドックスな僧侶姿ながらその顔面の右半分に入墨を入れた男、そして「オーツホツホツホ」と高笑いをしながら鞭型コンプを振り回す……エナメル系の下着と服の中間の様な装備の女王様とその下僕たる仲魔。

相対的にマロロがまともに見えてしまう濃い面子である。

「ちーっす、マロロさんの従妹さんですか、自分、ガイアやってますグラ3ってイイマスです」

「……よろしく」

引き攣りながらも挨拶を返すエリリ。

外見に似合わず丁寧な口調なので対応できているが、外見まんまの口調だったら逃げ出していただろう。

異界ではもっとおつかない悪魔をぶちのめしたりもしてるのだが、やはり人間相手だ

と勝手が違うのだろう。

「まだ、トライしてないけど、結構、みんな装備も含めて本気じゃない?」

「そりゃ、元ネタが元ネタだし、賞品とか期待出来そうだしなあ……」

「ついにガンプが!」

「1位の賞品が『車輛』だって噂だからなあ、このビルで車輛だろ? とくれば『あのト

レーラー』だよな?」

「オーブニング、カツコ良かったよね」

「で、マロロたちは何位?」

「今のトコ暫定13位ってとこか? あ、今下がった……ま、上位50位以内にはなんか

出るみたいだから、そこに入ればオツケーって感じ」

「中はどんな感じ?」

「マシンとダーク系メインに時々何故か霊獣が出るな」

「マシンは完全に時代考えると発達し過ぎ、今の遠隔操作ユニット越える動きを自律型

でやるとか……」

「公式HPによればアンチウィルスプログラムの応用ってことになってるらしい」

受付は既に済んでいたタケルたちの順番が回って来たのはそれから三十分ほど後のこと、個性的なマロロの仲間たちともかなり馴染んでフレ登録なども済ませた。

「お金持ってるって感じだね〜」

「なんか俺らのリアルより未来っぽくね？」

「だよね〜、床とか見た目金属っぽいけど感触違うし」

「マシンって気配が薄いから嫌いー！ 建物臭くないのに臭い悪魔出てくるし、なんか変、ココ」

フィーネが顔を顰めながらタケルに強く主張する様に、清潔な電子臭すら感じさせる内部に、ゾンビやらスライムやらが湧いてくるのは何やらゲーム内ゲームっぽい非現実感がある。

「タケル！」

「フィーネは一旦上に退避、ムルルは後ろ警戒、キヤロは俺の側にー」

「げっ、シャッターが下りやがった！」

「ペルソナ！ 補助いつとくよー！」

警告音と共に通路の前後の防火シャッターが下りる。

通路に面したドアが開き、平べったいメカがワラワラと溢れ出てくる。

アキラのアギが飛ぶがあまり効いている様には見えない。

「なんか、動きがゴキっぽくて気持ち悪い」

「変形しだした……アナライズ、マシン・TSUCHIGUMO、初見ってか、ここのお

リジナル？ 火炎耐性、電撃反射……マシンなのに電撃効かないとか酷くね？」

平べったい状態から変形、一部は蜘蛛の様な多足戦車の様な形に、一部は人型と蜘蛛型の合体した様な、いわばアラクネ状態になったマシン。

形状は異なるが同じ種類として認識出来ている。

つまりは状況や相手に合わせて複数の変形モードを持っているということなのだろう。

幸いと言つていいか重火器の類は持つて居ない様だが、行動を阻害する空気に触れるとすぐに固まる樹脂を噴出したり、火炎や電撃を放つてきたりする。

「固まるだけでも厄介なのに、あれ、可燃性が高いぞ!？」

「ははは……何故にマシンにハマが効く、意味不明過ぎる!？」

タケルの燭台の追加効果で一瞬で消滅するマシン。

マグの塊の悪魔ならともかく、現実の機械要素を組み込んだマシンの場合、これまでに遭遇した相手ではこうした事は無かった。

「これ、悪魔を加工して作つたマシンじゃね？ ツチグモつていたよな、メガテンの悪魔で!？」

「可哀相だとは思うけど、交渉とかも無理っぽいし、倒すしかないよね?！」

「機械の悪魔化の結果としてのマシンじゃなく、悪魔を素材に作つたマシンってことか、

趣味が悪過ぎるぞ、流石、原典・悪役企業！」

「タケルく、あいつら気持ち悪いよ……」

強さ的にはきちんと耐性を把握して戦えばさほど苦戦する相手ではない、今のタケルたちにとつては。

ただ、見た目からして気色の悪いゾンビ系悪魔以上に「気持ち悪い」相手なのだ。

ダーク系同様、比較的戦う相手としては気を使わずに済む筈のマシン系に、ここまで気分を沈ませる相手が居るとは思わなかったタケルたちは、戦闘が終わって、シャツターが開いても気を取り直して先に進むまでかなりの時間をロスしてしまった。

結果として最終タイムは3時間にはギリギリならず済んだが、50位以内の入賞はかなり微妙な線となった。

「まあ、電霊とか扱う企業だし、ダークサマナーの使い捨てとか平気でするところだから、やってもおかしくは無いんだけどね」

「遭遇はしてないけど、ダークサマナーとかヤバイメシアンやガイアーズだつて居るんだもんね、この世界」

「これから出てくるのかな、ダークサマナー。自分に縁の無い存在ならダークヒーローとかも『カッコイイ』とか言つてられるけど、目の前に出て来たり、外道な行為の結果とか見ることになるとか嫌だなあ……」

タイムスコアとは全く関係の無いところでタケルたちはどんよりとしている。

「タケルく、最終結果出るまで時間かかるんでしょ？ なにか食べに行こうよー！」

「カレー、カレー食べよう！」

「あんまり辛くないのがいいー！」

タケルの仲間たちは「自分の仕事は済んだ！」とばかりに食欲優先モードになっている。

エリリやアキラの仲間もそれに同調し、「いつまでもこうしてても仕方が無いか」とタケルたちも腰を上げてビルを後にするのであった。

「チーズがおいしいー！」

「エリリちゃん、エリリちゃん、ジャガイモがホクホクですよー」

神保町古書センターに本店があるカレー店。

甘みの強いまろやかな口当たりの欧風カレーの田町店を発見したので、そこで食事を取ることにしたタケルたち。

神保町の本店の方は入り口が分かり辛いが、こちらの支店の方はそうしたことが無かったことと、一般的な食事時と若干時間がずれていたことからあっさりと席に着くことが出来た。

タケルがビーフカレー辛口チーズ乗せ、アキラがエビカレー辛口大盛、エリリが野菜カレー中辛。

仲魔たちはフィーネがチーズカレー甘口、ムルルがホタテカレー辛口、キャロ、シエーラ、アンがお子様カレー、オカンが魚介カレー中辛、あと一人はキノコカレー甘口である。

ジャガイモまで含めるとかなりの分量であるが、一番無理そうに見えるシエーラですらゆつたりと味を楽しむ余裕ぶりである。

まあ、常人の数倍でも平気で食べるフィーネやムルルを見慣れているタケルからすると特に驚くことも無いが、偶然店内に居た他のプレイヤーの中にはシエーラの健啖ぶりに目を丸くしている者も居る。

食後に付いて来たアイスコーヒーを飲みながらまつたりとしているとマロ口からエリリに電話が入る。

「タケルたちは50位圏内から脱落してしまつたとの話にこのまま帰宅することになる。」

経験値的にはおいしいイベントではあつたが、若干モヤモヤしたものが残つたタケルたちではあつたが、おいしいカレーの恩恵で明るい気分です電車に乗る。

「パパ、パパ〜」と言いながら窓の外に見かけたものについて話しかけてくるキャロ

に、車内の老婦人が優しい目を注いでいる。

傍から見ると「大好きなパパとのお出かけにはしゃぐ娘」に見えるのであろう。

車内の注目を集めてしまっていることに気付いたタケルが「これ舐めて大人しくしてよな」とキヤロに飴をあげると、今度はフイーネとムルルが自分にもと騒ぐ。

結果、アキラやエリリの仲魔たちにもあげること……。

「一生付いていきますー！」スルーされがちなウコバクのウコンにもしつかりと飴を与えて、自分の仲魔じゃないのに忠誠度を上げてしまうタケルであった。

AWAKENING

「ふう、これで完了つと……」

技能向上のためのアプリ改造をひと段落し、タケルは冷めた紅茶を一口すすする。

いつもなら纏わりついてくるフィーネたちが大人しい。

タケルのベッドの上に寝転がって何かを見ている。

「何見てんだ〜?」

「ん、これ!」

「月刊、仲魔マガジン? なにそれ?」

「悪魔向けの雑誌、お店では売ってないの! 注文すると指定したポストに毎月入れてくれるんだよ。一冊100魔貨で一年購読すると1,150魔貨でお徳!」

表紙を見せながらフィーネが説明してくる。

以前に日本円でなく魔貨をねだられたことがあったが、これの年間購読料だったらしい。

一緒に少し見てみるとなかなか面白い。

「特集：これが勝ち組サマナーだ……俺に当てはまるポイント無いじゃん。魔界に帰る前にここだけは行っておきたい都内お薦めポイント……圧倒的アキバ人気だな、皇居も人気高いな」

「ニスロクの3分クッキングがね、毎回写真がおいしそうなの！」

「コンプの中で鍛える1クラス上の悪魔トレーニングは僕もやってるよ！」

「パパ、これ買って！ この広告の100種の悪魔エキス配合、超バイオマジカル肥料ソイレントグリーンX！」

ニコニコと広告のページを広げてキャロがおねだりしてくるが、丸囲みの中の研究開発したという高名な科学者の写真がどう見てもDr. スリルだ。

現実でもこの中でも見たことの無いほどの特徴的な鼻。

極めて胡散臭い。

期待で目をキラキラと輝かせているキャロには悪いが、どう考えても悪影響しかなさそうだ。

タケルは誤魔化すことにして外に食事に行くことを提案する。

「ラーメンが食べたい！」

「中華？ チャーハンと餃子にコンソープつけていい??」

「エビチリ、エビチリ！」

返ってきたリクエストからすると今日の行き先は商店街の中の中華料理屋になりそうだ。

小さな間口の老夫婦がやっているお店だが、メニューはなかなか充実している。

タケルは角煮のせチャーハンにしようかと考えつつ、仲魔と共に部屋を出る。

ふと気付けばマンションの駐車場に車が増えている。

しかも二台。

いつの間にか住人が増えていたのだろうか？

新たな車はいずれも趣味全開のマニアックなバブルカー。

BMWイセツタとメツサーシユミットKR200という共に二人乗りのドイツ車で、

羽根を取って車輪を付けた飛行機っぽいKRと、前面がドアになっているという独特な

デザインのイセツタ、共にちよつとオモチャっぽい。

「うわあ、タケル、タケル、この車可愛い〜！」

「カエルさんと冷蔵庫みたい〜！」

「こっちの車は飛行機みたい、羽根付いたら飛ぶかな？」

「ペタペタさわつちやだめだよ、人の車なんだから」

「構いませんよ、あ、こんにちわ〜！」

「あ、サダロだ〜、こんにちわ〜！」

「こんにちわ♪」

「あ、こんにちわ、買い物帰りですか？」

スーパーの袋を提げて声をかけてきたのはサダロ。

しっかりと自炊しているようで、冷凍食品や惣菜メインの現実でのタケルとは違って、スーパーでの買い物は野菜や肉といったきちんとした食材だ。

「はい、卵が安かったんで♪」

明るい口調で返事をするサダロ。

相変わらず外見と話し声のギャップが激しい。

「タケルさんたちはお出かけですか？」

「ラーメン食べに行くの！」

「僕はチャーハン！」

「エビチリ！」

「……つてな感じで商店街の中華屋さんへ」

「まあ、いいですねえ」

「よろしければ、ご一緒します？」

「はい♪ これ、急いで置いて来ますんで待っててくださいね」

急いでいる様子は見えるが致命的に素早さが足りない動きで部屋に戻っていくサダ

口。

パタパタと外見としぐさがチグハグな様子に、いまだ慣れる事の出来ないタケルである。

「この可愛い車、サダロのだったんだねえ」

「なんかウシロが購入時に苦労させられてそうだなあ……」

「今度、乗せてもらえるかな?」

意外なオーナーには驚かされたが、こうなるともう一台の方のオーナーも気にかかるところである。

「お待たせしました」

余り素早い移動では無かったものの、当人的には目一杯だったのだろう。少し息が切れている。

「いえいえ、じゃ、ゆっくりと歩いていきましよう」

「サダロ、サダロ、今度、あの車乗せて!」

「僕も僕も!」

「じゃ、今度、この近くを車でお散歩してみましようか?」

「わーい」

車で散歩というのもなんだか変な感じではあるが、サダロが口にするると自然な印象を

受ける。微妙な天然ペースのなせるわざか？

中華屋に近付くと匂いと音で目をつぶっていても分かる。

中華鍋とお玉のぶつかる音、そして炒め物の焼ける音。

「いらっしや〜」

客で賑わい慌しい店内でもどこかおっとりとした歓迎の声に迎えられ、空いているテーブル席に座るとすぐに水が出てくる。

「ここは初めて入りました」

髪で隠れて良く見えないが、ニコニコとサダロがメニューを眺めながら話しかけてくる。

「割となんでもおいしいんで、食べたいと思ったものを頼んで平気です」

「私はラーメンが一押し！」

フィーネが好きなこのラーメンはシンプルな醤油味のもの。

見た目のインパクトや「これが凄い！」といった特徴は無いが、しばらく食べずに居ると食べたくなってくる味である。

「僕はチャーハンと餃子、後、コーンスープはみんなで飲むの！」

味のしみ込んだチャーシューが入って、その分ご飯のお塩は控えめなチャーハンは絶妙なパラパラ加減だが、その分最後の一口、二口を食べるのには苦勞することになる。

ギョーザはんにくの入って居ない豚肉と白菜がメインのもの。

パリッとしていてモチモチで、夕方にはこれとビールをセットで頼むお客さんが多い。

「私はエビチリ、あと白いご飯!」

エビチリはレタスなどが敷かれたものが多いが、このエビチリはキャベツの千切りの上にふわふわの玉子が乗り、更にその上にエビチリといった形で供される。

辛いものがあまり得意で無いキャラだが、甘みのある玉子とさっぱりとしたキャベツと一緒に食べる形になるこのエビチリの場合は、辛味がいい具合に緩和されるらしく、お気に入りとなっている。

タケルが角煮のせチャーハン、サダロがタンメンと注文が決まり、料理が出来上がるまで雑談。

サダロのイセッタ、現実でも乗ってみたかったが安全性などに問題があるため諦めていたものを、中のカーシヨップで見かけて欲しくなり半ば衝動的に買ってしまったのだそうだ。

「本物と違って、こちらのは電気自動車なんですよ、静かなんで町の音なんかも聞けてお気に入りです。現実と違ってトロトロと走っても文句言われませんし……」

本来はスクーターやバイクなどのエンジンを積んだバブルカーだが、メガテン内部仕

様では電気自動車になつてゐるのだそうだ。

持ち主のことは知らないがメツサーシユミットも同じショップで売つていたものだろうということ、そちらも電気自動車らしい。

V Rの中ならではのご都合というか、サダロの契約したマンションの駐車スペースには充電用のコンセントがしっかり存在しているのだとか。

「自分のトコにはそんなの無かつたよな」と思いながら、先に注文した料理が来たキャロに「食べてていいよ」と声をかけるタケル。

次いで料理が来たサダロにも「どうぞ、お先に」と言うと、さすがに現在の髪では食事は無理だとサダロはゴムの髪留めで髪をまとめる。

「ナンパ除けでこの髪型なのも理解できるな」と思つてしまふほどの整つた顔があらわになる。

思わず見とれ、フィーネからのジロつとした視線に目をそらすタケル。

ちようどいいタイミングで来た料理に逃げる。

チャーハンの上にチンゲンサイ、さらにその上に豚の角煮。

トロトロの角煮はレンジでも簡単に切れる。

まずはチャーハンを一口。

付け合せの刻んだネギだけ浮いたスープに口をつける。

テーブルの上の練り芥子を取り角煮に付ける。

チャーハンごとすくって口の中に。

肉の存在感を強く主張しながらも舌だけでも崩れる角煮を咀嚼する。

「パパ、はい！」とキャロが渡してくれた自分の分のコーンスープをレンジでかきこむ。「キャロ、ありがとな」とお礼を言い、キャロが嬉しそうに笑うのを見つつまたチャーハンを口にする。

白米を食べる以上に「米の質感」を強調してくるチャーハンを噛み締める様に食べる。「やっぱりラーメンはこうじゃないと！」と力説しつつ麺をすするフイーネの姿に「次は自分も久々にラーメンにしようかな」と思う。

角煮の汁を吸った部分のチャーハンをチンゲンサイで巻く様にして口の中に。

こうして食べるとチャーハンが主食でなくオカズの様だ。

軽くお冷やを口にして、スープを一口。

コーンスープにとかれた玉子に口の中を軽くヤケドしつつ、今度は中心部から離れた角煮の影響の無い部分のチャーハンを食べる。

角煮、スープ、そしてチャーハン。

噛み締める、食べる楽しみを感じる食事に満足して、最後に余韻を消さない程度に軽くお冷やを口にする。

仲魔たちもサダロもニコニコとしている。

「ここもおいしいですねえ、今度、弟も連れてこようつと」

髪を戻しながらサダロが言うのを「ちよつと顔をまた隠しちゃうのはもつたいないな」と思いながら「どつちかかって言えば男の子向けの店ですからねえ、ココは」と答える。

「ご馳走様」と声をかけて勘定を済ませ、店の外に出ると入れ替わりの様に造魔スタイルのプレイヤーが店内に入っていくのとすれ違う。

まだ寒い外の風だが、温かい食事後には気持ちよく感じる。

「タケル〜！ デザート、デザート！ 商店街来たんだから和菓子屋さん寄って帰ろう！」

フィーネの要求に応え、自分も興味が有りそうなサダロも伴って和菓子屋に向かうタケルであった。

DISCLOSURE

クリスマスと並び非モテ民の暗黒オーラが立ち上るバレンタインデーであるが、女神転生 *Ruinna* の場合、出現悪魔がバレンタインのコスプレ、限定女体化と変化を見せ、通常のアイテムドロップ比率が向上するだけでなく、チョコレートが入手出来たり、VR だけでなくアプリでも女性タイプの仲魔からチョコレートが貰えるなど現実には比べれば遥かに恵まれた一日が過ごせる様になっている（萌え化してロリっ子外見になったモコイに「ダメダメだね、チミイ」と言われて再起不能レベルのダメージを食らったサマナーも居たようだが……）。

それでも遺伝子レベルで刻み込まれた暗黒オーラは溢れどころを求め、何故かメシア教に矛先を向けて爆発。ちゃっかりと便乗したガイアーズと共に各地のメシア教会で激しい戦いが繰り広げられた。

まあ、動機が動機なんで、メシアンが武闘派を引っ込めて見た目重視のシスターたちを前面に出すとあつけないほど簡単に終息したのだが……。

そうしたイベントのせいだろうか、久々にタケルたちが顔を合わせたアンデはやたら

と疲れて見えた。

「ああ、お久しぶりです……」

「オヒサビサ、って疲れてんなあ、攻略最前線でも回された？」

「一応前線組の一角になんとか食い込んでます。節分もバレンタインも気付いたら終わってましたねえ……」

「タケル、タケル、アンデの耳凄いよ！」

「アキラが見たら羨ましがるな」

「ちゃんと畳めちゃう残念仕様ですけどね」

季節遅れのハロウィン仮装の様に、アンデの耳はコウモリの羽になっている。

ただし本物のコウモリの羽と同じく、畳めるようになっていて普段は趣味の悪いヘツドフオンの様にも見える。

「そう言えばアンデは先祖返りだったっけか……、吸血鬼要素だろ？」

「それもよりにもよって『串刺し公』の分霊要素持ちだったようで……」

「串刺し公ってそりやまた……」

「しかもガーディアンにマンセマツト様の分霊が付きまして……」

「一人ハルマゲドン状態？」

「本来ならヴラド公はメシアンサイドなんですけどねえ……、その後の伝承やらドラ

キユラフィクションのせいで、すっかりカオス寄りに……」

ヴラド公は対イスラムの最前線に立ち続けた存在、本来から言えばメシアン寄りの存在である。

マンセマツトも悪魔であるとされたり、サタンの雛形と見做されたりする目的のためには手段を選ばない存在だから、串刺し公覚醒のバトル神父のガーディアンとしては適格かもしれない。

「本来ならマツチングしない吸血鬼要素が一周回って元ネタにぴったり来る感じになっちゃったなあ……」

ロールプレイ極め過ぎである。

「最近、私だけで無く、攻略組全体で前世覚醒イベントが発生してる人が見受けられますね。私、グロ耐性あんまり高く無いんですが、串刺し公の過去っぽいもの見せられましたし……」

「あー、だとすると、俺のアレもそうなのかな?」

「タケルさんも覚醒イベントが?」

「スサノオの息子のマイナー神だけどね、ただ、現実の方で見たのか、こっちで見たのか覚えてない……」

「ああ、まだ都市伝説レベルなんです……覚醒後、現実でもこちらのアバターに引きず

られる様な変化を見せてる人がいるという噂も……」

「え、あつちで魔法とか使ったり?」

「そこまではいきませんが、毛深くなったり、鱗っぽい角質化したり、食べ物嗜好が極端に変わったりはしていると……私も最近、リアルでトマトジュースばかり飲んでます」

「それはなんか違う」とは言えなかったタケルであった。

その後、初台までアキラたちと遠征に行き、経験値を稼いだタケルは、コンビニ↓自宅↓フィーネたちのお喋りからのログアウトという定番パターンで過ごした猛は、パソコンに向かいアンデの言っていた様な内容について掲示板の書き込みを漁る。



【俺もお前も】覚醒者専用雑談喫茶バビラン その6 【魔王様?!】

1：沼袋のバスター

ここは『女神転生R u i n a』において、覚醒イベント(?)を経験したプレイヤー

が集うスレです

「俺だけの妄想じゃなかった!」と安心して、自分の経験や現状を書いたりしつつ、全然関係無いことも雑談したりしましょう

リンク先へのアクセスは自己責任で!

煽り、荒らしは華麗にスルーしましょう

愛情の無いコメント、貶しはNG

新人さんへの詰問的なコメントもNG

和気藹々、マターリ進行でいきましょう

過去スレ: 覚醒者専用雑談喫茶バビラン その1〜5

(中略)

412: 西荻窪のペルソナ使い

仲魔やペルソナやガーディアンに付いてる悪魔とは全然無関係みたいだねー、俺なんか前世ダゴンで大本ネタの方なのかクトゥルーの方なのか分からんし

413: 溜池山王のバスター

造魔なのに覚醒しますたww

ヨシツネだったから英雄進化出来るかと思ったら全く何も無し

何回か変な夢見ただけだねえ

414：都立大学のサマナー

ロウ・カオス関係無いよねえ、これ

サンダルフォンの記憶なんか蘇っても根っからの中立の人間には面白くもなんとも無いんですが？

415：下高井戸のバスター

例の神父とかも覚醒済みらしいけどガーディアンと前世属性が真逆だった

416：蒲田のサマナー

いや、どうやりや現時点であんな大物天使ガーディアンに出来んだよ

洒落にならんだろ、あれ？

元ネタに似た外見だけでヤバかったのに

417：白金高輪の異能者

で、結局、みんな臨死体験者ってのだけが共通項??

418：赤羽橋のペルソナ使い

>>417 いや、それも未確定

ガセ扱いされてたけど、臨死体験する前にそれっぽい夢(?)を見てた例がチラホラ確定っぽいのは何段階かあって、パトるとその段階上げが加速するってトコくらい

最終段階まで行った人間は今のトコ出てない模様



「結局、良く分かってないってことか」

レンジで暖めていた食事を食べながら掲示板をスクロールさせる猛。

自身も経験していることだが、メガテンのイベントっぽい内容ながらイベントっぽく無い点多々見られ、公式サイドからも一切のコメントがでていないため現状確認と駄弁りがメインとなっている。

「まあ、俺の場合、マイナーだけど変な神様じゃないのが救いだよな」

外見的にヤバいマールだの、エピソード的にヤバいマンセマツトだのに比べれば穏当な前世だ。

本当かどうかは全く分からないが……。

しっかりと掲示板でもネタにされているアンデに苦笑しつつ、食事を取り終えた猛は軽く一眠りしようとベッドに横になった。

都内でも中野近辺だと民家の庭に木が植えられていたりする。

タケルたちの住むマンションの隅にも木が生えていて、樹木に対する知識の無いタケルにはそれが何の木か分からなかったのだが、蕾がほころび花が咲いて梅の木だということが分かった。

鮮やかな色合いの紅梅である。

フィーネたちと見ていると「梅ですか、綺麗ですなあ」とサダロに声をかけられた。

以前の会話を思い出したフィーネが車に乗せてもらいたがり、ムルルもキャロもそれに乗、快諾されたため、タケルもいつしよに「車でお散歩」に出かけることになった。東中野近辺は割と狭い道が多いが、サダロは車のスピードを上げないため危険は感じない。

女性ドライバーの場合、周囲を余り見ないタイプが見受けられるが、サダロの場合は逆に見過ぎるくらいで、時々何かを見つけてはウインカーを点けて停車している。

タケルの仲間たちは喜んでいますが、ウシロなどが同乗した場合など「のんびり具合にストレスが溜まるだろうなあ」などとタケルは思っている。

石焼きイモの車の速度とほぼ同等なのだ。

確かに「車でお散歩」だ。

現実では「トロトロしてんな！」とクラクションを鳴らされるだろう。

周囲とペースが異なる人間には暮らしづらいのだ、現実は。

そういう意味ではV Rの中の方が人に優しい。

それでも良く考えてみればフィーネの飛行速度よりは速いものだから、車に乗っている時の主観スピードというものは恐ろしいものだ。

時速30キロで遅く感じる。

道が順調なら60キロを越していても怖さを感じない。

時々寄り道や回り道をしながら高円寺まで散歩の足を伸ばし、そこから折り返してマシヨンの駐車場へ。

車の小ささもあつて車庫入れもスムーズだ。

サダロの愛車であるイセツタの場合、左右がギリギリのスペースに車を停めても全く問題無く降り降り出来るのだが、速度を出した運転こそ苦手なものサダロの運転自体は決して下手なものではなかった。

「どうもありがとうございました」

「ありがとう！」

「タケル、タケル！ 私も自分の車欲しい！」

「パパ、梅さんにお水あげて！」

タケルがサダロに散歩の礼を言うが、それを素直に真似て御礼を言うのはムルルだ

け、フィーネは自分の車をねだり、キャロは梅の木への水遣りをねだる。

苦笑するタケルだが、サダロは微笑ましそうにフィーネたちを見てお辞儀をすると部屋と戻っていく。

「今度なんかお礼しないとなあ」と見送った後、仲魔たちと会話しつつ部屋へ。

部屋に戻ったタケルはフィーネの用件は後回しという名の棚上げをして、キャロ用に買った可愛い如雨露をキャロに手渡す。

園芸店の前を通った時に、これを見つけたキャロのキラキラした目に負けた結果の品だ。

キャロだけに何か、という訳にもいかなかったため、ムルルにはおもちや付きラムネを、フィーネには普段買うものよりも高いアイスを買う羽目になった。

タケルは洗車用に買ったホースを担ぎ、冷蔵庫から取り出したカマンベールチーズをフィーネとムルルに渡して「ちよつと水をあげてくるから留守番頼むな」とキャロと外に出る。

キャロの持つ如雨露に水を入れてやってからホースから水を撒いていると、出来た虹にはしゃいだキャロに「もつとやって！」とねだられる。

二人して少なからず水を被ってしまい「大きなタオルも持つてくるんだったな」などと思うタケルであった。

PLUNDER

「タケルく、あつちからいい匂いがするく！」

「現実だとそうでも無いんだが、こつちで見ると不安感にかられるよな、こつち」

「おつきいカニさんだね、パパ」

「ハサミがカツコいい！」

今日のタケルは新宿に来ている。

女神転生 Ruina の公式HPで謎のカウントダウンが始まり、「これは全体イベント来るんじゃないか？」とアキラやエリリと都庁で強化のための攻略を行うことになっているのだ。

待ち合わせは現地集合だが、時間はまだまだ後、せっかくのお出かけだからこのフィーネたちのリクエストで少し早めに来て新宿の街をふらついている。

新宿の場合、他の町に比べると異界と普通の場所の境界線が非常にあいまいだ。

また、最近の噂では飲み屋街にベルベットルームのドアがあるという話も広まっている。

都庁という攻略最前線を抱えているため、そちらの方が目立って、他の異界に関して

は情報が少ないが、町のあちこちに中小規模の異界が存在している。

タケルたちは伊勢丹前を通り過ぎて、カニの看板で有名なカニ料理店の前に来ている。

現実の方では大阪の店では見たことがあるが、新宿などでは見かけない焼きカニの店頭販売しており、その匂いにフィーネがひっかかったというのが今の状況である。

「カニか〜」

「タケル〜、食べてこうよー!」

「今ならランチの定食や御膳が頼めるか……そんなにくつちには来ないし、入ってみるか?」

「やったく、カニ、カニ〜!」

「わーい、本物のカニは初めてだよ!」

キャロの言葉に思わず周囲を気にしてしまうが、特に誰も注目はしていないようだ。

確かにコンビニやファミレス、地元のお店がメインのタケルたちの場合、偽物というかカニカマの方が遭遇する確率は高いのだが、別に貧乏だったり、虐待をしている訳ではない。

むしろ仲魔に好きなものを食べさせ過ぎているサマナーでランキングを行ったら上位に入るタケルだが、中でカニを食べたことはタケルを含めて誰も無い。

中に入ると独特の臭い。

現実サイドでは外国人観光客の利用も多い店だが、VR内だと日本人の比率が高い。外国人では無く、サマナーの仲魔たちの悪魔だけでなく、自分でどうやってかは知らないが稼いだ日本円を持って客として来ている悪魔も居る。

名前しかアナライズ出来ない、おそらく高位分霊であろうフルカスの姿も見られ「ある意味共食いなんじゃ？」と思うタケル。

カニを食べる時は皆無口になるというが、確かに料理の追加や飲み物を頼む声以外はあまり人の声はしていない。

「パ。パ。やって〜！」

「こつちに貸して……道具あってもキャロには難しいよな。フィーネは大丈夫か？」

「この程度のカニ、私にかければ大したことないわよ、この10倍は持つてきなさい！」

「ムルルは身を取るのが上手いな」

「昔だったら殻ごと食べられたんだけどね」

本当に10倍持つてこられたら困ってしまうな、などと思いつながらタケルはキャロの分までカニの身を取りながら会話を続ける。

「サラダも美味しいなあ、おまけって感じじゃなく、ちゃんとした一品だな」

「このコリコリ、ポキポキしたのおいしい！」

「コロッケ、コロッケ〜！」

「熱っ、冷凍のとは違うなあ、こう濃厚なっというか……」

「釜飯、釜飯〜！」

「お茶漬けみたいにしてもおいしいね！」

大満足の食事を終え、最後のデザートも堪能し外へ。

待ち合わせまで三十分弱、ゆっくりと散歩気分で向かえばちようどいい。

軽く伸びをしてから足取り軽く歩き出すタケルであった。

「……βの時とこの辺全然違うのよね。その辺も踏まえて考えると、次のイベントでここが中心になる可能性が高くなって」

「……がそう言うなら俺はイベントまでここで集中してやつても構わないけどよ……つて、歩道の真ん中で仁王立ちで立ち塞がんなって、他の人の邪魔になるだろ？」

都庁近くでの高校生カプルの会話を聞くとも無しに聞きながら待ち合わせの場所に。

「どつかで見た様な？」などと気にかかるも、さして内部での知人の数は多くないタケルである。「近所で見かけたのかね？」と思考を中断し、既に待ち合わせ場所に来ていたア

キラたちに声をかける。

「お待たせ、超ハイパーピクシーファイネ登場！ エリリ久しぶり〜」

「ファイネちゃん久しぶり〜♪」

「アキラ髪型変えた？」

「ちよつと自衛官っぽく？」

「あー、そういうつもりだったんだ！」

ツツツン頭が気持ち短めになっているアキラだが、自衛官っぽくなっているかという
と実に疑問である。

「この中つてとところどころ昔の漫画のネタとかも入ってるからよ、新宿の地下にちゃっ
かり実銃の射撃練習場あるんだよなあ、ここ来る前、そこで練習してた」

「シ〇イハンターネタ？」

「そ、まあ、バスターなんか向けに開放されてて、個人所有じゃないけどな」

「自衛官なら自衛隊の設備で撃てるんじゃないの？」

「ログアウト中に微妙に経験積んだことにはなってるみたいだけど、ログインしてる時
には出来ないんだよなあ」

「エリリ、メット買ったんだ」

「ネコ耳メット！ それも別作品ネタじゃん」

「カラーリングまんまだけどフルフェイスじゃないし、ライダースーツじゃないからオツケーでしょ？ オークションで買ったんだ！」

「まあ、ネコ耳メツトって、現実に売り出されたりもしてたみたいだしなあ……」
わいわいとやり取りしながら都庁の中へ。

一部異界化してるとは言え、通常の状態の部分がほとんどなため、普通の人たちも行き来している。

「さすがに最前線はキツイよな」

「今のウチらのレベルだと20階くらいの異界？」

「もうちよつち上でも平気だとは思うけど、イベ前にパトするのも勘弁だし、今日はその辺でいんじゃない？」

「都庁の中ってロウ・カオスお構いなしだっけ？」

「なんか争ってるっぽい感じらしいよ？」

「アンデに聞いたときや良かったな？」

「耳がコウモリなんだって？ 羨ましいよな」

「あれ、アキラ覚醒が進んだとか言ってなかったっけ？」

「タケル居ない時にソロでパトってたらな……でもアンドレアルフスとかいう孔雀だぜ、孔雀！ 派手な色の羽毛生えてきちまうし、口は嘴っぽくなるし、悪魔人要素晒せなく

なっちまった」

「派手で騒音と一緒に現れるって珍走団みたいな悪魔だっけ？」

「珍走団は酷い、せめてチンドン屋と言ってくれ」

「あの、大して変わらないって思うの私だけ？」

「タケルタケル、アキラってチンドン屋に転職したの!？」

「ちげえよっ!!」

会話をしながらも各々装備を確認し、アキラは銃の残弾と種類を確かめて「通常弾のままにしてバリバリ使っていくか、それとも神経弾入れといて、いざという時用にするか？」などと思索している。

タケルは相変わらずの銀の燭台だが、レベルアップに伴い力が上昇した関係で少し軽く感じる様になっている。

エリリもおニユウのメットをガラス窓に自分を映して確認してはニマニマしている。

「よーし、いくよー、出発〜!」

掛け声は威勢がいいがファイネはタケルの頭に乗ったままである。

ふよふよと飛ぶムルル、キャロはトコトコと小走りになっている。

「ダンタリアンって色んな創作で色んなキャラで登場してるから『お前なんかダンタリアンじゃない!』とかあちこちで言われてるかもね？」

「メガテンだとあんまり強く無いしなあ」

「タケル〜！ 真面目に攻撃〜！」

「はいはい……」

『『はい』は一回〜！』

横殴りに一発、返す刀（燭台だが）でもう一発。

そういう特殊効果は無い筈なのに、ダンタリアンは朦朧としている様に見える。

「やっぱタケルの鈍器はなんか違うよな？」

「あの『兄貴』って人の丸太見ちゃったからインパクトは小さくなったけど、最初見た時

『なに、この人！』って思ったもん」

「手が休んでるぞ〜！」

「悪い、やっぱサブマシンガン欲しいなあ、単発は効率悪い」

「このステイック、攻撃力は高いんだけど、たまに手が痺れるんだよねえ」

「ふっふっふ、ついに覚えた私の必殺技が火を噴く時が来たよーね！ いっけー、メギド

！」

「おおお、さすがフィーネさんですう、でも微妙にHP残ってるみたいなんでザンいつと

きますねえ」

「むき〜、トドメを取られた〜！」

下つ端口調ながら、ちゃっかりとトドメを持っていくシエーラ。

ムルルは魔法よりブロンズの花瓶での直接攻撃を選び、上に下にとふよふよ高さを変えながら脛を打ったり、後頭部を殴ったりしている。

「フィーネちゃんメギド覚えたんだ！ あれ？ ……ハイピクシーつてメギド覚えたっけ？」

「他のハイピクシーはいざ知らず、超絶天才ハイパーピクシーの私はさらなる高みを目指すわよ！」

「まあ、実際属性関係なくダメージ入るから有り難いつていや、有り難いけどな」

「パ、パ、これ落ちてた！」

「ありがとな」

通常入手出来るアイテムの他にアイテムをキャロが拾ってきた。

タケルが頭を撫でると嬉しそうに身をくねらせている。

それを見たフィーネもムルルもタケルの顔の前に頭を突き出して、無言の要求をしている。

「相変わらずの仲の良さだな」

「ホント、羨ましいくらい」

「エリリちゃん、エリリちゃん、私はエリリちゃんのこと大好きですよー！」

「クマちゃんにべったりだったのに？」

「あの人は反則ですう、へばりつきたくなるオーラが出てるんです！」

「墮天使の次は天使か！ 連戦気味だけど、MPとかは平気だよな。アキラは残弾平気か!？」

「だいじよぶ！ この数ならなんとかなる！」

「ペルソナつ、そんでもって剛殺斬！」

「マハジオつ、いっけくっ！」

「すりランラン葬らん！ かつきくん！」

「タルンダくなの！」

会話中に出現した天使に対応して戦闘を再開する。

プリンシパリテイとパワーの混成チーム。

パワーのメギドも危険だが、接近戦をするタケルにはプリンシパリテイのヒートウェーブが厄介だ。

仲魔たちは躲しているがタケルは食らってしまい、キャラの世話になる。

「サンキュ、キャラ」

減った分のHPはキャラのディアで完全回復。

「お返しだっ！」

プリンシパリティの顔面に叩き込まれるタケルの燭台。

アキラやエリリは飛び散る歯の欠片を幻視した。

敬虔なクリスチャンが見たら腹を立てるだろうが、メガテン内の天使など他の悪魔となんの変わりも無い。

いや、それどころか、原典を含めた様々な作品でのロウの行動から、伝承上残酷だったり、「死」そのものだったりする悪魔以上にプレイヤーから嫌われてたりもする。

「伝承上嫌われても自業自得なマンセマツトとかと比べると可哀相な気もするが、これも経験値のためっ！」

倒すのは魔法でも銃でも鈍器でも同じ筈なのに、タケルの鈍器は何故か凶悪な印象を見る人に与える。

仲魔たちはそんなタケルの攻撃に大喜びなのだが……。

「この部屋は安全地帯かな？」

「少し休んでくか」

「タケルく水筒く！」

「パパ、私もお水ちようだい！」

「ぼくは飴だけでいいや！」

人間たちが休むより先に、仲魔たちが休憩モード。

エリリがアンを追加で召喚、アキラもオカンともう一人を召喚し、さらなる経験値稼
ぎに備える。

「さて、じゃ、戦闘再開といくか！」

タケルたちは都庁内部の攻略へと戻っていくのであった。

SUMMON

「引越し?」

「はい、メシア教団の方からの指示でメシアンの一定以上の者は教団が用意した新宿周辺に」

イベントに備えたレベル上げの合間、久々にブロードウェイに足を運んだタケルアキラたちはそこで出会ったアンデからそんな話を聞いていた。

初台や新宿三丁目、笹塚、南新宿、新宿御苑といった徒歩でも新宿に行ける程度の距離のマンションなどにメシアンたちが引越しを斡旋されているのだそうだ。

「まあ、ここからも新宿はさほど遠くは無いし、俺らも最近じゃ都庁とか結構行ってるしな、全く会わなくなるってことはねえだろうけど、次のイベントつてもしかして思ってる以上に大事になりそうじゃね?」

「都庁で遭遇する悪魔もなんか意味深なこと言ってるしな。単なる有り勝ちなフレバーの会話だと思ってたけど、もしかして都庁がホントにイベントのメインになるのか?」

「新宿徒歩圏つてのがちよつと物騒なんですよねえ、交通機関が使えなくなる様な事態が発生するんじゃないかって」

「あー、俺らはタケルの車とかもあるしなんとかなるけど、自前の乗り物確保してる方が少数派だからな、この中」

「タケル、タケル、あつちの人が食べてるケーキがおいしそう！ 私も頼んでいい？」
シリアス目になりかけた会話をいつもの調子のフィーネの声がぶち壊し、いつも通りの少し緩い空気に戻る。

「フィーネさんも最初に出会った時から随分と強くなっているようですが、変わりませんねえ……」

「私はいつだって、ハイパーで最強で無敵だよ！」

ピクシーからハイピクシーに進化を遂げて、その後も着実にタケルたちと力を付けて来たフィーネであるが、中身はタケルが望んでいた様に以前のままである。

自我の強さという点では現実の肉体を持つタケル以上の強さ、というかフィーネに限らずムルルもキャロも、そしてアキラやエリリの仲魔たちも強さの変化などはあつても元々の性質にはあまり変化が見られない。

話も一区切りが付き「引越しの準備もありますので」とアンデが去って行つてもタケルの仲魔たち、そしてタケルの口利きで召喚されたアキラの仲魔たちは飲み物や食べ

物夢中で食べている。

アキラは相変わらずオカンの世話を鬱陶しそうにしながらも召喚を解除したりはしていない。

膝の上に座ったキャロの上にこぼさないよう注意しながら、ぬるくなったアイスコーヒーを飲むタケルであった。

一方のエリリは、今日はいくまちゃんと浅めの異界巡りをした後、マロロの神社に顔を出している。

「見た目がおつかない人たちが居るからくまちゃん大丈夫かな？」と最近更に増えたガイアの居候たちを思い浮かべて少しためらったエリリであったが、話して聞かせたクダギツネのクーちゃんに会いたがったため、くまちゃんを伴っての訪問である。

見た目に反して礼儀正しいモヒカンに迎えられ、少し心配しながら横を見るとくまちゃんは普通にお辞儀をして挨拶をしている。

外見の怖さは全然問題無かったようだ。

実のところ、くまちゃんは同年代、特に普通の外見の相手に対しての方が警戒心が強い。

タケルに關してもタケルだけなら警戒しただろうが、フィーネたち仲魔とのやり取りと見て警戒を緩めたという経緯がある。

どんな外見だろうと、礼儀正しくこちらに接してくる相手には割と普通に対応出来るくまちゃんだった。

そんなくまちゃんは今クダギツネのクーちゃんにメロメロである。

着ぐるみなのに蕩けた表情を見せてクーちゃんと遊んでいる。

一方でエリリはマロロからちよつとした情報をもらっていた。

新宿に引越したり、新宿の繁華街などを徘徊するガイアーズが増えているのだそうだ。

「ガイアもウチに出入りしてる連中は話を通じるからいいんだけどな、過激派連中は満月の悪魔より話を通じないからなあ……だから、新宿に一人や女の子同士で行くのはしばらく控えた方がいいぞ?」

「もともと新宿はあんまり好きじゃないからいいけど……」

「これ始めた頃に半泣きで電話してきたもんなあ『ここ、どこ?』って」

「ちよ、そ、それは言わないで! だって新宿の地下が分かり辛い上に改札口が多過ぎるんだもん! それに西武のは別の場所に駅があったりとか、南口なんか下手すると代々木の駅からの方が近かったりとか分かる訳ないでしょ!」

「まあ、その辺はお友達やタケルたちの方がしつかりしてそうだからいいけどな。にしても次のイベントはホント洒落にならないことになりそうだぞ？ 鍛えてはいるみただけど、パトらない様に注意しとけよ？」

「大丈夫よ！ 私だって、ウチの子たちだって鍛えてるんだから、最近じゃ都庁とかでも！」

そういうエリリのピクシー、シエーラはくまちゃんと一緒の時はいつもくまちゃんにべったり、今もクダギツネと一緒に遊んでいる。

これに関してはエリリはすっかり諦め気味だ。

自分だって時々くまちゃんをぎゅーつと抱きしめたりしたくなるんだからと、むしろ似た者主従なのかなとも思っているくらいだ。

結局、エリリとマロロの会話はくまちゃんがクーちゃんとのコミュニケーションにすっかり満足するまで続いたのであった。

「水も滴るいい男ってか？」

「まさか水中戦闘なんてなると思ってたよ！」

「海水じゃないのが救いだな……」

タケルたちはイベント本番に備えて、今回は都庁から離れ池袋に来ていた。

池袋の異界、まあ、現実同様人間が作った異界（というか腐界）も存在していたが、そこらではなくサンシャイン60の方だ。

通りを通って建物に入り、都庁とさほど遜色の無いレベル帯の悪魔と戦いながら経験値稼ぎに努める。

順調に攻略は進んでいたのだが、水族館のあるフロアーの一部が水びたしとなっており、そこから出た水棲の悪魔に引きずり込まれたり、追撃の為に水中に入る必要が生じたりしたための現在のタケルたちの有様である。

「これからは現実の延長だけじゃなく、こうした特殊な環境の異界とかも増えそうだね」
「水はまだいいけど、夏場に火山とか砂漠とかはやめて欲しいよな」

「森とかは現実と違って蚊が居ない分マシかもしれない」
「森自体は好きなんだけど、虫はやだよねえ……あとヒルとか」

「昔、親父の田舎行った時、犬の散歩させられて途中で犬になんかオレンジ色の紐みたいな付いてたからなんだと思ったらヒルだったな」

「うわあ、やだよだ」

「タケルー、これ落ちてたよー！」

ムルルが拾ってきたのは「ルービックキューブ？」に良く似た物体。

「これ、メガテンとは全く別ネタだろ？」

「ムルル、今度ちゃんとしたの買ってあげるから、これを揃えるのは諦めような？」
「閣下が喜び勇んで出てきかねないよな、こういうギミック」

取り敢えずは取っておいて、オークションにかけようという話になった。

この手の物は欲しがる者はいくら出しても欲しがる……要らない人間にはゴミ以下ののだが……。

現実と異なり、割とあっさり乾いた服で、攻略を続ける。

VRの場合、過度に現実に影響を与える効果は、行政によって禁じられているものもあれば、開発側が自主規制しているものもある。

「風邪を引きそう」という感覚は特に現実へ影響を与える可能性が高い。

「引いたかな」とか「引きそうだな」という主観が体調に影響を及ぼし、実際に風邪の症状が出てしまうのはVRに限らず現実でもあることだ。

このVRでもそうした判断は適用されているため、南国リゾート風施設や夏場の海辺やプール、温泉や銭湯などといった場合を除いて、水に濡れてもすぐに乾く。

水族館から離れると悪魔の傾向が変わり、魔獣などといった獣系の悪魔が増えてくる。

「ヘアリージャックはともかくリリムは仲魔にしたかったな……」

アキラのセリフに女性陣からのジト目が降り注ぐ。

「い、いや、ちげえからな？ 戦力としてだ、戦力として！ んなこといいから先行くぞ、先！」

女性型の悪魔が多いメガテンだが、特に人間にサイズが近い者の場合、男性サマナーはこうした誤解（？）とも戦わなくてはならない。

開き直って「現実では無理だけど、この中ならハーレムも実現可能だろ！」とはっちゃけるといふか、そもそもが最初からそれを目的にプレイを始める人間すら居るのだが……。

そんなやり取りを重ねつつも当初の目標スタート階＋10階をクリアし、サンシャインを後にする。

池袋はラーメン激戦区、通りを普通に歩いているだけで、わざわざ探さなくてもマニア推薦のお店が簡単に見つかる。

「とは言え並んでまで食いたいとは思わないな」

「げっ、二郎系はパス！」

「あそこ辛そうだよ！」

「麻婆豆腐が乗ってるのか？　なぜ蒙古？」

「蒙古とか言うのと男塾とか北斗の拳とか思い出すな」

「なんか女の子も並んでるんだね」

「二郎系でマシマシ頼む女も居るって話だな」

「まあ、半端に残す子よりいいけど、そういう方が」

「あー、居るなあ、注文しときながらやたら残すの」

「ここはどう？」

「つけ麺か……油そばほどでは無いけど、なんか損した気分になんね？」

「パパ、おつきな人ばっか！」

「キャロ、指さしちやダメだって……見事に並んでる層が偏ってるな」

話をしながら歩くタケルたちだが、結局「東中野の商店街のいつもの中華屋にしよう」となり、池袋でのラーメンチャレンジはまた別の機会へとなったのであった。

5日前

「パパっ！」

キャロがしがみついて来るのを片手であやししながら、タケルはテレビの電源を入れる。

「速報はまだ出ないか……」

フィーネもムルルもキョトンとした顔をしている。

色々とリアルで天候の変化も、空気の匂いすらあるこのVR内ではあるが、リアルの日本では当たり前の様に発生するある現象がこれまで無かった。

体感出来るほどの物は稀とは言え、気象庁の該当ページにいけばしよつちゆうその発生が確認出来る現象……地震である。

宙に浮かんでいるフィーネやムルルにはわからない程度の揺れではあったものの、現実で何度も経験しているタケルと違って、キャロにとっては恐ろしいことであつたらう。

「どうしたの?」

「地面がね、ちよつと揺れたんだ、で、キャロがびっくりした」

「巨人でも暴れてるの？ キャロを怖がらせるなんて許せないんだから！」

プリプリと怒りながら拳を握りしめるフィーネ。

ムルルも壺の中から花瓶を取り出して握りしめている。

現実はともかく、この中ではあり得ないとは言えないのが困る。

巨人どころか巨神まで居るのだ。

そうした大きな存在は今までほとんど（全体イベントの東京タワーや年末イベントの怪異・リア獣以外は）出現していなかったが、都庁でおそらく何かが起こるであろうと噂されている現在の場合、ふつうの地震で無い可能性もかなり高い。なんせ、運営が起こそうと思わない限り、地震なんか発生する訳がないのだ。

「お、速報だな……え？ 震源地、新宿？ 最大で震度3とはいえ、これ

シャレにならんよな？」

スマホでニュースを検索しつつ、パソコンを立ち上げ、掲示板サイトを検索する。

「スレ立てした奴、趣味悪過ぎだろ……」



【ファイナル】新宿地震（魔震？）スレ【カウントダウン!?!】

1：高輪ゲートウェイのバスター

ここは『女神転生 Ruina』の新宿で今日、発生した地震についての情報交換、検証、確定情報の整理を行うことを目的としたスレです。

現状、気象庁から発表されている情報では

①規模マグニチュード3.7、震源地東京都新宿区西新宿

②最大震度3、物的、人的被害なし

目撃情報には時間、場所の明記を忘れずに！

他者の発言、発表に関してはソース必須！

リンク先へのアクセスは自己責任で！

煽り、荒らしは華麗にスルーしましょう

イベントとの関連の有無は確定していません

公式のアナウンスを待ちましょう

（中略）

194：玉川上水の異能者

プレイヤー以外、当たり前のこととして特に大きな反応してないんだよなあ。電車も影響受けなかったし

195：千歳烏山のサマナー

>>187 地震発生とほぼ同時に東京の東側だけ雲が無くなったのを無視してんじゃねーよ

【スクシヨ】 【スクシヨ】

196：大泉学園のペルソナ使い

え？ これ、どこで撮ったの？ 気持ち悪っ！

綺麗に一直線じゃん……

197：八丁堀のバスター

予備自衛官に動き、召集はかかってないけど所在明確化義務

198：日の出のサマナー

消防はそういうの無いけど？

あ、いちおうサブが消防士ね、俺

199：大崎広小路のペルソナ使い

警備の連中は何か伝達あったかい

公安は知り合いが居ない

俺は町のお巡りさん

200：下丸子の異能者

なんで、ゴトウさんが帰って来てんだよ！

PKF部隊まだ解散どころか帰国すらしてねえだろ！

201：祐天寺のバスター

大変キナ臭くなってまいりました……



「うわあ、これ、ほぼ確定じゃん」

新宿で悪魔がらみの「何か」が起こるのは、間違いなさそうである。

ガイア側が動いているのも確実。

メシア側の情報が全く出ていないのも不気味。

「これ、都庁はしばらく行かない方がいいかもな？」

経験値稼ぎの終盤で何か発生した

ら、パトリ必至だよな」

「タケルく、この間、エリリに聞いたんだけど、商店街にパン屋さんが出来ただって！アンパンが美味しいらしいよ、行こう♪」

フイーネの声に日常に引き戻されるタケル。

「行くの？」と期待のこもった視線がしがみついたままのキャロから注がれる。

ムルルは先回りして部屋の灯りを消し始めている。

「行こうか」そう口にしてキャロに笑顔を返すと、部屋を後にするタケルであった。

商店街のパン屋でパンと飲み物を買ったタケルたちは、天気がいいこともあって散歩がてら氷川神社まで足を延ばし、その近くの公園のベンチに腰を下ろした。

フイーネはホイップクリームの入ったアンパン、ムルルは極辛カレーパン、キャロはカスタードと生クリームの入ったクリームパン、タケル自身はオーソドックスな桜の花の塩漬けに乗ったアンパンである。

一口目は微かに餡がかすった程度、ほぼパン自体の味であったが、なかなか美味しい。頭の上ではフイーネがホイップクリームアンパンを凄く勢いで食べているようだ。

タケルの視点では見えないが、キャロが目丸くして見ている。

そのキャロは上品に小さな口で食べているが、上品さの割に口の周りや頬にクリーム

が付いてしまっている。

ムルルは想像以上に辛かったのか、飲んで食べてと忙しい。

上空を自衛隊のヘリが通る。

いつもなら気にしない光景も掲示板の書き込みを見た後だと不安がかき立てられる。

そのまままったりと休んでいると以前一回だけ臨時で組んだ、若松河田のバスターが通りかかり声をかけて来た。

近場に異界があるとのことで、組んで軽く経験値稼ぎをする。

「また機会があれば」と別れ、徒歩で自宅方面へ。

フイーネの強い主張でブロードウェイに立ち寄り、上に上がってからダラダラと見て回りながら下に向かう。

「あ、タケルさん、ちわっす」

「ウシロ、装備変えた？」

「ムド怖いんで耐性付きのに変えました」

「あー、俺も一回パトったしなあ、ムド怖いよね。スパロボほどじゃないけど、パーセンテージあんまあてにならんし」

「HPもアイテムも余裕ある時ほどおっかないですよね」

「そうそう、そういう時ほどムド乙しやすい気がする」

「なんか今、物騒そうですね、念のため……ねーちゃんのズラは無効付きなんですけど、流石に姉弟揃ってあの髪型は……」

「へえ、レプリカでもそうなんだ」

「ハマ、ムド系で乙るとやる気失せますし、特にメガテン慣れしてない人だとツライでしょ？ 直結厨避けだけじゃないんですよ、あれ」

3階でエンカウントしたウシロと少し駄弁り、地下まで下りてフィーネのお目当てのクレープを買って、ブロードウェイを後にすると外は夕焼け。

タケルの家に近づいた頃にはすでにクレープは食べ尽くされて、フィーネがコンビニ行きを声高に主張する。

少年野球の練習か、試合か、土で汚れたユニフォームを着て、バットやグローブを持った小学生の集団とすれ違う。

ムルルは高学年らしい少年の持つ金属バットに熱い視線を注いでいる。

コンビニに着くとムルルはオモチャ付きのお菓子のある場所へ、フィーネはアイスとスイーツ悩んだ挙句スイーツの棚に、キャロはタケルの手を引いてミネラルウォーターの並ぶ一角へと向かう。

タケルは水道水でも気にしないが、キャロは水に関しては何だわりのあるようで、新しいものが出ると試して居るがお気に入りはヨーロッパ産のミネラルウォーターであ

る。

「ドリアードがあつちの悪魔だからかな？」などとタケルは考えているが、単なる好みの問題に過ぎないかもしれない。

会計を済ませ、自宅へ向かう。

既に日は落ちて、残照で気持ち空が明るい。

部屋に戻り、コンビニで買った弁当やおにぎりやサンドを食卓に並べる。

みんなで揃って「いただきます」をして食べる。

キャロの頬に付いたマヨネーズをウエットティッシュで拭いながら、「もう少し、こういう穏やかな日常が続いて欲しいな」と思うタケルであった。

4日前

都庁や新宿方面は今の状況では不安だということ逆方面へ。

西国分寺まで足を延ばし、都立武蔵国分寺公園の外れから繋がるお鷹の道 真姿の池
湧水群が異界と化しているのので経験値稼ぎをすることにしたタケル。

どこことなく江戸を感じさせる雰囲気。

東京魔人學園の背景に使われていてもおかしくない。

今回の遠征はアキラ、エリリのいつもの顔ぶれに加えて、エリリの友人であるクマちゃんが行っている。

どつからどう見てもペルソナ系のキャラなのだが、クマちゃんことクママはサマナーである。サブはケーキ屋さんだそうだ。

ほっこりしてしまったタケルとアキラである。

可愛いものが好きだからと、仲魔はケット・シーとカーシー。

モフラーか？

エリリの仲魔とは仲良しなのか、シエーラはカーシーが召喚されるとその背中に当然の様な顔をして跨っている。

フィーネがそれを見て羨ましそうにしている。

ちなみにケット・シーの名前はネギトロ、カーシーの名前はちくわぶ。

タケル以上に壊滅的なネーミングだが、みな特にその点には触れていない。優しい世界だ。

ネギトロもちくわぶも自分の名前を気に入っている様子なのが救いなのだろうか？

「バスツアーの時には仲魔召喚して無かったから、てつきり異能者だと思ってた」

「あ、あの時は、仲魔がチャグリンしか居なくて、しかも『臆病な』の称号付きの子だったから……」

「結局、あの子には私も会えなかったもんね」

「あの子がちくわぶだよ？ 悪魔合体でカーシーになったら人懐っこくなったの」

「え、そうなんだ！ てつきり新しく仲魔にした子だと思ってた」

「女の子でサマナーやってる子は可愛い仲魔とか綺麗な仲魔を目指す子が多いみたいだよね。俺はいまだにまともな交渉で仲間増やせてないけど」

自分で言って自分で落ち込むタケル。

正規のパターンで入手したのはムルルと合体したカソをオークションで入手した時しかない。

「さて、そろそろ異界だな。このふいんき（で和風じゃない悪魔出ると違和感バリバリだけだな）」

「エリリちゃん、あつちに悪魔ですつ！ ジオ行きますー！」

「（あ、交渉とかしないんだ？）ちくわぶ、ネギトロ、まずは魔法からね」

「げ、いくら和風でもヨモツシコメは勘弁！」

「ヨモツイクサじゃないだけ、マシ！ マハブフ！」

順当に経験値稼ぎをこなし、ほぼ今日の目標を達成したので道を通り抜けた先にあ
る、テラスはわんこOKなカフェへ。

「チーズケーキにしようかな？」

「ちよつと腹減ったから、キーマカレーのセットいつとくかな？」

「タケルく、スープカレー食べていい？」

自然に囲まれた中でのゆったりとしたひと時。

「今、ちよつと揺れなかった？」

「え？ 分からなかったなあ」

「じゃ、震度1くらい？」

「震度1だと歩いてたら気付かねえよな？」

「また、揺られたの？ タイタン殴ってこないとダメみたいね！」

「流石のフィーネもタイタン相手じゃ厳しいでしょ？」

「地震関連の悪魔って他に何か居たっけ？」

「ロキとかテュポーンとか？」

「北米だとパロロコンとかウンセギラとか」

「ウエマク自体はマイナーだけど、メジャーなケツアルコアトルの神格のひとつ」

「エジプトだとゲブ神、シユメールだとグアンナ」

「インドだとアナンタ、蛇や魚関係の伝承が多いんだよな」

「日本だとナマズ？」

地震の話から悪魔や神話になってしまふのは、こうしてわざわざVRでメガテンをやっているプレイヤーだから仕方が無い。

メガテンは蘊蓄無しでも楽しめるが、有るとより楽しめる上に興味の対象がそこから派生して、読書や映像メディア鑑賞なんかに繋がつたりするし、ゲーム上の悪魔の扱いに関して「オイオイ…」とプレイしながら突っ込みを入れられたりする。

「これ素材にこれが出来ちゃ不味いでしょ、元の神話的に！」とか、「いやいや、この扱

はいくらなんでも酷過ぎるでしょ？ この神様、基本的に人間の味方よ？」とか、逆に「なるほど、これが伏線だった訳ね？ 元の神話知らん人には唐突過ぎんだろ！」とか「象徴するものが共通だから、この女神とこの地母神絡めて出してんのね」など、ゲーム本編や二次創作などでも蘊蓄前提の楽ししみも存在する。

食事やお茶を楽しみながらの談話、クマちゃんも自分の仲魔が居る状態で安心なのか、けっこう会話を楽しんでいる。

今日はこのままエリリの家に行って、お泊り会をするのだそうだ。

カーシーのちくわぶの傍に飛んで行ったフィーネは「次は私も乗せなさい！」と指を突き付けているが、ちくわぶは「わふわふ」と分かっているんだか分かってないんだか呑気な表情でクマちゃんに頭を撫でられている。

会計を済ませると西国分寺の駅へ、西国分寺から中野まで中央線。駅で解散、タケルは仲魔たちの言いなりにコンビニへと向かう。

途中、新しくオープンした100円ショップを見つけ、ちよつと寄り道。

フィーネはコンビニスイーツに心を飛ばしているが、ムルルとキャロは色々なものがある100円ショップの店内に目をキラキラさせている。

「凄いよ、これが100円なんだよー」

「パパ、この小さな植木鉢可愛いー」

「食べ物も売ってるのね、いつも買ってるメーカーのじゃないけど、味が余り変わらないなら、ここで買った方がいいのかしらね？」

本当に欲しいものではなくても、安さについて手が伸びる1000円ショップマジック。

自制心や計画性の無い人間（いや悪魔もか）の敵である。

結局、タケル自身は欲しい物は無かったが、キャロの為に植木鉢型の小物入れ、ムルのためにマジックハンドのおもちや、フィーネのためにスナック菓子を購入。

まとめてタケルが持つ。

これで購買欲が満たされたかと家に足を向けるが、フィーネに耳を引っ張られてコンビニへ。

レジ待ちで立っている間に軽い地震。

今回もキャロしか気が付かなかった。

階段でこれから買い物に行くのだというサダコと挨拶を交わし、自宅のドアを開けてほっと一息。

現実での自室より自分の家という気がする。

ムルルがテレビのリモコンを操作し、テレビをつけている。

ワイドショーでは「都内の群発地震は大地震の予兆か！」などとスキャンダラスな煽り、タケル目線ではシヨボいおっさんにしか見えない「専門家」にお笑いタレントらしい司会者が、どこかピントのズレた質問をし「まったく分かってないんだろなあ」と思わせる表情で肯いている。

100円ショップで買った小物入れをキャロに渡すと、自分の植木鉢の横に並べ、今までタケルが買ってあげて部屋に置いていたキャロの私物をそこに入れていく。

ムルルはマジックハンドを伸ばしたり、縮めたりして遊んでいる。

コンビニで買ったプリンを堪能中のフイーネにまでちよっかいをかけて、逆襲を食らっているがケラケラと楽しそうだ。

今日の遠征では結構強い悪魔を相手にしたので、皆、少し疲れていたのか、晩ご飯を済ませると相次いで「おやすみ」と言ってコンプに戻ってしまった。

仕方なく、洗い物を済ませるとログアウトするタケルであった。

ログアウトし、買い置き品の冷凍食品で現実での食事を済ませる武。

ドンという軽い突き上げから、ガタガタガタつと部屋が揺れる。

「またか」と思いつつ「あ、こっちじゃ久々か？」と気象庁のHPを開く。

2日前の地震しか掲載されておらず、「あれ、2日前って揺れたっけ？」と良く見ると

震源地は東北であった。

しばらくしてリロードすると最新の地震。

震源地はかなり離れていて、地元の震度は2の表記。

「もっと強かった気がするんだけどなあ」と言いつつ、今度は掲示板サイトへ。



【揺れる揺れるよ】 都内群発地震を考察するスレ 【地盤は揺れる】

1：武蔵野台の異能者

ここは『女神転生 Ruina』の都内で群発する地震についての情報交換、検証、確定情報の整理を行うことを目的としたスレです。

体感地震こそ一桁なもの、微細な地震まで含めると群発と言っていていくらい多数の地震が発生しています。

NPCや内部のメディアも不安視する動きが出ています。

防災グッズの購入や避難場所の確認も今からやっておいた方がいいかもしれません。

現実の地震関連で参考になる情報があれば、内部関連同様、該当ページへのリンクをお願います。

リンク先へのアクセスは自己責任で！

煽り、荒らしは華麗にスルーしましょう

イベントとの関連の有無は現時点でも確定していません
公式のアナウンスを待ちましょう

(中略)

473：西小山のバスター

中のテレビ煽り過ぎだろ、現実でやったらBPO案件だな

474：潮見のサマナー

現実の地震関連はあんま役に立ちそうも無いよなあ

だって、これ、悪魔関連だろ？

フィクションの方が役に立ちそうじゃね？

475：京成関屋の異能者

菊地作品ですね、分かります

476：扇大橋のサマナー

いやいや、デビサバだろJK

477：新板橋のバスター

ボソツ「東京受胎」

478：方南町の異能者

さすがに東京が死んで僕が生まれたりしないだろ？



「なんだかなあ、何かが起こるのは分かっているのに、その他はなんも分からないとか、とつとと起きてくれないかなあって思うよな」

パソコンの電源を落すと、明日の仕事にそなえて眠りに着く武であった。

3日前

「ううむ、神経弾は鉄板として、魔封じの弾とハッピーショット、どっちを多めに買うかなあ……」

タケルたち3人は、アキラが「銃の弾、補充しときてえんだよなあ」との言葉を受ける形で渋谷の銃砲火薬店に来ている。

猟銃や射撃競技などで使う表の銃器取扱店舗だが、裏ではバスターなどを対象とした対悪魔戦闘用銃火器の販売を行っている。

渋谷駅徒歩圏内と「え？ こんなトコで銃を売ってるの？」とエリリが驚くのも無理はない。

なんせ近くにはタワレコやアップル渋谷がある辺りなのだ。

渋谷に限らず、都内にはけっこう「こんな所にこんなお店が？」と驚かされる店が多いが、このVR内でも、そうしたお店は東京4分の1縮小化で省かれて無くなってしまうことなく、残されていることが割と多い。

真剣に購入する銃弾を検討しているアキラとは違って、タケルもエリリも銃を所持していないため、初めての銃系ショップ訪問に猟銃やクレーショットガンの棚が回転し、

裏の銃シヨップの顔を見せるゲームを想わせる展開に目を輝かせている。

「ファマスとかスコープピオンとか、渋谷で見ると違和感ありまくりだなあ」

「映画で見たことある銃がいっぱい。すぐ外、普通の人が歩いてるのにね」

ムルルは「カックイー！」とあちち行ったり、こちち行ったりしているが、フィーネもキャラも余り銃には関心が無いようで、銃に向いている関心を自分たちに向けようと、手を引つ張ったり、頭をつついたりしている。

一般人は無関心に通り過ぎているが、たまにプレイヤーらしき人間がチラツと見てからマジマジと中を凝視したり、ギョツとした顔をしたりしている。

他の街同様、渋谷にもプレイヤー御用達のお店はあるし、109の中にも何軒かシヨップが入っているのだが、街のイメージというものとのそぐわない、そうしたシヨップ、特に一目でヤバいと分かる銃の店に遭遇するとは思っても居なかったのだろう。

タケルたちにしても、アキラがこのお店を知っていて、そこを目的地としてやってきたから特に気にしていなかったが、予備知識無しに通りからこの店を見つけたら目をこすつて真偽を確認していたに違いない。

結局、大量の銃弾を補充したアキラは「すっからかんになっちゃった」と言いながら

も満足そうだ。

新宿地下の射撃場の常連と化しているアキラは、かなり銃を撃ち込んでいて、その腕前も当初に比べるとかなり上がっている。

乱戦気味でも、タケルたちに恐怖感を与えず、銃を使用出来ているのだ。

他に渋谷での用事は無いので、毎度、こんな時にしか召喚されないウコバクに荷物持ちをさせつつ、当初の予定通り、徒歩で代々木公園を目指す。

神宮通りからファイヤー通りを抜け、特徴的な外見の代々木第一体育館を左手に見ながらのんびりと足を運ぶ。

歩道橋を渡り、代々木公園へ。

今日は代々木公園内に点在する異界でで経験値稼ぎを行うことになっている。

歩道橋を渡り、原宿門から公園内に。

「いや、いくらなんでも、これ依り代に出て来ねえよな?」

アキラが不安そうに眺める彫刻。

メキシコから贈られたケツアルコアトウルの像である。

「これ、碑文や前知識無しにケツアルコアトウルだつて分かる人居ないでしょ?」

「レゴで作っても、もっとそれっぽい感じに作れそうだな?」

「羽毛のある蛇ってこったけど、いつの間にか恐竜って羽毛アリがデフォになっちゃってるのな？ その内、ゴ○ラとかまで羽毛生やされたりして？」

「ジェロ○モンになっちゃう、それ！」

「なに、それ、ポケモン的一种？」

「あー、確かにポケモンに居そうな名前だなあ」と初代ウルトラマンの知識が無いっぽい、エリリの返答に感心するタケル。

まあ、ポケモンのモンスター・ネーミングは、ウルトラマンをはじめとする特撮の怪獣なんかの影響も受けているため（○○ラー、○○ゴン、○○ドンなど）、実のところそれほど的外れな感想ではない。

幸いケツアルコアトウルは降臨しなかったが、バードサンクチュアリ近くに異界が存在し、そこで戦闘となる。

「通常弾でも鳥系多いから銃が活きるな！」

嬉しそうに補充したばかりの弾を早速撃ちまくるアキラ。

「アキラの銃があるからいいけど、レベル自体は都庁下層より上だろ、これ？」

「普通の鳥と違って、糞をしないのが救いよね」

タケルもエリリも仲魔たちも奮闘するが、ドリアード組が速さに対処しきれていない

ため、タケルやエリリはその防衛への手助けの比重が高く、結局、アキラ無双であった。

「うしっ！ イベント前駆け込みっほいけど、レベルと銃のレベルが上がったぞ！」

「レベル上がった！ ペルソナがタクシヤカになった！ なんかナーガっほい？」

「レベル上がったのはいいんだけど、何故上がる鈍器レベル？」

「こここのところの経験値稼ぎの成果が出て、今回の戦闘でそれぞれレベルや技能レベルがアップした。」

技能アップを目指して自主訓練にも励んでいた銃のレベルが上がって喜ぶアキラ。

エリリもレベルアップと同時にペルソナが新しくなり、特に「マカラカーンが使える様になったの！」と魔法攻撃への対処手段を手に入れたことを喜んでいる。

タケルもレベルが上がったが、今回は鳥系メインということで余り呻ることが無かった鈍器のレベル上がり、首を傾げている。

その後も公園内の異界を攻略しつつ進むが、流石に一日に2回目のレベルアップは無く、進むうちに明治神宮御苑に入り込んでしまった。

「この際だからお参りしてく？」

「この中に行くのは初めてだな」

「森と言つてもいいくらい木があるなあ」

せつかくなので参拝していくことに。

「いいな！」

「いいねえ……」

「なんで弓道の恰好した人いっぱい居るの？」

チラホラとではあるが弓道着を来た人の姿を見かける。

「中に弓道連盟の中央道場があるからな」

「正月とかだともつといっぱい居るよな、確か」

弓道着に萌えを感じる男性はけっこう居るが、タケルもアキラもその範疇に入っていないようだ。

デレつとしているのが気に食わないのか、フィーネが頭の上でタケルの頭をポコポコと叩いている。

手を繋いだキヤロは木がいっぱいの場所が嬉しいのかニコニコしながら、タケルを見上げている。

参拝を済ませたタケルたちは、神社本庁の傍を通り御苑から出て、代々木駅に進み、地元へと電車に乗るのであった。

「停止信号?」

「そういや、この中じゃ人身無いから停止信号で止まるのって初めてかも?」

「今は大抵の駅にホームドアが出来たからそうそう人身ってないけど、中の当時はけっこう多かつたらしいな」

「中央線のホーム構造自体に自殺誘発要因があるんじゃないかとか、学術的に研究してる人間も居たらしい」

動き出した電車が新宿に入り、新宿から乗って来た乗客同士の会話が耳に入ってきたが、少し大きな目の揺れがあつたらしい。

車窓から見上げる都庁に、ちよつと不安を感じるタケルであつた。

2日前

最初の内は怖がっていたキャラもすっかり地震に慣れてしまった。

……つまりはそれくらい頻度でVR内の東京では地震が発生している。

自室に居る時はほぼつけっ放しになっているテレビでもテロップは流れるが、緊急速報の警告音は流れなくなっている。

ムルルは「ノツカーだった時だったら何か分かったかもしれないのにね」と残念そうだが、手持ち仲魔にノツカーが居るサマナーが相当数居るにもかかわらず、そうした情報が見出し板や中で噂になっていないことから「たとえノツカーのままであつたとしてもそれで事態が変わつたということはないんじゃないかな」とタケルは思っている。

フイーネは敵意と闘争心の向けどころが見当たらず、地震の度に揺れる電球のヒモでボクシングをしたり、タケルの頭にポカポカと八つ当たりをしたりしている……あと、お菓子の消費が増えた。

タケルも中や外で色々と情報を集めてはいるものの、メシアとガイアが活発になっていくことと、一部の異界でこれまで見たことのない悪魔が出現するようになっていくこと以外、大した情報は仕入れられていない。

タケルだけでなくプレイヤー、そして仲魔たち全体に、どことなく閉塞感と自粛ムードが形成されている。

慣れない場所で唐突に状況が変化するのを避けたいという気持ちが高まっているのだ。

「まあ、それほど長い期間待たされることはないだろう？」

タケルのこの予想は、ほぼプレイヤー全員に共通するものである。

楽しむためのゲームなのだ、これは。

今のまま、長い時間が経過すればプレイ自体から離れてしまう者も出かねない。

つい最近もFFTベースの新作VRMMOがリリースされたばかりなのだ。

FFではなくFFTという当なりに製作陣のこだわりが感じられる作品で、タケルもちよっと興味を引かれている。

まあ、フィーネたち仲魔の存在もあることから、サービスが終了しない限りプレイを続けるつもりだし、終了する場合でもオフラインプレイなどでなんとか仲魔は失わない様にしたかと思っっている。

すぐに買うつもりは無いが、現状必要としていないサーバーのカタログをたまに見たりしているのはそういう理由だ。

自宅回り、最悪でも自宅の環境をオフラインで構築出来ればと思っっている。

アキラから連絡が入り、エリリにも連絡済みということで、いつものメンバーでの経験値稼ぎに出かけようとフィーネたちに声をかけるタケルであった。

「ふう〜」耳の中に入っている防水のBTイヤフォンを外しながら、タンクベッド型最高級VRマシンから身を起こす老人。

バスローブを羽織り、シャワールームで体を流すとあらかじめ用意してあった室内着に着替える。

室内着とは言っても庶民のジャージやスウェットなどは程遠い、そのままでもある程度の格式のレストランやホテルに出入り出来るくらいの代物。室内履きのスリッパも革製である。

一枚板の天板の重厚なデスクに向かい、その机と十分に釣り合う椅子に腰かけ音声で複数のパソコンを起動する。

メール、メッセージをソートしつつ、スケジューラーをチェック。

第一線は退いたとは言え、楽隠居には程遠い過密スケジュール。

「なるべく外には出たくないんだがなあ…」と引きこもりの様な独り言を言うが、70歳近くになって週に1度は国内の長距離移動、年に数回は海外への出張、懇親会やセミ

ナー、パーティーなどへの参加も数回に1回は断ることも代役も無理という、彼の状況を考えれば極めて妥当というか、当然のセリフだ。

この後もリモート会議で最低でも2時間は拘束されるのが確定している。ため息をつきたくもなろう。

「なんでみんな俺に役職押し付けて来るかな、やりたがってる奴だっているんだから、そいつらにやらせりゃいいじゃん」

普段のビジネスモードとはかなり違う乱暴な言葉遣い。

実年齢からするとかなり若い口調だが、彼の今もつとも時間を割いている「趣味」に引きずられているとも言える。

仕事の場でも油断したり、疲れて居たりするとポロつとこちらの口調が出てしまい、周囲の人間に目を白黒させたり、幻聴かと耳の穴ほじつたりさせている。

「タケルを俺の秘書にヘッドハンティング出来ねーかなあ、そうすりゃ色々やり易くなるんだけどなあ。エリリちゃんも事情ありそうだけど、卒業後在宅ワークメインでウチに就職とか？ そんぐらいの力はまだあるんだけどなあ……ひと様の人生だからなあ」

某金融系グループトップで、あちこちに顧問や相談役として名を連ねるこの老人こそ、タケルの最初のフレンドであり、相棒杵とも言えるアキラであった。

金とコネにあかせてβからプレイする気満々で、スケジュール調整などもして準備万端であったのだが、海外発の金融危機の影響を受けたグループのトラブル処理に追われ、本リリース後の開始となってしまったのだ。

災い転じてでは無いが、気楽に組めるタケルなども出会えて、かなり満足している状況ではあるが、イベント間近な予感がヒシヒシとする現在、リアル都合に振り回されるのは最小限にしたい。

「せっかく、会長職引退しても、わんこそば状態で役職押し付けてくるからなあ……主治医に頼んでドクターストップの診断書書いてもらおうか？」

ボヤキが止まらない。

モニター上の時刻を確認。

会議まで10分を切ったのを確かめると会議用のソフトを立ち上げ、『龍が〇く』の組事務所背景にしたい誘惑を押しつけて無難な海外リゾート背景をセットする。

「アキラのアバで会議参加したら、あいつらどんな顔するかな？」

呟きつつもモニターでカメラに写る自分の姿を確認し、軽く身なりを整える明樂であった。

本来、プレイヤーキャラの外見は設定したもののからさほど変化しないはずなのだが、久々にタケルたちが出会ったアンデはかなり原作戦闘モード寄りの外見になっていた。通りすがりのNPCがビクつくほどである。

「お久しぶりです。ホントなら少しお話とかして息抜きしたいトコなんですけど、この後も都庁で警戒巡回兼経験値稼ぎ兼連携訓練でして……」

「お、おう……メシアンは大変そうだなあ」

「どうも上にはなんか大天使か聖四文字から指示出てるっぽいんですけどね、実働部隊は蚊帳の外ですね」

「その点ガイアはまだ緩いっぽいわね、マロロもクーちゃん抱えて昼寝してたし……」

「いや自衛隊はピリピリしてんぞ？ 何故か、宮内庁や神社本庁の人間も出入りしてるっぽいし……」

「お茶の水にテンプルナイト溢れてるってホント？ ニコライ堂周りに大勢居たって、神保町のランチョンで優雅に午後ビール楽しみに行ったウシロがビビってたってサダロさんが言ってたよ？」

「首塚周辺、工事規制の名目で立ち入り禁止って掲示板にあったな」

「この間、大江戸線が停まったのって、地震関係じゃなく悪魔関連みたいですよ？ それ以降、メシアの新人は地下鉄駅にチーム単位で貼りつきです」

情報交換を済ませアンデと別れると、タケルたちは新宿御苑へと向かう。

新宿と言う場所はリスキーだが、地元にしても新宿からさほど離れておらず、ビル内や繁華街よりはマシであろうとの判断だ。

「入場料取られるんだよな」

「今回のイベント次第だけど、異界レベルが順当なら年間パスポート買った方がいいかもな？」

「異界の位置によつては新宿からより代々木や千駄ヶ谷からの方が近くない？」

「まあ中野からならJRも地下鉄も使えるから」

時代劇などでお馴染みの内藤新宿という呼び名、その内藤町にあるのが新宿御苑ということで、駅周辺や都庁周辺よりもこの辺りが本来の新宿である。

航空写真で見ると新宿、渋谷は緑が多い。

千代田区の皇居から赤坂離宮、新宿御苑、明治神宮、代々木公園と緑地がかなりの塊で連なっている。

新宿の緑の大部分はこの新宿御苑であるが、他の海外の都市と比較すると東京は実は緑地が多いのだ。

日本全体も飛行機から見ると圧倒的に山林の方が多く国土であるのは、タケルたちの暮らすこの時代でも変わらない。

奈良や和歌山などの畿内でも、県の面積の大部分が手付かずである。

ともあれ、タケルたちがやって来た新宿御苑、庭園と温室が見事な公園だが、その庭園と温室の一部が異界と化している。

レベル帯は都庁低層以上都庁中層以下とメシアとガイアに追い出された形のニュートラル陣に取っては格好のスポットとなっているのだが、日本円に苦労している廃人組にとっては入場料がネックとなっている。

塵も積もれば……ハンバーガーやおにぎりなら一食分に相当するのだ。

「これなら年間パスポート買った方が得じゃね？」

「イベントの影響が出るか出ないか、魔震レベルだともここも影響出るかもだし」

「学生は半額なんだよねえ……へへ」

「中学生以下は無料とは言ってもプレイヤーで無料に入れるのってタロウくらいだろ？」

入場料を払い中に入る。

家族連れなど軽装で近隣住民っぽい人が多い。

「えつとここが玉藻池、九尾出ないよね？」

「母と子の森ってほのぼの系なのに鬼子母神のせいで不穏」

「旧温室の遺構とか、絶対、夜には異界化するな」

「旧門衛所とかも雰囲気あるな、明るい昼だから怖くないけど、暗くなってきたら近寄りたくない」

「言ってる先から出たぞ、ここ境界線分り辛い、さすが新宿！」

「初見悪魔、マカラカーンいくね！」

「ふっふっふ属性なんて無視無視！　いつくよーメギド！」

「アナライズ、氷結耐性、炎熱弱点、ムルル頼む」

「えええ、殴り甲斐ありそうなのにい！」

他の異界と違って、異界とそれ以外の境界線がはつきりせず、唐突に悪魔との戦闘に入ることが多いのは新宿と言う土地の特性なのだろうか？

「外出るまでは気が抜けそうもねえな」

「レベルがある意味適切だから、耐性、弱点の判断ミスるとヤバイ」

「素早さとサマナーレベルから言ってタケルはアナライズ最優先ね」

「パパー、これ落ちてた！」

マイペースなキャロにほっこりしてしまふタケルである。

大温室の異界で集中して経験値稼ぎをすると、新宿御苑前駅の近くでハンバーグを食べ、帰宅の途につくタケルたちであった。